

# 奇譚クラブ

1955年 11月号

(第九卷 第七号 通刊第八十二号)



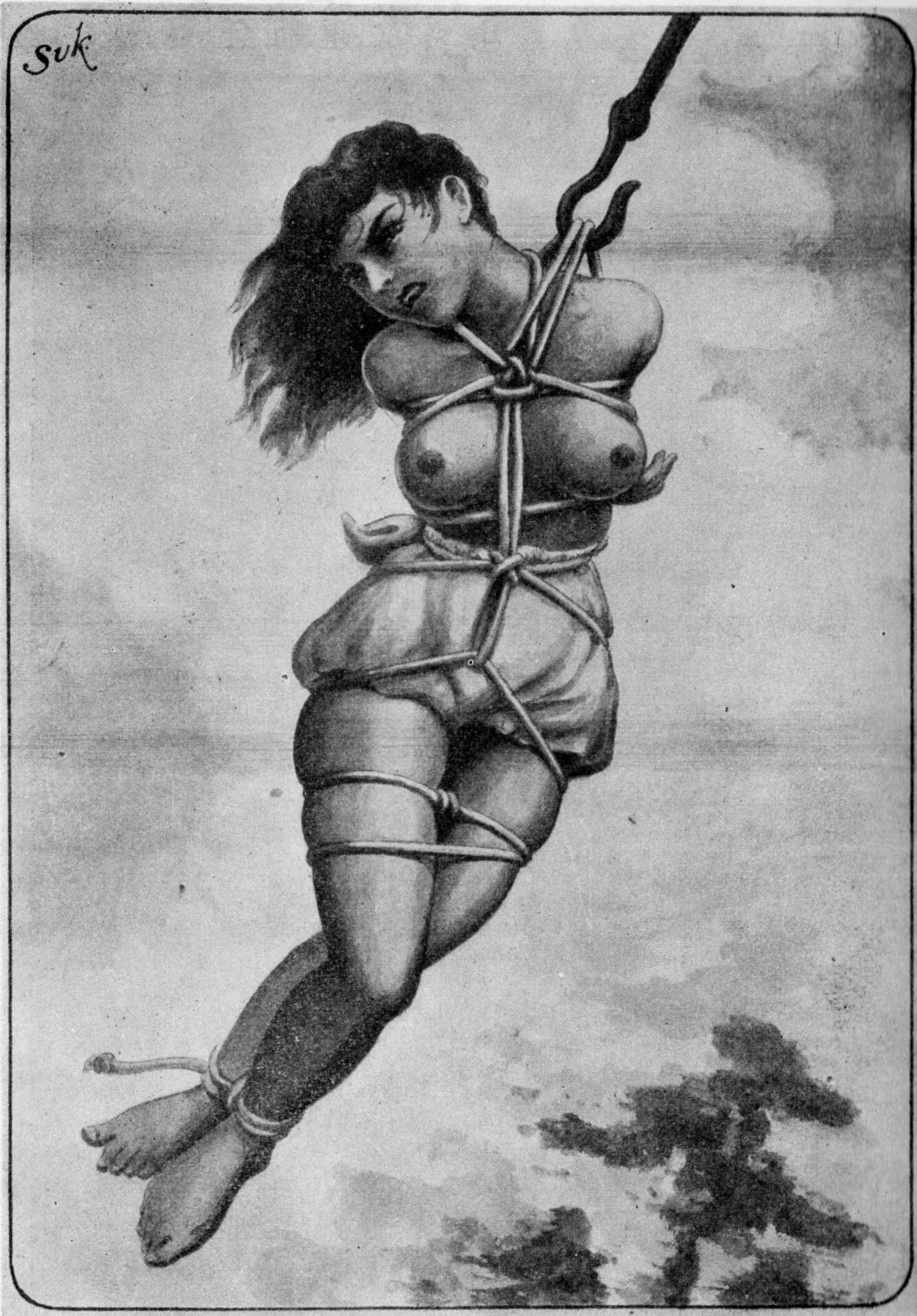
奇譚クラブ

昭和三十年十一月号

11

定価二百円  
(送料十六円)





# みのむし

起重機で中空に吊り上げられた美女、こういった恰好で衆人の見世物になりたいという願望が、案外、若い女性の間が多いのではないのでしょうか。

畔亭数久・画

## 奇譚クラブ 復刊第二号 目次

### 奇譚クラブ特選画家競作集

みのむし	畔亭数久
小さな運動会	四馬孝
漂う女二題	都築峰子
賭場の獲物	滝れい子
小人島の捕われ人	北原純子
女調教師	杉原虹児
上げてくる潮	依田精二
掃除日の出来事	宮崎昭平

告白	古川裕子	13
変態小説論	佐東増夫	24
幽囚十ヶ月	春田一郎	28
ボクの責め方	宝塚三夫	34
切腹通信	四馬孝	41
レスボスと浣腸	羽村京助	42
稽古着姿の女腹切	藤山秀緒	44
創作	二俣志津子	46
命がけの遊び	北原純子	46
あるマゾヒスト	沼正三	60
の手帖から	辻村隆	68
「或るアクロバット	辻村隆	68
「ダンサーの記録	辻村隆	68
「拷問に笑う女」	辻村隆	68
被虐少年期	三根耕二	74
敵前上陸」責め	三根耕二	74

賭られた娘	宮本昭平画	79
懸賞告白	永長治	80
お灸と腰巻	山下真一	84
(告白)	乱	84
私にも貴女の下穿きを	芳野眉美	88
一柳トシ様に	伊勢進	91
輝美礼賛	伊志田治	92
戸辺談話	伊志田治	92
懸賞入選作品佳作第一席	加治信一	94
接客婦	宮崎昭平画	101
大和撫子の散華	森本愛造	102
残虐なる女性達	沖野恵美子	106
流浪八年より	吾妻新	112
被虐より嗜虐へ	豊後忠	116
明治年間の新聞覚え書(四)	坂田信治	118
ソドミニストの告白	久利須照雄	121
泉都の夜明け	朝路のぼる	122
「完全なる隷属」	宮崎昭平画	125
浣腸器と共に	京町柳一郎	126
浣腸のお仕置	編集部	127
サディズムへの憧れ	編集部	128
掲載候補作品寸評	編集部	128
玉稿落穂集(二)	編集部	128
女優の素足	高原正夫	130
「百合子の記録」	渡辺陽	132
あるラブレター	畑晃一	136
長瀬昭子さんへ	波羅田譲一	138
映画、雑誌、芝居の緊縛場面	近東規矩也	140
体験記	鍛冶真三	146
吹き溜り	岩瀬祥一	147
アクロバットと曲馬団	俊野	148
続・岩瀬祥一のお灸院	鳴海文雄	150
続・映画に観た淡いマゾ	編集部	151
緊縛フォト	青葉慎一	155
アルバム第三集のアイデア	天泥盛英	157
セーラー服姿の切腹写真	編集部	158
「松本奈津子さんについて」	編集部	162
女子プロレスリング雑感	川上明	164
密(みつゐん)淫	吉住信吉	168
同憂の士に告ぐ	編集部	171
読者通信	編集部	171
最新版アブフォト(今月の新版)	編集部	171
蜂の胴四十五センチ	編集部	171
奇譚クラブ旧号主要目次	編集部	171
先祖の女腹切	編集部	171



四馬孝画集

小さな運動会 こんな姿で歩

けるだろうか。じっと立っているのさえやっ

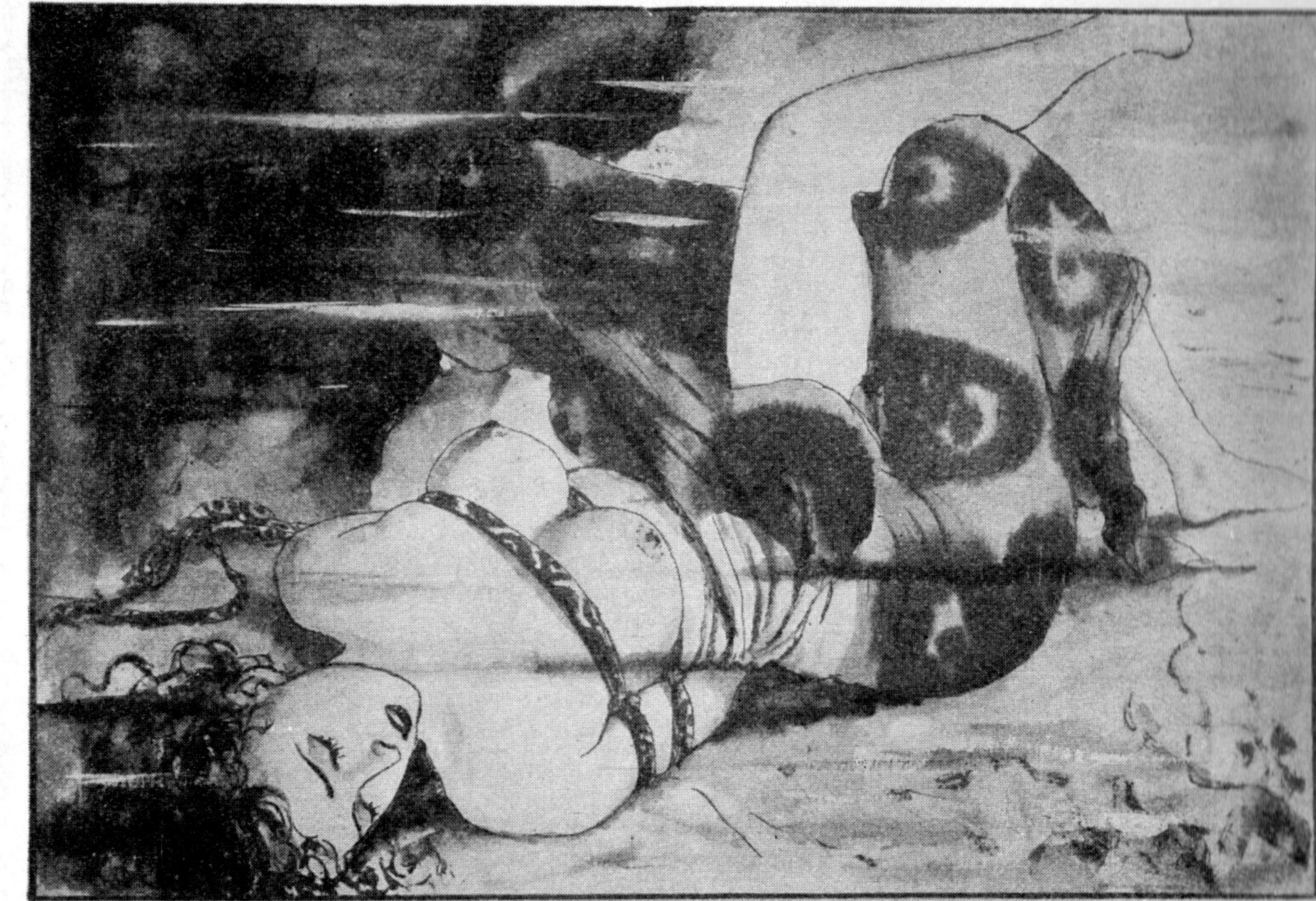
となのに、うしろの棒は容赦なく彼女を責めたてる。

「走るのだ、それッ早く走るのだッ」と。



漂う女二題

都築 峯子・画







かつぎ込んだる 土蔵の中で  
 流す流し目 猿ぐつわ  
 鬼のいけにえ 女のいのち  
 足の縄をば 解いてやれ

滝 れ い 子・画

## 賭場の獲物

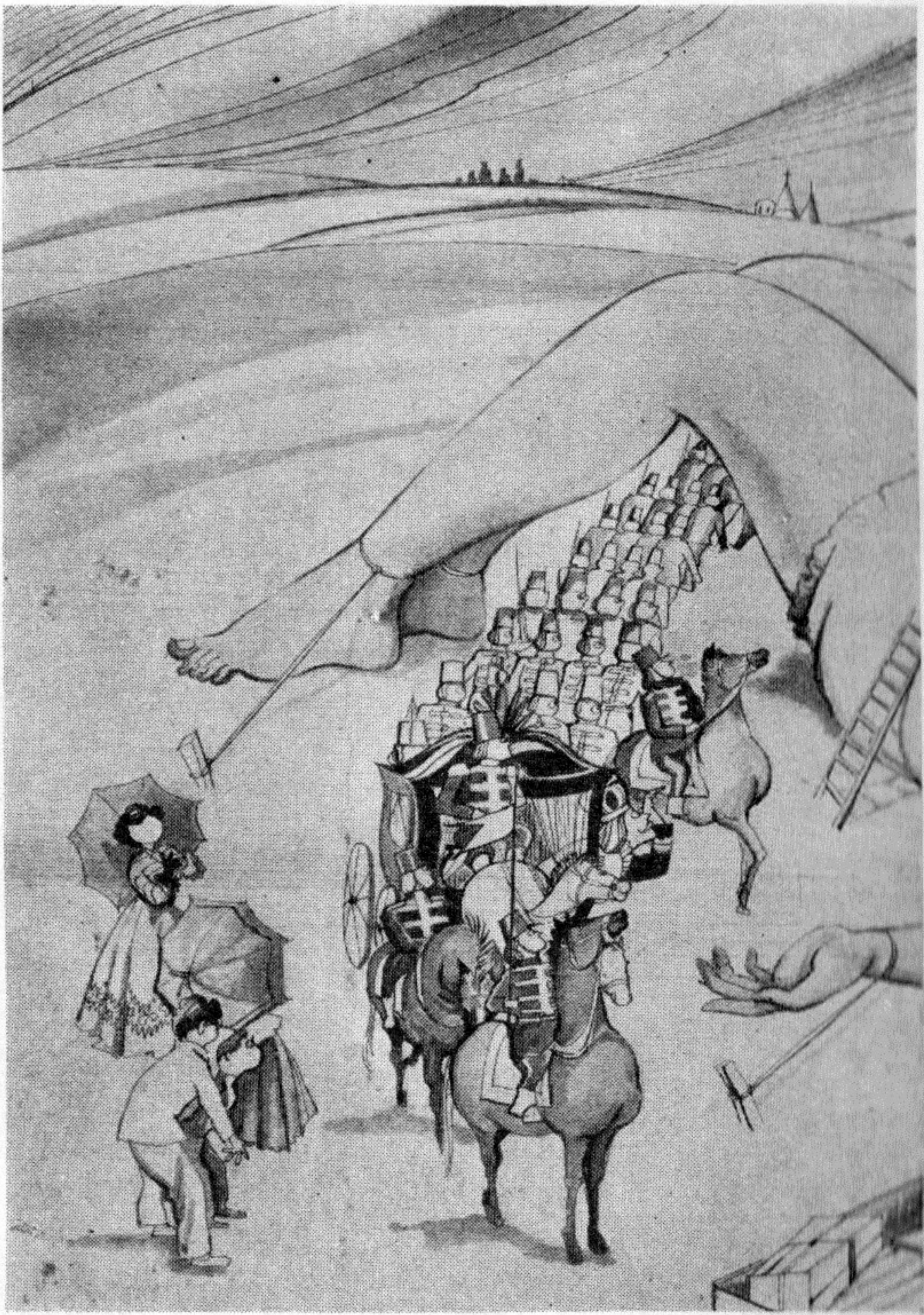
今宵祭りの鎮守の森で  
 斬ったはつたの丁半賭博  
 かけた賭代 女のいのち  
 誰が落すか 黄八丈





# 小人島の捕われ人

朝、目がさめたら、私は小人島の砂浜でブローズ一枚の裸で縛られていた。腰にハシゴがかゝっていて、小人島の士官が二人、乳房の上で私の乳首を不思議そうに見ていた。私を見物しようという小人島の王様の行列が私の膝の下のトンネルを通ってやってきた。縫針のような槍を持った護衛兵が、沢山、王様の馬車のあとに続いている。



北原 純子・画

スウイフト原作  
「ガリバー旅行記」

小人島探険ヨリ

(鳴海文雄氏案)

【名作ダイジェスト】 いろんな古今の名作から考えた縛りの場面です。被縛者は勿論、皆若い女性です。皆さんもいろいろの場面を考えて下さい。



女調教師

杉原虹児・画

「乗り手が女だと思って馬鹿にすると承知しないヨ、妾は馬を責めるのが、三度の飯より好きなんだから。言うことをきかないと拍車で、どてっ腹をぶち破るよ、それッ」

上げてくる潮

依田精二・画

浜の砂の上に流木を背に一人の女性がくもられている。姦通への私刑か裏切者への処分か？ビチ〜と音を立て汐が上げてくる。





# 告 別

古  
川  
裕  
子

嫌な長い冬の夜が明けようとして  
春の朝がせまる時刻  
お前にはきこえないのか  
まるで通り魔のように  
いきなり入ってくる誰かの足おとが  
どうして  
ちっとも恐がることはありやしないよ  
あれはお前の花嫁だ  
見ておやりよ  
絢爛たるお前の女を

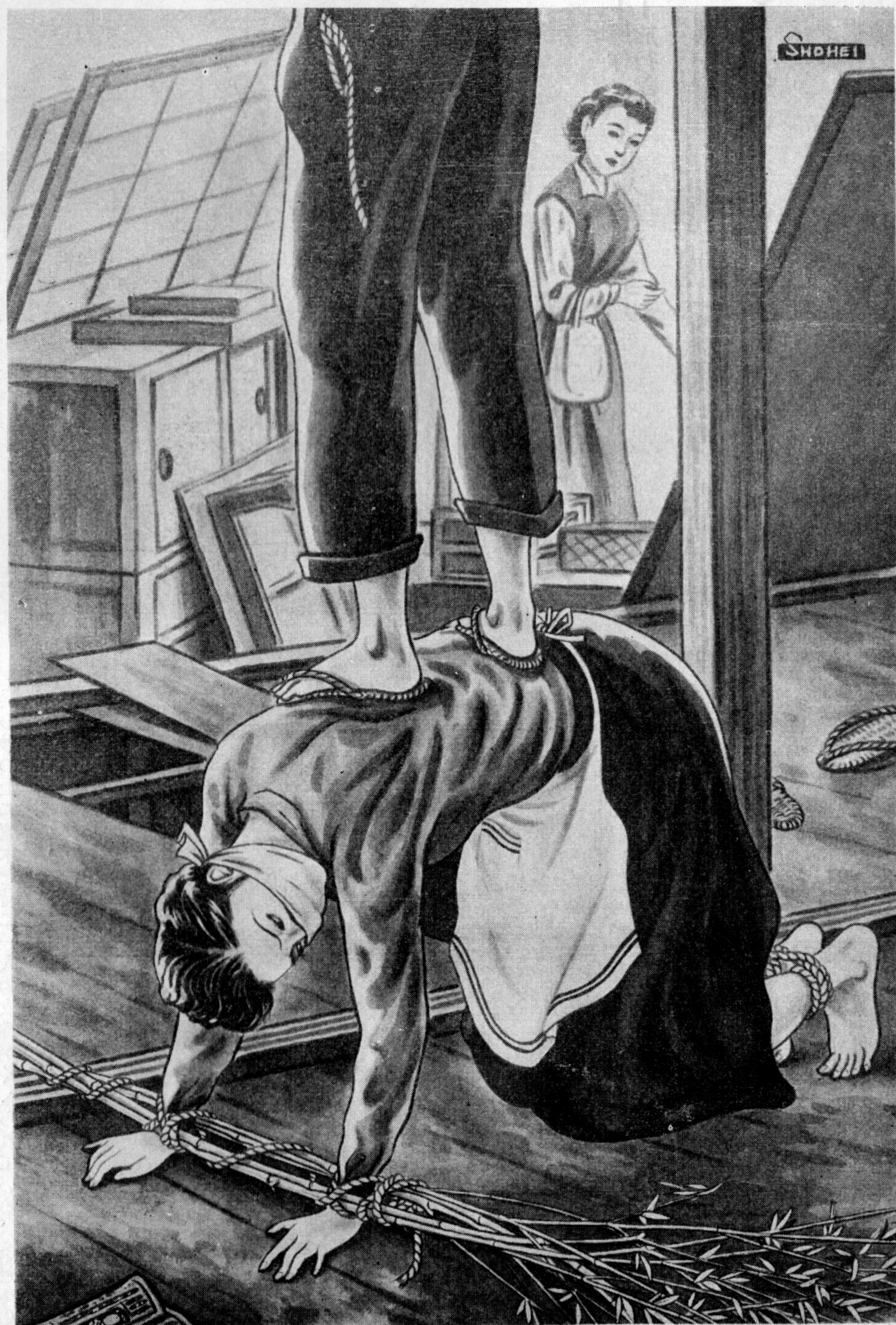
これはどなたの詩だったでしょうか。絹糸のようにやわらかな雨がふって——黒い土が女の眼のようにうるんで——この北国にも春が来たのです。窓にもたれて、ぼんやりとあたゝかい雨の外の面も眺めていると、私の身体の中にも何かうごく気配がする！間もな

く桜桃梅李一時に咲く春が来る。心がはずんで長い長い冬ごもりの生活に終止符をうつ時が来ている。遠い山脈もかすんで黒い土の上に緑がある。あゝ春が来た。この思いは私に歓喜の心を与える。そして同時に云いようのない恐怖を呼びおこす。春は私の狂乱の季節おさえようのない血のざわめきが、私の身体の中に「まるで通り魔のように、いきなり入ってくる」。そのかすかな足音を、私は、はや耳にしはじめている。私は怖い。「絢爛たるお前の女」というには余りにすさまじい私の「花嫁」！あの詩をうたった詩人のように私は私は大胆ではない。私は平静ではいられない。やるせない女の血、——裕子は愚にも、また人を恋うている。

それどころか、私は再び男のかたを恋うまいと心に誓った筈です。私の恋の遍歴は——心の旅路というには余りにも性欲の臭いの濃いものでした。私は敢えてこのように云わずにはいられない。自らへの嫌悪をこめて、はっきりとこう云わずにはいられません。人間の「愛」というものは、もっと精神の美しさに、心の気高さに根ざしていなければ「愛」の名に値しないと思います。私は、明らかに自

## 掃除日の出来事……(速成踏台) 宮 崎 昭 平・画

どしりと重量のある夫の体重も最初の中は、そう苦にならなかったが、時間が経つに従って、手と足が痺れて苦痛が増してきた。然し、彼女は夫の命令に従い、移動しなければならなかった。





分の歪んだ欲情を満足させるために「男」を求めた。これを云うことは私には苦しい。苦しいけれども、こういうものは私の「誠実」なのです。哀れな、そして馬鹿らしい裕子の「誠」！でも私は本當を云わなくてはならないのです。「人恋うは苦しきものと平城山にもとりきつゝ堪えがたかりき」詩は血を吐くように歌っています。裕子にとっても「人恋うは苦しきもの」なのです。裕子は今までに恥しくも愚かしい「告白」を十四篇も書きつづりました。そしてその最後の「孤独」に於て、再び人に呼びかけまいとの決心を筆にしました。「変態性欲者は永遠に孤独なのだ」と。「裕子は地平につゞく暗い暗い道を、たった一人とほとぼりくのだ」と。

あゝでも裕子はさびしい。身を絞るような寂しさを感じる。いくたびも、いくたびも私は男のかたを追い求めた。そのたびごとに私は泥にまみれた。自分自身への嫌悪を増す以外に何もそこからくみとることは出来なかった。このむごたらしい経験は、とうとう私にあの「孤独」を書かせてしまった。裕子は涙をいっばいためて、夜をこめてあれを書きつづったのです。自らを慰めるために、自分にあきらめさせるために。おろかな裕子はそれ以外になすべき方法を知らなかったのです。

裕子は二度と「告白」を書くまいと思った。それがいったい何の役に立つというのだろうか。お前は、それらは「自らの安全弁」といった。「わが慰めめの書」といった。しかし、お前は本當に書くものには「慰めめられて」いるのだろうか。狂乱の日はけ口に、あの長たらしい「告白」を書くことによつて、それを鎮め得たのだろうか。もしかすると、裕子は自分の書くものに興奮し、麻薬の中毒者が一回よりは二回、二回よりは三回と、たび重ねるに従つて大量を用いないと、その禁断症状をしずめ得なくなるように、裕子も、心弱く「告白」を書き散らすたびに、一層刺激的な一層破廉恥な性欲をさらけださなはいられなくなったのではないだろうか。すで

に私は（大阪の関氏のように）厳しい警告を頂いている。自らを破壊に導き、多くの人をも害するあのくだらない「告白」を、私は二度とこの世に投げだすまい。孤独のさびしさが如何に骨に沁みるものであるうとも、裕子の人間性の高貴さにかけて、この決心をゆるがすまい——固くこう誓つたのでした。それから以後、裕子には、いくたびもあの狂乱の日が襲つて来ました。裕子は歯を喰いしばつてそれに耐えた。苦しい苦しい時間でした。つらく悲しい長い長い一連の時間でした。でも私は耐えた。今度こそ、裕子は自分の歪んだ性欲に、うち勝つてみせる！と。編集部から贈られる「奇譚クラブ」さえ私は恐ろしいものに触れる思いだった。ちよつとのぞきみて——あゝそうしないではいられなかったのです——本箱の奥深くしまいこみ、ある時は、海へそぐ川に放りこんでしまった。そして季節は移つて春が近づいて来たのです。春がくることは裕子には、たとえようもない恐ろしさだった。春——むせかえるように生あたま、かいあの南の風。胸をしめつけるような悶えを残してゆくあの胡乱な風！あれがまたやつてくる。どこかといきなり私の肉体の中に踏みこんでくるなまぐさく困憊したあの季節の風！あれに裕子は耐えられるだろうか。修道女のように、自ら課した苦行にいじらしく耐えている裕子をいぢめないで。私はひざまずいて祈つたのでした。眠れぬ夜もありました。頭と胸がしめつけられ、思わずめき出したくなる日もありました。ハンケチをかみしめて鋭い目つきをして一日中口をきかない日もありました。でもその時は、窓の外は荒涼たる冬だったのです。雪におゝわれ、木枯が吹きすさび、心の底まで凍るような日々だったのです。それが裕子を護つてくれました。苦しくなると裕子はたった一人雪の道へ出てゆきました。蒼茫と昏れかゝる雪の野を、私は外套のポケットに両手をつっこんで、マスクをかけて、あてもなくさまよつたのです。心の中にはシューベルトの「冬の旅」の中の「道しるべ」の歌が鳴っていました。

私はこの歌にかじりついて、ひようひようと風の鳴る曇天を仰ぎ、昏れてゆく雪の野に自らの心をひやしたのです。「性欲」とはけがらわしいものとは思いません。裕子はそういう教育は受けませんでした。しかし歪んだ性欲については、どうしても心安らかではありませんでした。理屈ではよく解るのです。でも女は理屈だけでは仲々心が静まらないのです。多くのかたは——私にお手紙を下さつて裕子のくだらない「常識」をおわらいになりました。そして世の「常識家」をむしろ嵩然と軽蔑さえなりました。裕子はこの「常識家」なのです。人間というものが、人間の考える最大公約数だけを無批判に正しいと思ひ、たゞそれに従ふことだけが良いことだと裕子も思つてはいません。けれども男と女とが愛し合う場合、心から二人が結び合ひ、その表現としておだやかに正常の方法で満足し、可愛い、赤ちやんをもうけるのと、縛られ叩かれ蹴られ、狼ぐつわをはめられ、あらゆる凌辱を受けなければ「満足出来ない」と、どちらが「美しい」とお思ひですか。すくなくとも裕子は願ひは出来るなら前者でありたい。裕子はそう思ひます。もしもそれが出来ないなら、せめて「後者」のような行為を「しないで」すませたい。それが裕子の決心だったのです。異常性欲を純粹に自分の心の中だけに止めて、人に洩らすまい。最小限度の願ひはこれだったのです。私はひざまずいて、わが決心のゆるがぬことを祈りました。祈るとは何かはないことでしょうか。私は「祈る」ということが何を意味するか、何の役に立つかわかりません。それどころか「祈り」とは何のつくらない「無償の行為」だと信じているのです。けれども私は祈りました。これは「心弱きもの」の哀れな姿でした。こうして裕子は暗い長い寂しい道を一人でおぼつかなくも歩いてきました。長い長い冬の夜が漸く明けかけてきました。私の住む東北の片田舎にも、日々吹き荒れていた烈風がいつのまにかやんで、雨は海から静かに春を吹きよせて来たのでした。人々の顔には

——陰鬱なこの地方の人々の顔には春を迎える歓びが隠し切れぬ感情となつて現われて来ました。こうして裕子にも淫靡な季節がやってきたのです。私はこの新たな苦行の日々を思いこれからの長い一生の道のことを考えました。そしてあらためて自らのさびしい一筋の孤独の道をたった一人でゆく決心を固めたのです。「いじらしい裕子のこの覚悟をどうかおまもり下さい。裕子はそれが正しいことだと信じているのですから」私の毎夜の祈りはこれでした。激しい苦しみでした。自らに克つことはむづかしいことです。殊に私の場合は本能に根ざしたものであるだけに、どこにも逃れようもなく真正面からそれと対決する以外に道はないのです。裕子は平凡な女です。高い知性も深い教養も強い心も持ち合せてはいません。たとえ知性や教養が如何に高く深くても、性欲を知性的に聰明に処理するのはむづかしいことではないでしょうか。性欲を汚れたこととして軽蔑していても、性の誘惑の強さは同じことです。でも私は耐えました。自ら顧みて恥ない気持で私は春の足音を聴いたのです。

春は静かに私にもめぐつて来ました。おだやかな日射と花々の匂い、青草が芽ばえて遠い山々の線がやわらかくなってきました。乳房がやわらかくあたゝく温み、瞳がしっとりとうるんで、裕子の肉体にも、ひそかに春が訪れてきました。三十三歳の女ざかりの血潮が、白い頬にのぼつて頬からあごにかけての線は、我ながらなまめかしいものでした。私は鏡の中にうつる自分の肉体を眺めて深い溜息をついたのでした。裕子の心は孤独の道をゆく決心しているのに、目の前にあるこの肉体は、その心とは全く無関係に、声をあげて人を恋うている。この胸が、この肩が、この腰が、そしてこの手が、この指があたゝかく、うるおつて睫毛は黒くふるえ胸うちは豊かな乳房をつんで、声をあげて——あゝ声をあげて「男」を呼んでいる。淫靡なこの肉体。せいいっぱいの媚をふくんで「男」の前



にすべてを投げだして奉仕をのそんでいる。裕子は眉根をしかめて、その肉体をにらみつけました。でもそれが何になりましよう。今日の前に誰かと現われて、裕子の手首をとり背中に廻し、張り切ったこの胸にこの腕に縄をかけて縛りあげても、裕子の肉体は何の抵抗もしようもありません。あゝ裕子は人を愛したい。そして人から愛されたい。裕子の精神と肉体のすべてをつくし、すべてを捧げて、人を愛したい。裕子は奉仕の心しか持っていない。裕子の誠実の限りをつくして、たゞ奉仕するよりほか何も出来ない。これは私にとつて限りなく悔しいことです。裕子は本当におこったことがあるだろうか。本当に怒り得ない人間は、——本当に人を憎み得ない人間は、人を本当に愛し得ないのだ、と裕子は思う。でも裕子には人が憎めないのです。裕子は好意しか持ち得ないのです。これについて裕子はどんなに自分を齒がゆく思うことがあったか知れない。何故もつと鮮烈に怒らないのだ、何故お前はもつと心から人を憎まないのだ——それがお前の生ぬるさ、生きることに於て不真面目な証拠だ、もつと怒れ！ もつと憎め！ 徹底的に憎悪してみろ、裕子は何度こう自分に向つて叫んだか知れない。それなのに現実の裕子は、人の暴虐を救し、人の心理を理解し、立場を察し、あげくのはては「無理もないかも知れない」などと思つてしまふ。意気地なし！ 他人と真正面から闘つて勝つ自信がない故に、人の心を理解し人を救すなど自らをごまかし、何とか自分の方を納得させしまふ。これは明らかに裕子の悪徳です。悪に對し、暴虐に對し堂々と闘い、悪を憎み、暴虐を怒ることが何故悪い！ 怒らないことこそ「悪」ではないか。でも裕子にはそれが出来ない、私に對して無慈悲な人にさえ、最小限度の美德を探し、それを見つけて出して好意を持つてしまふ、すくなくとも積極的な悪意をもたないでしまふ。「あの人がそう考える心理の経過はこうなのだ」私はそれを克明に辿り、何か自分の心との親近感を感じてしまふ。あの人の中にある悪

徳は、自分の中にもあるではないか、裕子にあの人に石を投げうつ資格があるだろうか。最後に到達するところはいつもこれ、考えてみれば古川裕子は骨の髄までマソヒストに出来あがつている。裕子は、その依つて来る所以の深さに圧倒されてしまふ、そして再び自分の意気地のなさを、まざまざと思ひしらされる。自らの理性とは全く別に裕子の行動が生れてくる。そしていつも裕子は誰かに好意を持ちたがつている。他人に對して好意を持ち得ない瞬間は、裕子にとつて限りなく陰鬱な不幸な時間なのです。つまらぬ私が、何か人のお役に立つように、自ら善と信じられる限りに於て裕子は善をなしたい。そして美を創りたい！ 裕子はいつもこの「告白」に於てマソヒズムの惨烈な様相のみを記した。でも今日は、その根底に横たわっている裕子という人間について知って戴きたい気がする。行為に現れたもの姿より以上に、これは古川裕子の本質なので、す、「おれはそんな七面倒なことに興味はない。もつと直接的な、サディズムを満足させるような話をしろ」そうおっしゃるかたもあるかも知れません。でも奇譚クラブに一人位は、もつと本質的な、もつと人間の根底に横たわるものをお話をするものがあつてもよいのではないでしようか。今日は思い切つてマソヒストの女の性格はどのようなものかをゆつくりお話ししましょう。

まず第一に裕子の性格を形づくる大きな要素に空想性がありまふ、想像力と云いかえても宜しいでしよう。大体ヒステリー性格の女には必要以上空想力があると申します。裕子もその一人でしようか。ぼんやりと机の前に座つて、時に一時間も二時間も想像の世界に遊んでいることがあります。私の場合、その空想は豪華な衣裳でもなく、世界に君臨する夢でもありません、多くは例の被虐の妄想。後手に括られる縄が手首にまつわりつく感触から、口と鼻とを厚く覆われる猿ぐつわの布の臭いまで、まざまざと想像することが出来るのです。これは少女の頃からのあの………悪癖の

たらしめたものでありましようか。あらゆる姿態、あらゆる感覚、それらが一つ一つ手にとるよう感じられるのは本当に自分でも不思議なようです。この空想力がマソヒストの性格の重要な要素を占めていることは、私には疑いないように思います。元来「空想」とは何と愚かなものでしょう。浅墓さを絵に書いたようなのが、この「空想」なのだと思ひます。でも頭を遊ばせておくと——少し油断して心を解き放つておくと、心の中にあつた被虐の場面が浮んでくる。加之この想像の世界に陶醉している。あの狂乱の日々には、裕子の小さな頭の中は、そのような想像で一杯です。そのほかには何にも入る余地がない。肉体はこの想像の世界——と云うよりも願望の世界にあはられて、狂い廻る。そして苦み悶え廻る。空想と現実が混乱してしまつて、何かなんだか解らなくなつてしまふ、馬鹿々々しいことです。古川裕子とはこんなに愚かな馬鹿々々しい女かと、情熱の覚めたあとの情けなさ、くやしき、味気なさは何とも云いようのない不愉快さです。「夜光島」の中に出てくる唐沢登枝は本物の古川裕子と似てもつかぬ知性的な女性です。ほんものは、もつとほこりっぽい俗っぽい女の女なのです。思う存分におろかな。狂乱の日でない時でも、私の空想は果てしなく拡がります。それはまことに奇想天外なことを考へているのです。私の好きな夢——それはまことに怪しい南方の夢。勿論裕子は東南アジア——印度支那半島などには行ったこともありません。それどころか日本でさえも、ロウに知りもしないのです。それなのに、カンボヂヤ、トレンサップ湖のジャングルの中に蝕ばまれているという、あのクメール民族の十一世紀の巨大な遺蹟、——アンコールワットの写真集などをひろげると、ものおとしつない印度支那の奥地の真昼、強い強い日光の下に寂然と静まつているあの巨大な石造の宮殿——どこかでかすかに豹のなく声がきこえて、石の廊下を廻ると、私の黒々とした影が二つに折れて——こうもりの尿の臭いが鼻をつ

いてくる。タイ族にせめられて、このワメールの都の最後の日、王姫は多くの侍女たちとこの部屋で自刃したという。私の影はその前に立ちどまり、深く深く身を屈してお辞儀をする、廊をへだて、宮殿の庭からは、強い草いきれ。その草の中にたおれた仏像の口もとには、不思議なアルカイックな笑ひが浮び——私はそこに長く長く立ちつくす、やがて夕暮がくる。よどんだ宮殿の庭の上には闇がしのびこみ、あたりは昏れてくる、ものおとしつない。時々目醒したこうもりの鋭い叫び、けたる南の果ての黄昏——ものも、人も、すべてのものが自らの生命を思い悶えるような胸のうずきを感じる。南の国の黄昏のこのような一刻である——裕子の想像はこのように、はてしなくはばたいて、一時間も二時間も南方の怪しい夢に酔いしれているのです。お解りになりましたか。裕子がどんなに非知性的な女であるかを。裕子はまた嫉妬を持たない、人に嫉妬する程自分に自信がないのだとも云えましよう。でも裕子はたった一つだけ心から嫉妬を感じる対象がある、それは「美を創る人々」に對してです。裕子には何故それが出来ないのだらう。私には創造力がないのです。文学も音楽も詩も歌も、彫刻も私には何一つ出来はしない。裕子は音楽が好きです。ドイツのリードと、ベートーヴンの後期の四重奏曲は愛しても愛し切れない。勿論至らぬ私は、ベートーヴンの四重奏曲を理解し切ったとは間違つても申しません。しかしあの高貴な音楽をきいている間は——たとえば作品一三三の第三章。病の癒えたことを神に感謝したリディア調のあるアダージョをきいてごらんさい、誰が人々に對して悪意を持てるでしよう。たゞ芸術を知るものの歎びを、本当に心の底から感ずるものです。生きていくよろこび、美しいものを知るよろこびに、いっばいになつてしまふのです。これは見栄でも道楽でももの好きでも贅沢でも何でもありません、裕子はこの時だけは純粹に自らのよろこびに手放して身をまかせられるので、生きていくことはやっ



ぱりい。私はくだらぬ人間だけど、こんな美しいものがこの世にある間だけは生きていたい、そしてこの私が何人様のお役に立てるように。裕子は大真面目でそう思うのです。おわらいになるかたもきつとありましよう。深刻ぶったキザな云い草だと思いいなるかたも、きつとありましよう。でも裕子は、本当に心の底からそう思っているのです。今私は幸福だ、と。しかしそのあとで私は限らない嫉妬を感じる。何故私にこのような美しいものが創れないものだろう、何故他人だけその力が与えられているのだろう。裕子が心の底から嫉妬するのは、この時だけです。もういゝ加減につまらぬ話はやめるとおっしゃる声が耳もとで聞こえるようです。お前のそんなお談議をきくために、この雑誌を買うのじやあないのだとお怒りの声が耳もとに響き渡っています、ただ裕子は今日はこんなことを申したいのです。裕子を少しでも愛して下さるかたが、もしあるならば、笑って裕子の我儘を赦して下さい。博物館の乾隆の壺の青磁の色に魅せられて、半日もその前に立ちつくし——大真面目でその美に陶醉している、古川裕子はそんな女なのです。さぞお呆れになったことでしょう、裕子は「凌辱の幻想と期待」なる「告白」をものして皆様に呼びかけました。その時、私は私の全部をさらけだして皆様に求めたつもりだったのです。でも言葉が足りなかったようです。裕子には今日こゝに書いていような一面が——甘い、成熟した大人の目からは、まるで少女のように甘ったるい一面があるのです。裕子は、それでも、もう一度申します。この世に、あのように美しいものが残されている間は、マソヒスムの宿命が、如何に裕子を虐んでも、私は生きていよう。そしてあのように美しいものを、裕子が心から気高く美しいと感じられる限り、私は人に対して悪意を持つまいと。やさしくあたたく、真面目に一生懸命、裕子の誠実の限りを尽くして人々の役に立ちたい、と。これは裕子の自分で自分が可愛そうになる程、切ない想いなのです。私の甘さが

おかしかったら遠慮なくわらって下さい。この想いだけが——この想いだけは、どう思いかえしても、裕子の真実だと信じられる——そのことだけが、裕子のたった一つの生きてゆく力なのです。裕子にも少しは良いところがある。泣き虫の私はこゝまで書いてきて泣いてしまいました。涙が頬を伝ってとどめる術もありません。こんな甘いことに好い気持ちになって涙を流せるなど、お前は幸福だよ、皮肉なことはそうおっしゃるでしょう。マソヒスト古川裕子の惨憺たる悪業は、数々の「告白」に云いつくしました。せめて今日だけは——せめて今日だけは、黙って裕子の甘さを見逃してやって下さい。歪んだ性欲の塊のような裕子にも、少しは良いところがある！ ゴムのレインコートと麻縄と鞭、露出癖と自瀆癖と卑屈、美貌も才能教養も何もない裕子の、鼻持ちのならない云い草を、今日だけは、笑って見逃してやって下さい。裕子が、もし自らの孤独の道を、これからの長い長い一筋の孤独の道を貫きとほせるとしたら、この甘い想いにすがってゆくよりほかはないのですから。裕子は膝まづいて三度神に祈ります、「裕子に力と勇氣とをお与え下さい。裕子は祈りを信じていません。祈りがきかれるとは期待していません。祈りとは自らの弱さを自覚した時のみ、自らの無力を身に泌みて知った時のみ、人間の口から洩れるものであると思っています。信じていない祈りを、——神よ、裕子はあなたに捧げます。暗い世界の片隅で、一人のマソヒスムの女がつぶやく祈りを、裕子は自らの力として、あなたに捧げるのです」と。

こゝまで書いて来ました時、私の手もとに奇譚クラブの五月号が届いてきました。私は恐ろしいものに触れる想いで——しかしその耐え切れない誘惑にかられて、パラパラとページをめくってみました。ふと読者通信欄をみると、私の名がのっています、そして私の書いた「愛恋の日に」をお読みになって、何程かの感動を得られた

ように伝えてこられたかたがあります。裕子は不思議なものを見る目でその通信を拝見しました、裕子はむづかしいことは解りません。深い思慮とてないのです。私はたゞ私が心から思うことだけを——私が体験した事実と、私の心が感ずる想いとだけを、ひたすら書いてきたのです。へたな話術で、自分を慰めるつもりで書きつづってきたのです。そして編集者に「古川裕子に隔月位には近況を報告さすべし」とお述べになつています。裕子はおそろしくなりました。今私が書いているこれが、御期待にそえるだろうか。自分だけでいゝ気持ちで、おしやりをしている傾きは、この裕子の最後の一篇が一番甚しいのです。何にもお心をそゝるようなものはない。裕子は決心しています。私はこれを最後に永久にこのような「告白」を——いや一切の告白めいた文章を書かないと。そしてその後、せめて読者と編集者にとに甘えさせていたきたい、と。おねがいです。こんなもの、どうにも、しようがないではないかとおっしゃるかも知れませんが、お願いですから、これだけは——この一篇だけは、小さな小さな活字で宜しうございます、どうか奇譚クラブの片すみにのせて下さい。裕子は自分を甘やかすこの一篇を残さないでは、奇譚クラブの読者と編集者の皆様の前から消えてゆきたくないからです、この裕子の我儘をどうか私に赦して下さい。更に、こゝまで書いて来てもう一度パラパラと雑誌をめくってみると、意外にも吾妻新様から私への公開状がのっているのに気がつきました。裕子は、むさぼるようにそれを読みました。そして深い悔悟の念を感じてしまったのです。浅墓な私の言葉は、あの立派な「夜光島」を半途で終らせてしまった経過が、まざまざと読みとれたからです。吾妻様御宥し下さい、裕子はそこまで気付かなかったのです、そして重ねて裕子へあのような公開状をよこされました、これについて私は是非ともお答えしなければならぬ、でもいったい何をお話したらいいのでしょうか。

「夜光島」が連載され始めると、すぐに私は私自身がモデルになっているらしいことを察しました。そして一方では何か面映ゆさを感じると同時に、他方では抑え難い好奇心を抱いたと申さねばなりません。一回一回、回を重ねるごとに登枝が裕子らしいことは殆どたがう余地もなくなつて、私の興味も著しく増しました。でもこれに吾妻様の責任ではないのですけれど、私はまず登枝の挿画を見て驚いてしまいました。私自身とは似ても似つかぬ近代的な女性！ ぽつぽつとスマートで、おまけに男装をして鳥打帽子をかぶって現れた時には思わず笑ってしまいました。何も登枝が裕子に似ていないければならない理由は少しもないのですから、これも至って見当はずれな思いなのですけれど、裕子が男装をする——髪の毛を短かくヘッパイン型とやらにして鳥打帽子をかぶる——考えただけでも愉快になつてしまったのです。裕子から考えると余り奇想天外なことでしたので。吾妻様いゝえ挿画々家のかた、ほんものゝ裕子は、もともとと田舎臭い古風な女なのです。裕子はロクなお洋服も持っていないません、家で普段着に着るブラウスにスカート、それにスーツの一つ位はもっていますが、一日の大部分は殆ど和服ですごしています、私は非能率的な和服を愛しています。もともと洋服などを着ている私は、我ながら余りスタイルがよくないと自覚していますので、自然欠点が多くなる和服になるわけです。このような次第ですので、あの挿画のようにスマートには、とてもとても及びもつかぬものなのです。古川裕子が、近代的な美人であろうと想像なさる読者が、もしあるならば、その御期待は御無用になさって下さい。裕子は引込思案な、至って平凡な古風な三十女に過ぎません。ともあれ余り自分とかけ離れた挿画がかかれておりますので気が楽になつて一層興味を持ちました。吾妻様は「きいたふう」の中で御自分の作品の挿画についてお話になつていらつしやいます。私も自分の姿に関連させて、私の作品の挿画について一言申してみま



しよう。裕子の告白には、その内容以上立派な挿画がつけられています。このことについては裕子はお礼を申さなくてはなりません。どれがよい、どれが悪いということではなしに、どの挿画が一番、本ものの古川裕子に近いかをお話致しましょう。自分の姿、自分の容貌については、自分にはよく解りません。そこで義兄の意見をきいてみました。すると「美しい五月に」の挿画が、現在の私にもっとも近似しているそうです。この画には「SHIN」とサインしてあります。ゴムのくつわをはめられて後手に括られているもの、そして車中でマントをきせかけられている後姿、大へん感じがよく似ているそうです。シュミーズ一枚で、寝床の上に手をついている画は、「裕子さんより美人だね」という御托宣でした。第二に滝麗子さんが書いて下さった「夕暮の窓辺にて」及び「愛恋の日に」の挿画。これも美人に過ぎるそうですが、全体の感じは当らずとも遠からずとの事。殊に「夕暮の窓辺にて」のマスクを嵌められて床柱に括られている画、及び「愛恋の日に」の冒頭、猿ぐつわを噛まされて手足を縛られ転がされています。画が裕子のかもし出す感じを感じさせます。同じ滝様の画でも「孤独」のゴムレインコート、フーディー姿のものは、若すぎ、スマートすぎるとの評です。私自身としては、私の最初の告白「囚衣」のカットになっているレインコートの上から後手に縛られた絵、そして全裸で高手小手に括られて、うつむいている画が、裕子の若い時の身体を感じをよく出していると思っています。要するに「美しい五月に」にかかれた女の姿を御想像下さい。もっとも、あれそのままでは、少々裕子の方が、もうけものをするのですが。

余談になりました。「夜光鳥」にかえりましょう。小説がだんだん進んで章三郎と登枝とが、自分たちだけの生活を始める頃、私の興味は絶頂に達しました。しかし裕子は何か白々として寂しさを感じたのです。小説の中で章三郎は登枝に、「七つ道具」を嵌めてみ

ます。「たゞそれだけのことだ」との言葉は裕子を悲しませました。そして登枝は車をひいて家の廻りを廻る。そのこと自身は裕子にも興味はなくはなかった。でも裕子の心はたのしまなかった。何故なら章三郎は（いいえ、吾妻様は）そのような登枝を愛していらつしやらない。御自分の御趣味にあてはめた時だけ、いきいきと登枝を愛される、そのことが、この行間から痛い程感じられたのでした。吾妻様は、作中の登枝に、まるで本ものの裕子に気兼ねなさるかのよう、ちよつとだけ例の「マスク」をもち出されました。

ボートにのる前に「マスクをかけてこなかったのですか、」「そこまではかけてきましたわ」云々。それだけでした。裕子は裕子の趣味にあつた時だけ、章三郎に登枝を愛してもらいたいとは思いません。しかし御自分の御趣味に合わせた時に、作者の筆が目に見えて精彩を放ってくるのを見ると人間というものはこれ程孤独なものか、と、思わず嘆いてしまったのです。全く「見当はずれ」の嘆きです。でもこれは「夜光鳥」を読む裕子の実感でした。

裕子は、吾妻様の「汚れたズボン」に興味を持ちます。もうあの小説の立場に裕子が本当に立ったなら、裕子は何一つ自分の趣味を持ち出さず、章三郎氏のなすがままに「喜んで」なっていたでしょう。それどころか、そうすることに心からの喜びを感じたでしょう。小説の前半の読後感、それにも拘らず、何か冷たいものでした。私は何となく反撥さへ感じたのです。それは何故だったのでしょうか。その当時は、よく解りませんでした。でも、あの小説がとも角も完結した今、裕子には、はっきり解っています。小説の前半では吾妻様は登枝を（本当は裕子をと申したいのですが！）まだ本当には愛していらつしやらなかった。それは単なる小説中の登場人物にすぎなかった。小説が後半になると、私はだんだん引き入れられて来ました。前に感じたあの日々とした異質感が、いつのまにかすっかり消え失せて、裕子はあの「夜光鳥」の生活に陶醉し始めた

のです。登枝が裕子へ、裕子が登枝へ、私は殆ど区別さえしないようになつたのです。私は苦しくなりました。作者吾妻様は登枝を、——いや本物の古川裕子を「愛して」下さっている！裕子はそれを身に泌みて知つたのでした。一日猿ぐつわを嵌められている生活が始まってから、私は何と作者に愛の言葉を囁いたか知れません。吾妻様お赦し下さい。古川裕子はあなたを愛していたのです。吾妻様が章三郎氏に身をかけたように、裕子は、あなたの登枝に入りこんで、本当に登枝になりたかった。章三郎と登枝が始めて会い、夜光島に移る頃のあの我知らぬ反撥などどこかへ消し失せてしまつたのです。奇妙な話です。裕子。——古川裕子は本名ではありません。今まで本ものの古川裕子などという理屈に合はぬ用語を用いてきました。現実には生きています。私——古川裕子のペンネームを用いる私は、吾妻新というペンネーム（多分）をお使いになつていて、生きた一人の男性を、現実には全く知りません。いくつになるかたやら、どんな仕事をなさつていらるかたやら、そしてどんな姿かたちのかたやら、何一つ解つてはいはしないのです。同様、吾妻様にも私のことをお判りになる道理がありません。この二人が——広い世界に別々に生きていて二人の人間が、偶然「奇譚クラブ」という特殊な雑誌の上で知り合い、すくなくとも、現実には生きている「私」は今、吾妻新様を「愛している！」（吾妻様、私の非礼をお赦し下さい）これは、正しくまぼろしの恋です。うたかたの恋です。誌上の恋というよりほか何と申しましょう。裕子は苦しくなりました。この日本の現実に生きていらつしやる吾妻新なるペンネームをお使いになるかた——、そのかたに私は呼びかけていいものでしょうか。誌上ではなくそのかたのお心は、裕子というペンネームを用いる一人の女に、本当に向いているのでしょうか。ただ紙の上の思惟にすぎないのではないのでしょうか。私にはその自信がありません。何か大真面目に、ひどく滑稽なことをしでかそうとしている気がして

何方がないのです。「これは喜劇だ」——私はそう思いました。そう思おうと一生懸命努力しました。惚れっぽい私に嫌気さえ感じました。そして顧みて深い深い孤独を感じたのです。喜劇は御免だ、と。私は裕子に「孤独」なる一文を書かせました。それは論理の矛盾に満ちています。私はそれと知りつつ敢えて唇をゆがめて「愛異常性欲者の孤独」を強調したのです。誰が考えても「個人的な意味」で異常性欲者が常に孤独だというあの論理は筋の通らぬものなのです。私はそれを百も承知でした。でも敢えて古川裕子にあ書かせたのです。そして私の心のうちには吾妻様、あなたがありません。吾妻様がこれにどのような反応を示されるだろうか。私は獲物をまつ猟師の心で待ったのです。そして今「孤独の広場」を見ました。そして筆をもつ手もふるえる程心をうごかされました。でも私は今は何と申したくありません。私は古川裕子をこの世から消してしまいたくなつて居るのです。古川裕子ではない現実のこの話——出来るならこの私が代つて表面に立って、体当りで運命を話したくなつたのです。私は古川裕子の名で、もう十五篇もの「告白」を書いて来ました。今までの私には、これが必要でした。それは「我が安全弁」でした。吾妻様は、古川裕子の「囚衣」によって奇譚クラブに登場なさつたとの事です。さすれば、古川裕子には吾妻様に何かの特権を持つて居る筈だ。——こんなわけの解らぬ論理さえ私の心にうずまいています。吾妻様、「異常性欲者は永遠に孤独だ」との言葉を裕子は——いいえ私は徹頭徹尾致します。何故ならばそれは貴方にむけた「あてつけ」の言葉にすぎないのでございますから。あれはマソヒストの女の哀れな愛の言葉であつたことを、吾妻様はお察し下さいましたでしょうか。

私は至らぬ女です。意気地のない女です。私のような女の恋が、いったいどれ程の価値があるのか、私はそれを知りません。でも私は愛する男のそばにいたい。世界の果てまでもたとえ唐天竺のはて



までも私はあなたの後を追ってゆきたい。愛を感じるのには、——女が恋うのは、人格や学問や教養にではないのです。一個の「男」裸の、すべての肩書を剥ぎとった一人の「男」それを女は恋うのです。女というものは何と悲しいものでしょう。本当に何とおろかなものなのでしょう。このおろかさこそ、女の生命なのです。女の一筋の愛なのです。裕子は——いいえ現実の私は、マソヒストです。異常性欲者です。私にはこるべき何物も、自分では見つけることができません、でもマソヒストにも愛することが出来ます。私は今、その哀れな愛を、おろかな愛を貫きたいと思っていますのです。ああ愛するということは何と愚かなことでしょうか。

吾妻様。私はあなたにこれ以上の愛の書を捧げることはありません。私は現実のあなたを存じ上げておりません。これは私の独りごとと思召して下さい。奇譚クラブの誌上に生れた吾妻新と古川裕子は、どうかお願いですから、永遠に変わぬお友達であるよう、心から祈りたいと思っています。もし吾妻様がお許し下さるなら、誌上でも吾妻新は古川裕子を愛するとおっしゃって下さい。お願いいたします。

古川裕子は、そのお言葉を聴けば——いやそのお言葉を読めば、世界の果てまで吾妻様についてゆきます。失礼な、いやな云い方を赦して下さい。異常性欲の一筋の道を——長い長い遠い遠い地平に続くこの道を、同行二人、手を取り合って、いつまでも、いつまでも一緒に参りましょう。古川裕子というペンネームの女と、吾妻新というペンネームの男との間については私には何も申すことが出来ません。このことについて見通しをつける厚かましさと自信とは私は持ち合せてはおりません。この二人の関係については「運命」にまかせましょう。もし「運命」が二人を結びつけるなら——お気にさわったらお赦し下さい——私は素直にその運命をうけ

たいと思います。もし運命が二人を引き離すなら——いいえ、私の勝手な云い草が、勝手な希望が、かなえられないならば、私はそれに対しても何の不平も申しません。現実の私は、たった一人で暗い暗い道をゆきましよう。私は自分の勝手のために人様に御迷惑をかけたことはありません。たと運命にまかせるだけ。あとは、どのようでも「運命」がしてくるでしょう。

奇譚クラブの読者の皆様、そして編集者のみなさま、長い間有難うございました。昭和二十七年十二月、ふと、かりそめに書きつづった私の「告白」が意外にも長くつづき、満二年半、十五篇にものぼって、現在に至りました。古川裕子にも、良かれ悪しかれ、新しい運命が訪れて来たようです。私はここで古川裕子をこの世から消してしまふ決心をしています。新しい世の光に、私は生きてゆきます。それは相いも変わらぬ異常性欲の泥沼にもがき起ることですが、私は真面目に一切をなげうって新しい道にすすみたい。本当につまりぬ「告白」のために、多くのページを戴きました。そして数かぎりない懊悩を読者の皆様にお与えしました。御免下さい。裕子に深く深くお詫び申しあげます。

夜半から書き始めたこの最後の「告白」も漸く終了としていきます。そして今、東の空が白みかけて、春の朝があげようとしていきます。これからも、私にはさまざまな狂気の日が襲ってくるでしょう。その時はどうするか私は知りません。しかし古川裕子の名にかくれて、あられもない「告白」を書きつづけることは、よもあります。今までも裕子にいくたびか「裕子の最後の言葉」なるものを書きました。そうして幾度か、その後、恥しげもなく同じような告白文を発表し、読者の失笑を買いました。今度こそは、もうそのようなことを二度とくりかえすことはありません。裕子は奇譚クラブ

さめの安堵のように

彼の心が開かれる

と独唱と合唱とが深く深々と和唱して終る。裕子は身じろぎもせずと寝き入っています。そして静かに立ち上って、ひざまづき心から神に祈ったのです。春の夜が明けようとする時刻に

「裕子の曇れる眼を開き下さい。あなたの美しい調べで、裕子のこの暗い心を開き下さい。裕子は今、すべての自分をすべて生れ変わろうと決心しています。勇気を出して、勇気を出して新しい道を行こうとしています。それは寂しい苦しい道かも知れませんが、裕子は一つの恋を残して裕子は今立ちあがろうとしているのです」

春の朝の最初の光が射して来ました。さようなら、読者の皆様。この朝の光の中で、古川裕子は、皆様の目の前から消えてゆこうとしているのです。さようなら。

(終)

【編集者より】古川裕子さんの「告白」の原稿を受取ったのは、本年の三月末でしたが採否の決定がきまらぬうち、旋風襲来のため、延々となり現在に立ち至りました。文中、筆者並に読者の方々にお断りしておきたいのは、古川さんが、最後に編集者に依頼された二十八行に亘る事項は、現在その要求を果し得る自由を持ちませんので一方的に削除しました。悪しからず御諒承下さるようお願いいたします。

の誌上で吾妻新様を得ました。たとえ現実の一人の男性を得られなくても、裕子は何を不平を申すことがありません。雨気を含んだ湿っぽい風が窓から吹きこんで来て、外はたんと明るくなって来ました。疲れはてた机の上のスタンドの光が次第にうすれてゆきます。新しい日、新しい春、何の希望もなくとも、日々はめぐって来ます。腕から肩から腰までも、裕子は今疲労にみたされています。もう筆をおきましょう。裕子は裕子の好きな音楽をききます。音をひそめて、耳をすますと、LPレコードはゆるやかに廻ってアルトと男声合唱が流れて来ます。

すべての愛する父よ。あなたの楽器で一つの調べが彼の耳にきこえるなら彼の心は開かれる。

彼の曇れる眼を開かせ給え、そこにあまたの泉が見えるように荒野には渇えしもののかたわらにある泉が。

深く吐息をつくように再びアルトと合唱とでくりかえされます。

すべての愛する父よ。あなたの楽器で一つの調べが彼の耳にきこえるなら彼の心は開かれる。

アルト独唱が熱烈な祈りをこめて歌えば、合唱は切願するようにあとをつけてゆきます。そして最後に長い休止のあと、あたたかも慰



# 變態小説論

佐東増夫

## 一 序

「変態小説」とは余りつかれない言葉ではあるが、変態性慾を取りあつた小説の意味であることはすぐに了解して頂けるものと思う。

変態性慾を分類すれば、サジスム、マゾヒスム、フェチシスム、同性愛その他幾つにも分けられるから、変態小説もそれらの各種を對象とした幾種かに分けられる。そしてその各々について論ずるのが本筋なのであるが、こゝでは主としてサジスム及びマゾヒスムに關するものを對象として取り上げることにする。それは変態性慾のうちこの二つが最も代表的なものであるし、私自身他の事柄については知る所が極めて少ないからである。

## 二、変態小説の特徴

さて、変態小説をサド・マゾにヒントを合せて、その特徴は何んであろうか考えて見たい。

まず始めに考えられるのは、変態小説には

それが表面出ていようといまいと、必ず一種の罪惡感をとまなつていふと云うことである。それを認めようと反撥しようと、多かれ少なかれ後ろ暗さにつきまといわれていることを否定出来ない。或る種の小説ではこの罪惡感を超越或は無視したかのように書かれていゝるものもあるが、それとてもその奥に、罪惡感から逃れようとするあがきが感ぜられるのは、必ずしも讀者自身の意識過剰の故であるとは思えない。この感じは、変態小説を書く側の人と、読む側の人々との双方に深く喰ひ込んでいゝのであるから、変態小説であるかぎり、何んらかの形で罪惡感にとりつかれるのは致し方ないことである。

次に、変態小説は、本質的に耽美的乃至享樂的傾向を持つと云うことである。これは変態性慾に限らず性慾というものの自体の性質に根ざして居ると考えられるが、普通のそれに比して、変態の場合は耽美的傾向が強いと云うことが出来ると思う。最も變態的美しさに

關しては異論もあるかも知れないが、私は決して美の範圍外にあるとは思わない。通常の美と、變態的美くしさの間に本質的な差が存在するはずはない。變態小説はその耽美的、享樂的傾向からして当然、広い意味の娛樂として受けとられてゐるが、これは何も悲しむべき事ではない。娛樂は人間の必需品であるから。しかし、變態小説がいつまでも単なる娛樂から一步も出られなかつたとしたら、それは大變惜しいことだと思ふ。變態性慾の中には、人間の心の秘密を探るのに重要な役目を果すべき鍵がひそんで居ると思ふからである。

變態小説の特徴の一つとして絵面性を上げることが出来る。變態小説にとつて、もちろん心理描写も重要であるけれど、普通の小説に較べて、絵画的描写が大きな意味を持っていると思ふ。或るアブノーマルな出来事を、絵でも見ているように眼前に描き出せば、それだけでもアブ小説の価値は或程度生ずるの

である。従つて變態小説においては挿絵が重要な役目を果すことになるが、これについては、機会があつたら別に論じて見たい。變態小説のもう一つの特徴は、對象が限られて居るので範圍が狭いことである。多くもない材料を、種々な調味料と料理人の腕前で調理して綺麗な器に盛るわけであるが、何しろ、材料の絶対量に限りがあるのであるからそう大きな御馳走を作れるはずはない。同じ事を繰り返すのでなければ長篇變態小説は作り得ないと思ふ。すなわち變態小説は本質的に短篇若しくは中篇小説であると思ふ。

以上、變態小説の特徴について述べたが、次に變態小説の分類と技法について述べて見たい。

## 三、變態小説の分類と技法

變態小説は、それが書かれた目的から、或は形式、時代などから分類するのが適當である。

先ず目的に従つて分類して見る。

- ①精神的苦しみを描こうとするもの。
  - ②自分の意見を主張しようとするもの。
  - ③美しくさを描こうとするもの。
  - ④たのしさを描こうとするもの。
  - ⑤サド・マゾなどのプレイの技巧を解説しようとするもの。
- ①に属する小説では、どうしても堅苦しく

深刻になりがちで、興味本位に見れば面白くないかも知れない。又、實際純粹にこの悩みと取り組んで、これだけをテーマに書き上げた作品は殆んどない。しかし、興味に乏しくても、この種の作品は是非共必要なものであり、又、變態小説がより高度の文学に高められる為には、苦しみに打ち勝つて、もっと沢山書かれるべきであると思ふ。

②の變態性慾に關する自分の意見、特に倫理的主張をする手段として小説をえらぶと云う事は余り感心出来ない。このような主張に小説をもつてすると、その議論の論理性がいまいになり、我田引水の一方的議論となる恐れが多分にあるからである。又、小説としての必然性が薄くなり、面白さにも欠けてくる。したがつてこのようなのは、無理に小説化する事なく、論文、或は隨筆にまづめた方が表現形式として優れていると思ふ。

③の變態性的美しくさを描いた作品は割合多く見られる。これは④のたのしさを描いたものと密接に關連してゐて、無理に分けることもないのであるが前者はマゾ・サドをより美化して幾分客觀的に眺めようとする点で、後者と異なる。より美しく眺めようとするのは人間の基本的要求でもあり、變態小説の価値を高める上にも重要なことであるが、この美化が、變態性的苦しさをまぎらわす麻藥となる危険もあることを考えの上に入れてお

かなければ、サッカリンの美くしさに終つてしまふ恐れがある。現在までに私が読んだ作品のうち、本當に美くしいと感嘆させられたものは残念ながら極めて少ない。

④の變態性的愉しさを描いたものは極めて多い。ただこれだけを目的に書いたもののみでも全作品の七割位はあるであらう。又少し広く考えれば、變態小説はすべて多少の愉しさを描いて居ないものはない。それは、サド・マゾの中に愉しさがあつたからこそ人々がこれに引きつけられる事を考えれば當然の成り行きである。若し何んの愉しさもなければ誰れも見向きしないであらう。この素晴らしい愉しさを描かなくては、實際上變態小説は氣の抜けたビールのように、ただ苦いばかりとなつてしまふ。しかし、こゝで注意しなくてはならないのは、愉しさの追求ばかりに氣を取られてゐると、やゝもすれば小説が下を向いて、單なるエログロ小説に墮ち入らず、或る程度の品格を備えながら、サド・マゾの愉しさを十分に描くことが肝要である。又、いたずらにストーリーの面白さを追う余り社会的に害の大きい物語りとなることも、どうかと思ふ。しかし、この点に關しては、例えば社会的に有害であらうとなかろうと、作品が優れたものでありさえすれば許されるべきだとする意見もあるが、その作品が娛樂のうち



に含まれるものであったら、まず「有害なもの」は認めるべきではないと思う。

⑥の変態的技巧の解説をしようとする意図で書かれた小説は、小説の文学的価値を云々する場合に問題にならないが、単なる解説よりも生々として表現することが出来るという点で存在価値があると思う。しかし、この場合作者は自分だけにしか分らないような描写に落ち入らぬよう細心の注意が必要である。

以上変態小説を、その書かんとする目的から見て分類したが、次にこれを形式或は技法から見て分類して見ることにする。

#### ①一人称小説

#### ②二人称小説

#### ③三人称小説

イ、現実的なもの

ロ、非現実的なもの

#### A、時代小説

#### B、空想・幻想小説

以上のように分類して見た。

①一人称小説「私は……」で書き起す一人称小説は、書き易く、しかも比較的容易に真実感を感じさせる事が出来るという優れた点を持って居る。又実際、多くの人がこの手法を用いて効果をあげて居る。しかしながらこの形式は真実感を出すことと、自分の心理を細かく描くには適して居るが、すべての事柄を、自分の目で見たように、自分の口か

ら話すように書かねばならないから、自分以外の人の心理や、自分の居ない場所の出来事を描くのは不向きである。とは云っても真実感や、それによって来るところの緊迫感というものは、変態小説にとつてかなり重要なものであるから、短篇向の形式としては最もふさわしいと思う。

一人称小説のうち、自分がサジストの立場に立つものと、マゾヒストの立場に立つものがある。前者は語り手が男である場合に多く後者は女である場合に多いのは自然の傾向である。こゝで男の作者が女の一人称で書くことが問題となるが、私は、それが小説であるかぎり、とがめられるべきではないと思う。

②二人称小説、手紙又は話しかけの形式を取るもので、これを用いた作品は極めて少ないが、時たま使われると、案外面白い効果を生むものである。しよつ中使われたのではすぐにあきてしまうかも知れないが。

③三人称小説「彼は……」「彼女は……」で始まるこの形式は小説の形式として最も一般化したものであり、最も広い、しかも突っ込んだ表現の可能な自由の広い形式である。この形式を自在に使いこなすにはかなりの手腕が必要であり、下手に使えば、少しも真実感のない、いかにも作り話といった感じのものが出来上る恐れもあるが、本格的

のであろう。

以上、変態小説を種々な角度から分類して見たが、あらゆる変態小説がすべてこの分類のどれか一つにきちんと当てはまるわけではなく、この分類の幾つかにまたがって居るものがあるのは当然である。否、むしろ、どれか一つにきちんと当てはまるものは、まれであると云つてもよいかも知れない。

#### 四、登場人物

変態小説で主役を演ずる人物はサジストとマゾヒストであるのは当然である。

サジストの中にも気の強い絶対的サジストもあれば「縛らせて頂けませんか」式の紳士サジストもあるし、マゾヒストの中にも、大っぱらの「縛ってちょうだい」型と、潜在性の「嫌よ嫌よ」型とがあり、その四種の人物がさまざまに組み合されて小説が構成されるわけである。

マゾヒストの中で一番多い型は、自分のマゾは認めるけれど、或は自分でも認めたがらないが、他動的にマゾヒスティックな行為を強いられることを心の奥で望んでいる様な人達である。この型の人々は、サジストによって強引に自由を奪われてしまい、自分は全力を尽したのだから仕方がないと、自分の心に対して申し開きが立つときに、最もよくマゾヒストたり得るのである。だから、このような人物を取り扱って耽美的小説を書くとき

には、どうしても絶対的サジストの登場が要請される。

絶対的マゾヒストに対しては、紳士的サジストを持って来るのが定石ではあるが、絶対的サジストを持って来るのも又興味ある組み合わせではないだろうか。

#### 五、結

以上、変態小説一般について概観して来たが、最後にこれからの変態小説に望みたい事を幾つか記して見たい。

前に書いたように、変態小説の対象は必ずしも広くない。しかし、それだからと云つて現在の変態小説は、もうすべてを書きつくして行ききつまっているなどとは全く云えないどころか、むしろ、今までに書かれたものは何人にもありはしない、すべてこれからだと思つて居る。成ほど、後手に縛つて猿轡をはめ鞭でたたきだだけの話はそろそろ鼻について来たけれど、これは書こうとしていて目的をはっきりとつかんでいない為、上すべりして居るからであつて、目的をはっきり見つめもう一步突っ込んで書けば、書くべきことは幾らでも見つかると思う。その意味で、はつきりしない幾つかの目的と、複雑な形式を用いた小説の前に、目的と形式のはつきりした引きしまった短篇が書かれることを希望する。

又、構成能力の優れた人達には、もっとス

な、スケールの大きい小説を書く上にはどうしても必要な形式である。それに時代小説、空想・幻想小説の大部分はこの形式によって書かれている。

ここで時代小説と、現代小説との比較について触れて見る。時代小説は（と云つても、もちろん日本の時代物の意味であるが）日本独特の着物や髪形の形態的、色彩的な美しさ、封建女性のしなやかさに支えられ、且つ又現代の人は誰れも当時のことを実際に見た人は居ないという気安さから来る空想の自由が広い。したがって絵巻物のような美しく楽しい小説を書くにはもってこいである。

それに反して、現代小説は、現によく知つて居る世界を舞台とするわけであるから、材料を得やすいという点は便利であるが、空想の自由という点では時代小説に及ばない。しかし、これは現在の我々と直接つながるものであるだけに、現代の社会から受ける制約と悩みは必然的にからみついてくるので、これを追求することにより、変態小説の文学性を強調する上に役立つ。

時間的に云えばもう一つ、未来小説、或は空想小説というものが考えられるが、現在までの所、そう云つたものはあまりないようである。空想が豊かであれば、あらゆる制約から脱却して、思いきり自由に書けるわけであるから、変態小説にとって最も都合のよいも

ケールの大きい、空想豊かな時代小説、及び幻想小説を期待したい。

更に罪悪感についていえば、これは変態小説にしっかりと喰ひ込んで居るものであるから、そしらぬ顔をして見ても、どうにもならぬものであり、又一步下がって考えれば、これがあるが故に変態小説はその独特の背白い燐光を放つてはなかるか。若し、何んらはばかる処なく白日のもとにさらけ出してしまつたら、それは薄暗の中に光つたような、妖しい魅力はかき消えて、残るのは、ただ醜悪な残骸ばかりとなつてしまふに違いない。その点を考えた上での、罪悪感に反抗するため、故意にそれを無視するならばそれもよかる。又、正面からがっちり四つに組んで戦うのもよかる。執拗に追いかけてくる罪悪感から息せき切つて逃げるのもよかる。ただ、それを感じ覚的に表面だけを捉えるのではなくて、全身的にこれをつかむか、或はつかまれるかしくはなくては、変態小説はいつまでもより高い文学として昇華し得ないと思ふ。

最後に、変態小説の社会にもたらす影響も考慮して、ただ奇をてらわんがためとしか思われなような不潔な事柄を、作者の良識にてらして、取り上げないでほしいものである。

(終り)



# 幽 四 十 月

春 田 一 郎

## 医 務 課

七月の初め、私が担当台へ呼ばれて、「ラ イフ」誌の説明を看守にしていた時、医務課の呼び出し担当の看守がやって来た。誰かに 対する診察の呼出しかと思っていた所、図ら ずも私に対する医務課からの呼び出しであっ た。私は若しかすると私が看病夫になるの ではないかと思つたが、之は一寸意外であつた。 私は自分も予想し、周囲もその予想していた のであつたが、私は計算夫か図書夫か或は考 査夫になるのではないかと思つていたのであ った。この事は訓練を終つて二舎に帰つた時 秘かに期待していたのであるが、その方面の 音沙汰がなくて、二工へ配属されたのも意外 であつた。併し医務に行くことはそれ以上に 意外であつた。私と同時に二工へ行き、一緒

にマッチの整理をやっている内山君こそは医 務課以外に行き様の無い人で、私は経歴から 云えばむしろ計算に行くのが適當であつたか らである。私は医療には全くの素人であるが、 内山君は元陸軍衛生大尉で、看護の専門家だ ったからである。不思議に思つたが、呼び出 しを受けているのであるから、呼出し担当の 杉本さんに連れられて医務課へ行つた。私は 入所以来病氣をしたことがないので医務課へ 入るのは新入考査の時以来初めてであつた。 医務課は八角の右端から出て、廊下を通り、 材料倉庫の間のトンネルを抜けると三四段の 石段があり、それを上つて扉を入ると医務課 である。この扉を入ると病院特有の強烈な薬 品の匂いがした。ものの一週間もすれば慣れ てしまつて何も感じなくなるのであるが、最 初はとても鼻を衝いたものであつた。

私が連れて行かれた所はレントゲン室であ った。そこに一人の部長が居つた。この部長 は佐藤と云つて保健助手と看病夫の取締を兼 ね、レントゲンを担当している人であつた。 背丈は低い、恐い顔をした人であつた。併 し笑うと非常にやさしい表情になるのであつ た。

「近い中に仮釈で出て行く看病夫があるの ね。春田、お前をその代りに医務課へ探らう と思うがどうかね」と佐藤部長は尋ねた。私 は矢張り看病夫になれるのだと思ひ、内心は 嬉しかったが、同時に亦不安でもあつたので 「部長さん、私は医療と云ふことに全然無経 験なのですが、それでもよいのでしょうか」と 尋ねた。

「一寸も構わない」と云う返事であつた。併 し私は現在二工で働いて居り、当然医務課へ

来るべくして未だ来ることの出来ない内山君 のことが氣にかゝつたので、部長に確めた。 「部長さん。私と今二工で一緒に働いている 内山ですが、あの人は衛生大尉上りで医務課 に来ることになつていゝと聞いています。そ れなのに内山君がまだ来ない先に私が探つて 頂いて、そのために内山君が医務課へ来るこ とが出来なくなるのでは大変気の毒に思うの ですが其点はどうでしょうか」

之に対して佐藤部長の説明に依ると、私を 医務課へ採るのは別段内山君の代りと云う訳 ではなくて、内山君も医務課へ来ることはな っているのだが、何分彼の刑期は六年であ り、入所してからまだ二ヶ月そこそこなので 受刑者中行動の最も自由な看病夫にすること は戒護上少なからず難色があるので、多少遅 れているとのことであつた。

私の医務課に於ける予定された職場は薬剤 室らしく、佐藤部長は私を調剤室に連れて行 った。そこには四十才余の年輩の白衣を着た 先生がいた。この人が薬剤士の小村先生であ った。小林先生は私の学歴、経歴、刑務所へ 入つた事情などを掘り葉堀聞いた。小村先 生との面会が終ると、再びレントゲン室と行 って、佐藤部長から看病夫としての注意が色 々あつた。新入の間は古い看病夫の習慣に逆 わぬようにすること。看病夫は受刑者と思え ぬ程行動が自由であり、且つ相当な物品を取

扱うのだから反則に氣を付けること、患者に は古い受刑者が多いから悪い事の煽動に乗ら ないこと等が主要な注意事項であつた。最後 に佐藤部長は 「若しお前が医務課にどうしても居りにくい ようだったらすぐ俺に言つてくれ、希望の所 へすぐ廻してやるから」と 付け加えた。

其日は生憎医務課長が留守なので、翌日か ら正式に医務課へ移ることとなり、二工へ再 び連れて帰つて貰つた。二工へ帰つて看守に 医務課でのことを報告して自席に帰ると、皆 が私を取巻いて私が看病夫になることを喜ん でもくれ、羨しがりました。私は内山君に佐 藤部長の話を伝え、自重して医務課に行ける 日が来るのを待っている様に要望して置い た。

その一舎の房に於ても、房の人達は皆私が 看病夫になるのを喜んで呉れた。前述の如 く、看病夫、計算夫、考査夫及び図書夫を総 称して経理夫と云うが、経理夫の仕事はすべ て智的のものであつて、受刑者として最も程 度の高い仕事であり、人数から云つても、最 も頭数の多い看病夫で十名余、他は三、四名 止りなので、経理夫になるのは最もむづかし く、従つて受刑者の最も憧れる職場なのであ る。私も看病夫になることは些か意外だった とは云え、之で刑務所に居る間の仕事が本格

的に決つた訳であるから嬉しかった。

その翌日、作業が始まつてすぐ、佐藤部長 が二工へ私を連れに來た。私は看守、用務者 其他の人々に挨拶をして部長に従つた。医務 課では先ず防疫課長の田沢先生に会つた。田 沢先生は見るからに温厚な老年の医官であつ た。田沢先生は拘留所で色々とお話をしたこ とがあり、医務課で唯一の顔見知りであつ た。次は愈々吉山医務課長の前へ連れて行か れた。吉山先生は新入考査の時以来二回目であつた。白髪を長く延ばして中央から分け、 やせ型で鼻の赤い老博士は私を前に立たせて 雄弁に色々金属性の事で注意した。

「刑務所へ入つたら、もう社会での学歴や地 位は忘れてしまつて、受刑者と云うどん底の 線に同じ立場に他の受刑者とならんでいゝの だ」と云ふことを心得ていなくてはならない。 人間は十人十色と言つて、一人々々顔が違う 様に心もみな違う。看病夫はお前を入れて十 二名居るのだが、之が一人一人みんな氣持が 違う。併し一つの仕事をやって行くためには 夫々に違う氣持を同じ目的に向つて協力して 一つにして行かねばならない。銘々が勝手な ことを思い、勝手なことをしているのでは、 協力と云ふことは不可能だ。そこで秩序と云 うことが必要となる。学校を出ているお前にはよく分つていゝことと思ふが、協力と云う ことを第一にして貰いたい。次に医務課は他



の工場と違いお前達に直接接触するのは担当さんだけでなくて、先生方も沢山居るし、刑務所の幹部の人達が沢山やって来る。この人達は色々の話をし、それがお前達の耳に入るだろうが、そんな話を他人に決して洩らしてはならない。わしの見る所、お前は気がよきいて、仕事が出来る様だが、口が軽いように思う。この点は充分注意しなくちゃならない」

私はこの注意にはむしろ苦笑した。吉山先生の心配とは丸で反対で、私は気をきかすのは全く下手だが、口だけは固い積りだったからである。課長への面会が済むと、私は佐藤部長に連れられて、医務課の室を見せて貰い、職員の人達に挨拶した。

医務課は石段を上って扉を入った一劃が診察室事務室等であり、その奥のも一つの扉の室が病舎である。事務室の方は廊下を挟んで左側にはレントゲン室、診察室、課長室及び調剤室の順序で並んで居り、右側は歯科室、外科室、病理試験室、薬品倉庫、現像室及び事務室の順序で並んでいる。私が行くことになった調剤室は医務課の中で最も広い部屋で左側には事務機が二つ、右の方には大きな調剤台が据って居り、その背後は全部薬品戸棚になっていた。窓際には水道のついた流しが作られていた。

医務課に於ては調剤室、診察室等の一劃を

## 病 舎

「事務所」と総称している。之は「病舎」に對して斯く稱されているものである。「事務所」の廊下が突当った所に一枚の扉がある。この扉の内部が「病舎」である。同じ医務課に於て、わざわざこの様に「事務所」とか「病舎」とか何故区別して呼称するのか、不思議に思われるかも知れないが、刑務所にあつては「事務所」と「病舎」とは全く別の世界なのである。即ち「事務所」は「娯楽の世界」であり、「病舎」は「受刑の世界」なのである。「事務所」は八角の鉄扉の向う側にある職員課とか用度課とかの普通の事務室と同じ範疇に属するものであるが、「病舎」は二舎とか二工などと同じ類別の下に入るものである。医務課に於ては娯楽の世界と懲役の世界とが偶々扉一つに依つて相隣切していると云うに止まり、両者は全く別の世界なのである。従つて、「事務所」には普通の新聞もあれば煙草もあるが、「病舎」には斯かるものは一切禁物である。看病夫は受刑者であるから、当然「病舎」に属するものであつて、「事務所」で働くのは毎日「病舎」から「事務所」へ「出役」(シュツエキ)することになるのである。

病舎は事務室に對して直角に廊下が走っている。片側は窓で、反対側には房が一房から

九房まで並んでいる。この中、一房から三房までは看病夫の房である。一房の隣は浴場、浴場の手前が看病夫の控室兼食堂となつて居る。八房と九房という雑居房が一房から七房に引続いて並んでいるが、廊下をへだてたその向い側には壁があり、その壁を入ると三つの房となつて居る。之等の房は曾て「狂人房」といふ、精神病者を収容した所であるが、私が医務課に行った時は既にこの内の二つを看病夫の房に、一番奥の一つを物置に使つていた。房の番号は九房に引続き、十、十一、十二房となつて居た。一房から十二房迄の一劃を「平病舎」という。平病とは伝染病ならざる普通の病氣のことであり、平病舎はそれらの患者を収容しているものである。この中、八房及び九房は比較的軽症の患者を収容している雑居房である、平病舎と「T」字形をなして、更に一つの病舎がある。之は隔離病舎であつて、十三房から二十二房まで十室あり、肺結核其他の伝染病患者を収容している。病舎は他の舎房と異なり、看病夫の手に依つて塵一つない迄に清潔である。この点は普通の病院と同じ、或はそれ以上であるが、各房についている頑丈な扉、ピカピカと白く光る冷たい本錠、これだけが娯楽と違ふ所である。社会から隔離された受刑者を、更に一般の受刑者から隔離する所、之が刑務所の病舎である。受刑者はいわば一つの精神的な病舎であ

る。その精神的な病氣に加えて、肉体的な病氣に犯され、錠のかゝる病室で療養する患者は誠に不幸な人々といわねばならない。

私が入った時、医務課には吉山医務課長の下に田沢防疫課長、若森先生という若い医官が居った。若森先生はインターンを終つたばかりの若い医官で、風さいを構わぬ、学究肌のどちらかといえば田舎風丸出しの人であつた。この他には保健助手である二人の部長があり、佐藤部長はレントゲンを受持ち、橋川部長は防疫関係を受持っていた。この両部長が交替で、看病夫二名を連れ隔日に工場回診に廻り、工場回診のない日は特診に廻るのだった。特診とは各工場舎房の一般の治療ではなく、特に急病などに対する措置を講ずるためのものであつた。薬剤士である小村先生、事務担当の神前看守、患者呼出しの杉本看守の八名が医務課の職員であつた。齒科担当の鶴井先生は嘱託で、一週二三回治療のため出勤せられることになっていた。

右の人々は「事務所」の職員である。「病舎」には之等の人々とは別に、二舎や二工其他に夫々担当看守がある様に病舎担当の看守及び部長がいるのだった。担当看守は鈴川といふ、担任部長は安川といふ。私達看病夫は身分上のことや日常の行動については鈴川看守の戒護監督を受け、「出役」中の仕事に關しては事務所の職員の監督を受けるのである。

刑務所に於ては「戒護権」ということをやかましくいう。「戒護権」とは受刑者に對し監視保護する権限である。看守長、副看守長、部長及び看守には戒護権があるが、医者薬剤士等の技官には「戒護権」がない。従つて、看病夫に對しては鈴川看守が戒護権を持つて居るのである。佐藤橋川両部長、神前杉本両看守も勿論一般的の戒護権は持つて居るが、受刑者として病舎に属する看病夫に對しては鈴川看守が直接の戒護権を持つて居るのである。厳密に云へば、例えば薬剤士と看病夫とだけで仕事をすることや、医官と二人で他の舎房に赴くことなどは戒護上許されないことなので、その様な場合は戒護権を持つ看守が必ず附添わねばならないのである。併しそんなことを言つては仕事が出来ないので、この点は緩和されているが、それだけに看病夫の選択には注意を払うのである。

## 看 病 夫

鈴川看守に挨拶した後、私はその日から同僚となる看病夫達に挨拶をした。看病夫は私を加えて、十二名であつた。一級は森田さんと云うのが一人、二級はなく、あとは全部三級で、四級は私だけであつた。看病夫の首席である森田さんは患者に応急処置をする仕事と調剤を受持っていた。この森田さんが近く仮釈放になる予定なので、私がその後任に來

た訳なのである。青野君と云うのはまだ少年らしい倅の消えぬ青年で外科の手伝いをして居た。田辺君は両あごの張つた大きな頭と身体とを持った青年で事務と防疫の係りであつた。吉田君は頭髪のちぎれた美青年で矢張り事務の係りであつた。池上君は四十才で、一寸猿に似た顔で、おまけに歯が抜けているので余程年より老けて見えた。この人は電気技術面の仕事と、診察室の雑務をやつて居た。揃つてインテリである看病夫の中にあつて、池上君だけは学校を出て居らず、多少他の者と肌合の違ふ所があつた。川崎君は極めてよくとつな青年で、レントゲン室の係りであつた。下田君は小兵ながら精悍な青年であり、早野君は目が鋭く唇が薄くあごの尖つた青年であり、金王君は旅役者の群に加わつて居たと云うだけに何処か垢抜けのした青年であつた。この三人は病舎の係りで、病室の掃除をしたり、病人の世話をしたりする役目であつた。もう一人の看病夫の山本さんは六十才以上の老人で特殊な存在であつた。八房にはカリエスの病人や其他二、三世話の要る患者が居り、大小便の世話をしなければならぬのであるが、そのため老人の山本さんが専任となつて居たのである。

看病夫は山本さんの様な老人でも中等学校を卒業していた。だから他の一般の受刑者――それは平均的に見て教育の程度が極めて低



いのであるが——に較べると、看病夫のレベルは比較にならぬ程高く、それだけに看病夫達の自尊心も高かった。事実、経理夫と総称される計算夫、図書夫、考査夫及び看病夫はその教育及び智識の程度から云って、他の受刑者とは格段の差異があり、受刑者は一般から擢んでた一種特殊な存在を形造っていたのである。一般の工場に於ては用務者及び衛生夫があり、他の一般の受刑者はその監督下にあるのであるが、看病夫には用務者も衛生夫もなかった。従前は医務課に配属された受刑者を看病夫と衛生夫とに分けて、衛生夫は看病夫の下に属していたのであるが、後に全員が看病夫と呼ばれるようになったのである。看病夫は一人々々が用務者であると言う自尊心を持っているのであった。勿論、看病夫の中には物品を請求したり、食事伝票を書いたり、看守の手伝いをしたり、所謂用務者と同じ仕事をする者もあった。併し之は必ずしも最上位の看病夫の仕事ではなく、誰か一定の一人がやっていると言うに過ぎないのであった。

やがて、私が看病夫になって第一日目の中食の時間が来た。炊場から食事を病舎まで運んで来る。之を檢数して受取る。菜食器を入れて各房に配る大きな浅い箱が二つある。一つは平病舎用であり、他は隔離病舎用である。工場や倉房に於ては飯皿も菜食器も別に

個人のものが決つてゐる訳でなく、一旦集められると、今度配られた時どの食器が当るか分らないのであるが、病舎に於てはそんな訳にはいかない。殊に隔離患者の食器は嚴重に他の患者の食器と混同しない様にしなければならぬ。看病夫自身の分も患者のものと混同しない様に別の板の上に並べる。斯くして副食物を分けてしまふと、今度は配食である。病人には一般の副食物の外に「病菜」が付くことが折々ある。この為には患者には普通の菜食器の外に「別菜器」と称する平たい皿が一つ宛貸与されて居り、この別菜器は普通の菜食器にびたりとはまる様に出来ている。病菜は仲々御馳走である。私が看病夫になった日も丁度病菜が付いていたが、その日は魚の丸いさつたま揚げを甘く煮付けたものであった。配食が始まると一人が鍵を持って一つ一つ房を開けて行く。その次には二人で飯の箱を持って飯を配って歩く。患者に依つて飯の等級が区々なので、飯を配る仕事は慣れないと仲々出来ないものである。その次には二、三人がかりで副食物を配って歩く。そのあとから桶に入つたお茶を配って行くのである。最後に一番上位の看病夫が配食の終つた房から順次扉をしめて廻る。新入はその又あとから塵取りと箒を持って配食の時こぼれた食物を掃除して歩くのである。私も医務室に来て一ヶ月、結りは之をやった。二舎、訓練工場及び二工

と私はずっと配食を人にして貰つて食事をする立場にばかりいた。それが医務課に来て配食と云うものをする立場に始めてなつたのである。して貰つてゐる時は何も感じないが、自分がする立場になると、配食と云うものは仲々むづかしいものである。特に副食物の公平な分配がむづかしい。

患者の配食を全部終ると、私達看病夫の食事となる。訓練工場に於ても二工場に於ても食事は席も決つて居り、正座して「黙禱」「直れ」「頂きます」の順序に従つて食事をすると云う風に秩序正しいものであるが、看病夫の食事には之等の秩序立つたことが全然なく、学校の寄宿舎の食堂と何等異なる所なく、むしろ慣れない中はだらしく見えた程であつた。おかずは一般菜の上に、先程病菜として配つた揚げ団子が二つずつ乗つていた。それは一般菜とは較べものにならぬ美味さであつて、恐らく刑務所へ入つて始めての御馳走であつた。病菜と同じ御馳走が食べられるとは流石に看病夫は皆の羨む職場だけのことはあると思つた。併し、之が非合法のことであると分つたのは一ヶ月も経つてからであつた。病菜は大体一週間に二回位の割合で付く。病菜は病人の栄養補給のためのものであり、病人だけに給与せられるものであるから、看病夫が之を一部分横取りすることは素より反則

ではあるが、何と云つても不自由な食生活の中にあつて、特別の食物を目の前に見せ付けられ、之を取扱うのであるから、看病夫の欲しくなるのも亦自然の人情であらう。そこで機会があれば病菜をうまく一部分看病夫の分に取りとうとするのであるが、正担の鈴川看守が配食に立会つてゐる時はとても出来ない。絶好の機会に鈴川看守が休憩の爲めに、他の看守と交替してゐる間に丁度配食の時間が来たのである。病菜は一般菜とは別の桶で持つて来る。そこで病菜を病人の食器につけ分ける時、交替の看守が不慣れで目が届かないのを利用して、桶の底に看病夫の分を残し、この桶を素早く看病夫の食堂の片隅にかくしてしまふのである。看病夫の食事には他の工場に於ける様に看守が監視してゐると云う様なことはないから、桶さえかくしてしまえば、あとは悠々と病菜に舌鼓を打つことが出来るのである。私はその時は何も知らなかつたが、私が医務課へ来た日の中食に於いた揚げ団子もこの手で誤間化したものであつた。看病夫の中には病菜のみでなく、病人用の卵、牛乳、果物などを誤間化するものがあり、その手口は頗る巧妙で全然分らないのであつた。

中食後、鈴川看守に指定された私の房は十房であつた。同房者は早野君であつた。前に述べた如く、十房と十一房とは狂人房をその儘使つてゐるもので、普通の房は通路から五

寸程の高さの床になつてゐるのに対し、十房と十一房とは三尺程に床が高くしてあつた。之は普通の房に床几の様なもの並べ、その上に莫座をしいたものであつたので、水道は床の下にかくれて使えず、便所は三尺以上も床の下にあると云う不便さであつた。唯、普通なら相当高い所にある窓が、そのまゝ床だけが高くしてあるだけなので、窓の敷居は床より一寸高い目の所にあり、壁の代りに窓があると云う形になつてゐた。私は呼び出しの杉本看守に連れられて、一舎へ行き例の如く財産一切を十房へ運んだ。

仮令僅かの間にしろ、同じ房に暮した人を悪く云うのは忍びない所であるが、私と同房の早野と云う青年こそ人間の最も稀薄なほんとうの悪人と云うのではないかと思う。早野君は三十才前の青年で、顔色が青白く——

營繕、外役、耕運などの如く日光に當つて労働する以外の受刑者は日光に當る機会が非常に少ないので、一般に顔色は青白い。その上どうしても脂肪分が不足するの、顔色に艶と云うものがなくなつて、受刑者特有の顔色になるのである。この意味では、營繕、外役、耕運などに働く受刑者も同様で、彼等の顔は唯陽に焼けてゐると云うだけで艶がなく、くすんだ黒さになつてゐるのである。この様に青白く艶のない顔色の受刑者の中にあつたえ、早野君の顔色は目立つ程青白かつたので



## ボクの責め方

宝塚二三夫  
四馬孝・画

そも／＼女性の受虐心理というものは、愛する人を満足さすためという、殉情の発露によってあらゆる責に應えているのであって、刺戟性、冒険癖、慾得づく等がそのあとに続き、女性特有の順応性から、マゾヒストらしい性情に甘んじているものである。

さて、窓際のさらし責は、前回に次ぐ残りの一人は君江であり、

「この残酷さを見せたら、驚くのは、却って社長さん御自身でしょう。ソーレ」

と背中にも高小手の縄目を、わざとらしくガラスにピッタリ引付けるにくりしき、そのくせボクが「何とでもいって」と知らぬ半兵衛していると、人通りの内に上向く気配を見て、パツと身を引く君江、

「それ見ろ」

「ウウ、さんくネエ、しらない！」

とすねて見せる。見せかけ勝負、そして心臓は人一倍、そして何か物質的慾望を取引条件としたような君江の受虐。そして又、大きい脚を太ももまでさらけ出して、ドタリ！と大きな音を立て、これ見よがしに足掻き喘ぐ情熱の女、君江。

「鈴子のバクロ心理は、一寸恐ろしいゾ」

「鈴ちゃんだったら、いゝかねないでしょうネ。見て頂戴ってネ。この前のズカの温泉、あの目の前の河原に遊んでいる人達に平気でテラスのそばに立つんですものネ。皆ビクビクして怯えているのに。恐るべきヒスネエ。そこへもって、社長さんを、とてもコッソリ

と何か考えているのよ。お店でも……」

「もういゝ／＼」

女のやきもちはうまくない。シヤベリ乍らも僕よりも、窓の下から自分の縛り上げられた姿を——と気にかゝって仕方ない君江、

「折角買って頂いた服も、皺がよって台無しネ。こうムゴク縄をかけられては」

「純毛だから大丈夫といわんか」

「鈴ちゃんのようにでしよう、お生憎さま」といゝさま又、ビクツと身体をガラスから離す。

「いつまでやせ我慢張っているんだ！」

「暗くなつて通る人がなくなつたら、又車に積んで京都まで運ぶんでしよう」

なるほど七時も過ぎると、この辺は夜の人

なしタイムになる。夕方から、押かけ責めを求めて来たわけが、京へ。そして多美子の館へ。さて、差し向いで独専、とわかる。この辺、僕も案外ドンカン居士である。「社長さん、あなたはこうして縛っていて、指をピンとはじいて、しびれるまで解かないの、わたしにだけですか？ エライ損」と本性はどこかで暴露する味気なさ。さて事務所の窓際責もこの位とするが、読む人には物足りぬかも知れないが、実際こゝまでさす女は、なか／＼ないものである。今後どんな事態が発生するか、ボクは希望と期待は十分持っているが、鈴子位が最上のものと考えて、今は満足しているというより、よくこんな楽しみが出来たものだと思ひでいる。

さて、会計の昭子（前述済）これも残業してのあれこれといじめるわけであるが、事務員達に限らず、責める方にとって、たとえ片手首掴んでねじ上げるとしても、千差万別のスタイルは勿論、性格露呈で事務室内だけの例を挙げても、大御所和子に至ってはボク自身で手をねじ上げなくとも、あごをしやくつて一寸目付で知らすだけで、両手を自分で後へ廻し、胸を張ってあごを上げて、早くも悩ましい目付になるとジツとボクの目を見詰めるが、情慾そのものゝ目をボクの目から離さぬ。

「何だ、そんな高小手があるか！」

と叱ると、声は出さぬが口の中のハイと唇を開けて、これ亦、自分の片手で片手のひじを掴んで、ウンと片手を背負上げようと、握り締めた十指の指を突立て、その指が「この通り」と返事しているようである。目は益々ラン／＼と、又哀願調に輝く。

次に、アルバイター君子は、片手をねじ上げると、たとえ痛くなくとも一応「イッ」と一声出すが、後は少し前かゝみになるだけで「しまった！」とか「チキショー（畜生）」とか「猛烈や！」とかアブレ十代のセリフを連発するだけで、余程上手にやらぬと目を輝やかさぬのは年代のせい。

タイプの立子は、餅のような手首をねじると、全身二つ折になるほど前かゝみで、ボクの膝に突当る臀を斜にそらしてでも折り曲る女、そして黙って片手も後へ廻して来て、

「勘忍——ククク——」

といやでもなく、刺戟的な歓喜の声かわからぬのを鳴らしているくすぐったい立子。そしてまるで上半身逆立ち位までに折って、餅々した手首を上から下へボクに押えさしつゝ

「勘忍チテ——」と甘える娘。

タイプの和子、色白く隆々たる肉付の大きな手を、相当の力を入れると一応「イヤァー

ツ」と大きくバカ声出して叫んで抵抗して見せ、次は「ホホホ／＼」と笑い乍ら上半身クネツ！とねじらしつゝ、片手も亦一応胸に押付けて一寸抵抗してみせる。下手すると、二三度繰返さぬと両手後で掴めぬ女。そのくせ本気で逃げては行かぬ。ボクが手間取る

と、ジツと両手を胸にあてたまゝ「早よ」と請求するように待っていると云う白痴感の娘例により全身ねじって「ホホ／＼ホホ／＼」と嬉し笑いの後

「社長さん、どうしよう、どうショー！」

と足摺りする。他の娘に現場でも見られると、腰から上を前に折つたまゝ

「エ、恰好やる、よいわんワ、ホホ／＼」と又バカ笑い。

交換の相子、片手をボクにねじられると、片手を自分で後へ廻して、「こうするの？」と突立ったまゝなので、ギョツとしめ上げる

と、

「痛い、ほんま——」

と突立ったまゝジツと絹肌を掴まして、

「社長さんにいじめられてるのに、何んてこんな気持ちになるのやろ」

と、前者と同じく事務員系とは一段落ちる白痴性を出す。

会計の昭子、

「イヤン、イヤン、」

と仲々ねじ上げさ／＼ないかと思うと、





「社長さん、ハイ」  
と手を廻して来る気まぐれ型だが、この娘も亦、上半身二つ折り型に前にかみ折れるが、臀はボクの前につけたまゝなのは、顔をかくすためであって、色情調ではない事務室の令嬢。両手握みにすると

「イヤアア、どうされますの？」  
と片手を自分の片手で握んで、一応抵抗してボクの方を向いて、後へそり反えろと、ニツと意味ありげなニタ笑である。ウンと両手をねじ上げてしまふと片ひざ浮き上げて、ボクの胸にそり反えりつゝ、頭を押付けて来る

「ダメだ！」と叱ると  
「殺生ヤイッ！誰か助けて、ひどいわ」と相当多弁だが、責の文弥節には一向ならぬ凡愚調である。  
受付弓子、鼻筋が高く通った美人のくせに派手さがないのと特徴がないので、損をしている令嬢タイプの小娘、セミアプレ型でこれ亦イササカ、頭の一隅にピンボケ調であるが全く手軽にチヨイ責にはもって来いの娘、手をねじ上げなくとも、おやつつまみ食い最中なんかに「コリヤッ！」と一喝すると、ウンと口ごもり乍らも、自分でパツと反動的に両手うしろへ廻して組合わせると、ニツと笑って振り向いて、カウンターのへりに腹を押付けて足を揃えて立つ——そこまではカンタンに順応する弓子  
「又、ズボラな高小手だ！」  
と叱ると、松本同様に自分で自分の片手を上へ引上げて、あごだけ突出しての力一杯よと云わんばかりの高小手型にして、ボクの行きすぎるのをジツと見送る小娘。亦可愛い、誰かと背中合せに縛りつけると、一方の娘は同性の手前と両立てで背を丸くして俯向いて羞恥オンリーなのに、弓子の方は縄のかゝった手首をチヨク／＼動かして、十指で相手の娘の手指にいたずら仕向けて行く無邪気さか、アプレやんちゃか、縛られる事もその位に考えているのか、それともボクに気を許し

「もうだめ——とばかりに恥かしい笑いで、後は沈黙してモジ／＼するだけ。ボクには、素晴らしい絹もち肌の触覚である。  
事務の綾子  
「イヤアア、どうされますの？」  
と片手を自分の片手で握んで、一応抵抗してボクの方を向いて、後へそり反えろと、ニツと意味ありげなニタ笑である。ウンと両手をねじ上げてしまふと片ひざ浮き上げて、ボクの胸にそり反えりつゝ、頭を押付けて来る

「や（驚嘆調の声）くられた」とまだ縄もかゝらぬ内から、合点だと云わんばかりの小娘、大きく強力性のある臀を、ジンワリと力強くボクのひざの上に落付けて来て、顔も動かさぬ沈黙の内に次を待つ娘ます子。顔の細い割に手足の太く大きな、色黒、平凡肌で背高の彼女の手は相当無遠慮にねじ上げる。腰を横に出して、くの字に全身ねじる女  
「社長さん、スゴク痛いワ、もう沢山、許してエ」

けるポーズに任す女、そのくせ一日、  
「社長さん、括って頂戴！」と恐るべき言葉を発して来る。わけは決った、恋人があるのに逢えぬ日が続いて浮気してみたくなつたので——と云う雪子。これも普段言葉少ないくせに、ボクの命令では、車中  
「ゆき子縛られます。ハダカにむかれて」と連呼出来る女  
「社長さん、裸にむかれてと云わはるので、初め、ほんとに皮でもむかれるのかと思ったワ、ホホ／＼」  
と、とてつもない純真派。  
事務八重野、肉付よい手首をねじ上げると無言のまゝ軽い抵抗、そり返りも、前かゞみもせず、片手もボクにつかまれたまゝ、同じく軽い抵抗で両手うしろ手握みにされている間、同じく無言。椅子にかけたボクの膝の上に両手ねじ上げたまゝ腰かけすと初めて  
「や（驚嘆調の声）くられた」とまだ縄もかゝらぬ内から、合点だと云わんばかりの小娘、大きく強力性のある臀を、ジンワリと力強くボクのひざの上に落付けて来て、顔も動かさぬ沈黙の内に次を待つ娘ます子。顔の細い割に手足の太く大きな、色黒、平凡肌で背高の彼女の手は相当無遠慮にねじ上げる。腰を横に出して、くの字に全身ねじる女  
「社長さん、スゴク痛いワ、もう沢山、許してエ」

力一杯

「もう結構、それ弓子さんがやいてるワ」

と気をそらす姉さん振り、両手背につかんで終うと

「しどいお方ねエ、しらない！」

とすねて見せる。がこの肌合では年増臭くてボクには不向、そのくせこの娘、チヨクチヨクと男を拾って歩いて、ネチネチする情慾型であり、唯ボクの責め相手には、余程キマグレの責め折檻一本の外、ノーコメント。事務所の君江に相応する立場にある、やはり男向美人、さて次々と立つ観念性の前、  
先ず秘書の和子、今更らしく夜間とか早朝利用での素裸の柱背負は、この女には却って平凡、紺の詰襟ダブルボタン型の上着に、紺のサージズボン、唯跣足にさしての観念柱の前に立ち縛りで、真昼間の午後、いつもそばにいる君子、章子、君子は  
「マアスゴイ！気の毒ネ、モレツな縛り方で、許してあげなさい。大恥ねお姉さん」  
クリクリツパンビよろしく、小さい目を丸くして、お茶を持ったまゝチラリと跣足の和子の足元を見ると、ボクのテーブルへお茶を運んで来て、自分の方へお鉢が廻らぬ先にとスタコラ退却。章子は又同じく「マア」としばし驚嘆よろしくあきれ顔で  
「今頃、お可愛想よ、許しておあげなさいネエ。あたし、よう見て居られないワ」  
と部屋の隅の机に坐り込んで、俯向いて何かとムリに書類をさがして見る。和子その間一言もなく顔をやゝ上向けて傾け、じわと、ボクの瞳を射込む眸をピクとも動かさず、まばたき一つせず完全なやまし型で、くずれそう



めて突立ったまゝ小さくなる。白く全く煮抜  
き卵の如き昭子の手を掴んで、先ず一ねじ  
「勘忍——」  
と一声で上半身ねじって背向くと、丸くな  
って俯向く。それでも、そばの和子の言葉の  
通りに、片手を自分から後へ廻して来る。  
「あやまるのは、まだ早い」  
ボクの手は悠々と本縄をかける。  
「和ちゃん、手伝わんか？」  
本能的に居すくんでいた湯上和子「ハッ」  
と元氣を出したように、そばに寄ると、  
「あきらめて辛抱しいナ」  
と高手小手、首縄へとボクに手伝う。ガイ  
ツと最後の締りを終えると、前かゞみの昭子  
「アツイイツ」  
と叫び声を挙げると、和子もハッとした様  
に、手を引いて又棒立ちになると  
「スゴク、ごっついわ」  
とあきれ声であとずりして、部屋の隅の円  
卓に、かけるといふより尻もちをつく。こゝ  
で跣足にするには惜しい足だと感じると、繩  
念柱をあきらめて縄尻引いてボクの机の前、  
コツコツ靴音が響く程夕は深く静かである。  
ボクの手は下へ、チヨコレートのドッグ型の  
真面目そのもの靴をぬがす。  
「この上へあがれ」  
「そんなの、そんなの——」  
とイヤイヤして甘え声。



な表情は——斯くして、二人をコソ／＼と退  
散させる程凄惨シーンである。  
タイプ立子も和子と全く同じコスチューム  
で、残業時の立縛りに「ククク」などのどを  
鳴らして「勘忍——」と甘えて、やはりくず  
れ落ちる風情、はだしの姿まで和子そっくり  
但し情炎の眸はない。何かお駄賃待の様子。  
タイプ和子、交換の相子共似たり寄ったり  
で、紺の事務上ばりを着たまゝの立縛りに、  
「よう云わんワ、大変な罰のうけ方ねエ」  
等と、平静を粧っているが、暫くホツて置  
くと、沈黙とうなだれと、はだしの足をビク  
ビク指先を動かして、本能羞恥のスタイルで  
赤くなつて来て、これ亦同じく「もう勘忍——」  
八重野、水色麻の上っぱりで、柱へ立縛り  
「又縛りつけられてしまった」と一息いれる  
と、靴、沓下なしのはだしに氣を取られて  
「足太いから——勘忍して——」  
姉のます子は、  
「マア——早よ、ほどこいて頂戴ネエネエ」  
とねだり型で腰をズラして、はだしをかく  
そうと縄さえゆるめば坐り込む氣。  
雪子を観念柱へと、一応机の下へねじ伏せ  
て、片手背中へ——の事務室内  
「社長さん、許して、姉ちゃん、」  
と綾子と呼ぶと、綾子こゝで本性たがわず  
天下の名セリフか？

「そこで、ヒイーといわんかいナフフ……」  
と色氣のこもったセ／＼笑い面を面白そうに  
足掻く妹の姿を、キヨロ／＼と何をか求める  
目付で見入る姉。その姉綾子を同じく机の下  
へねじ伏せて、一先ず後ろ手腰縄縛り——紺ズ  
ボンを捲り上げて、いささか栄養失調型の素  
足を腰まで捲り上げて、机の下足掛棒に縛  
りつけ始めると「ウウッ！」と口をとんがら  
せて、仏頂面を開口一番、そばに居合やす章  
子を見上げて  
「これ見てみいなア——救いを求めぬところ  
にお読み止めを」ほんとにイッ！」  
とボヤク綾子を見た章子。「マアツ」  
大きく口を開いてボクをにらみつけ、  
「あんまりひどい事したげなさんナ」  
唯それだけ、これ亦章子らしいセリフで、  
ノータッチの性格を表わしている。  
「ネエ、何とかしてんかいナ」  
と今度は章子に向く。ボクが綾子の素足を  
宙縛りに机の脚に縛りつけたのを見ても、冷  
静に  
「わたし、何も出来へんやないの、助けたら  
わたし身代りにされるからいや／＼わ」  
とこれ亦一本  
「それよりも早いことあやまりなさい——」  
「何も悪いことしてへん——」  
「じゃ、社長さんが悪いの？ わたしわかん  
ない」

と平氣そうに書類をなぶり初めて、顔を反  
らす章子、これも一風景。ボクに云わすと乙  
羽信子で、さて足の太いことを氣に病むくせ  
に、割合短かいエンジ細縞のスカート、ワン  
ピース、共柄バンドを肉盛りよい腰にしまて  
いる昭子。事務服を忘れて来たのを逆利用し  
て、  
「いゝ服を見せるためか？」  
といゝがかりをつけて、責め初める。  
夕の定刻後、  
「そこへお立ち」  
と観念柱を目で知らす。モジ／＼と入って  
来た昭子。甘えた口調で  
「社長さん、勘忍。縛りつけられるんでしょ  
う……」  
と顔と、チヨボロと、甘えたれ令嬢型に似  
合わぬ割れ声である。そばにいるSの男役型  
の雑務の湯上和子  
「早よくくられてしまいで、その方が早よ済  
むよ」  
これ亦ユカイな文句であると同時に、同性  
愛患者の特有のセリフか？  
「イヤッ、ワテエ——」  
と又甘えてスネて見せる昭子。時間外の事  
とて、ボクはユウユウとして抽出しから麻縄  
を取り出してしごとと、立ち上って、昭子のそ  
ばに行くが、口では云えども何とやらで、逃  
げ出してもムタとあきらめつゝも、身をちぎ



「サッサときかぬと、吊り上げるよッ！」  
驚いたのは、隅にいた和子  
「アンタ、早よお聞き、社長さんに任じとき  
で——」

ほんとに吊り上げられては、とのウソも方  
便。友愛の子供らしき、立って又坐り込む  
「勘忍。そんなの」

と泣きべそ、カスレ声で、又甘え口調でも  
ある。椅子の上、テーブルの上へと漸く洪々  
乗って立つ。

「下の道見えるか？」

彼女には何か見当違いの質問に思えてか、  
「アッ」と口をあけて、身を延ばして窓越し  
に下を見る。

「エ、チヨット」

マジメくさった返答は、事務所らしいフン  
イ気の一つである。ボクにしては、和子を一  
時でも追払う口実が一つと、更に別の考えも  
あって

「和ちゃん、降りてお出で、昭子立たされて  
るの見えるか、見て来てくれんか、そして  
後で入口の錠おろしてナ」

どちらがホントの目的か、そんな事に頓着  
なさそうな和子は、一つ返事で出て行く。早  
速ボクの手はナイロンが電線病にかゝる程ハ  
チ切れそうに横張りして布を通して見ても、  
白さのわかる脛の上、ナイロンストッキング  
を脱がせに立って寄る。

「イヤンイヤン、わたし脱ぐッたら」  
と足踏みして、太ももへ行く手をのがれよ  
うとする。余り前かがみになって倒れそう  
「静かにせんか、足もくくって、さかさにし  
てほしいのか？」

そのおどし文句はよく利いて

「勘忍、かんにん——」

と静かになってぬがす、と出た二本の  
雪の脚。前かゞみになってるので、下から  
見上げるようなボクの目前、まさに一尺そこ  
そこに見る腓脛は、それでなくても普通に見  
下している時でも肉張り太いのが、これはこ  
れはとばかりの太さである。ボクには、もう  
背中の上の縄目の十指がどうであろうと、昭  
子の顔がどうであろうと、その飽食一杯の真白  
い腓脛に思わず唇を——

「アレッ、イヤ——」

と地たんだふむので、こんどは帳綴黒紐を  
取り出して、両足の指を括り合わせる。

「勘忍、社長さん！」

縛られた手、高手小手、首縄でからだの佇  
立中心が取れぬので、前かゞみをいさゝか起  
こしてもだえる昭子、片手で足首を掴み、片  
手ひざ小僧をスカートの下から掴み、本格的  
に横腓脛に吸い付く。

「イヤアーツ勘忍、もうしらん和ちゃん」

と派手に騒ぐのを耳をかさず、チユプッチ  
ユプツと、キッスマークへの努力。真白く絹

肌、モチ肌もこの脛は立ち縛りのためにシコ  
／＼するばかりに張り切った太さ、相当永く  
噛む如くなめながら吸い付いて離さない。  
「社長さん、もうかなん、勘忍」だいぶ声も  
落ちて来て、膝を曲げ中腰になり、所謂全身  
中心を取るのに力一杯のくの字型に居すくむ  
昭子。脛毛一本も見当らぬような、雪と絹と  
張り切りもちの甘味は、陶酔境へシリ／＼と  
引込んで行く。舌唇掴む手の肌触り、もう一  
息のと噛む如く力一杯の吸付キッスと共に、  
片手は膝頭へ、片手は足首から離しても一方  
の脛を撫ぜ始める。

「ア、アア——ツ、イヤン勘忍、くすぐ  
たい！」

とくの字は過度でゴロリと横倒しになる。  
机の上、灰皿、フワイバボックス、ペン皿、  
一輪差等が四散して、ボクの唇はチユプツ  
と音を立て、離れる。机の上へ又もくの字な  
りに横転した昭子、立ち上ったボクは、すぐ  
足頸を掴むとキッスマークはどうかと、スカ  
ートを捲り上げた瞬間、指括られて捕えた  
まゝ空を蹴ると又

「イヤン勘忍、」

とかすれ声も大きいと、やはり黄色い声で  
呼ぶ

「やかましい奴だナア——」

と両手で上下抑えつけて捲った脛のひざの  
下のところ、仲々残らぬ場所なのに既に赤く

すかさず

「道から見えたか？」

「ガラス窓が反射して見にくいわ、ワタシは  
知っていてすかして見るから見えたけど、高  
い二階だし一寸気がつかないワ、それにこの  
お子の立っているのが見えなくなったの  
で、いそいで来た——これやないの——も  
う許してやって頂戴」

と云うより早く昭子のスカートを降して、  
ともかく脛を覆ってやる。この女、もっと美  
しい娘なら身代りと、又面白いのだが。さて  
白く大きく肉付よい円い踵が別れ／＼で苦悶  
態を現わす指縛りと、可愛イ、引締ったく  
るぶしから流れて太く盛り立つ脛に、心を残  
しつゝ残念責。その和子に至っては、膝の上

## 【切腹通信】

復刊第一号、今まではちが  
ってすつきりした体裁でかえ  
ってよけいに親しみがもてる  
ようにさえなりました。たゞ  
女性切腹の頁が少ないうえに  
美しく感じられませんでした。中康  
先生がすっかり姿を消され、  
田谷先生も五月号の御記事で  
は記事止められるとか、何  
とか折々記事をつづけていた  
でけるよう編集部からも御願  
してはいたけれども、原  
月様、どうぞ早く貴女の切  
腹記を見せていただけますよう

毎号楽しみにしています。原  
桐咲代様、田谷先生がきつと  
貴女の切腹写真を御希望して  
おられるのだと存じます。裸  
体の写真を見られるのは女に  
とっては相互に恥かしいもの  
ですけれど、きつと田谷先生は  
貴女の写真から切腹フテンの  
楽しめるものを引出して下さ  
ると思います。お名前もお住  
所もお知らせにならずとも編  
集部を通じて一時でも借して  
あげては下さいますんでしよ  
うか、愛読者の一人として心  
からお願ひします。(東京、

北井美子)

私は少年の頃から女性の切  
腹と白足袋に魂を奪われる程  
深い関心を持っていました。た  
だ切腹への憧れは年と共にたか  
まってゆきました。「血塗れ  
の半生」という私の切腹愛着  
についての告白を書いて送っ  
たこともありますが、私の念願  
は若くして美しい女性が自ら  
切腹する姿を見たいというこ  
とです。誰かこの私の悲願を  
かなえて下さる人はいないでし  
ようか。(桜恵之助)

紫に血筋が立っている満足さ。と同時に余り  
のキヤキヤアうるさくに却って気が立って、  
共柄のバンドのところまでクルリと、スカ  
ートをシユミーズの裾も一緒にまくり上げる。

「イヤアーツ——」

悲鳴一声室内の静寂を破る。素裸に剥いて  
見る臀と、こうした場合の臀部、それは尻だ  
けを見る場合、後者に手を上げるのは諸賢は  
百も承知の筈、全くの美形甘味、そのものゝ  
神聖なる隆起である。但し処女の場合、次の  
瞬間、お笑い事ではない。真白い昭子の臀部  
が紅く色付いて来たではないか？

「アッ、これは——」

とグツと胸が詰まる一瞬、戻って来た湯上  
和子、彼女もハッと驚き顔を紅潮させて

「ヤヤヤッ、何されてるの！」

たゞごとでない立ちすくむと、スグ氣を  
取り直したか近づく姿に

「和ちゃん、あやまってエー」

とむせぶような昭子の声も力なし。

「何や、縛って置いては、社長さんヒキヨ  
ー」

更に両脚も、全身の調和恰好からしては不  
自然に引付けて間の空いた両脛。そして爪先  
だけ更に引付けて、キビスは又別々にわか  
れているのを見てのぞき込むと

「スゴイ縛り方して——」

とボクの方を今更らしく見詰める。ボクは



## 「レスボスと流腸」

羽村京助

私は二月号の「レスボスとソドミアへの福音」を書いた羽村京助です。あんな事書いた癖に当の私はソドミアに関しては実際の対象者を得なかった為か、現在ではソドミストは能動者、受動者共に、いやらしく感じる程嫌いです。レスボスは戦前男女の交際が自由でなかったのが女装して女に近づいて見度。特にセーラー服を着て女学校に入って、選り取り見取り的に千人位の生徒の中から、一番綺麗な子を選んで、自分の愛の対象にしたいという願望があったのと、全くの偶然の機会だったので、私より三つ年上の姉が女学校時代、美しい友達をつれて来た時、何となく好奇心が起り、二人のいる部屋にソツと近づいたのです。中から「ねえキツッてどうするの知ってる？」と云う姉の声が聞えたので、ハッとして物陰に隠れて、ソツと見てると「まあ知らないわ」と顔を真赤にして答えてるのを「まあ！知ってる癖に、知らないだなんて——ちやう教えてあげるわね」と云うが早いか、姉はいきなり両手でそのお友達のお頬をギュッと抱きしめ、キッ

スするのを見たのが、非常に強い印象を受けたのです。

尚、この時の光景は後になって、互に愛し合っている二人の美少女を抱き合った姿のまま縛りつけ、鞭打木馬責の流腸をする幻想に変化致しました。以上の願望と印象が複合したのか、現在ではソドミアには全然興味もないのに、レスボスの方は依然強烈な関心を持って居ります。勿論、自分の妻のレスボスをソツと隠れて眺めたいという気はありません。只一般の夫婦よりも、何となくその方がもっと素晴らしい様な気がするのです。私がいらない昼間私の妻は女の恋人を持っている。美しい妻が美しい女性を愛し、愛されている。その妻の立場が羨しい様な、そして何だか嫉妬めいたものさへ感じながら、妻の浮気を別の世界の出来事の様に見ているのです。それもその筈、私の空想では、一方の女性は私の化身なのです。私の幻想では、私がある時は妻であり、ある時は妻の彼女になる事を夢見てます。私が云うレスボスとはSよりも、もっとはっきりしたレスボス意識による精神愛を持

つならば、一般に云う様な疑似夫婦的肉体関係や責めや流腸を伴う必要はありませんし、又伴っても一向差し支えありません。只精神的な美しい愛情は持たずに、肉体や責めだけの結び付きは大嫌いです。そして私はその関係に干渉は致しません、例えそれが精神的な関係だけのものではあっても能動と受動の両面を二人が持つのが望ましいのです。つまり彼女等二人だけの世界の中で、夫と妻の立場が、一日交替で逆転するのが私の理想です。次に流腸の方は十才位の頃、母に流腸された以外は、未だ一度も他人に流腸された事はありません。同時に他人に流腸した事もあります。二〇CC・三〇CC・五〇CCのピストン型とイルリガートルを愛用して居ります。昔は、エネマシリチ及びイルリガートルに直結する四十種類のゴム製の大腸管も愛用致して居りました。いつも自分で自分に流腸しながら、未来の妻に行ったり、妻からされる事を想像してやっと思つて居ります。流腸に理解を持ち積極的に協力を惜しまない夫をお持ちの羽村京助さんの御家庭は、大ッピラに流腸出来る点に羨しくなりました。それに反し、二月号の「猥らな虫」の中の夫がもう少し気の利いた処置をしていたら、あの様な悲劇は起らなかったであろうと思ひます。夫自身流腸の用途について長々と講義した事から彼自身ある程度サド的流腸マニアで

あると明白に推定出来ます。それなのに、いつ迄もそうでない様な仮面を被っているから、あゝいった結末になったのだと思います。夫婦生活もある程度の処迄来たら、夫の方から先に打ち明けたら、上手に指摘して、ドシドシ流腸した方が良くと思います。

さて、それはそうとして、私は私の流腸やサド・マゾ及びレスボスへの幻想を愛態だとか、悪い事だと考えたり、劣等感を持った事は全然ありません。而し自分の異常な性格の為に、今迄積極的に恋愛した事もなければ、秘かに恋情を抱いても誰にも打明けず、又心を寄せて来る女性も可成りあって、その中にはこんな方とは是非結婚したいと思う事もありましたが、折角のチャンスも自らそれをやり過してしまいました。又縁談はいくらでもありますが、まさか結婚の条件に「女装して（もう女装しても一寸も似合わない年なんですけど）縛ったり縛られたり流腸したりされたりしたい。その上両性愛の女性を求める。」とは親にも云えず、結婚したいという欲望は熾烈でありながら、何やかやと難癖つけて未だ一度もお見合した事ありません。

そして年許り取って本年三十一才になりましたし、家では私が一番最後なので、両親も盛んに気をもんで居りますから、自分と趣味の人とめぐり合う事は不可能なことだと断念して、平凡な見合と普通の平凡な結婚生活

に入ろうと思うに至りました。その代りせめて流腸マニアの方と文通位は致したいと思ひます。そのため、私の趣味に感じ得る女性がこの世に存在するかどうか是非確かめたいのです。同性愛者ではないが、異性の同性愛には深い関心を持っていて、両性愛の女性を求める男性は、各人共にその動機は違いますがこの東京だけで私以外に、二、三十人位は確かに居ると推定出来ます。それ等の男性は大抵女装願望を持っていますが、同性には関心を持っていません。

果して女性側にそれに応ずる様な人がいるかどうか知りたくて仕様がありません。結果さえ判ればそれで満足です。

## (1) 一般のレスヴィアンへの質問

○結婚の条件として自分の夫がソドミストではなく、而もレスボスを認めて呉れる男性を求める女性、但し私が二月号に書いた様に世間をごまかす為の愛情のない形式上の夫としてではなく、心から夫を愛し得る人です。

○その場合夫と同性の恋人に対し、相手を取り換える事なく、能動と受動の両方の立場を取る事を望む女性。（従って真の同性愛者ではないのです。真の同性愛者ならば一も二も成立しないし、女性側の二人ともが、真の両性愛者でなければなりません。）

○更に二人妻の形式、あるいは社会的には第二号夫人の地位をも辞さないから同居迄した

い方。

以上、葉書で番号に対し○印×印による簡単な回答によって、編集部で統計取って発表して下さい。

## (2) 羽村京助さんへの質問

○御主人に流腸なさった事おありですか。

○御主人に流腸したいと思ひになりますか。

○御主人御自身、京子様から流腸されたいという願望をお持ちですか。

## (3) 花村恵美子さんへの質問

○貴女はレスボスを讚美して居られましたが（A）適当な方があれば結婚なさいますか、それとも絶対レスボス一点張りですか。

（B）現在のお気持として状況が許せば、結婚して、もしレスボスを両立させたいと思ひになりますか。

（C）相手に聞く訳にも参りませんが、未来の夫は、流腸マニアではなくとも「流腸と出来ればレスボスにも理解ある方」を希望みにありますか。

○（D）男性あるいは未来の夫に対し、流腸して見たいと思ひになりますか。

○（E）貴女を完全にマニアにした画家に、いつかは流腸による辱しめを与えて、敵討したいと思ひになりますか。（私が貴女の夫だったら必らず流腸と写真によって一ヶ月か三ヶ月位の一定期間、流腸奴隷として服従させます。



(4)三月号の緑川純子さんへの質問  
 (A)若い一看護婦が医師の立合いも承諾もなしに、一つの部屋を長時間占有して勝手な事が出来たとは、地位のある年寄婦長ならいざしらず、今だったらとても出来ない事だと思いますが、何年前(或いは戦争中)の事だかお知らせ下さい。  
 (B)その時のナースは単なる流腸マニア、あるいは只のサジストではなく、レスビア

## 稽古着姿の女腹切 (白い稽古着の妄執)

藤 山 秀 緒

ンの傾向があると思いますが如何ですか、  
 (C)退院後そのナースとの関係は、交際又は文通によって続きましたか。  
 (D)現在貴女は流腸マニアですか。  
 以上三氏の方々は甚だ恐縮ですが是非一筆お寄せ下さい。余り個人的過ぎて失礼の段は、重々不悪お許し下さい。御回答は決して強要は致しません。簡単で結構ですから誌上にお寄せ願えれば幸甚です。

幼き日の絵物語の数々に見た白虎隊の少年たちの勇しい切腹ぶりは、もはや抜き難い強烈な印象をわたくしの網膜に焼きつけてしまいました。ほかのみなさま方と同様、うら若花の蕾の十六、七の生涯を、男らしく腹掻き切って鮮血りんと散らし行く姿には、まこと故しらぬ昂奮と激しい陶酔の泉がかくされて居りました。わたくしも赤、白虎隊によって切腹への憧れを開いた一人でございます。

唯、こゝに申し上げたいことは、わたくしが白虎隊切腹の絵を愉しむ場合、特に激しくわたくしの胸をゆさぶるものは、この少年たちが着ている白い稽古着なのでございます。勇

ましく凛々しい剣道の稽古着姿、そしてその前襟を押開いた切腹の絵は、わたくしにとつて最も魅力あるものでございます。

私のこの稽古着への妄執を、更にかき立てたものは、幼き日に愛好した高島華宵画伯描く所の美少年の、少年剣士の颯爽たる武者ぶりでありました。  
 私は中学に入るや、早速あこがれの白い稽古着を買い求め、剣道部の修業に夢中になりました。もちろん私の場合、技の練習もさることながら、毎日の放課後の道場の更衣室に入り、同年輩の少年達と、若々しい裸身を競いながら服を脱いで稽古着一枚のうれしい

姿となり、縞の稽古着に竹の胴、颯爽と竹刀を振る自分の姿を鏡に映しては、しびれるような満足を感じていたのです。そしてその稽古着の下小さなお腹には、真新しい白のさらしが堅く巻き締めてあったのです。私は時々練習にかこつけて夕方遅くまで道場に残り薄暗くなった板敷きの上に白布を敷いて正座し、時には月光を浴びながら、剣道の型に使う日本刀の鞘を払うと、激しい練習と昂奮に汗ばんだ肌を拭き開いて、腹巻の上から心静かに氷のような切腹を左の下腹に突立てるのでした。

わたくしのこの白い稽古着姿の切腹への憧れは、やがて女切腹への執着と合体し、こゝに「女剣士」の切腹姿に身も世もあらぬ恍惚境を味うまでになりました。  
 若く美しい女性が、白い半袖の、(しかもピッタリと上半身の豊かな肉体の線の現われるような少し小さい型の、殊に腕は、袖が二の腕の半ば位に短かく、堅く肌を喰ひ込む感じのものがよろしい)刺子の稽古着に袴姿で乳房もあらわに、男らしく切腹している絵は今のわたくしにとってかけがえのない宝物のような感じがいたします。先月号の「奇ク」にあった娘剣舞士が友の介錯で切腹する絵、多くの方々が通信欄で希望して居られる女白虎隊の最期―私には殆ど狂喜に価するものでした。かわい女性、男性的な剣道の稽古

着姿で、しかも切腹する姿を好むということ、四月号に載せられた「女武者」への執着と、一派相通ずるものがあるかとも思われます。「飛行服姿の女腹切」にも、やはり同じような要素があるのではありますまいか。  
 とまれ、こゝにわたくしの腹に浮ぶ「稽古着姿の女腹切」の悲壮な一場面の幻を描いて見ましょう。

―敗色は既に迫っていた。姉妹はその夜の中にかねて覚悟の通り、自害を断行することにした。敵の手に捕われるよりは潔く日本人の最期の花を、一流石にそうきめると姉妹の瞳には悲壮な昂奮の涙が宿った。部屋を清めて自刃の座をととのえ、久しぶりに入浴して、食事を朝から断った。二人は女ながらも割腹する決意であった。深く腹を裂いた時臓腑が破れて食物が流れ出る恥を避けるためである。勿論、正午には二人で互に流腸し合っ

て心ゆくまで腹中を洗うことを忘れなかった。  
 日が暮れるとともに自害の仕度にかゝった。姉妹とも剣道の名手で聞えた二人は、死出の晴姿にも思い出の白の刺子の稽古着を肌に着込んでいた。髪をととのえ、薄化粧して用意が終ると二人並んで最後の食膳につく。朝からの空腹では自ら腹を掻き切る気力が出ない。食事を終えてすぐ割腹すれば、胃を切らない限り食物は溢れない。二人は腹を切る

氣力をつけるために、充分に食を摂った。死ぬために摂る食事は、二人を不思議な昂奮に誘った。  
 夏ながら夜は肌寒く、熱い白粥は元氣をつけた。真白い切り立てのさらしを強く巻き締めた下腹が快く温まると、死の座を目前にした食事も進んだ。姉は三膳、妹は軽く三杯で箸を置いた。

七時―死の時刻が来た。

姉がまず屏風囲いの中で用意の白布の上に正座した。ためらう色も見せず双肌を脱ぐ。袴に袖の短い稽古着一枚の勇ましい姿である。グッと前を開いて豊かな乳房もあらわに腹巻の晒布を押下げると雪のような腹。妹は静かに背後に廻ってこれも稽古着一枚になり袴の股立ちをとって白鉢巻、介錯の大刀の鞘を払う。姉は妹をかえり見てかすかに微笑みながら、

「―止めは自分でしますけど、あんまり苦しむ時は、介錯して頂戴―お願い」

「えゝ……用意して見えます。静かに充分に切つてネ」

「じゃ……やります」

最早死への恐れもない姉妹は、短かい挨拶を交わして眼を見合せる―それで充分であった。

姉は一折の懷紙を口にくわえた。苦痛の呻

きを立てないようにとのたしなみである。右手に三宝の上の腹切刀を握る。切先三寸キラリと灯を射返して逆手にとり、左手でムッチリと張り切った下腹を押すように撫でさすると、氷のような刃を臍の左下、こゝと思う所に当て、呼吸をはかり、左の指先で肉を揉み下しつゝ一氣にウムと突立てた。グーツと深く刀身を刺し込んで置いて力まかせに右へキラリと引く―下腹の皮は厚い。女の切腹はそれほど深く切らないと臓腑に達しない。かねて亡き父に教えられた通り、彼女は決行した。皮膚の下に口を開いた黄色い脂肪の厚みの間から送るような鮮血と共に、灰色の臓腑の塊がドロリと喰ひ出す。刀を存分に大きく切り廻した彼女は、第二刀で滑らかな鳩尾から丹田まで、豎に十字に切り下げて、女ながらも見事古式の作法通り切腹し終ると、短刀の切先を静かに左の乳の下に当てがい

「お願い……」

と一声、グイと止めの急所を貫く―「ウム」というこらえにこらえに絞るような苦痛のうめき、下半身は血の海の中にひたり、双の乳房は死の苦しみにおのゝいている。

「お姉さま……お立派」

涙と共に妹の介錯の刃は、ガツンとさしのべた姉のうなじに落ちた。

前のめりにつゝ伏した姉の背中の中白い稽古着の菱形の刺子模様を最期の眼に入れながら妹もその場で壮烈な立ち腹を切った。



## 命がけの遊び

二俣 志津子  
北原 純子・画

## (一)

橋本夢道の句集「無礼なる妻」の中に、こんな句がある。

古妻よ味噌壺は味噌を入れる壺である。

この句集には「逢いたかったと思う大阪から帰りの妻の目も膝も六月の夕べ」だとか「夜はもう秋の抱いた肉体も乳房も胸にまどかな柔肌だった」とか「鷺毛の降る早春の夜や妻の裸身に触れんかな」等々粒ぞろいの佳句が多く、洪江は手離したとおない。が、この「古妻よ……」の句をひよつと頭に浮べると、苦笑ともつかぬ笑いがこみあげてくるのをどうしようもなかった。と言うのは、彼女

の居る第一病棟一号室は、便所に一番遠いのだ。廊下を、足音を忍ばせてながいこと歩かねばならない。暖いうちはそれもよかった。そのうちに秋も終り、木の葉が庭を敷き、その上に霜が降りる頃になると、誰とても部屋を出たくなくなる。床を離れるのさえおっくうになってしまふ。誰彼となくひそかに便器をベッドの下へ置きはじめ。第一病棟は、結核でも安静度三度、二度と云う重症患者達で、一室に二人づついた。更に重症患者は東第一病棟で、全く個室である。付添婦が居て食事から下の世話までする。

人の信雄に持って来させたところ、彼は、事もあろう、ふた付の味噌壺を、味噌の入ったまま持ってきたものである。彼女は心の中では閉口した。(参った!)と、苦笑したものだ。が、考えてみれば、信雄に、壺の用途を告げていないのだから無理もないのである。また、味噌壺を持ってくるのは当然すぎるほど当然であるのだ。枕元には幾つかの壺があって、花が飾られたり、絵筆が林立したりしているし、更に壺を持ってくるとしたら、味噌壺しか見当がつかないのだ。何故ならば、殆んど患者は、自費で何かを食っていた。うどんを煮たり、飯を炊いたり、はなはだし

いのになると、スキ焼までする。そこで彼は

呂へ入る日以外は、下を素肌にして、彼の親切に依っていた。この頃では彼も次第に図々

しく大胆になって、文子が背を向けていても、やめなかった。洪江は、ふいっと、生理

彼女が味噌でも欲しているのではないかと気を利かし味噌壺を持ってきた次第なのだ。ところが彼女は、それを便器にしようと言うのだから何とも手のほどこしようもない。大体彼女は、あのおまる、あさがおが気に入らない。男の便瓶では用をなさない。考えついたのが日頃集めていた様々の型の壺なのである。隣りのベッドの文子がおまるでやっているが、深夜に勇敢な音をたてられて目を覚すことがある。壺がいい。深い、あまり口の狭くない——あゝ、ところが、信雄の持ってきた壺の底には味噌がこびりついている。恋人にこんな下司な話は出来たものではない。それで、厚く礼を言っ、仕方がない、味噌をちびちび使い、ながい廊下をばた／＼歩いて御不浄へ出掛けたものである。

やがて味噌がなくなった。

(テンホ!)

信雄が夕方やってきた。昼は勤めているので、休日以外はいつも六時頃にやってくる。彼は、花を取替えたり、菓子をはひるげたり、枕元近くへ椅子を引き寄せて本を読んだりしてくれたりする。実にまめ／＼しい、他人から羨しがられる恋人である。が、文子がトイレへでも行くと、そのすきに、ふとんの中に手をすべり込ませたりする。その方もまめ／＼しいのだ。洪江も心得て、風





的に笑うようになり、それをこらえるのに苦  
 労したりした。

文子は外出していた。信雄は天下晴れて、  
 ベッドにびたり半身をつけて、淡江の顔をの  
 ぞき込んだ。

「味噌、もうないんだろ？」

「いやよ、そんな話。いま。折角、ね、気分  
 こわしちゃうじやないの。」

「うん。」

「ねえ、キスしてくれない？」

信雄はひるんだ。その気配に淡江の心は壊  
 えた。

「いいわ。病氣、うつるから。」

「す、するよ。」

「うん。いいの。じゃ……」

淡江は言い渋ったが、信雄は、彼女が言い  
 淀んだ意味を察した。

「お隣りが帰ってくるよ。」

「大丈夫。泊りよ。」

「そうか？じゃ、ぼく、ここに、病院に内密  
 で泊ろうか。」

「うれしい！」

「じゃ、消灯時間になったら一たん出て、今  
 度は窓から入ってくるよ。」

「え。」

「じゃ、もう出よう。」

「すぐ来てよ。」

「うん。」

信雄が出て行くを入替りに、家へ泊りに行  
 った筈の文子が、元気ない顔で入ってきた。

淡江は（しまった。）と、思った。彼が窓  
 から入ってくるのを事前に防がねばならな  
 い。彼女は消灯された廊下を洗面所へ急い  
 だ。その辺で呼止めるつもりであった。が、  
 彼の姿は見当らなかった。便所側の出入口か  
 ら庭へ出てみたが、窓の方へ行くのは一とま  
 わりしなければならぬ。そのうちに病室へ  
 入られたら万事休すだ。淡江は部屋へ急い  
 だ。が、彼女は部屋の前ではたと足を止め  
 た。信雄はもう侵入してきているのだ。そし  
 て、心得顔に、声もたてられずふるえてい  
 る文子の傍にすべり込んでいたではないか。

淡江の胸は引きむしられそうであった。彼  
 女は怒りの力をこめて、部屋の電灯のスイッ  
 チをつけ、戸を開けた。信雄も文子も悲鳴に  
 似た声をあげた。

思いもかけぬ結末である。こんな事件の伝  
 播性は、他に比べようもない速さを持つてい  
 るものなのだ。

文子は一たん退院して家へ行き、そして他  
 の病院へ移った。それきり信雄は淡江のこ  
 ろへ来なくなってしまう。澄江こそいゝ面  
 の皮である。彼女はやけ気味になり、落付か  
 なくなつた。文子の後へ来た良子と云う少女  
 には半月も口を利かなかった。澄江は、良子  
 が居ても平気で味噌壺の上に尻を据えて用を

足した。そんな時、良子は、大きな眼をばち  
 ばちさせて顔の位置を変えるのであった。

## (二)

澄江は日々が不安であった。いつ病氣が治  
 るのか皆目見当がつかないこと。治っても満  
 足に仿けない身体。そして、結婚の問題にな  
 るとお先真暗である。ヴァージンでないこと  
 はそれほど気にもかゝらない。が、胸に空洞  
 があると云うことは、決定的な打撃である。  
 整型をするにしろしないにしろ、労力は出来  
 ない。いつまでも親は生きていない。どうや  
 って生きていったらいいのか、考えようもな  
 いのだ。人間の思考など狭く小さいものであ  
 る。明日のことさえわからない。朝に元気で  
 あった者が、咯血して夕方死んでしまったこ  
 とだつてある。澄江は、新聞を丁寧に隅々ま  
 で読みまわした。良縁多数云々。といった結  
 婚相談の三行広告。澄江は、ふいつ、と、そ  
 こへ手紙を出してみようか、と、思いついた  
 半ば遊びで半ば真剣な、そして多分に好奇  
 心も手伝って、サナトリウム内ではまずいの  
 で、実家の住所にして、彼女は要心深く簡略  
 な手紙を出した。

退屈な明け暮れである。九時から十一時ま  
 で、一時から三時まで、どんなに天気の良い  
 日であろうとも、気分がよからうとも、安

静にしていなければならない。そして、夜の  
 九時には消灯である。節分もすぎ、幾分春め  
 いてくると、澄江も身が軽くなったような気  
 がし、しきりに出歩きたい慾望に促される。  
 結核患者が秋よりも春の方が死ぬ率が多いの  
 は、こんなところに原因しているのだ。と、  
 ある医者が言ったが、そうかもしれない。か  
 げろうのように、結核患者は、野に出てはね  
 まわると死ぬ。しかし、それにしても、昼も  
 夜も寝ていると言うことは、やり切れないこ  
 とだ。澄江は、他の患者同様、ちよつとした  
 ことでも手紙を書き、また、新聞、雑誌の懸  
 賞物にも投稿した。俳句だとか短歌だとか、  
 標語だとか——小説とか手記とかエネルギー  
 を必要とするものには手を出さない。無駄だ  
 からだ。

で、そんな様々な通信の中で、結婚相談の  
 返事も、一寸した悪戯つ児のような心で待っ  
 た。返事は一週間程たった或る日、家から転  
 送されてきた。八四切手の開封であること  
 が、彼女の心の張りをしほませてしまった  
 が、それでもやはり、何となく開けることが  
 躊躇された。そして、良子がトレイに行った  
 間に急いで封を切った。内容は次のようなも  
 のである。

御親書有難く拝見致しました。  
 申込無料の広告面につき説明申し上げます

同封の申込書に御自分の希望の詳細を有  
 の儘を記入して、写真添付の上申込んで  
 頂きますと、私の方の会員の方が、あな  
 た様の身分書により、自分の条件と合致  
 する様に思われました時に、あなた様に  
 対して先様の身分書同封の上、私より連  
 絡させて頂きます。

其時、身分書により、大体これなら会っ  
 てもよいと思われました時に始めて会員  
 になって頂ければよいわけです。（当方  
 の会員は不真面目な方はないと信じていま  
 す。私もお断りしている方もあります）  
 一度入会さえして頂ければ何時迄でも有  
 効ですから申込だけはしておいて下さい  
 ませ。理想の人は何処にいますか計り知れ  
 ぬものと思ひます。

私も真剣に貴方様の幸不幸を左右する時  
 に当り、貴方様のお気持ちになり切つて御  
 相談させて頂きます故、必ず私の誠意を  
 わかつていただける日を祈りおります。  
 御多忙中とは存じ乍ら寸暇をさいてお越  
 し下さいませればと念じつゝ、お目もじ  
 の日を楽しみにお待ち申し居ります。

・月 日

戸田 沢江 様

東京都世田谷区世田谷

南条 繁子

### お奨めの言葉

結婚に対し個人の自覚と言うものがまだ  
 本物になつていなく、親兄弟、世間によ  
 つてたやすく動かされ、戦後の自由結婚  
 も、中身は案外古い旧觀念に促されてい  
 る状態であります。

自分の配偶者の選択は、身内や他人が  
 ほつておかない等と考えている方も多い  
 世の中です。

新しい時代には、新しい感覚のもとに  
 最も合理的なる方法を以て自分の理想を  
 求めて下さい。

文通——交際——恋愛——結婚——と

幸福なコースを歩まれて人生の醍醐味を  
 味う楽しさ、また、心の友として、人生  
 のよりよき話し相手として、視野をひろ  
 めて語り合う異性の友と交際出来るのも  
 誠に意義深いものと思ひます。楽しかる  
 べき人生に寂しい方、幸福なるべき世に  
 精神的に、また経済的に悩み居られ  
 る方々が如何に多い事でしょう。

こんな時に、異性からの親愛なるお便  
 りが、或いは慰めがあったなら、どんな  
 に心強い事でしょう。

——孤独な荒漠とした旅より愛のオアシスへと辿りついたならば——現世の騒々しさに疲れた人達をきつと優しく慰め



てくれますことでしょう。  
心の太陽は生活のための強力なる源動力となり、逞しい明日への活動力の源泉ともなります。

人生をより楽しく希望を以て生活を望まざる方は、近親、職場の限られた枠内より、広い世間に、秘密を望む内にて当むつみ会を通じて異性の友を求められ、よりよき配偶者をお選び下さいませ。

人生の幸福を得るために、一日も早くお申込み下さいませようお奨め申し上げます。

むつみ会々長

南条繁子

其他、会則や入会申込書があった。申込書には、略歴の他に写真を貼付しなければならなかった。そして、澄江には最近の写真がなかった。サナトリウムには、カメラの会もあって、撮るのはわけなかったし、容貌にも自信があったが、入院してからは、カメラのレンズを避け通していた。病衣ではなく、普通の服を着ていても、病人くさい感じが、どの友の写真にもにじみ出ていた。それがいやなのである。

澄江は、むつみ会の、妙に鼻についた文章を返して見た。そして、なかなか含みのある内容のように感じた。良子が帰ってきた

が、別に隠すほどでもないな、と思った。  
次の瞬間にはもう、それ等印刷物を、良子の目の前につき出していった。

「読んでいいわ。」

「何？これ。」

「いいから読んでらんナ。」

良子はベッドに腰掛けて読みはじめた。とに角、退屈していると云うことは、よいことではない。どんな些細な誘惑にも引かかってしまう。ことにそれが結婚とか色情の問題になると、男でも女でも簡単にのめり込んでしまうのだ。良子はそとそれ等を返してよこした。

「どう？一緒に申込んでみない？」

良子は微笑して、淋しそうに首を振った。

「生保だから——。」

生活保護法による患者だから何をするゆとりもない。と言うのだ。良子はベッドのふとんの中に入って澄江の方へ向いた。

「澄江さんは？」

「私？入会するワ。」

「お金、だんだん沢山とられるようになるのじやあないの。」

「そうかもしれないわね。結婚成立のあかつきはいくら、なんて。」

「入会金だけだったら私、入ること出来ると思うワ。だけど、やっと安静度三度じやあね、肉体的にも理由と思うの。結婚そのもの

が……。」

温順そうな良子のあきらめの表情を見ると、澄江は意地でも入会する気になった。中野のアトリエで、三十分と画布に向っていらなくなつた時のことを思い出した。作品搬入日は迫っている。秋だと云うのに全く火の気もない五坪ほどのアトリエ、その床に、彼女は時々横たわっては、また力を振り絞って画き上げたものだ。裸婦を二点、静物一点、風景一点を画きかけのまま、都内のささやかなサナトリウムに運ばれてきてしまった自分。あの芸術に対する熾烈な精神に比べる、と、何と云う情ない思考範囲だろう、と思うのだ。結婚のケの字も考えていなかったものだ。跛の無名画家信夫三朗が、理智的だが、シユールになつてゆく傾向があるね。と、彼女の絵を見て呟いた時、ひよっと、この醜い跛の男と結婚してもいい。と、思った位である。

澄江は印刷物を文庫の中に収めると、くると良子に背を向けて、偶然に浮び上つてきた信夫のことを考えた。彼女は、誰とも音信を絶っていた。アトリエの彼女宛の手紙はS県の父母の許に転送され、そこからサナトリウムに来るのだ。彼女がどうしても手紙を出さねばならない時、封書やハガキのスタンプの押されるところへ油を塗って投函していた。どこへ消えたのか。と、言う手紙が沢山

来た。信夫からはあまり来ない。彼に言わせれば、ハガキを出す金もないのだ。澄江は彼に手紙を出そうと思った。

### (三)

三朗は、絹の画布をみつめながら墨をすっていた。挿画、映画の看板、何でも手当たり次第にやっていたが、美容院が商売替のため室内改造をする時、

その室内装飾を手伝ったことがある。その内儀に絹に裸婦を画いてくれ。と、頼まれたのである。内儀と言っても主人が死亡したための転業で、いわば女将である。表看板は変えないで、内部だけ変更したので女遊びもしたことがない木像金像の彼にも、何かを感じたが、性来無口の男であるために、誰にも何も聞かなかった。



返してみると、澄江の、二字しかない。消印は殆んの読めない。拭き消されたように感じるほどのあとがある。

三朗は机の前にもどってから封を切った。

飢への三朗様。

三朗は苦笑した。冬をとうとう炭なしで通



す位だから、食糧とて似たようなものだ。  
 (飢えても絵の道具だけはちやんとあるぞ。  
 松葉杖を質屋に入れても、こいつは手離さねえ。)

薄暗い、足の踏場もないほどに散らかった六畳に、芸術への妄執だけが満ちていた。

私はあなたと結婚する。但し、胸には空洞がある。あなたがいやなら結婚媒介所で男の子を捜してもらい、テキトウに結婚する。

乞返。

澄江。

三朗は、この字一字一字が痛ましかった。その一つ一つが呻き声をあげているように思えた。勝気な、浪費家の、ずぼらの、そして絵のことしか考えていなかった女、その澄江を知っている彼は、何と返事を書いていゝかわからなかった。そして、返事は急を要するのではないかと思えるのだ。彼女は救いを求めている。そうとしか考えられない。

彼は絹布を畳の上に置いて、便箋を取出した。そして、今、裸婦を書くためにすった墨に筆を浸した。

御病気の御様子、何よりもまずお見舞申上げます。私達は何としても、まず生きなければなりません。エンマ様があきれかえるほど

生きねばなりません。そして、いゝ絵を書くこと。これが平和を守る、私達の出来る最善最高の道だと存じます。あなたも、病気が治ればまた画けるようになるのです。それで、当面、病気を治すことに専心して下さい。私と結婚して下さい。それは大変嬉しく存じます。しかし、あなたが御丈夫になった時、私のみすばらしい姿を見て悔めることはないでしょうか。結婚は、淋しいとか、または衝動でなすものではありません。勿論男女は、国籍、階級、年齢の相違を超えて結びつくことの出来る可能性を持っております。戯れなればお断り致します。愛とは別のもので結婚したいと云うのであっても亦お断ります。

愛とはわかりやすくてえれば、抛物線のようなものです。一回性？ のものです。それは再び帰って来ないのです。巨大な虚空に金色の光りを放ちつゝ目的に向って進みます。目的は何か！ それは誰でも知ることが出来ないものです。そして、どこにもあるものではない。こんなことは簡単に腑分けして説明するとは出来ず。が、それは、説明した部分から次々と屍になり腐敗してゆくのです。「二十五時」に於ける、トライアンコルガに対するノラのように、またその逆のように、つまり、人と人との結合は何物にもかけがえがないもののなのです。抛物線は接点で火花を散らして滅亡するかもしれません。どちらかの抛

物線に吸集されるかもしれない。更にまた、燃えることもなく、火花を散らすこともなく、冷酷な、単なる接点としてふれあつただけで永遠に別れ去らねばならぬかも知れません。  
 あなたが若し私を真に愛しているならば、よし、あなたがレプラであつても、私は躊躇なく結婚しましょう。何故ならば、私もあなたを愛しているからです。口に出して言うべきことではないかもしれませんが。  
 近日お訪ね致します。どうぞ今しばらくそのまま御療養なさつて下さい。

信夫はこゝまで書いて、はっ、とした。彼は、彼女の病院がどこか見当がつかないものである。中野のアトリエを訪ねて行ったことがあるが、留守番の老婆は、ただ、故郷へ一寸お帰りになりました。と言うだけである。故郷！そこはS県である。そこに母が居ると云う話を聞いた。それだけである。孤独で交際の少い彼は途方にふれてしまった。一人の人間が愛を求めている。その質量は生命に等しい。と、彼は考えた。

彼は手紙をそのまゝにして、机の上にまた画布を置いた。そして、棒に張ったその画布に女の裸像を描きはじめた。

(金！ 金！ 金！)

(愛は金であがなうものではない。)

(まず劣仿——行為がある。そして、その行為に名称が冠せられる——。)

裸婦が彼の手から生れていった。

(バザロつたれ！)

時間が彼を憔悴と馳りたてた。女は、澄江はどこに居るのだ。封書の消印がわかれれば簡単である。信夫は澄江の手紙の一つ一つを頭の中で引出してみた。住所も消印もない。予感としては東京に居るかもしれぬ。と、感じられる。だが、S県にも大きなサナトリウムが二つもある。その一つは故郷の近くに……

……そこか。

彼は裸婦を描き終えて戸外を見た。夜である。東京の灯が、彼も人の愛へ誘った。空腹よりも先に、彼は疲労を感じた。

灯蛾が灯へもう働きようがない。

渡辺と云う俳人の句だ。信夫はたつた今描き終えた裸婦を見た。悪くはない。(あの、上原何とかと云う女は、絵がわかるようなことを言ったが、これなら金を出さう。)

(いや、金よりも愛だ。人間が先だ。)

信夫は急いでオーバーを羽織り、終戦当時そのままの、焼トタンの家を出た。松葉杖の音がせか／＼と鳴る。彼は乱れる髪を時々掻き上げた。帽子を取りに帰ろうか、どうしようか、と、思いながら駅へ急いだ。

(四)

澄江はサナトリウムからエスケープして信夫の家に来た。風が吹けば飛びそうな、柱のない、軒の低い……、彼女は胸がつかえた。今更ながら彼の生活のきびしきをつきつけられたようであつた。どこかで時計が一時を打った。

(安静時間だわ。)

澄江はそう呟いて、自分の意識がすっかり結核患者のものとなつてしまっていることに気付いた。心が弱った。肉体もおとろえていく。全身に冷汗がにじみ出て気分が悪い。それが更に肺患の意識を呼び起し、前へ進むことを引止めている。初春の陽は柔く弱々しい。が、やはりぬくぬくとした気を散乱させている。彼女は信夫の家のドアを軽く叩いた。返事がない。屈託ない、不具者とは思えぬのびやかなソフトな声が響いて来ない。

(野菜で買に行ったのかしれない)

彼女は簡単に開いたドアのために、そして、不平な手紙を出した手前、すぐに彼に会えぬことにほつとした。彼女は家に入って座敷に腰を下した。入るとすぐ土間で、炊事道具が一杯あり、左手が二帖程の座敷とも云えぬ床になり、その周囲に、ぎつちりと本が並んでいる。その二帖の奥に三尺の通路があり、その奥が、所謂、彼のアトリエ兼ベッド・ルームである。

信夫はいくら待っても帰って来ない。そし

て、家の中は薄寒い。澄江は次第にアトリエ生活を心の中に甦らせていった。勿論、彼女のアトリエは立派だ。地方の素封家の一人娘として、金に心配なく建てた。父が死んで、急に縁談がふえた。婿をとらねばならぬ。彼女は首を横に振り通した。母は親類の圧迫と入智恵で、婿をとらねば金を送らぬ。と言ってきた。彼女はやはり首を横に振った。恋人が居るのか。ともたずねてきた。その当時は恋人もない。彼女の描く裸婦は次第に暗い色になり、生々しくなつていった。すっぽり芸術を取り落して、更にヴァージンも捨てたのは病んでからである。悔いてもはじまらないことだ。

彼女は七輪に火をおこし、湯をわかし、食器棚からコーヒーを出し、勝手にコーヒーをいれてのんだ。だが、彼は帰って来ない。疲労が彼女を捉えた。陽は傾き、彼女は電灯を点けて、ずかずかと彼のアトリエに入って行き、倒れるように、男くさい信夫のベッドに寝た。アトリエ独特の匂いが彼女の心をゆさぶった。コーヒーと疲労と、芸術と熱情とが、彼女の脈搏をたかめ、彼女は熱っぽい瞳で部屋中を見廻した。グリーン色の勝った彼の絵は、何となく女性的だ。と共に、ねばっこい、執念に似た芯が犇々と感じられる。そんな中に、妙な裸婦が机の上に立掛けられてある。澄江に似ている、病院に入院してからの



彼女に似ているとはいはれない気配のある、ベッドに仰臥したおんな。

(あれは、私だ。)

澄江は起きて行ってその絵を取上げた。日本画に使う絹布である。そこには色情があった。眼を落すと、書きかけた手紙がある。彼女はそれを持ってベッドへ帰り、彼の夜具にくるまって、読んだ。それは自分宛のものであり、彼女は、自分に気付かぬうちに涙をふれしめていた。病んだ肉体と、病んだ精神が慟哭しつづけた。彼女は、すべり墮ちつづける自分が彼によって支えられることを信じた。

夜になった。彼は帰って来なかった。空腹にたえられない彼女は、飯を炊いてたべた。

(待とう。)

彼女は再びベッドに横たわり、知らぬ間に眠りに入ってしまった。

同じ時刻に信夫は澄江の実家を辞した。そして最終のバスにやっと間に合った。彼は、東京駅を十時何分かの東海道線に乗り、翌日の昼近く、町を取巻く山々に雲が湧く澄江の実家の地方へ来たのである。彼女の家はすくに訪ねあてた。それは、町で一、二の大きなそして古い家であったからである。そこに、彼女の老母と中年の女中がひっそりと暮らしていた。

彼は頑な老母に澄江の手紙を示し自分が彼女と結婚出来ようとは思っていない。が、彼女が精神的な危機にあるらしいこと、そして、人間的な愛が今の彼女にはなくなつてしまつたこと、自分が少しでも彼女の力になれば嬉しいと思ひ、彼女の入院している病院を知りたいためにここまで来たのだ、と、ねばりよく、一語一語誤解されぬように注意深く語つた。山林地主の一人娘と、孤独な蹠の貧乏画家とどうして結婚出来るよう。

(そりや無理だ。小説や物語では可能でなくても、現実にはどうにもならぬ。)

バスは川沿いの切通しをガク／＼と下つていた。あまり混んではいなかったが、それでも二、三人立っている。私鉄の駅のある町まで二時間乗りつづけねばならぬ。

信夫は、やっと聞き出した病院の住所を見て、自分の予感が当たっていたことに満足した。と共に、実家まで行ったことにも満足した。

(彼女の結婚は親族会議にはからねばならぬとは、こりや、民主主義かもしれぬ。彼等から云わせれば――。大衆の討議により少数は多数に従う。なるほどね。いや、だが結婚する当事者の意志の問題はどうなるのだ。)

個の自由はあり得ないのか? いやな相手でも、少数者の場合、決定に従わねばならぬのか?。それが出来なくて彼女は自から貧困を選んだのではないか――)

に、はつ、とした。電灯を点けた。が、恐怖は去らない。

信夫が急流の岸近い崩れた崖から救い出されたのは明方近くである。

### (五)

朝、澄江は妙に疲れていた。不吉な想念があった。身が重く、ベッドから起上るのが大儀である。裸女は夢を嘲笑した。疲労と妄想のなせる業だ。だが、信夫への愛は、昨日よりも明確に、ゆるぎないものになっていることに気付いた。そして、彼が帰って来なかったと云うことは、やはり心配であった。彼は新聞もとっていないので、朝おとな者もない。何と云うわびしい、孤独な、孤立した生活をしているのだらう。と、彼女はあらためて彼を想った。

彼女は、陽が高く昇ってからやっと起きて食事をしたが、彼は帰って来なかった。そして、彼女には、彼を捜しようもなかった。病院にも帰らねばならぬ。その前に、あの、むつみ会とか云うところを訪ねてもみたい。

(遊びだ。これは遊びなんだ。)

澄江は信夫と結婚する意志を固めると共に、結婚相談の三行広告の実体をのぞいてみたい誘惑に引かれた。それを、彼女は遊びの一種と考えた。結婚してしまつたらこんな遊

突然、バス全体が丸太棒で殴られたような衝撃を受けた。乗客達は不安な顔を見合せた。バスは数メートル走って止り、車掌が懐中電灯をつけて飛び降りた。

「バック!」

車掌の鋭い声が闇の中に走った。再び、

「バック、バック。」

バスは徐々にバックしはじめた。再び車体、が、がんと鳴って、はじめて乗客は崖崩れに気付いた。ヘッドライトの中に、頭上から降ってくる岩塊が見え、人々は恐怖のために中腰になった。バスはエンジンの音をふるわせてバックしつづける。冬に崖崩れはめつたにない。二、三日前の雨で地盤がゆるんだのだ。などと、したり顔で喋る親父が居る。ものの裂ける音と共に、土煙をあげて崖上の松が切通しの路上に叩き落ちた。バスは危く難をのがれた。路上に落ちた岩塊の幾つかは、首を砕いて眼下の急流に、猛った獣のようにとび込んで行った。

バスは、更に十メートルほど後退して止った。町へ引返せ。と言う声がした。しかし、バスが故障して、これ以上動くことは出来ない。と、告げられた。車掌が町へ連絡にもどつて行った。乗客達は下車して、ライトに照し出された崖崩れを眺めながら焚火をはじめた。前方にライトの色が見え、上ってくるバスが来て止った。そして、崖崩れの中を、車

びは出来ない。

彼女は、信夫の手紙の余白にペンで走り書きをした。

わがつまよ。汝、家を空けて遊び呆けり。よって汝の妹背も遊び呆うけん。

タダシ、コレイチダダケ。

澄江は春の陽差しの中に出て行った。

むつみ会はわかりにくかった。南条ハリ炎院とたずねて澄江がやっと探しあてた時は夕暮に近かった。サナトリウムでは心配しているかもしれない。と、彼女は思った。その家の前を二、三度往復しながら病院へ帰ろうか寄つてみようかしら、と、迷った。そして、時を早く切あげること、つまり、要点を掴んだらすぐ帰ることにしてハリ炎院に入った。院内は改造されたばかりで、塗料の匂いが新しい。澄江は、応接間に通された。勿論、各部屋が、秘かに外部から内部を眺められるように仕組まれていることなどには気付く筈がない。

南条繁子は、太った、精力感のあふれた、らい落そうな女で、ふちなしの眼鏡をかけていた。彼女は澄江を一べつしただけで、あとは殆んど、澄江と視線を合わさずに喋った。「そうですか。どうりで、少しお疲れのよう

掌が、注意深い足取りで、崖上に注意しながらやってきた。

「徒歩連絡すれば大丈夫。下りはNで方向転換出来るし、今下つてきたバスは町に近いからそのまま逆行すればいい。」

「車が故障で、逆行も前進も出来ねえ。」

運転手は乾いた声で言った。

「下へ行く人で急ぎの人は徒歩連絡してもらつたらどうだろう。」

徒歩連絡する、と、言う者が十人程居た。

その中には、二本の松葉杖をついた信夫も居た。彼は一時間でも早く澄江に会わねばならぬと思っていた。

澄江は重苦しい夢にうなされてめざめた。

びっしり寝汗をかいていて、まだ、夢が身にとりついていて錯覚で身顛った。夢に、叫びがあった。闇の中から救いを求める悲痛な声が、ずるずると、奈落の底へ果しなく落ちてゆく、それが自分自身でもあるように、また信夫でもあるように、信夫と自分が一体であるように――そこは夢で、混んととして、恐怖がびっしりと彼女を取り縛った。まだ夜半である。最早やねむれなかった。彼女は衣服を脱いで裸になり、タオルで全身の汗をふきとり、そのまま再びベッドにもぐり込んだ。電灯を消した。暗黒の中に、声がある。絶望の呻きを、澄江は自分でも発しているの



ですな。ゆっくりしておゆきなさい。どうせ、旅館へお泊りになるなら、うちにお泊りなさい。無駄にお金を使っちゃいけない。うちがいろいろがいい。宿料はとりませんよ。はっはっは。」

「あの、でも、荷物を宿屋へ置いてきたものですから……。」

「そうですか。どこです、宿は？。若い者に若物をとりやせませう。」

「東京駅のそばなんです。私が行きます。」

「東京駅のそば？。ふんだくられますよ。東京は恐いからね、こちらへいらつしやい。」

「は、でも……やっぱり、御遠慮しますわ。」

「そうですか。無理にはすすめませんけれどね。そうそう、丁度、花婿の候補者の方が一人見えていますね。身分書と略歴はこれです。」

繁子女史は、澄江の目の前に、男の写真と二通の書類を差出した。

「会ってみてもいいと思ったら会って下さいよ。見るだけならタダなんだからね。はっはっは。つまり、お

見合ですよ。」

「は。」

「どうです。お会いになりますか。」

「は。」

「じゃ、相手の意向もあることですから、一応、殿方にも諸否を聞いてから、双方よしとなったらお見合していただきますよう。」

澄江は、巨大な繁子の尻がドアの向うに消えると、救われたようにほっとした。らい

落ぶった蔭に油断のならぬものを感じ、深入りせぬ方がいい。と、心に決めた。二十分程して繁子が再び現われた。「向うさんもO・Kだそうですね。御案内しましょう。」



「あの、ここではないのですか？」

「いや、ここが一番いいのですが。何しろお客様が多いので、しかも、お互いに秘密でありたいと云う方もあるし、人に聞かれないことも話さねばならぬでしょうし、まあそんなことやなんかで、この通り、部屋を改造したんですよ。どうも、こう云うことは、ガラスばりにはゆきませんよ。あなただってそうでしょう。当事者以外の他人がそばに居て具体的な話が出来ますか？。ね。じゃ、どうぞこちらへ。」

いやとは云わせぬ押し強さである。

澄江は、サラリーマン風の男が机の前にぽつんと居る四帖半に通された。押入れ。床の間、棚、何かとどのいすぎた趣きがある安手の部屋で、繁子は二人を紹介すると、他にも客があるから二人で充分話合うように、と言いつつ部屋を出て行った。

神戸と云う、色白でひ弱そうな、そのくせ蛇のような冷酷さを匂わせている若い男は、火鉢を少しずらせた。

「戸田さん……ですね。あたりませんか。冷えますね。」

「は？」

「どうぞ、お手を下して下さい。」

「は。」

「きれいな指ですね。」

神戸はそっと澄江の指に手をふれた。澄江

は、ぴくっと、手を引込め、机の上の新聞に目を向けた。新聞は社会面が開かれてあり、S県の文字が彼女の眼を射た。

——崖崩れ。

その文字が、彼女の心を故郷にかえした。よくある。台風季節にはしよっちゆうだ。冬にはめずらしい。しかし、春には時々ある。そんなことを、ぼんやり考えているうちに、男の手に自分の手が握られているのに気付いた。それは、ゴムの帯のよう、彼女の手のしつかと捉えている。彼女は新聞に眼を据えたまま、手を引いた。

——重傷者信夫三朗（東京）

（あつ！）

澄江の口は、火鉢を乗起してきた男の掌でふさがれ、男の重量を支え切れずに、彼女はどっと倒れた。

（重傷者信夫三朗！東京！）

——放して。放して。

男は用意していたらしい手拭を素早く澄江の口の中に押込んだ。澄江の力は、どんどん消耗していった。重苦しい塊が胸からのどへこみ上げてきた。

（血だ。）

血は口の中の手拭を浸し、鼻から、上を覆った手拭に滲み出た。

男はそこではじめて澄江の顔を見て、あつと、叫んだ。

「し、舌を噛んだか。」

（猿ぐつわをされて舌を噛めるか。）

澄江は遠くなるうとする意識を必死に引止めていた。

——信夫！

男はあわててさるぐつわを外し、澄江の口に火箸をはさんでこじ開けた。血が、あふれた。彼は更にあわてて、火箸を外して彼女の口を開け、ふるえる手でふすまを開けた。そこに繁子が立っていた。彼女の手は、男の手の指をしっかりと握っていた。

「逃げるんですか、神戸さん。」

「ずっしりと重い声だ。」

「い、いや、ち、ちよっと。」

「吉本。」

彼女は書生を呼んで、神戸を彼の手に渡し、澄江の傍へかがんだ。

「お嬢さん。しっかりなさい。今、医者を呼んだからね。結核とは気が付かなかったよ。ここで死なれちゃ、うちも大困りだ。しっかりしておくれよ。」

繁子は、澄江の乱れたスカートを直し、押入れからふとんを引出して澄江の身体を軽々と移した。

「全く、開業早々これだ。縁起でもない。お嬢さん。しっかりするんだよ。」

（医者代の四、五倍はあの神戸と云う男から絞り取ってやろう。この娘は、マスクも体格



「だ。え。」

信夫は澄江の顔色の動きで、話を杜切らせた。やつれ切った澄江は、かすかに身じろぎをして、口ごもった。

「どうしたんだ。ここはおれとお前しか居ない個室だ。結婚届も済ました。あとは、お前が治ることだけだ。」

「ええ。」

「しおらしくなったな。おれは、お前が悪たれをつく日に来るのを楽しみにしているんだ。新聞の奴は、おれが跋をひいているので、あわてて重傷と書きやがった。おれは、一寸口を利きたくなかっただけだ。」

「ええ、あの……。」

「何だい。」

「ベッドの下に壺があるのよ。」

「壺？。壺を何するんだい。」

「何でもいいの。とって下さらない？。ふた付きのよ。」

信夫はベッドの下からふた付の壺を取出して澄江の枕元へ置いた。

「床に置いていいのよ。」

「何うしてだい。なか／＼いい壺じゃないか。ふだんは必要だな。」

「ええ、私もそう思うの。でも……。」

「どうするんだい。」

「起して下さない。」

信夫はふとんをめくって澄江を起した。窓

外は春である。部屋は和やかな空気に満ちている。

「大丈夫か。」

「だめね。」

澄江は又よこたわった。

「何を考えていたんだい。」

「あのね。」

澄江は信夫から眼をそらして輝いている窓を見た。窓に区切られた空の背を見た。その空のように濁りなくならねばならぬと思った。

「お小用、したいの。その壺、私のお小用なの。」

「ふーん。」

信夫は微笑しながら、澄江と壺を見くらべた。

「夢道の句にな、こう云うのがあるよ。新妻よ味噌壺は味噌を入れる壺である。」

「ええ。」

「自分で自分の身体を自由に出来るようになるまでは、壺はおあずけにしろよ。毎日、おれは来るには、来るがな、なるべくおれに頼めよ。」

「ええ。」

澄江は処女のように真赤になっただけにからだ。信夫も顔を赤らめ、これには絵を描く時の手の精彩もなく、無器用に澄江が小用を足すための仕度をはじめた。澄江は、そっと、

彼の真剣な表情を盗み見た。

澄江は信夫の非力な肉体にすがって快く小用を足した。

(新妻よ、味噌壺は……)

澄江は幸福を感じた。

信夫は澄江を元のように寝かせると、濡った手を、澄江にわからぬように素早く唇にあててみた。澄江は、それを見て見ないふりをした。

「春ね。」

「うん。」

潮のように愛情が二人を浸していった。

**不眠の夜 (夜12時35分)**

ふと私は目ざめると、今迄の夢の中の出来事を思い浮かべ、寝苦しさで寝がえりを打つが、もう私を夢の中にはひきずり込んでくれない。これは小説の書き出しではありません。最近の私はこのような夜が多く、イメージを追っている中に朝を迎える事も幾度かございます。その私のイメージとは？、そうです、SとMです。文中の主人公のように、はじめなさらし者の姿で大勢の婦人になぶられ、さげすまれ、打たれ苦しんで喜ぶ私。私は支配者だ、こゝに大勢のメス共をどんな事でも出来るのだ。そうだ、こいつは昨日、この俺に逆らったナ、今やきを入れてやるからな。SとMとは紙一重の差だとしてよく云われますが、私はM七、S三ぐらいです。一度思いきり、なぶり、なぶられたい、と思っています。

(東京、Kより)

もいいんだから、少しよくなったらうちの会員になってもらって、少し儲けさせてもらおう。



澄江の頭は混濁していた。信夫の無惨な姿と、繁子の声と、男の圧迫とがごっちゃになって押寄せては引いてゆく。

——会員組織の淫売窟か！  
逃がたい心は悶えていた。が、肉体は屍のように動かない。  
医者が来た。

(六)

「……落下してきた岩塊を除けたのだよ。除けたつもりなんだ。ところが、杖が引き千切られるようにおれの手から關の中にけし飛んで、おれは、さくさくに崩れた道に膝をついたんだ。頭から崖下へずる／＼のめり込んで行った。誰かがおれの足首を掴んで何か叫んだ。どうしようもない。おれは砂礫だか雑草だか掴んだ。急流がぐんぐんおれに迫ってくる。おれは、岩に爪をたてた。お前に会いたいと思った。残念だがお前の顔は浮んで来なかったよ。想念だ。親しい人、或いは愛している人の顔を想い出すと云うが、あれはあてにならない。視覚の乱れない限り、現実が眼前にある。視覚が乱れている者は意識も乱れている。おれは、水を見た。真暗な中に、ヘッドライドの光りが水に映っている。肉体の感覚は失っていたが、意識は確かだ。おれは水際の濡れた岩でやっと身を支えた。おれは逆様になったまま、胸に岩をあてて、岩を抱いた。こんなに真剣にものを抱いたことは、今迄に一度もなかったぞ。どうしたん



# あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

## 第九十二 死ぬまで檻の中においで

「丹夫人の化粧台」は、「女が男を非常に窮屈な場所に閉じ籠めてしまう」話として読むことおできる。そこで、是非一つ紹介しておきたい作品がある。

一七五〇年、ルイ十五世の治下に、フランスの王朝文化が爛熟の極に達した頃のことである。ド・マルネヴィル家の令嬢アドリアンヌの求愛者デフォルジュは、情熱的な詩人であった。当時王の寵妃として飛ぶ鳥落す勢威のボンパズール侯爵夫人を、アドリアンヌが嫌っているのを知ったデフォルジュは、ボンパズールを諷刺した、辛辣無比の諷詩を作りあげた。

小説の場面は、令嬢の私室から始まる。令嬢の足許の刺繍した足台に坐った詩人は、傑作を彼女に示し、彼女は喜んで「今日から、あなたは妾の騎士兼宮廷詩人よ。」と云う。詩人は原稿を彼女に捧げ、更に写しを作って街中に広めに行く。ボンパズールを諷するものは生命がけなので、勿論無名氏の作として広めるのだ。危険を冒すのも、唯々令嬢の歓心を買わんが為である。

彼が出て行った後へ、マルネヴィル夫人が入って来て、モーレバ

侯爵との縁談をすすめる。令嬢は、デフォルジュという求愛者に、

騎士たるを許したばかりでもあるので、はじめは渋っているが、母親が、侯爵の素晴らしい財産を賞めるのを聞き、結婚すれば贅沢に暮して、黒人奴隷を使ったりできるのだと知ると、いつか気が移って、結婚を承諾する。詩人のことは、もう念頭にない。——暫くすると詩人は帰って来る。決死の思いで諷詩を広めて来たのだ。アドリアンヌに喜んで貰うつもりが、夫人から、「実は、娘は今度モーレバ侯爵と……」と聞かされ茫然としてしまう。

翌日、アドリアンヌに逢って、彼女の変心を責めるが、彼女は「今はもうあなたよりも、侯爵の方が好きなのよ。」と剣もほろろの挨拶である。やけを起した詩人は、侯爵にわざと喧嘩を売って、やつつける。侯爵がのされるのを見たアドリアンヌは、詩人にひどい復讐をしてやろうと思ひ定めるのであった。

丁度その時、二日前の諷詩の作者を、ボンパズールがカンカンになって追及していることが伝って来る。アドリアンヌは彼女を訪ね、諷詩の作者の名を密告し、証拠物件として、例の原稿を渡す。ボンパズールが喜んで、何かお礼をしようという、彼女は答えた。「貴女様がデフォルジュをどんな刑罰でお懲しになりますか、その刑の重さはそのまゝ、妾への御褒美と心得ましょう。」

「そう、じゃ、貴方は、この上ない御褒美を期待して良いわよ。」  
そういつてボンパズールは笑った。

その夜の中に、詩人は捕えられ、バスチーユ監獄に送られた。ボンパズールは彼女をば、独創的な酷刑に処すべく、数日の考案を重ね、その準備を命じた。

やがて、デフォルジュは、裁判を受けるために引出された。法廷は小さな部屋である。裁判官は、例の諷詩を知っているか、と問い、更に、その作者はお前であろう、と畳みかけて来た。詩人は勿論、否認したが、自分の自筆の原稿を突きつけられ、すっかり度を失って、自白してしまう。裁判官は、曝しものにされた上終身禁錮という判決を言渡した。極刑に仰天した詩人が、「何卒御慈悲を」と叫んだ時、柄附眼鏡を携えた一人の婦人が現れた。

「陛下の御慈悲から赦免があるなんて思っては駄目よ」と彼女は、冷淡な、事もなげな調子で云った「法廷はそなたの刑を云渡した。そして、陛下はそなたの刑をば、妾の思いのまゝに執行させるよう、妾に全権を委任されたのだよ。おわかりかい、諷刺の天才さん、ユベナリス（ローマの諷刺詩人）の生れ残りさん、妾の思いのまゝになるんだよ。」

この婦人こそ諷刺の対象にしたボンパズール侯爵夫人その人であると知ったデフォルジュは、驚いて、もう駄目だと観念してしまった。

侯爵夫人が目くばせすると、スペイン風の壁が左右に開いて、丈夫な鉄棒を用いた低い檻が現れた。

「妾は、こういう珍らしい詩人の標本をここにこの檻の中に保存することにしよう」そうボンパズール夫人は続けた「この男は豊かな空想力の助けで、こういう狭い牢屋もバスチーユ監獄位の広さに拡張してしまうだろうよ……狭いことといったら、ひどいものよ、中に入ったら立つこともできない、掛けることもでき

ない、寝ることもできない、そんな風に押し込められてあるんだから

——けれど、詩人という種族は、並の人間とは違うんだから、こういう変った牢獄も暮し易いといつて気に入ることだろうよ！」  
獄吏は哀れなデフォルジュを引捉え、忽ちこの檻の中へ押込めた。すると彼女は鍵を下して、彼を閉じ籠めてしまった。合鍵は侯爵夫人自ら預った。

「さあ、若いユベナリスさん」と彼女は、柄附眼鏡を眼にあて乍ら云った。「今日一日はまだパリの市街を見せてあげる。日が暮れるまで群衆がそなたをもてなして呉れよう、ヴェルサイユ動物園のお猿さんにしか与えないようなもてなし振りだね。」

デフォルジュが、檻の中に入れられたまゝ、曝し台の上に載せられ、パリの民衆の中の賤民達が、この哀れな諷刺詩人を、棒で突いたり、腐った林檎だの、糞だのをぶつけたたりした日、その同じ日に、モーレバ侯爵とマルネヴィル令嬢の結婚式が、ノートルダム教会で挙行されたのは、決して偶然ではなかった、侯爵がわざとその日を選んだのだ。不幸な詩人は、曝し台の檻の中から、四方硝子張りの透明な馬車が、教会から帰って行くのを見た。その中には、彼の恋人が、美と幸福とに輝きながら、良人の横に坐っていた。——アドリアンヌは勿論彼を見なかった。彼女は、あまり幸福だったので、自分の横に坐っている美しい貴族の良人以外には、とても気が附かなかったのだ。

……何年も経った。

デフォルジュは、もうとっくに、世間からすっかり忘れられていた。彼をこのような檻の中に入れて、殆んど発狂せんばかりの悲惨に追込んだ、当の張本人たる二人の侯爵夫人すら、すっかり



原文によると、彼女の考案した檻の高さは、掛けることができない位とあって、正座した時、頭も直立できるだけの高さがあつたかどうか明確でない。かりにそれだけの高さがあつたとしても、正座しなければならぬだけでも、西欧人には充分の苦痛であつたろう。しかし、この檻の高さは、実はもっとずっと低かつたと思われる。幽閉中に彼の四肢は痺えてしまったというのだが、正座しているだけなら、足は痺えても、手は痺えまい、手まで痺えたということは、両手両肘を前についた不自然な姿勢を長く強制されたから、とみるほかない。それはつまり、天井がうんと低いので、否応なしにお辞儀させられ、両手をついたに違いない。普通の詰牢（やつと身を入れるほどの狭い牢）は、横臥する広さがないだけだが、彼女の檻は、更に高さを制限して、中に入ったら四這しか許されぬような、特殊の詰牢なのだ。しかも獣の檻の中で四這に坐る男、それは畜生だ。彼女を嘲った罰の償いに、詩人は生きながら畜生にされたのだ。彼女は合鍵を取上げる。彼は畜生にされるばかりでなく、死ぬまで畜生であることを強制されるのである。この珍らしい新種の動物、詩人を彼女はパリの民衆に示す。「妾を諷刺すると、畜生にしてしまうぞよ」との示威を籠めて。

パスターユ地下での数年間は、どのように過ぎたのだろうか？ 彼女は、この不自然な姿勢の下にも、彼が少しでも長生きし、苦しみを多く受けるよう、彼の健康維持を獄吏に厳命したに違いない。食事と排泄に事欠かねば、生きてだけは行けるものだ。しかし、髪や髭がぼうぼうになつても、身体が垢だらけになつても、衣服が朽ちて代りを欲しい時にも、檻から一步もでられぬ詩人にはどうにもならない。人間らしい所の皆無な、こういう悲惨な状態を死ぬまで続けねばならぬことを悟つた詩人の心境を忖度するがよい。証拠の原稿を突つけられたことで、愛人の裏切りを知つていた詩人は、出獄後にもなお、彼女の馬車に懐かしそうに呼掛けた。とすれば、裏切り

られても、彼は彼女を愛し続けていたのだ。しかし薄情な彼女が、檻の中のことを忘れていたことは、彼にも想像がついた。このまゝ、世間から忘れられて、この檻の中で、畜生として死んでゆくのか……、そうあきらめた彼は考えられる最も惨めな囚人の一人といえるだろう。例えば「公妃の復讐」（二十八年八月号）において、四肢を切られて犬にされたマクも、随分悲惨な刑罰を受けたわけだが、見方を代えれば、犬になつて公妃の傍にいられることは、大きな幸福ともいえるのだ。ところが、檻の中の彼には、そういう楽しみは何もない。愛人は彼を忘れてしまつてしまつたのだから。

愛人だけでない。ポンパズール自身も忘れていた。これが、刑の珍奇さと並んで、本作の第二の要点である。この忘却はマゾヒストを動かす。彼女は錆びた鍵を見つけても、何だか思い出せない。一人をこれほどの酷刑に処しているながら、それが心に何のわだかまりも残していないのである。これは、彼の人格が彼女にとってゼロであることを示している。毎日憎しみを新たに、毎日新たな凌辱を加えるということは、ある意味では、相手の人格を無視しえず、それを克服しようとすることで、そのこと自体相手から影響を受けていることになる。真の人格無視は、相手を忘却することに極まる。それがその真の凌辱である場合が少くないのだ。（鵬外が「貴人は多く健忘なり」と「心頭語」に記した裏には、苦い経験があつた。苦痛性患者は、毎日の虐待の方を選ぶかも知れないが、真のマゾヒストは、むしろ忘れられることの方に被凌辱の快感を見出すのである。）

合鍵が見つかった時、偶然ポンパズールの機嫌が良かった。そのお蔭で、彼は赦免された。もし機嫌が悪かつたとしたら、そのまゝにされて、結局檻の中で、死んだかも知れない。刑罰も彼女の気まぐれのまゝなら、赦免も気まぐれのまゝなのだ。彼女の気まぐれの犠牲になつた男一匹が、檻の中で畜生の生活を強制されている時、

彼を忘れてしまつていた。

と、ある日、偶然の機会に、フランスの力強い支配者であるボンパズール侯爵夫人は、今迄ちつとも気が附かなかつた錆びた合鍵が、化粧机の隅に在るのが目に入った。侍女達の誰も、何の鍵か返事できなかった……、おしまいにやつと、侯爵夫人の頭に何かひらめいた。

「じやあこれは、あの檻の鍵なんだわ。あの時妾が、あの阿呆な諷刺詩人を閉じ籠めてやつた檻の——一体何て名前だつたか知ら？」彼女が侍女達に訊ねた。

「デフォルジュじやございませんでしたでしょうか？」

「そう！ デフォルジュだつたわ！」侯爵夫人はその名を繰返した。「まだ生きてるんだらうね？」ふん、物言わぬ鍵が終身禁錮の詩人の為の無言の弁護を試みたわけね、妾は今日は機嫌がよいせいか、こういう面白いことが気に入つたわ。赦免してやろう！ 誰か監獄にやつて、すぐ釈放しておやり、そしてフランスから追放するから、八日の間に国外に出て行けて……」

赦免の報を聞いて、詩人は子供のようになり、泣いたり笑ったりした。そして云つた、「旦那、私は動けません」彼は口籠つた「私の手足はすっかり痺えてしまつたんです！」

人に手伝つて貰つて檻からやつと這い出た彼は、二日経つて、松葉杖をついて街に立つた、その時、偶々、海軍大臣モーレ侯爵の馬車を通り過ぎた。車中にはアドリアンヌが坐つていて、騎馬で馬車の横を馳せる若い士官と話をしている。「アドリアンヌ！」詩人は叫んだ。若々しい侯爵夫人は、自分の名が呼ばれるのを聞いて、道傍の乞食に冷淡な一瞥を与えた——それがデフォルジュであることを彼女は認めた——そして、さげすみの笑みを浮べると、その視線は、再び士官の方に戻された。（下略）

原作は、ザッヘル・マゾッホの短篇「ボンパズールの奇行」Ein Geniestreich der Pompadourである。本邦未紹介の作品は、手帖とは別に独立の訳文として提供したいと思つていたが、目下全文訳出の余暇がないので要所だけを訳して、他は梗概に止め、手帖の一項にさせて貰うことにした。一段下げて組んだ部分が、訳文である。

マゾッホは、大学で歴史を講義したこともある専門家である。題材を過去に求めた場合、必ず根拠のあり史実を基礎にしている。この作品も単なる創作ではない。そのつもりで読まれたい。

残酷な女性が一人出てくる中、モーレ侯爵夫人アドリアンヌは、浮気で派手好みで冷淡で、愛人を裏切る、マゾッホが好んで描いたタイプの女性であるが、本作では大して重要でない。女主人公はボンパズール侯爵夫人である。彼女については、アルフレ・ド・ミュツセの「ほくら」を紹介する時に、詳述したいと思つているが、とにかく、美貌と才智と勇気と野心と閨房術とが渾然一体となつた稀に見る怪物、ルイ十五世に代つて、多くの国事を処断した支配的女性であり、当代の貴婦人中の貴婦人であつた。

国王の権力は即ち彼女の権力である。彼女を嘲つた生意氣な詩人を死刑することも難くない。しかし、傷のついた彼女の自尊心を慰藉するには、死刑では軽すぎるのだ。彼女は死刑よりも残酷な刑罰を求めて数日を費す。自分の思いのまゝに（Ganz nach meiner Laune 気まぐれ次第に）、他人を処罰しようことは、専制君主にのみ許された特権である。この特権を行使して沈思した彼女の数日間の心境は、現代法治国の私達には想像もつかぬ、残酷な愉樂に満ちていたことであろう。彼女の思いつきがそのまゝ詩人の運命になるのだ。裁判官達は、訓練した犬同然、彼女の命令したとおり喋るのだから、煮て食うも焼いて食うも、彼女の勝手なのである。彼女は詩人を畜生にしてしまおうと決心した。



いつでも彼を解放することのできる唯一人の女性が、彼のことなどすっかり忘れて、長夜の宴遊に酔い痴れている。——こういう女性こそ、私達マゾヒストの理想の女神ではないでしょうか。

尚、末尾で省略した部分では、四十年後、モーレバ侯爵夫妻がギロチンで断頭されるのを、松葉杖のデフォレジュが見物することが書かれているが、これは、史実に忠実ならんとするあまり、マゾヒズム小説としての効果を忘れたものであって、私は、訳す気がしなかった。

**附記第一。**「死刑の代りに畜生にして檻に入れる」というテーマでは、ヘッベルの「ユーディット」で、英雄ホロフェルネスが、刺客を捉えて、狼の檻に入れ、狼の代りにするよう仕込まれる条りを思い出すが、これは、ユーディットについて一項を設ける時に触れることにしよう。

**附記第二。**本誌三月号口絵の「残酷な女性画集」中、第十八番「厳しい調教」は、畜生として檻に入れられた男を画いている。檻は、広さも高さも、本文のものより大だが、獣の檻に違いなく、素裸にされている男が、畜生に見立ててあることは明らかだ。女の服装や背景の小道具からサーカスが連想される（例えば右第四番の絵を見よ）。ゴッテの「鞭うつ女達」の中には、主人公ミクロスがサーカスの熊にされる所があるが、絵の右の女性が説明できぬので、その挿絵ではない。森本氏の指示によると、「マゾの傾向ある画家の手に成る彩色画」としか原著にも説明がない由である。右の年増は女団長であろうか。左の妙齢の美人は一座の花形の女猛獣使であろう。あるいは女団長の娘かも知れない。二人は白人で、男は有色人（黒人かも知れぬ）。これから引張り出して色々な芸を仕込むというのだろう。見れば見るほど空想を湧き起させる絵である。森本氏が同号解説で支那のことを題材としたものといっておられるのは、畏友の言ながら、私には納得し

難い。

## 速報欄

**八〇 小島信夫「温泉博士」**（文学界四月号） 義理の妹アキ子を幼少時「アキさま」と呼ばされて育った男。今は母も自分も彼女の食客である。彼は事業家の辣腕を有する彼女の奴隷にされてゆく……。

**八一 安部公房「盲腸」**（右同誌） 羊の盲腸の人間移植により羊と同じ様な食物で生活できる人間を作り出し、食糧問題を解決しようという実験の第一号になった男が、実験成功後、ひとから畜生見たいな目で見られて悩む……。

**八二 「男の中の女」と「ババの育児学級」**（キング五月号）

いずれも口絵写真であるが、対照的な面白さがある。五月号速報欄号外「女のはな息」でもあげた女弁護士沢井光子嬢が巻頭に出ている。法廷に立つ男勝りの美人の姿と、その数頁あとの、赤ちやんのおむつのさせ方を学ぶ恐妻ババ族の姿。……男が女性的になり、女が男性的になる倒行逆施時代を象徴するような写真であった。

**八三 野村胡堂「笑う悪魔」**（読切小説集増刊冒険怪奇特集）手帖第四十八号で触れた「新奇談クラブ」の中の一編。人間馬テーマとして本文で扱う予定だったが、再録の機に、ここで取上げておく。幫間が裸にされ、美妓を背にして馬になって這い廻らされる場面がある。大尽は「飼糧だ」といって小判を投げる。女騎手は舞扇を鞭にして、馬の臀をピシリピシリ……。

**八四 源氏鶏太「奥様多忙」**「娼天下の素質」とか「男性虐待の図」とかいった小出しで想像される通り内容。尤も期待を掛け過ぎては失望する。「男性虐待の図」というのは、上京の夫婦の悍妻が赤帽代りに夫に全部荷物を持たせ、迎えに来た若い二人の中、男

だけがその一部を分け持たされて、女二人に随行するといった駅頭風景のこと。

**八五 佐々木邦「女性強い」** 姉の所に婿養子が来ている社長の次女が非常に嬌慢な態度で、社員の中から婿選びをする。この作者としては手なれた材料だが、微温的ながら、マゾヒズムを操られる雰囲気がある。

**八六 丹羽文雄「魚紋」**（丹羽文雄文庫十七） 宗アサ子というフアション・モデルの冷たい美しさにマゾ的な魅力を感じたので、あげておく。

**八七 川口松太郎「山を飛ぶ花笠」**（『風流剣士』所収） 令嬢が役者に対して女上位的な恋愛を仕掛ける所にマゾ的な場面がある。女が男に暴力を揮う。

**八八 アラルコン原作木下順二脚色「三角帽子」**

**八九 木下順二「赤い陣羽織」**（未来劇場No.31） 八八は新版ではないが、増刷されたので、あげておく。それを日本風に脚色したのが八九である。マーク・トウェンの「王子と乞食」などと同じく、支配者と被支配者とが服装を交換したため、人物を誤認され悶著が起きるという趣向。これは日本でも「絵姿女房」の昔話として伝っており、百姓の着物を着た殿様は本当の百姓として追出され、殿様になった百姓はそのまゝ殿様の地位に止まることになっているので、一層マゾ的倒錯感が強い。「三角帽子」の方は、あとで元の地位に戻るが、その代り奥方には頭が上らなくなってしまうので、別の面でマゾ的な味がある。岩波文庫の会田由訳の原作もおすすめしておく。

**九〇 坂口安吾「女剣士」**（『保久呂天皇』所収） 一度雑誌に出たもの。山に籠った剣道家の娘で、名剣士。弟子共をボカ／＼撲りつける。山に住むという原始生命の表現見たいな女性は、「桂馬の幻想」（小説新潮昨年十二月号）にも出て来る。男を縛りつけて

凄惨折檻を加える。

この作者の急死は文壇から惜しまれた。マゾヒストとしても、この人の作品には期待できただけに残念である。「夜耳姫と耳男」「ジロリの女」などは必読である。追悼の意を兼ねて、「ジロリの女」から二節ほど引いておこう。私がマゾヒストとして彼を惜む理由が分るであろう。

（主人公ロゴー三船は大学出の幫間で、金龍姐さんに惚れている。女王対奴隷関係にある——）

屋さがりチャブダイにもたれて雑誌かなにか読んでいるうちに、ふと私の方へ白い足を投げ出して、

「蒸したオルで足をふいてちょうだい」

イサイ承知と、さてこそ私はマゴコロこめて、毛孔ひとつおろそかにせず、なめらかに、やわらかく、拭いては程よく蒸し直し、それに心根ささげる。まさしく魂こめるのである。

夏は冷たいタオルで、膝小僧のあたりまで、ふく。私は然し劣情をこらし、そういう時には、決して狎れず、ただ忠僕の誠意のみをヒレキする。

金龍は意地の悪い女であった。そんな風に腹を立てると、ただはキゲンな直してくれず、もう冬近いころだというのに風呂桶にマンマと冷水をみたくして、私にはいれと、というのであった。そして私がふるえながら蒼ざめて水にはいるのを、ジツと見つめていて、面白くもなさそうに振向いて去るのだ。

短い引例だけでは充分説明できぬが、坂口はドミナを書くことがうまい。（太宰治はマゾヒストを書いたが、ドミナを書いていない）読者自ら就いて読まれよ。

**九一 ジョイス作伊藤整永松定訳「ユリシイズ」**上巻（新潮現代



世界文学全時第十巻) ユリシイズがマゾヒスト必読のものであることは今迄に何度も申し通り。

九二 ガーネット作滝沢敏雄訳『水夫還る』 以前に訳題を別にした袖珍本の訳本があったのを記憶している。アフリカの酋長の娘が英国水夫に連れられて英本国に来て苦勞する話。マゾ的な味のものではないが、黒人白人別ありという点から関心を惹くので、あげておく。

九三 ヘッセ作高橋健二訳『幽王』(ヘッセ著作集『夢のあと』所収) マゾ的ではないが、題材について一言したのであつた。周の幽王の妃褒姒は、金毛九尾の狐が化けていたと俗説にある妖姫、幽王を性的隷属状態に追込んで無茶をやらせた。「赫々たる宗周、褒姒之を滅す」と詩われた傾国の美人である。ヘッセがこんな材料を扱っているのは面白い。

九四 フノア作永井順訳『アトランチード』(世界大衆文学全集第六巻『アトランチード・エツフェル塔の潜水夫』所収) 速報七六「洞窟の女王」に似ているが、このヒロインであるアンチネアは、アッシヤより崇高さに劣る代りにもっと色好みで、白人の美男子を次々に誘拐しては、二ヶ月からせいぜい一年も可愛がって、飽きたらミイラにしてしまふのである。男達は、それが分つていながら、彼女の美に呪縛されたようになってしまふ……

九五 Frances Lengel, The Cernal Days of Helen Seferis (姫君の肉慾の日々) 例により啓明社版であるから、特に扱うことにする。書誌については全く知るところがない。後半が面白い。主人公は Helen を捜索している。第六章では、アラビヤ娼婦 Aisha と遊ぶが、彼女は彼の体の上に透明な液体を放出する。第七章では、警察の長 Poilu 大佐を責めて Helen の居所を云わせようとするのだが、その責めには Aisha が一役買ひ、裸の Poilu の仰向けの顔に跨って、大きな尻で押える。Poilu が彼等を火焙り

にするぞとおどすと、彼女は、その火を消すという洒落から、跨った姿勢のままで彼の顔の上に放尿する。第八章では、主人公が逆に囚えられて、裸の美女から鞭撻を受ける。第十章では驢馬との〇〇、宦官の性生活、後宮の女子同性愛などを Helen が語る。

啓明社の他の翻刻版は、詳しい検討はしていないが、大抵、単純な従って露骨な性交描写やクニリングス描写のみのようだ。ただ、Robert Desmond, An Adult's Story (大人の話) の一四八頁で、主人公 Gwen が愛人 Eddie の性的奴隷と化し、Eddie の仲間の玩具物にされて、テールで踊らされ、尿をかけられ、それを飲まされ、皆から代る尿をかけられてビショビショになる場面があるのが見当たったが、簡単な書き方で、感興は少ない。

九六 清水崑『かつば天国』第一集 週刊朝日連載の傑作。このかつばの国は大変女権が伸張しており、女尊男卑の風がある。耳と臍がなく、肉体の伸縮膨脹係数が高いが、その他は人間と余り変らぬ。背中の甲羅が唯一の服飾でモードが競われる。

九七 加藤芳郎『あほだら漫画集』 キング連載の漫画が主である。この人のものは人間の尊厳の完全な廃棄を天外の奇想のスプリングボードにしてるので、かつば天国とは違った意味でマゾ向きである。「助手のモンさん」は備われれば、どんなことでもするの、助手というより奴隷志願なのだ。猿まわしの猿になり、スパイ団の犬になり、人間の舌を馬の舌に代えて菓を食べさせる実験台になり(本号ハ一を思い出す)、化粧する女の腰掛になる。女から人間電気をかけられて征服され、彼女の電氣洗濯機になった」と洒落た作など、マゾヒストにして始めて充分に楽しめるものである。

九八 「お城の中をバカバカと」(アサヒグラフ四月二〇日号) 宮城にあるパレス乗馬倶楽部の紹介。吉田元首相を会長に会員二百六十人中女性百人、その中七十人が日本女性。誌上の写真はやはり

女性騎手が主なので楽しかった。表紙を飾った二人の令嬢の乗馬服、長靴、拍車、鞭の風爽とした姿には思わず昂奮し、その踏み開いた両脚の間に四つ這になつてはいりたい衝動を感じた。(淑かなお嬢さんであろう、然し、こちらが馬であれば、彼女は淑かでなくなるのだから。)

号外 九里洋三の漫画『女性全盛時代』(週刊タイムス四月一〇号表紙) 女の馬になる幸福を知る者は案外に多いような気がする。

号外 映画『路傍の石』(松竹) 主人公吾一が小学校時代の仲よしだったおぬひの家に卒業後奉公し、五助と命名されると共に、

令嬢おぬひは彼を丁稚として扱って、口もきかぬようになり、外出に際して履物を揃えさせ、氣に入らぬとて邪慳に辱しめる……これは原作を読んだマゾヒストには忘れられぬ印象を残す条だが、映画にも、この場面がある。

号外 高峰秀子の結婚 マゾヒストとして、通常のミーハー的興味以上の関心を、この大女優の女上位的結婚について持っているが、敢て詳説は避けておく。

## 奇クの復刊について

狩井麗作

遂に來た！ 玄關に置かれていた四角い封包を手にとって、こゝろ叫ばなかつた愛読者は一人も居ないと思う。長かつた半年の空白もう駄目だと半ばあきらめていたのに、全く何一つこわされず、以前通りの姿をして、我々の前に配達されようとは。勿論、以前に比べると表紙は色刷りでなく、カットその他が少なくて淋しい体裁になつていますが、今は、この事に文句をつけるよりも、健全な復刊をして呉れた事に限りない喜びを感じるのです。

斬新さ。恒例の連載物等。日本に前例を見ない各資料や小説、告白類が、何事もなかつたように、ぎっしり掲載されている事は、奇クの貫録を充分に示すと同時に、編集発行者の誠実な努力に、唯々頭が下がる思いでした。奇クはつづかないでしようか。とにかく採算を度外視して復刊して下さった編集者に万腔の感謝を捧げると共に、この編集子の努力を無駄にしてはならないと思うのです。

奇クは、我々読者が育てるべきです。店頭に出せず部数が減じた事をよく頭に入れ、之を出来るだけ普及するように努めねばならぬと思うのです。今迄店頭で買っていた読者は、必らず購読者にな

つてくれる人々です。我々は奇クの復刊を、そのような人々に何とかして、知らせたいと思うのです。読者から読者へ、我々はかつてのフランスレジスタンスの諸君がやったように、多くの仲間を見出し、奇クの読者層をひろめて行くことではありませんか。健全な研究誌である事。これが編集子の望みでもあり、我等の希望でもある筈です。特定の人が巨費を出して、秘密出版をするのは、個人の趣味を出でません。だから少数の会員組織で多額の会員費を負担する希望が出てくるそうですが、私は賛成しません。多くの読者を獲得し、健全発行をして行く事こそ大切で、例え初めは店頭に出せなくとも、必らずやその真価は各界に認められるでしょう。

(福岡 狩井麗作)



## 『拷問に笑う女』

辻 村 隆

「僕の身を案じての、数々の御忠告深く感謝する。」

君にいわれる迄もなしに、僕自身今の泥沼の境地から這い出そうと、幾度が努力し反省もした事か——。然しそれも遂に諦めてしまった。否、諦めたという語弊があるかも知れない。僕は今、此の奈落のどん底に蠢く生活自体に、反って大いなる喜びすら感じて、甘んじてこの儘一生を終って仕舞いたく思っているんだ。

画壇での評判の散々な事も、有識者の顰蹙を買っている事も、何もかも承知の上で、僕は総てを抛って、易々として侮蔑の鞭を満身に浴びつゝ、何時何時迄も限らない愉悦に充ちあふれた二人の生活を続けて行く事だろ

う。

でも君ならば、或いは僕のこの気持も、多分に判って貰える事と信じる。此儘僕の胸ひとつに納めて、そっと抱き続ける気でいた僕

を進める連中の多い中であって、僕は比較的恵まれたスタートを切った。天才画家などとおだてあげるものもいたが、僕の画風が正しいに過ぎないのだ。

マチス、ピカソの異常な作風が、わけもなく世間に騒がれた頃だけに、僕の自在奔放に描き殴る絵が、一部には反って好評をうけ、描けば描く程にトントン拍子に売れた。僕も評判倒れにならぬ様、事実精魂こめて創作をつづけ、発表すれば意外に絶讃を博し二科展でも無審査に近い成績で壁間を飾った。恐らく、あの当時の熱と力で押して行けば、僕は今頃、或いは一流画家に伍して、肩を並べ得る位置にあつたかも知れない。

僕はその絶頂期に、思いきって念願の広大なアトリエを新築した。運もよく、田舎の両親が相継いで世を去ってからは、その遺産が数千万円も長男の僕の懐に転がり込んで来て最早何不自由なく婆やひとりを下働らきにおいて、創作に没頭し、氣随氣儘に日を送れる自分となった。

僕の地位と財産をねらってか、自ら身を投げ出してくるモデルや、弟子志願の女も多かったが、僕は程々に遊び、女に堪能すると、態よく追払い、うまく体をかわして、すべてに事欠かなかった。

それなのに、帝展見学の為上京したふとし

等の秘密も、君になら何故かしら、総てを打明けでもいゝと思つた。君に対する返事の遅れたのは、ついその事に迷つていた為だ。悪しからず許してくれ給え——。

何も改った告白と云う程のものではない。が、マキと二人での偽わらざる生活記録として、敢えてこゝに記して見た次第だ——。

(こんな書出して、私の中学時代の旧友、矢瀬弘から、便箋一杯に細字でギツシリつまつた、可成り部厚い便りが届いたのは、案じていた22号台風もどうやら何事もなく納まってすっかり初秋らしい日ざしのさしだした。昭和三十年の十月二日、日曜日の朝の事であつた。

終戦後一年程した頃、突如関西画壇に彗星の如く現われた新鋭画家、矢瀬弘が、矢継早やに嶄新卓抜の筆法で、シュールリアリズムの一風異つた作品を次々発表し、あれよあれ

た春の一夜のアヴァンチュールが僕の生活を根底から覆がえしてしまつたのだ。

日比谷で先輩のU氏と久闊を序し、久々の旧交を温めるべく、僕は心おきなく銀座から新宿へと数軒梯子で呑み廻り、流石にその夜は銘酩酊してしまつた様だ。関西では既にセミプロ的存在となりつつあるアルバイトサロンが、漸く東京にも進出して来たのか、新宿の開店して間もないアルサロQのネオンが僕等を吸い寄せるが如く夜空に点滅しているのを眺めると唯もうわけもなく、フラフラと千鳥足で倒れそうになり乍ら薄暗いソファに腰を落していた。

酔眼に、丁度今しがた始まつたフロアショーを漫然と眺めていた僕の意識は、流石職業は争えぬものか、妖しく踊るストリップパーにも、モデルに見立てる、ボンヤリと構図を思い浮べたりしていた。

いつか音楽はスウィングから印度風の打楽器を主にしたマンボ風のエキゾチックなものへと変つていた。長い髪の毛を綺麗に真中で分けた、黒ずくめの八頭身の女が、スポットライトを浴びて、スルスルとフロアの中心に滑る様に現われていた。

僕はこうした踊りの知識は余り深くはなかつたので、よくは分らぬが、両手を黒蛇の様に絡み合わせ、首から上が、肉体とは別の生きものの様に前後左右に揺れ動くその踊りは

よと云う間に二科展に迄突入し、その余波を駆つて一流画壇に迫りつつあつた。それがどうした事か急に影を潜め、前途を囑望されていた彼が、画壇のゴシップや噂話の種になる様な異常な私生活に没入しているとか、兎や角のよくない風評を屢々仄聞するに及んで、日頃から親交のあつた彼の身を他人事ならず氣に採んだ私は、沈潜した旧友に、再び往時の華やかな活躍をして貰いたさに、多少忠告めいた手紙を出したのだが、それに対して待てど暮せど何の音沙汰もなかった。私も身辺の雑用に追われ、忘れるともなしに彼の事を忘れていた頃、あれから一年以上もたつてひよっこり舞い込んだのが、外ならぬ前述の様な手紙であつた——。彼の便りは縷々と続いている……)

「自分で云うのも可笑しいが、綿々と飽きもせず、一向上手くもならぬ絵を描いて、精

僕如き門外漢の胸をすら掻き乱さずにはおかぬ程の、妖しさとコケティッシュを盛り上げていた。

深酔のせいか、僕の体は絶えずぐらぐらと前後に揺れていた様に覺えている。半睡半醒の眼をフト挙げると、いつの間にか黒い踊子は僕のほんの眼の前迄近附いて来ていた。黒ずくめの寒冷紗に全身を蔽い、顔面に黒いヴェールを纏つた踊子の、紗につけられたスパコンロールがライトを浴びてキラめき渡り、くねくねとねばつこくうごめく指先は深海魚の遊泳にも似てヴェールの奥から、黒水晶の様にキラリと光る瞳が、僕を凝視め乍ら、しなやかにうねる両の指先を、ねっとり僕の前首に絡ませて来たのだ。近々と僕の鼻先にきつく極端に吊り上げた眉、そして眦。赤く鮮烈な唇。白の直線を引いた形よい鼻、くびれた顎の丸み。それらの融和したドーランの顔がまじ／＼と近く、迫ってきた時、僕は思わず酔も一時にさめ、ハッと息をのみ込んで思わずソファの奥に後ずさりしていた。間もあらず女はフツとニンプの様な謎めいた微笑を残すと、するりと僕の首から指を外し、その儘の姿勢で片脚を前に出すと、ゆる／＼と背を反らして行つたのだ。

女の手は見事に床に支えられ、赤バラを刺繍した漆黒のバタフライはピッチリと締め上つて、その丘陵を見事に盛り上げ、黒タイ



ツの太腿から片脚、これ見よがしに僕の眼前でスツと上った。

脚を降すと、一歩二歩逆さに反った儘、ヨタ／＼と後退したかと思ふや、床に支えられた両手は静かにフロアから離れて両脚首を掴み、シリ／＼と尚も体を海老の様にそらせて豊から乳房の盛り上りを遺憾なく發揮させ乍ら、彼女は妖しくも己れの股から顔を覗かせてぐつと頭を上げると、僕に再び妖艶な笑みをニツと浮べた。

果然とする僕の目前で、彼女は素早く両手で脚の爪先を持ちかえすと、スツと頭を股の中に引込め、ゴトリ／＼と轍の廻る様に乳房を圧迫し、肋骨をきしませ、腹部を波打たせて、フロアの上を右に左に転がり始めた。

かねてきいていた、これがアクロバットだとはその時知った。が……、今、眼の辺りに此の世の女とも思えぬ、妖美、華麗、優雅な彼女の、人体酷使の極致を見て、僕はその上生れて初めての感激と興奮を覚えたのだ。

曲技はそれからそれへと続いた。

一本脚で佇立し、股がはり裂ける程に片脚を持ちあげて、頭のとっぺんに爪先をつけた、フロアに仰臥して両脚を屈曲させ、頭上に脚を揃えて、一廻転して立ち上ったり、パタリと臀を落して両脚を水平に横に長々と伸ばしたり、そのどれもが、アクロバチック・

ダンスが誰しもがやる曲技だと、U氏に説明され乍らも、僕は瞬間から焼けつく様な激しい思いを彼女に抱かずにはおられなかった。

酔いはすっかりさめきつていた。嶄新と奇を好む僕の面影は、早くも彼女をモデルにして、様々の妖しいポーズを描く果てしない夢に拡がり、それは激流の勢いで僕の心に浸透して、只管彼女を描いて見たい慾望にかられ出したのだ。

僕は羞かしげにこの願望をU氏に話して見た。一笑に附した彼は、媚態は、彼女達が誰しも行う、コケティッシュな儀礼の形式に過ぎぬもので、明日は又誰かに同じ動作をくり返すに過ぎないと、半ば揶揄気味に、僕のこの唐突のアイデアを諷めた。

さと。ピッタリ引締まった強靱そのものの、一分の贅肉もない肉体の均整のよき――。如何に優秀なるモデルを引っ張ってこようとも、彼女に較べればヴィナスと泥人形程の違いであつた事だろう。

例え全財産を抛うつても僕は彼女を口説き落さずにはいられない衝動にかられた。

もう僕のこの決意を遮る何ものもない。

僕はU氏と別れ、当って砕けるの覚悟で彼女に面会を申し込んだのだ。

くどくどしく、彼女を求め得た過程をこゝに書くことは省こう。要するに彼女は困惑し躊躇し、婉曲に謝絶し、言葉に窮していた。

けれどこうと思つた僕の決心は固く、百夜を遡る深草少将の熱心さと渴仰に彼女の心はいつしかに淡雪の如く、溶け始め、綿々と訴え、かき口説く僕の熱意に、彼女は遂に承諾した。その時の僕の喜びは如何許りであつたろうか。

僕は幸福の絶頂にあつた。

次々と発表した、妖美限りなきアクロバチックなポーズによる奔放な創作は、忽ち巷間に喧伝され、以前にも況して僕は名声を得て来つたあつた様だ。彼女は惜しみなく僕のよき半身として、努力を惜しまなかった。

そうだ。僕は未だ彼女の名前すら君に知らせていなかったね。随分独りよがりも甚だし。済まない――。

いた。

まして二十才と云う若さが、さして世間ずれもせず、化粧のない素顔のマキは、見違える許りに楚々として淑やかで、僕の妻として何処へだしても決して恥かしくない女だつた。マキこそは今の僕にとっては何ものにも変えがたい至宝であつた。

思わず僕の私生活を長々と書いてしまった。君も退屈したろうね。ではそろ／＼君に興味ある問題を提供しよう。

君にくらべたら、僕は別段とり立てて云う程のサチストではない。もっとも男である以上多少の嗜虐的傾向は持ち合せていたかも知れない。しかしこれは男なら誰しも多かれ少なかれ、心の中に秘めているもので、敢えて問題にする程のことでもないと思う。

にも拘わらず、僕はマキと官能遊戯にふけるうち、徐々に常識的な嗜虐感情が膨張し、拡大し、進展して行くのを覚えて、思わずハツとする事があつた。

平凡な女を妻に持てばこうした事もなかったろう。併しマキの如き特異体質の女を妻とした僕が、平静はおれと云う方が無理だと思ふ。

マキ自体は恐らく自覚してないに違いない。併し女は夜は魔性と化するものだ。巧まずして発散させるサディスティックなポーズは屢々僕を途迷いさせ、悩ませる。コケティシ

エな肉体を惜しみなく露呈し、手を縄の様にない、五体をくねらす時、僕はそこに現実の緊縛を想起させて一度なりとも試みて見たい慾望にかられるのをどう押え様もない。緊縛――。どうやら君が好んで使う言葉が出て来た様だね。

僕はマキに対して緊縛を行つた、サチストとして初夜をここに語るべくして、もっと話を早くこゝ迄運ばせる筈だつたのに、とんだ長い冒頭になつてしまつたね。

記念すべきその夜、例の如く乳当とパンティだけの姿で、ひとしきり激しい柔軟体操を終えたマキは、静かにアトリエの片隅のチェアに凭れて体を休めていた。

僕の希望で、体が硬くならぬ様、マキは結婚後もこうして、柔軟運動だけはつづけていたのだ。

ナイトガウンに着換えた僕は、優しくマキにくちづけしてその労をねぎらつてやつた。

僕に椅子を奨めたマキはピョンと一つ跳躍すると、軽く二三度とんぼ返りを打ち、続いてグーッと背を反らせた。両手がフロアにつき、反り返つたその儘の姿でヨタ／＼と僕に近づき、徐々に両手をはなして向き上つて行つたが、僕の唇を下から撫で上げる様にして接吻を返すと、クルリと向きを変え、軽く跳躍したと思うと一瞬音もなくマキの両脚は僕の首に絡んでダラリと垂れ下つていた。強靱

牧由起子と云うんだ――。僕は始め苗字を呼んで牧さん／＼といつていた。それがいつしか呼名となつてマキと呼ぶ様になつた。

僕等仲間でも、全部と云つてよい程マキを苗字でなく名前だと思つてゐる――。

でも呼名なんかどうでもいいじゃないか――。彼女を求めて呼び馴れたマキが、由起子よりどれ程呼び易いかもしれやしない。

牧由起子は消えて、マキが誕生し、彼女自身、マキを自分の名前だと思ふ様になつてゐるのだ。僕がマキに畢生の情熱を傾けて、凡ゆる肢態を彩管にのせたのは周知の事実として、仲間も世間もマキを僕の妻だと思つてゐたらしい。大阪へ連れ帰つて、創作に没頭していた頃はところがなんでもなかった。けれど所詮は男と女が一つの屋根の下で暮して見れば、当然の成行として行きつく処へ行きつくものだ――。

女は一旦心にこうときめたとなると弱くなるものだ。僕の愛情が単なるモデルとして終るのではないかと、何よりもそれを恐れ、身も心も僕のものとなる事の一日も早からん事を日毎夜毎秘かに願つてゐたと云うのだ。

その夜以来、僕は名実共にマキを掌中に納めた――。

過去の華やかな生活に似合わず、マキは案外無口で外出嫌いだったし、それに華美的化粧を好まず、服従心はいじらしい位徹底して



な筋肉が運動を始め、背を反らして僕の座った膝に両手を置いて力を入れる、その儘首を狭んだ両腿の間から顔を突きだして来て、ピッタリと僕の顔に顔を押しつけた。

いつもの遊戯の一コマであるけれど、その時僕はあらぬ事を考えていた。何を隠そう、マキをこんな姿の儘縛ったら、どれ程愉しからうと秘かに考えていたのだ。

数日前、何気なく書店で見た風俗雑誌の中に君の随筆「夫婦生活と緊縛の考察」なる短文を発見し、興味深く読んだからに外ならない。僕等も夫婦である以上、愛情の緊縛はアブノーマルに非ずと云う、君の一文によって意を強くし、どうしても一度マキに試してみたいと思っていたのだ。

だから、僕がマキを緊縛し始めた動機と云うのは正に辻村君、そも／＼君にあるのだよ。

僕はこの愛する妻に、何としてこの件を切り出そうかと散々迷っていた。この種の緊縛が決して憎悪からではなく、激しい愛情の発露としてであることを、マキに納得させる事が如何に難事業であるかを、僕はつく／＼思い知った。気がむけば合意の上で奥さんを自在に緊縛できる。君達夫妻をこの時程羨ましく思ったことはない。

あの雑誌にも書いてあったが、成程、緊縛の最初の契機は仲々に掴めないものだ。

激しく愛すれば愛する程、激しく縛りたくなると云う君の持論も今は分る気がする。

それ程分っていない乍ら、僕は憶病なのか、妻にアブノーマルと思われるのが厭なのか、いずれにしても、斯うした未知の分野に馴染んでいなかっただけに、マキが案外たやすく承知してくれずかも知れないとは思いつつも仲々に切出し難かった。

何気なく転じた僕の眼に丁度昨日到着した画材が、梱包された儘、アトリエの入口に投げ出しているのがその時フト眼についた。

「随分あの梱包は頑丈に縛ってあるじやないか——。一寸解いておいてくれないか——」

マキはすぐ元の姿勢に帰って、云われる儘梱包を解きだした。細いが丈夫そうな細引が丁寧に結び目をつくり乍らも、再び役に立つ様、焦って剪ったりしない限り一本の長い紐になれる様結んであった。

時に歯を使い、手先に力を入れてしきりと解きにかゝっているマキの後姿に、私は今だと何気なく声をかけた「マキだったら体が柔かくて自由自在だから、若しもこんな梱包の様に縛られても、すぐ解いて見せるだろうね——」

必死で心を見すかさね様、これだけ云うのに、私は汗をかく思いだった。あでもない顔を挙げてマキは、

「さあ、私縛られたことなんかありませんか

さだった。

僕は感嘆し、驚愕し、呆然となっていた。

マキはバツと私に縋りつき、

「ねえ、ねえ……大丈夫でしょ——」

と頬をすり寄せて甘え、しなだれかゝって来た。

画

依田 精二

断頭台



革命は遂に貴人の上へも、その触手をロチン台は、今又妙齡の貴族女性の血を吸おうとしている。

ら分りませんけど——。多分……」

それは解けると云う意味だ。

「それじゃ僕が、解けるか解けないかマキに試してみようか？」

「あら、だってそんなこと……」

僕はこの機を逃がしては一大事と

「だって、万一泥棒にでも這入られた時、二人共縛られたりしちゃ、解いて貰えぬとなると困るからさ。一度試しだよ。いゝだろう」

「そう云やそうですわね。じゃ試して見ようかしら——」

「じゃあ、丁度いいや。ここに細引もあるし早速やって見るか——。きつく縛るよ。いゝね」

占めた、もう大丈夫だ。僕は胸を弾ませて梱包の紐をとり上げると、しなやかなマキの両手を後ろに廻して縛り、余った細引をパンティの上から股の間に通して前に廻し、首にかけて結んだ。別にあり合せの腰紐なんかで、かもしかの様にキユツと肉のひき締った両脚を揃えて縛って見た。

「さあ、僕の眼の前で解いて御覧——。恥かしいかい？」

「そりやあ、もう……誰だって——」

フロアに転がされたマキは、擦ぐったような笑いを僕に投げると、ぐーっと体を屈曲させ、一二度、体をふると難なく首の縄を抜いた。ついで恐るべき熟練の技は、しばらく後

「素晴らしい、実に素晴らしい。マキは関節が自由に外せたり、嵌めたり出来るんだね」「いや、そんな事仰有っちゃ。今まで隠していたのが、ばれたじやないの何だか恥かしいわ。」

この夜を契機として、僕等の遊戯の中で、新たにこの緊縛のプレイが如何に重要な役割を占める様になったことか——。そして又亢進して行った事か——。「僕は断乎として、マキが解けないと云って泣き出す迄、縛るのは止めないよ。口惜しいから——」

「えゝ、どうぞ、きつと解いて見えますから……。どうぞ御遠慮なく縛って頂戴——」

これがその夜の最後の会話だ——。

僕はこのプレイを書くのが面倒くさくなってきた。ここに日記の断片を同封しておこう。それが何よりも雄弁に物語ってくれる事だろう。これによって、僕の感情、マキの感情、その云ったものを含めて、緊縛から責めへ、そして拷問に近い行為へと進展して行った過程を赤裸々に書き綴ってあるから断読して呉れ給え。僕の日記が何にもまして二人の生活を如実に語ってくれるものと思う。

日記は、緊縛やそれに伴うもの、又官能遊戯の責めに近いものだけを特に抜萃しておいた。

乱筆で読み辛いかもしれないが、暫くは我慢して最後まで読んでくれ給え。(つづく)



# 敵前上陸 責め 三 根 耕 二

郷愁に駆られている内に冬が駆足でやってきました。赤煉瓦の高塀の向うに見えている丘や雑木林や畑のみどり色も、日増に寒々としたうらぶれた風景に変化して、それを見るだけで私共の身も心も凍み勝たぬのでした。

生神様逃走事件（既載）が起きてからの所内の空気はトゲトゲしいもので、僅かの反則行為でも苛立っている看守に見えされると忽ち容赦なく烈しい鞭に見舞われるのです。戦々競々として私共は少年らしい気分から遠ざけられたような生活でした。十二月中旬を過ぎるともうこの姫路では厳しい寒さです。古参の少年達から聞かされた「刑務所で一番辛いのは冬さ」と云うその冬が私の目の前に立塞ってきたのです。屋根の上に大地を白く凍てつかせた霜の朝のカンカン踊りは今迄と違った意味でも辛い行事となりました。少年達の淫らな視線を全身に浴びる精神的の苦しみに

加えて、隙間から吹入る身を刺す冷い風に鳥肌を立てる肉体的の辛さ。しかも意地の悪い看守は検査室のすべての窓を明け放って、寒風をたっぷりと満喫させてくれるのでした。

私があの未決監で初めて木刀の痛さを知り、鉄砲責の苦しさに泣いてから、この姫路少年刑務所の一受刑者としての半年の生活は、もっと恐ろしい地獄の存在をまだ十分に知らされていなかったのです。四舎の一月の生活では野村看守のサディズムを満足させ、私は冷い廊下を皮バンドや青竹や竹の鞭の洗礼を受けて転げまわり、工場では「蛤ひろい」で苦痛と曝し物の屈辱を味ったのです。しかもそれだけの運命でなく、ナオスケとして少年達の肉欲の対象としての苦難の道がありました。一つ一つ苦難を越えるともう次の苦難が待構えている生活、その一つを私は語りたいと思います。

私と同じ日に四舎から工場に一緒に下りた東京生れの小野寺少年、彼が幸運にも医務に抜擢されて、病舎の看病夫に転じたのは私に取ってとても淋しいことでした。少年囚達の羨望の的である仕事は、独歩（看守がつかず一人で所内を歩けるメッセンジャーボーイ）教務の図書夫（官本の貸出し整理）医務の看病夫（看護婦のようなもの）の三つが主なもの。此のポストを務める事は三分の一で釈放される最短コースと云って間違いありません。彼の嬉しそうな顔を見ると取り残されたようにさえ感じる私でした。病舎に行っても小野寺はいろいろの方法で、私のもとへ貴重な品を危険を冒して届けてくれました。

或る時は砂糖を、或る時は鉛筆を届けてくれるのです。刑務所内の学校へ行った時に誰かにことづけて届けるのです。私と小野寺は学年が違うので危険な他人の手を通じての交渉

でした。

結局はその為が発覚してしまったと云つてよい反則でした。十二月も押詰った或る日でした。その日は朝から雪もよいの寒い日でした。昼食が済んで午後の作業が開始されて間もない一時過ぎです。私は印刷作業場で一しきり製本作業に夢中でした。しばらく前に紙管工場から一等作業の印刷へ廻されて私は張り切っていました。勿論ナオスケとしての私の為に工場の幹部の少年達が印刷の技手に運動したからです。私は作業をしながら先刻午前の学習から帰った印刷工の少年から、小野寺のことづけを受取っていました。手触りから砂糖が塩らしい紙包みをまだ作業台の抽出しに入れてあるのです。早くどこかに隠さなきゃ危ないと思ひながらまだその儘にしておいたのです。担当台でチリチリと電話のベルが鳴りました。ボタ餅が受話器を取って何か緊張した面持ちで話している様子です。

「ウウン 三七〇番の吉田、ウン俺の所にいるよ。ウンそう——ハイ分りました」

その短かい電話がああ地獄の第一歩であったのです。吉田と云う少年は直ぐボタ餅に呼ばれました。私は吉田が呼ばれた事でハッと危険を感じました。吉田は今日病舎の小野寺からの品をことづけてきた少年だったからです。私は早速引き出しの紙包みを、印刷の紙を裁断する機械の下へ突込んでしまいまし

た。不安を抑えて仕事を続けている私の気持ちにお構いなく事実はぐんぐん進展しているのです。吉田は担当台の前でボタ餅から何か訊かれていきます。見ていると吉田の顔色は蒼白に変わってゆきます。担当台から激しい喚声が飛びパチッと云う音がします。吉田の答弁に腹を立てたボタ餅のゴムバンドの振り下ろされた音です。すぐ戒護の若い看守が吉田を連れにやってきました。戒護課の呼出しと云う事は私共の一番恐ろしい事なのです。吉田は連れて行かれる時にチラッと私に眼で合図をして行きました。担当台の後の黒板に「三七〇番戒護取調」と書かれて不気味に私の心をどきつかせるのです。到頭その日、吉田は工場に帰ってきました。もう明らかに反則者として四舎の独房に収容されたに違いありません。そしていまに私の呼出しがないのは彼が総てを明らかにしていないからです。しかし、彼が自白するまで戒護の取調官のひどい拷問の手はゆるむ筈はありません。もう私の身に追究の手の伸びるのは確実なのです。私は白川や文にその事を打明けて相談しました。また私の作業場にある反則品をすべて処分して終ったのです。戒護に身柄が渡ると居室や作業場の捜検が行われ他の少年らに迷惑を及ぼすのを恐れたからのことでした。

翌日、午前九時頃に遂に呼出がきました。戒護課の若い看守が工場へ入ってきたのを見て私は覚悟を決めました。ボタ餅から名を呼ばれて担当台の前に立った時には私はもうやけくそな気持ちでさえあったのです。若い看守に連れられて戒護課までの道はとても長いようでもあり短かい気もするのです。でも工場を出る時に文や白川や工場の幹部達が私に目配せをして励まして呉れたのが心強い思いでした。工場だけの反則なら幹部少年らの取りなしで簡単にすむ事も、一旦戒護課の手に移ると一寸易々とは行かないのです。戒護の若い看守は「おい、お前は余り痛められん内に早く謝って許して貰えよ」と私に忠告して呉れるのです。年少の私が戒護の地獄の拷問に耐えられるかと思つての忠告なのでしょう。戒護課へ行くと私は取調室へ入れられて窓の前に立たされました。窓の外は一本の大きい柳の木、そして余り大きくない池、その周囲は芝生と雑木です。冷い日で池には氷が張りつめています。じっと立っているとコンクリートの床から足へ冷たさが這上ってくるのです。私はその冷たさとこれからの私の運命を考えてガタガタと胸震いを禁じ得ないのでした。私はそんな中でも取調べに対する答弁を色々と考えました。吉田が引張られた以上は小野寺からの品物の事に違いありません。私はどんな事があっても小野寺少年の名は出すまいと心に誓いました。彼に迷惑をかけてはならないのです。そしてこれは少年囚として



の悲しい意地でもあったのです。私は工場で居房で先輩の少年達から、戒護課での惨酷な拷問やリンチの恐ろしさを聞かされていました。もう私はその恐ろしい運命から逃れる事は出来ないでしょう。泣こうが叫ぼうが謝ろうが所詮は蜘蛛に捕えられた虫と同様でしょう。私はもう度胸を据えているより仕方がない事を覚ったのです。

十五分も待ったでしょうか、調べ室のドアが押し開かれて戒護の部長が入ってきました。私は軍隊式の拳手の礼をしました。所内で先生（看守や技手）には必ず敬礼をしろと平素から教練で教え込まれているからです。部長は三十二、三の若手の人です。私は此の温厚そうな部長の取調べなら一寸ホッとしました。部長と私の間はカウンターの机で遮ぎられているのです。私はその机の前に直立不動の姿勢で立たされました。入口の扉が開いて看守が一人入ってくると私の両手に手錠を掛けてしまいます。取調べ中に反抗をされないように自由を奪って置くつもりでしょう。

その看守は私の後に椅子に腰を下ろして待機します。私に対しての拷問係であるのかも知れません。部長は私の今日迄の経歴を調べるといよいよ核心の問題に触れてきました。「お前の反則は皆分っているんだから正直に云ってしまうんだ、いいか」

してから「おいお前はこゝで白が切り通せると思っているのか」と低い声で云うのです。「部長ツこいつ水でも喰わしてやんなさい」横を向くと部長にそう命じて立上りました。部長は看守に目配せをして、課長と一緒に外に出てゆきます。付いていた看守の手が私の肩をグイと押しました「オイ出るんだツ」私は取調室の外に連出されました。戒護課長は柳の木の下に立って部長の準備を見ています。部長が看守休憩所の方に小走りに駆けていき五人程の看守を連れて戻ってきました。その間中は後手錠のまゝ吹き曝しの寒風の中に立たされているのです。人数がそろうと私は池のふちに連れで行かれました。私の後手錠は外され、捕縄で後手に縛り上げられ腰にも縄が廻されます。そして一人の看守は素早く縄の紐を解いて文字通りの丸裸にしてしまいました。もう身についているのは手首と腰の白っぽい捕縄だけ、身を刺すような寒風と看守達の視線の前に、青白い少年の肉体が慄え、そして妖しく盛上ってさえるのです。部長は私の前に立つと「おい三根、今のうちにすつかり白状してしまえ、そうしたら課長さんに謝ってやるぞ、どうだ」最後の説得を試みるのです、私もこれから行われる拷問はいやで、恐いのです。しかし私は小野寺の名を出す事は出来ません。私は安易の道より苦難への道をいさぎよく選ぶことにしまし

私は無言で部長の顔を睨みつけました。おいでなすったナと云うつもりで身構えしました。部長は立上ると後の戸棚をガラ／＼と開けて又席に着きます。戸棚の中は責道具がズラリと並んでいました。大きい手錠、小さい手錠、足錠、革手錠、鎮静衣（搾衣のこと）木剣、バット、竹棒、皮バンド、ゴムバンド、鎖錠、捕縄、ロープその他沢山の拘束具や責道具がいやでも目に入って、取調べを受ける者の心を威圧するのです。こうして責道具を見せる丈でも精神的拷問の一種と云えるでしょう。私は流石に此の責道具を目の前にしてサツと顔色の変るのが分りました。

「オイ三根、お前吉田から砂糖を受取ったろう、どうした」「——」私は答えません。「吉田は確かに渡したと云っている。お前は受取ったろう」「ハイ」私はそれ迄は否定出来ませんのでそう答えました。部長は私の発言は机の上の調書に書留めていました。

「お前その砂糖を誰から貰ったんだ」もううっかりした答は出来ません。私はもう無言で頑張るより仕方ありません。下手に辯解をしても調べ上手な役人に掛かるとむしろ簞蛇になってしまふでしょう。勿論部長はカンカンになって怒り出しました。私の態度で答辯しないのが分ったのでしよう、十分程執拗に訊問してから立上ると待機している看守に「君こいつを素裸にして置いてくれ」と云い付

た、私は強情に口を閉じていたのです。部長は「馬占山」の方へどうしましようかと云ったような顔を向けました。「馬占山」は冷たい笑を浮べました、その嘲けるような薄笑いの下から「一つ敵前上陸でもやらしてやれよ」と部長へ命じるのです。敵前上陸とは何をやるのでしよう！ いずれにしても私は苛酷な拷問と対決しなければならぬ運命には違いありません。私は一人の看守に突き飛ばされるようにして、池の水際に追立てられました、その看守一人を残して他の看守は池の向う岸に廻ってゆきます。池の水は凍っていました。後の看守の手には青竹が一本握られています。「オイツ敵前上陸をするんだ此の池を渡って岸に突込むんだ」看守はそう云って私の背を押します、私は彼らの考えている事が分りました、彼らは此の冷たく凍っている池の中を渡らせようと云うのです、池の深さはどれ位あるのか知りませんが、後手に縛った少年を追込もうと云うのですから四尺位迄の深さなのでしょう。私は後から押されて池のふちまで追立てられました。ハア／＼と吐く息が白く湯気のようにです、よほど固く締上げたと見えて後手の手が痺れそうでした。私は向う岸の看守達の眼をも構わずに後の看守に向って「先生もう許して下さいお願いですツ」と哀願していました、とても此の氷の中に入ってゆく事には耐えられそうにもなかつ

けて又事務室の方へ行ってしまったのです。

看守は私の手錠を外し、服を脱がせ褌一枚にしてしまおうと私の手を後ろに廻して手錠を掛けてしまいました。冷いコンクリートの上でいゝ加減慄えていた私は今度は丸裸でブル／＼と二、三度身体を慄わせて、その運命に従いました。じつと立ったまま足の先はもう氷のように冷くなっています。部長は中に入つたまま仲々出てきません。後手につけられている手錠がまるで凍りつくように感ぜられます。取調べ室の前を大勢の少年が通り過ぎよう、彼等は窓の外から裸で手錠をかけられている私を覗き込んで通り過ぎて行きました。

——オー五工の三根だぞ——どうしたんだろ——などと囁やいているのが耳に入りました。寒さの為に血の気が失せて身体が紙のようになくなってきました歯がガチ／＼と音を立てるので、私は唇を噛みました。そうして十分ほど過ぎたでしょうか、事務室へ通ずる扉が開いて部長が入ってきました、その後から入ってきたのは戒護課長でした。

「馬占山」と少年達から呼ばれる諱名の通りに大陸を暴れ廻っていた馬賊の首領のような髪のパサ／＼の大陸的の男で冷酷無惨で少年達の恐怖の的となっていたのです。馬占山は椅子に着くとジロリと私を睨めつけました。細い眼をして私の頭から足先まで眺め廻

たのです。看守は

「それなら課長さんに皆白状するか」と云うのです。私は無言でうつむきました。「さア入らんか敵前上陸に何をぐず／＼してるんだホラ行け」ぐい／＼と看守が私を押します。私は縛られた身体を左右によつてその手から逃れようとし、看守の手にした青竹がビシリと鳴って、私の剃き出しの尻に飛びました、アツと私はその灼けるような痛みを声をしました。続けて一打又一打と私の身体に真赤な痕をつけて青竹が震えます、私はそれを避けようとして自然に又池の水際へ追詰められてしまったのです。「オイツ早くせんかツ」柳の下で先程から見ている課長から叱声飛びました。看守は一しきり青竹の雨を浴せす、私はその激痛による／＼としながら遂に氷の中に追込まれてしまったのです。足の下で一センチ程の厚さに張りつめていた氷がミリ／＼と音を立て割れました。身体はそのまま氷を押し割って池の中に沈みます、その冷たさに私は思わず岸に飛上がろうとしました。と岸の上で青竹を振上げている看守の姿、止むを得ず又水の中に落ち込みます、氷が割れて私の脛にぶつかります。岸のあたりは膝ぐらいの深さです、底はぬる／＼した泥でとするとツルリと滑りそうになるのです。うっかり滑って水の中に横倒しにでもなろうなら、両手を縛られている私は起き上れそう





た。白川や文の笑顔が迎えます、丁度ボタ餅は休憩でいましてしたので、早速彼らは印刷工の事務機の廻りに集って私に色々とい

るのです。私はその日の次第を話しながら次の責苦を思つて武者振いをしたのです。次の日の拷問にも私は果して耐えられるかどうか

それは分りません。しかし私はその苦しみには耐えられないのです。その夜私は次の責苦を思つて眠れぬ一夜を過したのです。

#### 宮崎昭平画集

#### 賭けられた娘

昨日の祭の晩に、橋の上で一人歩きしていた美しい小町娘を拐ってきた二人だったが、女が滅法、別嬪ときているので、娘をめぐって争いがたえなかった。

「よし、この上はサイコロの丁半で勝負をやる、勝った者がこの娘を手に入れるんだぞ」

腰巻一つのまゝ、絞りの扱帯で後手に縛った娘を目の前に置いて、二人のやくざは目を血走らせて丁半を争うのであった。果して、可憐な小町娘は、どの男の手に落ちるだろうか。恐怖と羞恥におののきながら、賭けられた娘は自分の運命に観念の眼を閉じるのであった。

にもありません。私は不安定な自らの身体をささえるだけでも精一杯でした、水の中に入っているとその冷たさは骨身にこたえてくるのです。私は又その苦しみに耐えかねて岸へ上ろうとします、又青竹が振り下ろされて結局池の中に追込まれてしまうのです。私は結局こうしている事の不利を覚りました。それより思い切って向う岸に渡ってしまった方がこうして水中で凍えるより苦痛の時間が短いでしょう。そう決心すると私は向きを変えて踏み出したのです、ミシシと氷は音を立て、破片が脛に腿にぶつかるのです、向う岸まで三十メートル程もあるのでしょうか、私は懸命に氷の中を進みます、後から看守が大きな声で「進め、早く向うの岸に上るんだ」と叫びつづけます。池は中心に行く程深くなってきて、水はやがて太腿を濡らし、遂には氷の破片がお臍に迄打突かってくるのです、私は寒さと冷たさに顔色はもう蒼白を通り越してしまいました。と前方の岸の上からヒュツと何か飛んでくるのです。パラと又飛んできて身体をかすめて水の中に落ちました。小石を拾って看守達が水中の私に投げつけているのです。小石を避けようとして足が滑べるパシヤツと水の中にのめり込みそうになるのです。やっと身体を立直して進もうとすると又小石の雨なのです。水の飛沫が顔から胸を濡らして吹きつける北風に凍りつかん許りで

す。私は後へ引返そうとしました。すると、此方側からも又小石が飛んできます。ピシツと二の腕に石が当たります。顔を防ごうにも後手の縄ではどうにもならず俯伏せになつて避けるより仕方がないのです。私はもう夢中で頭を下げて向う岸へ突進しました。一きわ烈しく小石の集中を受けて私は池の中心に達しました。そしてグツと一歩踏み出した時に、足が深味に落ち込んだのです、アツと云う間に私の身体は首まで水中に没しました。池の中心部を円錐状に深くしてあったのです。私は思わず水を呑んでしまつて必死の思いで浅い所を見つけて逃がれたのです。もう全身びしょぬれの有様です。ホツとするいとまもなく前後から小石がパラと飛んで所嫌わずに命中します。私はもう死物狂いで岸に突き進みました。ふらふらと岸に上った私は極度の緊張と寒さでフツと失神しかけた。待ち構えていた看守らの手で私は看守休憩所の所まで運ばれて縄を解かれていました。二人の看守が乾いたタオルで私の全身を拭いて全身の摩擦を行いました。勿論あのまゝでは凍死するでしょう。私は暗紫色になった唇を震わせて眼を閉じていたのです。流石殺すことは彼らは避けねばならぬでしょう。仮死寸前に迄の冷酷な拷問、彼らの云う敵前上陸とはこのことなのでしょう。でも私はその試験に耐えぬきました、小野寺の名を私は遂

#### 本誌掲載済み『口絵』『挿絵』並に掲載洩れの『口絵』『挿絵』の原画分譲します

本誌が過去三カ年に亘って掲載した雑誌の口絵、挿絵並に、種々な事情のため掲載洩れとなった原画の中、編集部にて、保存してある分を、好事家の方々に分譲いたします。

◎内容価格一覧表は切手十円にてお送りいたします。

堺市菅原通四丁

曙書房編集部宛

に一言も洩らさず此の苦しみを甘受したのです。私は乾布摩擦でやっと生気を取戻して服を着せられました、そうしてその日はどうしてか工場へ帰されたのです。しかし此の反則事件はまだ解決してはいないので、又翌日も呼出されて調べられるのは確実でした。私は部長に連れられて工場へ戻りまし



## 懸賞告白 お灸と腰巻

永 長 治

本誌四月号の「婦人のお灸十態」を、興味深く読みました。美しい婦人が、純白の肌に灸をすえられている光景は、想像しただけでも、胸がわくわくしますが、なかなかかかる光景に接することは出来ません。しかしながら「虎穴に入らずば虎児を得ず」のたとえの通り、自分も背中中に熱いお灸を、すえてもらう覚悟さえあれば、かかる機会に接することにも多くなります。私自身男でありながら、お灸と腰巻が異常に好きで、以下その想い出を綴って見たいと思います。私は明治の末、大阪で生まれました。私の母は、私の口から云うのも変ですが、非常な美人で、且つ、専門学校程度の教養もありました。その血の一部をうけついで私も、小さい時、女中に、「坊ちゃんに男には惜しい」とよく云われましたが女性的な、柔弱な少年でした。そしてきれいに化粧をして、きれいな着物を着、赤い腰巻をはける女が、うらやましくしてしうがありませんでした。この婦人に対する憧れが、フエティズムに変形したものと思われれます。私の小さい頃は、小学校の学童も大部分は着

物で、英語で幼いことを「インペチコッツ」といいますが、私達も小学校へ行く迄は、男も女も腰巻をさせられました。小学校へ入ると、友達から、ひやかされるので、だんだんはかなくなりしました。一年生の最初の身体検査の時、私は着物の下に、何もはいていませんでしたが、受持の女の先生が、「おこしもしないの。」と半ばあきれたように云いました。どうやって身体検査をうけたかはつきり覚えていません。三年生の頃、お腹をこわして、学校を休みましたが、その時、母親が自分の赤い腰巻を、はかせてくれました。それが内心うれしくてたまりませんでした。それが、そのまま医者へ、つれて行こうとしましたので、「恥かしいからとって」といって、とって貰いました。

女性的な生徒が、「おこしや」といって、その布を腰に巻きました。中にはすでに、筋骨逞しい生徒もいましたが、皆様に白い腰巻をさせられて、身体検査をうける光景は、まさに珍光景ともいうべきものでした。それ以来、毎年、身体検査の季節になると、ひそかに雨天体操場へ行って、その白い布をながめました。

中学二年生の時、懐しい母親は家庭の不和のため、東京へ行ってしまいました。私は学校から帰ると、着物に着かえて勉強するのですが着物の下には、パンツだけしかはいていません。冬、冬の早朝に腰かけて勉強すると、寒くてしょうがありません。腰巻をはいたらどんなによいだろうと思いつつも、相談する相手もなく、ありあわせの小さい毛布を巻いて勉強していましたが、若い女中が感付いたのか、物を探するような風をして、下からのぞきこむには閉口しました。

中学校を卒えた年、山陰の某高等学校と、北大の予科の試験を受けましたが、東京で北海道出身の若い婦人と知合になり、北海道の

絵葉書を沢山貰って、北海道の雄大な風景に憧れを抱くようになりました。そしてその婦人が北海道へ帰る時、上野の駅迄見送りに行きました。しかし運命は皮肉なもので、北大予科は不合格でしたので、山陰の高等学校へ行きました。高等学校へ入った時半ば強制的に剣道部へ入れられましたが、剣道の練習の時に、ある者は袴の三角の隙間から、猿又をのぞかせ、ある者は足だけをのぞかせて練習に励んでいましたが、あの袴の下に柔かいネルを巻いて、袴のすきから真白い布をのぞかせたらどんなにいいだろう等と考えるような柔弱な私の事から、剣道部は長続きしませんでした。又男ばかりの殺風景な寮生活の事です。町へ出ると、呉服屋の店頭につきみ重ねられた。赤や、ピンクや、白のネルの反物や、町を歩く若い婦人の裾からこぼれ出る赤い色が、むやみに眼に入ってきた。二年生の終りの頃、三年の寮生の送別の為、劇をやる事になりましたが、男ばかりで劇をするのですから女形も必要になってきます。私も柔弱な点を買われてか、女形の方にされてしまいました。内気な私だけでは、どうしても着物を借りてこれないので、二、三口の達者な悪友と共に町へ行き、時々行った事のあるカフェで、女給から着物を借りました。そして「おこしをしないと気分が出ないから」といって赤い腰巻まで借りました。劇

も無事に終り、記念写真も写しましたが、次の劇に間にあわないというので、かつらを持って行ってしまったので、坊主頭で女の衣裳を着た妙な写真が出来上りました。高等学校を卒えて、京都の大学へと進みましたが、中京区にある叔父の家から学校へ通いました。叔父は勤め人ですが、叔母が洋服店をしていましたので、人の出入りが多く、勉強の為にはあまりよい環境ではありませんでした。大学へ入る迄はと辛抱していた元服も、祇園ですませ、婦人に対する見方も大分変わって来ましたが、肉体的には最盛期にありながら、結婚迄まだ数年間待たなければならぬ淋しさが腰巻に対する思慕を深めました。私と十歳しか違わぬ若い叔母には、割合に気楽に話が出来ますので、叔母に頼んで毛糸の腰巻を買って貰いました。はじめてはく毛の腰巻は、中背の私にも足袋との間に隙間があかない位長く、かつ適当な弾力があつて、はき心地はまさに万点で、坐った時の坐り心地も今迄にない快いものでした。銭湯に行く時も、腰巻をしたままで行きましたが、この腰巻は着脱が極めて簡単で、ただ足を二本入れて紐をしめればよく、脱衣箱の方を向いて、脱いだりはいたりすれば、殆んど人に気付かれることもありませんでした。又中京の商店の主人は殆んどといってよい位、腰巻をしていましたから、男湯の客の半分位は腰巻党で、女湯の

客も通算すると、七割位迄は腰巻党という事になり、大いに意を強くしました。又夏の暑い時、着物を透して、二本の足が見えるのが嫌で、これも叔母に頼んで、白い不二絹で腰巻を作ってもらいましたが、暑い時の絹の感触は、たとえようもなく快く、又黒いうすものから、白い腰巻がすけて見えるのが、たまたまなく好きでした。お灸の味を覚えたのもこの頃で、小学生の頃、何かの雑誌で、三河の百姓の万平が、三里の灸をかかす、すえて二百四十何才かの長寿を保った話をよみ、将来いつか実行したく思いましたが、そのままだでいて、十数年経って何かの機会にそれを出し、早速実行にかかるとになりました。お灸の本を買い求め、腰巻をめぐって足を出し、墨でしるしをつけて灸をおきました。線香で火をつけると、艾はもえ出し、やがて次第に熱くなり、遂には刺すような熱さが続きましたが、じつと耐えていると、休全体がポツと温かくなったような気がしました。背中のお灸も、試みて見たく思いましたが、背中に灸痕をこしえることは、まだ色々と差支えがありますので、将来のたのしみに残しておく事にしました。学校を出て無事某大会社に就職し、結婚しましたが、その後、あの長い嫌な戦争がつづき女でも妊産婦以外は、ネルの買えないような状態が続きました。やがて長い戦争も終り、終戦後の苦しい時代が



続きましたが、二、三年もすると、昔懐しい毛糸の腰巻が店頭にあられはじめました。最初の年は経済的の關係から空しく見送り、次の年、M百貨店で手に入れました。十年振りではなく毛糸の腰巻は、やはり昔のままの状態で私を喜ばせてくれました。そしてその晩は殆んど眠れぬ位でした。その後ある雑誌に和服の正式の着付の時は、パンティやズロースをはいてはいけなく書いてありましたので、これを早速私の場合に適用しました。やわ肌にも似た、柔かいネルの感触が、何のさへぎるものもなく腰から下をおおい、更に毛糸の腰巻を重ねると、適当な圧力も加わってその心地よさはたとえようありません。はじめのうち、立っている時、何か腰のあたりがたよりないような寒気のような気がしました。が、なれてくると便利な事もこの上なく、正月のように休みがつづくときには、一度腰巻をしめると、風呂へ入る時以外は、ぬがずに総べての用が足せます。しかし着物を脱ぐときは、今度は腰巻が一番先きにぬぎましたが今度は一番後に脱がないと、シヤツだけで下に何もつけていない不細工な恰好となります。また着る時は逆に一番先きに腰巻をする必要があります。従って銭湯の場合は、衆人環視の中で、腰巻をぬいだり、はいたりしなければなりませんので、近所の銭湯をさけて態々遠く迄出かけました。そして番台に女の

人が坐っている時は、何だか気も楽で、なるべくその近くで腰巻をしめ、何か腰巻について話しかけて見たいような気がしましたが、気が弱くて話しかけることが出来ませんでした。又婦人と同じ腰巻をしめる以上は、婦人のよい点だけを真似て、次の三つの事を実行したいと思ひました。それは禁酒、禁煙、及び絶対に膝を崩さないことで、婦人のように小さい時から、そのように育って来た場合にはさほど苦痛でもないと思ひますが、男の身にとつては、この何れもが全くの難行苦行で酒の方は高等学校以来、量に於てもあまり人に負けず、かつ経済が許すならば、毎日でも飲みたい位好きでしたが、現在では、日頃は絶対といつてよい位、飲まなくなりました。しかし宴会の時まで飲まないのは人づきあいにも悪いので、かかる場合には、適度に飲むことにしています。第二番目の禁煙は、全く難事の中の難事で、煙草をやめたいと思う第一の理由は、煙草をのむときは、必らずといつてよい程、お茶をがぶがぶと飲むため、ニコチンの害と相まって胃腸を害すること、第二は、私は心臓が弱くて、血液の循環がよくないのに、煙草をのむと更にそれが悪くなるように思われること、第三は私は、体が細くて、たださえ不恰好な男の腰巻姿を、少しでもよくするため太りたいことです。まず煙草の一日

量を光一箱ときめ、それがなくなっても、その日は絶対に買わないようにしました。次いで三日間位全然煙草なしで辛抱して見ましたが、四日間位に遂に辛抱しきれなくなつて、遂に一箱買つてしまいました。現在でもかかる状態が続いていますが、これも必らずやりとげたいと思ひます。第三の絶対に膝を崩さぬこともなかなか困難で、精々二、三時間もすれば、足が痛くて辛抱しきれなくなりました。しかしこれには前に述べた血行の不良が一部原因していることを偶然発見し、血液の循環と、血液の質を少しでもよくするため、三里の灸を復活しましたら、今迄の何倍も坐つて居られるようになりました。しかしこれも禁煙が完全に実行できるようになれば、もっと実行出来るようになると思ひます。話はすこしさかのぼりますが、一昨年ある事情で、永年勤めた会社をやめ、しばらく自由となりましたが、当時胃の調子が悪く、春と秋には必らず、胃酸過多のあの不快な痛みが悩まされ、且つお茶を飲みすぎるせいか胃下垂も伴っていました。この機会を利用して、懸案の背中の灸を実行したく思ひましたが、たまたま近所の奥さんが、結婚してから長年子供が出来なかつたのに、大阪のある寺の家伝の灸を腰にすえて貰つて、子供が出来た事と胃腸病にもよく効く事を間接に聞きました。それから方々探しましたが、偶然の機

会に発見出来ました。冬の寒い日でしたのでネルと毛糸の腰巻を重ねてはき、着物を着て大阪へ出かけました。玄関で下駄を預け、人の後について、寺の一室に入りましたが、そのときの光景は、全く想像以上で、さながら地獄絵図を見るようでした。五十畳敷位の細長い部屋の中には、公園のベンチのような木の長椅子が置いてあり、その上には、細長い座蒲団が置いてありました。日曜日の事とて、大入満員で、真中の畳の上にも、座蒲団をおいて席を設け、席を占めた人々の背中からは煙がゆらゆらと、立ちのぼっています。線香のにおい、艾のにおい、皮膚の焼けるにおい、それにこれらの煙が、もうもうと室内にたてこもっています。あまりの光景に、一瞬たじろぎましたが、意を決して着物を脱ぎ腰巻だけとなつて、尼さんに背を向けて、正坐しました。尼さんは病状を聞いて、艾を紙で巻いて煙草位の太さにしたものを、四つ背中につけてくれました。多くの婦人たちがすえて貰っている腰の灸も、すえて貰いたいと思ひましたが、とっさの事でうまい口実もありませんに「腰にすえて下さい。」と云うと、寒い日とは云いながら、腰巻を二枚もしめていましたので、尼さんはさすがに察しがよく「冷えますか」と云つて腰にも大きな艾をつけてくれました。腰巻が落ちないように手でおさえ、折よく空いた椅子席に壁の方を向い

て坐りました。しばらくすると、姉につれられて来て、真中の方の席に坐つていた女学生風の女が「熱い。熱い。とつて。とつて。」と泣き声をあげました。両側から、姉と中年の婦人とが手を握つて「もうすぐだから辛抱しなさい」と云つて励ましていました。椅子席の方が空いたので「あそこに坐つて、椅子の手摺を握りましめると、ずっと楽になるから」と云つて椅子席の方へ、変りました。私の後に、線香を持った、若い女の子が来て背中の方のうちの二つに火をつけました。次第に熱さが押し寄せて来て、やがて刺すような熱さに変わりました。膝に手を置いたままではしばらくじつと耐えていますと、やがて体全体が急に温かくなつたように感じ、背中の熱さも殆んどなくなりました。私の席から少し離れた椅子席に、やや太り肉の美しい婦人が静かに本を読んでいたが、艾が肌を灼く瞬間にも、そのままの姿勢を、少しも崩れませんでした。その姿が「地獄で見た観音様」のようにも思ひました。又女の子が廻つて来て、腰の艾に火をつけました。次第に熱くなつて来て、ウーンとのけぞりたい様な、激しい熱さに変わりましたが、観音様に負けてはいけな思ひ、じつと耐えました。熱いお灸も済んで、腰巻をしめ直し、着物を着て外へ出ました。腰巻の下に二ヶ所と、背中に四ヶ所、ヒリヒリと快く痛む箇所があり、爽快

な気分は、たとえようありません。「聞いて極楽、見て地獄」と云うことがありますが今の場合は「すえて極楽、見て地獄」です。その後二、三回お灸をすえに行きましたが、胃の痛みも、ケロリと治り、もう行く必要もなくなりましたが、予防の目的も兼ねて、年に二、三回は、お灸をすえに行きたいと思ひます。これでお灸の話は終りですが、今年の腰巻の計画については、ある古い編物の本のついていた、「総ゴム編の都腰巻」を試してみたいと思ひます。既製品の腰巻は、じきに丈が短くなり、横に広がって、はき心地が悪くなりますから、少々歩きにくくても、巾を狭くして、絶対に膝を崩せないようにし、色も婦人のように、赤いものははけませんから、出来るだけそれに近い柿色位にしたいと思ひます。(終)

### ◎本誌旧号のおすゝめ◎

今後、もう二度とこのような豪華なアブノーマル文献誌が、このような形態で発行されるようなことはないと思ひます。本誌旧号をお買い洩れの方々は、どうぞ売切れにならない今の中に、是非お求め下さい。在庫月号と目次は別項に掲載してあります。売切れ後は絶対に入手出来ません。御申込みをお持ちします。



サチズム、フェチズム、天はなぜ私にこのような心理を与えたのでしょうか。自分でもいうのも変ですが、小学生時代より現在まで少くとも人よりまじめで勉強家として世間に知られている私の心の中にこのような異常な欲望がひそんでいようとは果して誰が知っているでしょう。私は今まで、この人に云えない異常心理を持てあまし、日夜悩み続けて来ました。こゝに私が「縛り」と「ズロース・腰巻」のマニアとなるまでのいきさつを拙文ながら発表致します。

私が縛りに興味を持ちはじめたのは小学校に入学する頃からであつたと思います。絵本や雑誌などで時たま見かける縛られた人（その頃は縛られていさえすれば男でも女でも區別はしなかった）の絵を見ると、普通の絵には見られない興味をおぼえたものでした。そうして、その傾向は年と共にだん／＼と強くなって行きました。小学校二、三年頃になりますと、少年読物だけでなく一般大衆雑誌ま

で読むようになりましたが、その中に人の縛られた絵があると強い興奮をおぼえました。中でも講談社の絵本に「万寿姫」というのがありました。その中に万寿姫の母が頼朝を討ち損じて捕えられ、後手に縛り上げられて頼朝の前に据えられている場面と、後手に縛られたまゝ土牢に引かれて行く後姿が、極彩色で美しく描かれていたのが強く印象に残っています。この本は戦後にも再版が出ています。で現在で手に入れることが出来ると思います。やはりその頃でありましたが、学校の読方の教科書にお寺の小僧であつた雪舟が本堂の柱にく／＼つけられるところがありました。あの時、私は母の実家へ遊びに行き、同年輩だった従妹と二人でそれを読んでいるうち、その従妹を縛って見たくなり、家人のいないのを幸い、何とか理くつをつけて納得させ、しごきで後手に縛り上げ座敷中を引き廻したことがあります。

やがて小学校を卒業し、十五六才頃になり

ますと、人を縛りたい気持は一層強くなり、縛る相手も次第に女であることを望むようになりました。しかし実際に女を縛る機会もなく、まだ晴雨氏の存在も知らなかった私は、ひまをみては自分で縛られた女の絵をかいて抑えきれない欲望をわずかながらも満たしていたのです。そのうち自分を後手に縛る方法を考え出し、自分の体に縄をかけることによつて、実際に縛られた人の姿を見出し、女を縛りたいという欲望を何とか満足させるようになりました。一方小学校時代から少しづつ、持ちはじめていたズロースに対する興味も、この頃から急に強くなりましたが、腰巻に対しては殆ど興味がなかったのです。ところが、あるとき畑で仕事をしていた若い女の人が、紺がすりの野良着の下から真赤な腰巻をのそかせているのを見てはげしい興奮を覚え、木かげからじつとその姿を見つめていたと、やがてその人は鎌を杖に股を開いたまゝこちらを向いて立上りました。股を開いているため

短い野良着の裾がめくれて、その中から真紅の腰巻が大きいのでいて、私はたゞ呆然とその場に立ちすくんでしまいました。が、モンペ姿ばかり見馴れていた私にとって、この姿は非常な刺激だったので。この時から私はズロース以上に赤い腰巻に対して強い興味を持つようになったのであります。

それから二年程たちまして、ビルマから復員した叔父夫婦が住宅難のため、私の家に同居することになりました。私は垣間見る（のぞきではない）十歳の叔母の、入浴時のズロース姿や腰巻姿に強いあこがれを感じ、ある日叔母の不在を見計らって行李にしまつてあつたズロースと赤い腰巻を取り出し、自分の猿股を脱いでズロースを穿きました。太股をキュッと締めつけるゴムの感触、ふつくらとした裾のたるみ、やがて着けかえた腰巻の赤さ、私は生れてはじめて身に着けるズロースや腰巻に、しばし我を忘れてしまったのでした。しばらくして興奮からさめると、そのズロースと腰巻を気づかれぬように元通り行李にまうと、何喰わぬ顔で叔母の帰りを待って居りました。それからというものは、叔母の不在のたびにズロースや腰巻を借用に及んでその感触を十分にたのしみました。そうしてそれだけであき足りなくなると、それらのものを身に着け、更に自ら後手に縛り上げて、縛られた女のつもりで立ったり、座ったり、

寝たり、転んだり、あらゆる姿態をとつてそれを鏡に写し、赤い腰巻の乱れや、肌に喰い込む縄目などに抑えきれない興奮を感じたのでした。叔父達が隣に家を建て、移り住んできたから、私は発見される危険を冒してその行為を続けました。

そのうちある日、所用で近所の家に行ったのですが、その家の風呂場の横に赤い腰巻のぶら下がっているのがふと目につきました。私はそれが欲しくてたまらなくなり、夜になるのを待って再びその家へ出かけ、とう／＼その腰巻を失敬して来てしまいました。悪いことをしたという気持も強くあつたのですが、始めて手に入れた女の腰巻に私は全く夢中になつてしまったのでした。それからしばらくしながら叔母の下着を借用する必要もなく、家人の目を盗みさえすればいつでも前記の遊戯に耽ることができるようになりました。この頃から外出する度に物干に干してある腰巻やズロースが目について仕方がなく歩いていても乗物に乗っていても自然物干にばかり注意が向くようになってしまったのです。戦後の洋装の普及によりズロースは至るところで見られますが腰巻はだん／＼少くなり、殊に赤い腰巻は殆ど見ることができませんでした。それだけに時たま赤い腰巻の干してあるのを見かけるとはげしく胸がときめくのです。少なくなったといってもまだ中年以

上の婦人は大体腰巻を使用しているようで、特に和服姿の秋や冬の頃には桃色や柄物などの腰巻は比較的多く見かけることができますが、私は赤と桃色以外のものには殆ど興味がありません。時折見かける赤い腰巻の魔力にひかれた私は、遠い道をかけて行って干し忘れられた物干にそつと忍び寄ったことも何度かありました。しかしこの数の少い腰巻を自分一人が集めると、それだけ世の中の婦人の赤い腰巻姿を少くする結果になると考え直した私は、それを自分で作ることにし、衣料品店から大巾の赤い富士絹を買って来て縫上げたこともありました。ズロースも店から恥しいのを我慢して妹のものとか何とか弁解しながら買集めました。洋裁の本を見ながら自分で縫つたものも二、三あります。

腰巻やズロースに対する私の興味は、その型や色にありますので殊更汚れたものや色のさめたものは歓迎せず、むしろ新しいものが好きなのです。私はこうして手に入れた腰巻やズロースを使用してアブブレイをたのしむばかりでなく時にはそれを身に着けたまゝその上に服を着て仕事をしたり外出したり致しました。特にズロースは一寸注意しさえすれば他人に気付かれるようなことはありませんので、それだけに身に着けたまゝのことが多いのです。いつだったか、友人に無理に誘われて特殊飲食店に登楼したのですが、私はズ



ロースを穿いたまゝであることに気付き、とうとうそのまゝ帰って来たこともありました。

さて、こゝで再び話を縛りの方へ戻しましょう。叔母の下着を身に付けて自分を後手に縛って、縛られた女の幻想に耽っていたことは前に述べましたが、やはりその頃近くのF市に行ったときふと立寄った古本屋で、「刑罪珍書集」なる本を発見しました。この本には徳川時代の縄のかけ方の図解をはじめ、刑罰や拷問の方法が詳述してあり、当時まだこの種の文献を全然持たなかった私は早速これを買求めて帰ったのでした。それからはこのような本がまだ他にあるかも知れぬと希望を抱いて、私はF市へ出る度に古本屋を片端から探し歩き始めました。こうして縛りに関係のありそうな本を調べては気に入ったものは手当たり次第に買集めたのです。この古本屋漁りに依ってはからずも「責め」の大家伊藤晴雨氏の存在を知り、早速同氏のところからその著書や写真、絵などを取寄せ、始めて見るそれ等のものに息も詰る程の興奮を感じたのでした。その上、女を縛ることに異常な興味を持つ人が自分の他にもあることを知って大いに心を強くしたのです。それからしばらくは同氏のもとから責めの本や写真の分譲を受けて居りましたが、新味がないためにやがて飽いてしまいました。

その後、ある雑誌社の縛り写真も蒐めていましたが、こゝはいつの間にか消えてなくなりましたのですっかりして何か他に同傾向のものがありはしないかと物色しているとき、見出したのがこの奇譚クラブであります。こうした間にも私の女を縛りたい気持はますます強くなる一方でした。しかし、実際に女を縛る機会も無く、前に記しましたように、自分を女に仕立て、縛り上げ、縛られた女の姿態を想像しながらわずかに自分を慰さめる外ありませんでした。でも一度だけ、こんなことがありました。それは昨年のものでしたがかねてから私に好意を持ってか少々うるさく思うくらい付きまとって来る女が、その夜もぜひ会いたいと友人を仲に知らせてきたのです。私は女の要求に応じて会いに行ったのですが、話しているうち、少しばかり酒を飲んでいたせいか、ふと彼女を縛り上げて見たくなり、私の胸に顔をうずめていた女の両手を後にねじ上げ、近くにあって短い荒縄の切端を拾って、手早くその手首に巻きつけて縛り上げてしまったのです。女は「なぜ私を縛るの……。」と云っただけで殆ど抵抗しませんでした。縛ったまゝその場に押し倒したところ急に手がきはじめ、脆くなっていた縄は間もなく切れてしまいました。その後何度も二人だけで会ったのですが、二度と縛る勇氣はありませんでした。あの時縄の用意さえ

あったら遠慮なく高手小手に縛り上げることができたのにと今でも残念でなりません。下手な文章でだら／＼と書いてきましたがこれが私のサジスト・フエチリストとしての生立ちの記とも云うべきものです。これで私の傾向は大体お分りになったと思いますが、いまだし現在の私に就いて述べさせて頂きたいと思っています。

現在でも、私はさきに述べましたような、女を縛ること、赤い腰巻、ズロースに対する関心は強くなりこそすれ弱くなることはなく日夜悩み続けて居るのであります。そして望みが叶えられないまゝに、自分の体に赤い腰巻又はズロースを着けて縛り上げることを続けて居るのです。今では自分を縛る方法も十数種考案し、又自分を後手に縛ったまゝ宙吊りすることもおぼえました。ところで自分を縛ったり吊したりするのはマゾではないかと読者の方々はおっしゃるかも知れませんが前にも書きましたように、これは自分を虐待して飲ぶのではなく、自分を縛られた女に置きかえて、その姿態を想像することにより、満足を得ているのであります。もし実際に女を縛ることができたら私はそんな行為は絶対にやらないでしょう。又腰巻やズロースを現在までに相当無理をして蒐めました。これもふんだんに腰巻姿やズロース姿を見せてくれる女性が有れば必要もないのです。

さて、こゝで私の好みをまとめてみましょう。先ず縛り方ですが、これは是非とも後手に縛り上げた姿でなければなりません。手を前で縛るのや別々に縛るのはずっと興味が薄くなります。後手に縛った手首の高さは肘の高さ位が良く、腰のあたりへだりと下げたのは感心致しません。縛るものは細引が最もよく、紐類や荒縄も好きですが鎖は敬遠します。

縄のかけ方はそれ／＼の方式に従って整然とかけることが大切で、がんじがらめにするのは美感を削ぎます。かけた縄がゆるいのも縛った感じが出ません。締められるだけ締め上げる必要があります。次は姿態ですが、私は全裸よりも腰巻又はズロースを身に着けている方が好きで、それから長襦袢姿、そして着衣の順です。着衣の場合、どちらかと云えば和服の方が縛られた女の美しさを多く感じます。腰巻は断然赤いものでなければいけません。純白の晒の付いた燃え立つような真紅の腰巻こそは、私の最も求めてやまないものなのです。時にそんな腰巻が干してあるのを見かけることがあります。その時の私の気持は何と云い表してよいのか、全身の血がカーッと頭にのぼってくるようなショックを受けるのであります。その真赤な腰巻を白い肌にとった女の姿——残念ながら私はまだ実際に見る機会が恵まれて居りませんが想

像しただけでも心が昂ぶるのです。桃色の腰巻にもほんのりとやわらかい色気が感じられて好きですが、他の色のや柄ものにはいさ／＼かの興味も湧かず、赤いものでも色のあせたのはつまみません。生地は薄いものがよくちりめん、メリヤス等が好きですが厚い生地のもものはゴツ／＼した感じがして腰巻特有のデリケートな感じがなく歓迎しません。つまり腰巻はその構造の関係で一才乱暴な立居振舞をするのが割れ、裾が乱れて白い太股のぞくのですが、厚い生地のもものではこの時の微妙な感じを味うことができないのです。ズロースはフライス編のようなピツタリと肌に着くものより幾分ゆったりとしたいわゆるブルーマー型の方が好きです。特に、やわらかい太股のキュッと喰込んだゴムの感じ、そして締め付けたゴムによってできた裾のひだやたるみ、それ等の微妙な組合せが強く私の関心を煽るのです。髪型には特に好きとか嫌いとかいったものはありませんが、高島田とヘップバーン・カットとを比較した場合、どうしても高島田の方に深い親しみを感じるようです。

そこで、髪を島田に結った若い女が燃えるような緋縮緬の腰巻一枚の裸にされた上、細引で後手にきり／＼とそれこそやわらかい肌に縄が深く喰込む程強く縛られて、次第にはだけの腰巻の裾を直すこともかなわず、白い

太腿をのぞかせて苦悶している」と云うような場面が最も私の希望するところであることがわかり願えると思います。私が今日まで日夜悩み続けてきましたのは、実にその現実の姿を求めてのことであつたのです。冷静に考えて見ますと本当に馬鹿々々しい限りです。しかし、この異常に左右される私は、理解ある女性を見出せぬ限り、今後更に悩み続けねばならない事でありましょう。

長々と取とめもない事を並べたてましたが最後に一つ二つ付け加えて置きます。それはあれ程好きな腰巻やズロースも、それが汚れていると嫌悪を感じるのです。よく本誌にマゾの方がズロースの汚れた部分をなめたり噛んだりする場合が載っていますが、私はこんなことを想像するだけでも嘔吐しそうになります。あくまで清潔で、それでいてほんのりと甘い女の肌の香りを蓄えたものでなければいけないのです。

それからもう一つ、私は女を縛ることに激しい興奮を覚えるのですが、女に苦痛を与えることには反対です。私が女を縛るのは縛られた女の姿そのものを自由に奪うことによつて、いかなる恥かしい姿態でも取らせることができるというところに興味を持つからであります。もちろんえび責めや吊し責めは大きな苦痛を伴うと思いますが、私はこれを縛り方の一種として実験がしたいのです。しかしむち打ちなどには賛成できません。まして血を見るような残酷な行為は絶対反対です。



# 私にも貴女の下穿きを

——柳トシ様に——

芳野眉美

五月特大号の、「私の下穿きを」を拝見して、北海道の荒巻さんがうらやましくなりました。——それで、私もお願いしてみようと思います。

廿九年七月号真砂子さんの「コルセットマニア」は、私の好きな作品です。何故か「コルセット」とあると、ある動揺を覚えます。——私に決してコルセットマニアではありません。よくわかりませんが、これは、奇クによって、「アブノーマル・フォトセクシヨン」が発表されない以前は、多く外国文獻による資料で眼をなぐさめていたため、「コルセット」といえば「貴婦人」、という觀念が根深くつくられたせいかと思われま

特に、

「ナイロンでつくられた全く透明な全身のコルセットを穿いて、岡田と出かけました。その上へオーバーを着ただけで——」（七月号）「娘の真砂子にも、この頃は毎日、裸の上に乳当ても前当てもある海水着のようなコルセットを穿かせ、その上は何も着せず、セーラー服だけで——」（五月特大号）姉妹のような、御二方の美しい姿が彷彿して、忘れられません。美（貴）に憧れるのに人間の本能です。その奴隷になりたいのが男のマゾヒスト、そのなかで、「美しい人の尿が飲みたい」

というコブラグニスト、「汚れたパンティに顔を埋めたい」というパンティマニアも、この一校でしようか。その「貴婦人」が、「私の下穿きを」

と奇クに発表なさったのですから——「汚れとおっしゃいますが、何の汚れをお好みですか、おっしゃって下さい。尿の汚れでしたら娘の方が臭いが強く、分泌物は私の方が臭うようです。この次は何をお送りしようか」パンティマニアにとって、これほどの殺し文句はあるでしょうか。

マゾヒストとしての私は、コブラグニストとして出ました。この告白は、廿八年二月号五月号に、「硝子便所」としてくわしく書きました。コブラグニストの悩みは、特に不可解だと思われま

「いやらしい」嘔吐を感じるといので、「読者通信」などで相当手厳しく攻撃されました。仕方ありません。

廿八年四月号で、沼正三先生が私に教え下さった「ネクタールを飲む方法」や、五月号の脱脂綿を使う私の方法でも、そうたやすく飲めるものではありません。

同好の方から、編集部を通じていただいたお手紙にも、その方が熱烈な願望を持ってお

いでになるのかかわらず

「現実には飲んだことがない」

とありました。こればかりは、どうしても「直接」を望むより手がないと思われま

多くは空想の産物であり、現実はそのなまやさしいものではありません。

しかし、いくら望んでも、「便器」として使用して下さるサチストの御婦人はいらつしやらないようです。

求めるのが無理なのかもしれません。

だから——はつきりいえば、「貴女の虎子に下さい」と訴えたいのです。

ぶしつけな行動をお許し下さい。

求めても求めても得られぬ苦しさ——「燃える体の処置に、裸になって重いタンスの裏へ入り、壁とタンスにはさまれた」

この苦しさは、根本的に同じだと思ひます。これはまた奇クの愛読者全体に通じるものだと考えます。これがあつてこそ、無意識に奇クを通じて結びあい、お互に異った性癖を、充分とはいへませんが、理解するカギになっているのではないのでしょうか。

夜の街に、忘れたように乾かされてあるまっ白なパンティ——

「美しい」

と思ひました。

そう感じたからいけないのです。

ウロラグニストを理解する上に大切なのはこの感覚の相違を考えねばなりません。

とある尿の便所で膝におろされにパンティを覗いたとき

「せめて、下穿きからでも——」

「社会秩序を乱す」と心配しておられることを、私は犯しました。

——といって、「現向穿いている人から奪う」ことも、「洗濯寸前の物を盗む」ことも出来ません。そんな勇氣はないし、もっとも、ない方がよろしいでしょう。

やたらに乾かされてあるパンティが眼につきま

「ほしければあげる」といわんばかり。

「いけない、いけない」と思ひながら——

「ほし」と思ひながら、盗んだあとのことは考えていないのです。ただ、

「ほし」

それだけ。

どうにもこうにもしようがなくて、一夜中ほつつき歩いたこともありま

怖ろしいことです。

さんざん苦しんで——

「つめたい」犬の遠吠にさえ追いつてられて、露地の奥で穿いてしまったこともありま

が、一時の興奮からさめれば、がっかりします。洗ってあるのは興味がないのです。洗っても落ちない染はあります。だが、臭いがない。ガスであたためて、かすかに泣けてきます。

「さびしい」と思ひ。

「何故盗んだのだ」

夜明け前に、近くの川に捨てます。

それなのに、また——奇クに投稿するのは、発散させて気を静めるためですが、あまりいらいらしくすると書けなくなりま

中学生の頃の詩に、驚くことにこれをクラ

女が少年に布切れをくれた  
黄色く着色された布切れだった  
少年はペラ／＼舐めた



外に数篇ありましたが、これだけしか覚えていません。

やはり、「直接に」、脱いだばかりのぬくもりのさめぬものを舐めさせる貴婦人がいなければなりません。

中学生の頃と、願望は少しも違っていないようです。

ぬくもりのさめぬもの、と書きましたが、ひよんなどところで味わったことがあります。吉原などで遊びますと、よく「まわし」をとられます。あまり気持のよいものではありません。

その夜、

「なじみが来たから」

とかで、花魁行ってしまった。

しやくにさわるから夜具の中であばれていると、爪先にひっかかるものがある。

掛布団をまくってみると、足で脱いだのでしよう、まるめられたパンティが忘れられてありました。

この時ほど、「まわし」が有難かったことはありません。

そして、この花魁は派手なワンピースだったことを思い出しました。多くは着物ですから、下穿きなどはいっておりません。

ひろげると、案定ひどく汚れている。

夏だったので、両腰にあたるところが網になっている。涼しそうな、可愛いパンティで

した。まだ覚えています。

それから何をしたらか（以下略）

もらってくる「積極性」はありませんでした。

はがゆくなります。

ついでにもうひとつ――

たまに、親切な女の子に出会うことがあります。

そんなときには、思いきって、

「顔をまたいでよ」

「Hね」

と云いながら、それでも微笑んでいます。

五月特大号の「フエチ通信」に、

「パンティのままで私の顔をお尻に敷いて下さい」

私もよく、

「裸よりも」

と、それを空想しています。

これは、パンティマニアの夢でしょうか。くどくどと書きました。

「私の下穿きを」読んで、大変うれしかったのです。

廿七年十二月号に「孤独なフアンタジー」

を投稿してから奇クに何を求めていたか、何を待っていたのか、はつきり、わかったような気がします。

誇張ではありません。

貴女に最大の賛辞を捧げたいのです。

久しぶりに軽い気持になり、すら／＼書けました。

「貴方の悩みは充分に理解することが出来ません」

とおっしゃりながら、荒巻さんに提供して下さったことは、有難いことだと思えます。

なか／＼出来るものではありません。

これが機会になって、奇クに筆陣を張るサジストの女性方から、一柳様みたいな方が現れはしないかと、そんな虫のいいことを考えています。

（モデルの方々が使用したのを提供して下さいている編集部にも、ここで感謝しておきます）

私も、ただ

「汚れ」

と書いていますが、主として、

「尿の汚れ」

をさしています。

貴女のも、真砂子さんのもの、ほしいのです。

パンティも、ズロースも、メンスバンドも、ガーゼも――すべてが。

私にもお送り下さい。

お願いします。

（おわり）

## 禪 美 禮 賛

### 伊 勢 進

六尺禪の好きは縛りに通じるあの緊縛感である。股間を通して腰にぐるっと廻し、背にからけてぐっと締める。なお上に下に引締め前に余る一端を更に股間を通して背の結び目でそれと交叉、腰にたばさむ。

腰骨に喰い込み、腹がくびれる密着感を着衣しても僕の場合はすーと禪一本だけの裸身と抜き出し歩かせる。そのきつさにゆるめようと腹を凹まし、尻を前後に振る、がどこまでも離れない感触がまたたまらない。

この効果はまた歩くことに求められる。微動もしない緊縛感には更に屈伸運動に腰背が痛い迄の密着感とし、禪一本の幻想に酔いながら歩く。これが街なら食べることに酒を呑むことによって内からぎりぎり更に締め、足が棒になる迄、いや最後に期する自然に湧く快感に致る迄さよう。

郊外なら人を避け、冬はオーバーに、春秋はパーバリーに上半身の裸をかくし歩き続ける夏は川か海に全裸をさらす。

が（雪中の寒中水泳姿が脳裏を灼く）戦災にあつて失った。

多くの人は白の晒に執着するが僕は色物を揃えている。寸も七尺から一丈のものもある。緊縛感を持統する為には六尺ではゆるみ易い。勿論常時は白であるが、ひそかに求める時に黒、青、紺等を使う。

赤は水泳用に使う。この目的は又裸身に禪の刻印を打つことにある。日灼けの跡にはつきり印されるその白さは、風呂と酒の後にくつきり浮いて出る目の楽しみである。この背の刻印は苦勞なく残るが問題は腹部である。一日で咽喉迄日灼けして人に奇異の眼を見晴らしたが、一年中残したい為人を避け、炎天下無理強いにさらす。風もない熱い河原に寝ころんで時に息苦しくなることもあるが、よく耐える。反転しては、また石の熱さに全身をのけぞらせ、やがて水中に潜る。

かくの如く、水中で身体を冷やしては灼熱の陽に裸身を灼き、禪の刻印を打つ、色彩の禪を用いる又別の意味は、一つずつ、腰と腹に色の異なるものを締める緊縛感には、僕特有の感覚かもしれない。「禪美」かかる特異なテーマを載せる奇クに、数少ないマニアの一人として絶大なる感謝を捧げ、後生に残ることを祈る。



## 炉 辺 談 話

伊 志 田 治



もう大分古い話になりますが、私が病後の腰掛けに或る所に勤めていた時、サア其の頃六十余りの吉山さんという、本職は浮世絵師でしたが、隠居の身分で飲代稼ぎの自由勤めといった人が居りまして、一度若い時の画帖を見せて呉れた事がありました。其の中に若い女の縛り画のスケッチがありましたので、モデルでも使用したのかと尋ねますと、吉山さんは、こういう話をして呉れました。

「私の若い頃は、田舎で大きな風を上げる」とが競争ではやりましたので、画の修業旁々田舎町の顔役の所へ行き、頼んで風の画を描かして貰い、又祭りの時には、田舎芝居の背景、其の他何でも好まれるまゝ画を描き、終ると一パイ有り付いては金をもらい、顔役の紹介状を持って、次から次へと旅をしたものです。サア……今から思うと、画筆一本で暢気な旅をしたものです。この画も、其の時のスケッチですよ」といって、一服旨そうに吸ってから、手垢で縁のすりきれた画帖を見せるのでした。「或る時、紹介された家へ訪ね

て行くと、出て来たのががちりした中年の此の家の主らしい。紹介状を見せると、手にとつて読み、男は、今日はいよいよ誰もないのでお構いも出来ませんが、マア……どうぞと、顔に似合ぬ愛想よく、一寸そこに座って待っていてくれ、何も無いからと出て行ったので、何か茶菓でも買いにいったのかと思つて、一服吸って暫く待っていると、誰もいないといったが、どうも先程から隣の部屋に人の気配があるので、若かった私は、好奇心も手伝つてソット唐紙を細目に開けて見て驚いた。若い女が本縛りに掛けられて、床柱に括られている。女は感付いたのか、顔をあげて、こちらを向きましたが、縛られるとき大分抵抗したか、髪は乱れ口には豆絞りの猿轡をはめられている。丁度、晴雨好み其のまゝ、何事かと思つたが、その中、主人が帰つた来たので、周章で唐紙を締めると、主は一寸恐いた顔をして「見ましたネ、じや隣の部屋へ」と自分から先に入り、丸い飯台を中央に据え、其の上へ買つて来た酒、有合せの煮物をそえ「マア一杯やりましょう。それから風の画をお願いします」といったかと思うと、女の側へ行き、もう観念している女の猿轡を取り、次に手首の縄だけははずして、手を引張り、私の側に座らせ「酌しろ」という女は青白い顔をして唇をグッと結び、痺れているのか、手首をソット揉んでいる。男は「サ

(其の一)

ア一つ」といって酌をしてくれる。暫くして女も徳利を片手に酌をしてくれたが、其の手首は腫れて縄の跡が紫色にへこんでいる。水商売上りと一目で知れる細くて弱やかな手だ。男はしきりに酒を勤めるが、此の様な縄付きの女に酌をさす酒盛りなんて画描き生活していても見た事もない。何んとかして、仲直りさせようと口を出す、男はガンとして聞き入れない「かまわんで下さい。許せない女で礼明しているのですから、まさか命迄取りませんよ」とチラと女を睨むと、女はだまっていたまゝ一言もいわない。好きな酒が苦い。飲めた物ではない。ほんの一杯だけにして、食事を戴き、風の画をなぐり描きして、女を許してやると、くれぐれも頼んで、永居は無用と飛し出したが、今から思うと嘘のような事にぶつかりますよ。もうぼつ／＼仕事の時間でしよう。伊志田さん」といって眼鏡を掛ける。

(其の二)

私の近所に、小唄の師匠といつても、初めは遊び半分に近所の若い者、(皆男ばかりですが)二三人手解きしていたのが、此の頃、七八人も出入りしていました。私も遠慮のない間柄で、よく遊びに行きますが、唄は、やらない主人は、マア主人というよりおやじといった方が、ピッタリとしてゐる。私のおやじの連れでした。師匠は、三

十五といっていました。或る日、雨模様寒い日でした。私も一日休みで退屈していたので、ブラリと、師匠の家へ行くと、今日は休み日、おやじは留守「マアお炬燵へいらっしやい」私は無言で、炬燵に入り、世間話の末「姉さん」師匠の名は千代といいますが、私は姉さんと呼んでいた。「今日は一つ姉さんの変わった話を聞かせて呉れない」といふ私は、師匠の前身を知っている。永く田舎町にいた、悪くいうと水転芸者ですから何か聞き出そうとする。「サア——」といふと、お茶を入替えている。以前の自分に触れるのは、以前の主人の名が出るので躊躇している。暫くたって「治さん」治さんとは私の事、「治さんは、内緒事はいわぬ人だから、内緒にして」と念を押してから、「私が岐阜にいた頃、よく呼んで呉れる御客に、Oさんという一寸粋な人がいて、お酒を飲むと私の手を握り、黙っていると手首を捻り、引寄せてから指をなめるのです。気持が悪い事でしたが、でもお酒の上の事と思つて

いました。素面の時は、とても好い人でしたので、ひかされて、といつても奥さんの無い人ですから、二人暮らしの何不自由のない生活ですが、先ず私を、洗湯へ行かし、帰るとお酒にして、廻ってくる、れいの病気が始まるのです。二の腕を後で縛ってから、手首を片方で捻じ上げて、指をなめてから、指先を噛むのです。噛まれますと、頭の先へ針をさされた様で、あばれようとすると、ぐつと折れそうに成る迄、力を入れて、二の腕の縄に括つて、次に片方の手も同じようにして、俯向にして、両足を余つた縄で上の方へ折曲げて縛り、足の裏も同じようになめて噛むので、私は泣き出してしまふのを、足の縄をとき、前の胸を開けて………をなめたり、吸つたりするので、とう／＼我慢が出来ずに、逃げ出したが、其れでも一年余り辛抱しました。益々ひどくなるようなので別れました。変つた話の中でも、こんな事は余り聞いた事もありません」と口を結んだ。

私はまだこれ以上の事が世間の蔭で行なわれていると思う。お別れに、もう一杯熱いお茶を出されたのを飲んで、「有難う、左様なら」と帰つて来た、といつて私は、巻煙草を口にマッヂを手取る。



## 接客婦

加治信一

谷田が、その映画館に入ると同時に、上映を知らずブザーが鳴り出した。彼はつと売店に近よった。チョコレート、キャラメル、フライピンズ等の色とりどりの菓子類が、硝子張りの陳列の中で螢光燈に照らし出されていた。

「ガムを下さい」谷田はズボンのポケットに手を突っこみ、しわだらけになった何枚かの十円札をとり出した時、休憩室から出てくる見覚えのある女に眼がとまった。(おや、つぼみ……)一瞬ぎくりとした。彼女は背の高い青年と連れらしく、その男と肩を並べて歩いてくる。谷田は二人が近づいてくるのに、二、三步後退して道をあけた。別に、彼がそんなことをしなくても、彼等が通れるだけの広さは充分であった。谷田は咄嗟にとった自分の行動の意味はわからなかった。ウース・テッドのワンピースに、ハイヒールをはき、化粧も薄くしたつぼみは、至極、素人然とした恰好であった。サキソニーのダブルに、白と茶のコンビの靴をはいた、如何にもダンディーな連れの青年とは、好一對の組合わせであった。体がふれそうな近くに二人は近づいた。つぼみは、谷田の存在等意識もせず、連れが何か話すのに、クツ、クツと面白そうに笑い声

をたてて二階に通じる階段の方へと歩いて行った。

淡い香料が残った。一種の緊張した気分から開放されたように、ホッと息をついて、心に余裕をとり返した谷田は、

(つぼみの連れは、一体何者だろうか……)

と、小首をかしげるようにして二人のうしろ姿をしばらく見送っていた。

## 二

一年程前の事であった。その日、谷田は東京から大阪に来て始めて大阪の遊廓の中に足をふみ入れた。

飛田の街は、青や赤のネオンが軒並みに輝き、衣裳をこらした女達が玄関に立って、直接、お客に呼びかけていた。谷田は、その中をぶらぶらと歩いて行った。

「兄さん。兄さん。ちよいと兄さんってば。」

と、黄色い声が、右から左から振りかかった。中には、はたばたと勇敢に飛び出してきて、洋服の袖をつかんで、ぐいぐいとひっぱる女もあった。しかし谷田は、それをふりはらい、悠然と電飾に輝く中を真直ぐ歩いて行った。ある辻にきて、右に折れた。

と、少し暗い横手の入口の中で、一人の女が坐っているのが眼に

とまった。

「ちよっと」と、その女は手まねをした。

谷田は、つと足を止めた。チラッと見ただけではあるが、その整然とした容貌に、思わぬ拾い物をしたような感じで惹かれたのであった。

「あがつてよ……」と、少し甘えるようにその女は云った。

「何時だ？」谷田は、ぶっきらぼうに、その女の顔を見て云った。

彼の腕には秒を刻んでいる時計がはめられてあったのであるが……

「十時よ。ね、あがつて……」銘仙の荒い縦縞の袷に同じ物の羽織をひっかけたスラリとした体付きのその女は、媚をふくんだ瞳で云った。

「十時か、幾らだ？」そう云いながら、彼女をじつと観察した。切れの長い、すっきりした眼が、谷田を正面から見据えていた。

「そうね。税込みで千五百円ね」彼女はそう云って、ぐつと谷田の腕を抱きかかえるようにした。

「よせよ。まだあがると云ってないよ」と谷田は彼女の手をはらいのけるようにして、ゆっくりとした動作で煙草をとり出し、女を品評でもするように、再び彼女を見た。

赤い電飾に輝く額は、はり気味で、すつと通った鼻筋、紅の口許も恰好よく塗られてあった。谷田は結局、靴をぬいでしまった。

「いらつしやいませ」と丁度奥から出てきた二階まわりの女が、彼に声をかけて、「つぼみさん、お部屋の方へね」と谷田のかたわらの女に云った。谷田は相方の女がつぼみという名である事をその時知った。

「どうぞ」と、そのつぼみと呼ばれた女が、谷田の靴を持って先きに階段を上り出した。階段の途中に、コップが一つ伏せてあり、底の処へ塩が三角に盛られてあった。縁起のものだな、彼は思いながら女のあとに従った。階段を上り、廊下を右へその突き当りが彼女

の部屋であった。

六畳のその部屋は、床の間と反対側の壁に男物の寝間着と彼女のフラノのワンピースが掛けてあった。床の間には、青磁まがいの花瓶に菊が生けてあった。きゆうすや客用自分局の湯呑等丸見えになつてゐる黒塗りの茶箆が床の間に並んで置かれてあり、その横には、ガラスの灰皿や、大小の罌をのせた姫鏡台と、ジュン・アリスのポットレットがプロマイド立てにはまって置かれてある机があった。彼女はその外国映画の女優であるジュン・アリスのファンらしく、床の間の上の壁にも、四ツ切り程の大きな彼女のプロマイドが額縁にはまってかかっていた。糊のきいた真白いシャツのかかった夜具と天井に描かれてある浮世絵の色彩が、せまい部屋を華やかに、ぼつと色どり、妙にせんじように感じられた。

彼女は飛田に来て、五年もたつというのに、九州弁が残っており五尺二寸、という女としては長身の方であったが、その顔は、こじんまりとして愛らしく、とくに、その理智めいた瞳は、男を惹きつける魅力をもたえていた。そのものごし動作は、一見、荒っぽいように見えたが、そつがなく、いわゆるてばきとしていて、何処かに家庭生活に経験ある女のように思えた。それは、床の中の首尾にも現われていた。「いや、いや」と軽く拒否しながらも、いつしか、寝衣の腰紐で後手に縛られていた。

五年間の娼婦生活によって自然と会得した手練、テクニクの一つでもあるが、相手をして、決してそのような感情に走らせず、心よい満足感をあたえるのであった。

翌朝、谷田はその家かなり遅くなってから出た。何時も味あうあの灰のなめたような感情は、不思議となかった。さわやかな気持ちだった。(異性を縛りたいという性癖を、商売といながら、彼女ほど自分を満足させてくれた者が他にあったらどうか)谷田は、さっぱりした感情で、朝の廊下の中を歩いて行った。



朝の飛田は、人の往来はめずらしい位に、ひっそり静まり返っている。道路一杯にあふれるような雑踏だった昨夜のあの客や女達は一体何処に消えてしまったのか、という程であった。軒並みの家の戸は、重くとぎえている。その中を帰り客を拾おうとする自動車が警笛を鳴らしながら、ゆっくりと流して行った。

## 三

谷田は、今迄に経験したことのない素晴らしい女を見つけたように思い、それから、たびたびと彼女に通い続けた。とはいえ、彼も一週間に一度、十日にいったん、というふうな、こつたりのぼせたりするような事なく、ただの馴染客として遊んでいたに過ぎなかった。つぼみにしても、彼女の女を縛りたいという特異な要求については、素直にきいていたが、それ以外では特別に熱いところを見せる風もなかった。それでも、馴染になつてから三ヶ月もする頃になつたある日。

「私、やつと借金返えしてしまつたのよ」と云つて、一枚の公正証書を彼に見せたりした。「借金？ 今頃、やはり皆は借金をしているのか」谷田は、げげんな顔をして、見るともなく、その書類に目をやつた。

戦後、こういう処の女は、以前と違つた環境になり、そのほとんどは自前となつて働いていてと彼は聞いていた。勿論、四分六とか半々に配分するそうだが、それでも相当の収入になり、かなり貯金や故郷に仕送りしている女もいると聞いていたので、彼女のその言葉に不審がったのである。

「お店からぢやないの。この会社から……」とつぼみは、その書類を谷田の目の前につき出すようにした。谷田は、それを手にとつて見た。

「なる程。信用貯蓄会社か」彼は納得したようにうなづいた。それには朱印で「済」と大きく押されてあつたが、金四万円也とあつ

た。

「毎日、四百づつ払つていたの。それが昨日でやつと終つたのよ。これでせいせいしたわ」

「日払いってやつだね」

「ええ。百日払いの……」

「保証人一人で借してくるのだから、こんな金をたくさん他の人も借つてゐるのぢやないかな？」

「そうね。でも考えたればかばかしいわよ。先きに、ちゃんと利子を引くんだもの」

「しかし、この会社もよく考えたね。廊の中の女を得意としたのは……」谷田はそのような日掛けは、小さな小売店等によく出入りしているのは知つていたのである。

「ちがうのよ。この会社わね、廊内だけの会社よ。つまり、お店のお父さん達が集つてこんな会社を作つたのよ。だから、私達が対象人物なのよ」

「なる程」谷田は、その巧妙なからくりを驚いた。人身売買が禁止され、彼女等の大半は自前の立場であるが、彼女等に同情するような機関のようには見せているその信用組合も、一つ掘り下げて考えれば、彼女等の弱点を利用しての利殖を得る方法であると思つた。

「ところで、こんな大金、どうして借つたの」

谷田は潜索するような言葉で云つた。「いったからよ」つぼみはその書類を大事そうに、小箱にしまいながら云つた。その彼女の動作を見ていた谷田は、ふとこんな事を考えた。

彼女は馴染客とはいへ、別に何事も知らない客の自分に、公正証書等を見せたりしたのは、これは、自分一人だけに示した事ではなからう、と。このような彼女の態度は、やはり、彼女の一つの手段であり、一応の馴染客の誰にでも示しているのではなからうか。

客に好意以上の心を抱いている事を示すための彼女のジエスチャ

の一つではなからうか。

谷田は頭の中で、チラリとそんな事を考えた。

「いるのは判っているさ。しかし、どんな事に？」別に、彼女のプライヴェートにタッチする気はなかったが、好奇心にかられて云つてしまつた。

「家を借りたのよ」

「家？」

「私、いま此処に住込みぢやないのよ、通いな。週に二日は泊るけど……」

「へえ。そいつは知らなかった」谷田はさも驚いた、とばかりの表情で云つた。

「前に、私あなたに、九州から弟が上阪してきたつて話した事があつたでしょう？」

「ああ、そんな事を云つていたね」馴染となつて、まだまもない頃彼女は、弟が大阪に職を求めて上阪してきて旅館にいと聞かされた事を思い出した。

「旅館住いぢや費用がかさむばかりでしょう。それに、住込みの就職と云つてもそうたやすくはない時節だし。だから、仕方なしに、私こうして無理をして二階を借りたの。朝に帰つて、お掃除や洗濯をして、食事の用意をして、又、夕方出てくるのよ。だからお店を休まない限り、その借りた家で眠る事はないんだけど、案外、こんな生活も面白いわ。少しつかれるけど」

「それは大変だね。で、弟さん、何処かに働きに行つてゐるのか」谷田は何時のまにか、彼女の私生活の話題の中に身を入れて行つた。

「それがまだなの」

「君の事、弟さんにどう云つてあるの？」

「まさか、こんな商売をしているとは云えないから、住込みでバー

で働いてゐると云つてあるのだけど」彼女は蓋付きの湯呑みに濃い

茶を注ぎながら、少し、しんみりとした口調で云つた。しかし谷田は、彼女の話もあやしいものだ、とも思つた。弟が九州から上阪してきて、彼女と一緒に家を借りて生活していると云つてゐるが、変な男にひつかかつて、その男と暮らしながら、まだ仇かせられてゐるのではないかと……と猜疑な気持ちも湧いたのであつた。

「私には、兄が三人いたの。二人は早く亡くなり、一人は、まだシベリヤから帰つてこないの。弟はまだそんな具合だから、私が年とつた両親と妹をみてゐるわけなのよ。毎月の仕送りも大変よ」

「君はいつたい、月にどの位になるの、二万五千円位？」

「阿呆らしい。それ位で、誰が、こんな商売をしますものか」つぼみは昂然と云つた。

「へえ。ぢや、どの位？」

「そうね月平均、五万。十日勘定で一萬五千から二万位だから……」

「五万？」谷田は撫然たる面持ちになつた。

「その位になるわ。その中から、組合費を五百円づつ三回払うでしょう。それから、日に百円の衛生費、此処にいる人は、食事代を払つて、いろいろな必要費を払うと、結局、手取り四万円位ね」

「ああ、俺も女に生れればよかった。大の男が、毎日、あくせくとして一万円少しなのに」

「商売が違ふわよ」

「それなら、相当の仕送りは出来るぢやないか」

「毎月、一萬五千円づつ送つてゐるのよ」

「俺の一月分の給料か！」谷田は、ゴクリと湯呑みの茶を飲みほした。そして、今始めて見るように、部屋の中にある、まだ真新しい整理タンスや机等の家具類を見渡したが、始めてその部屋に入つてきた折になつた品物が幾つか増えていた。

「その位もうければ、こんな物も買えるわけだね」彼は、うなずく



ようにして、眼の焦点をつぼみの顔にもどしながら云った。  
 「お客さんに買ってもらったのよ。みんな」  
 「お客さん？」事もなげに云う彼女に、谷田は、おうむ返しつづやいた。

「ええ、馴染のお客さんよ。映画やお芝居に連れていってもらった折、別に、こちらが何も云ってないのに買ってくれたりする人があつた。洋服や着物も平気で買ってくれるわ。悪いと思うけど、向うが勝手に買ってくれるのだから、遠慮しない事になっているの。お金って、持っている人は持つてるものね。でもね、私、何か買ってもらったり、お小遣いを貰ったりする折、何時も思うのだけど、私等にそんな事をしないで、奥さんか、お子さんに洋服や着物でも買ってあげたら、どれだけ、その人達がよろこばれる事だろうか、と第三者の立場になって考える事もあるのよ。私等にそんなお金使うのは全くの死金よ。そりや、私だって、感謝したり、よろこんだりするけど！」谷田は世の中には、また変った人間もいるものだ、と思つた。芸者とか、ダンサー、女給に、今、彼女が云つた事をして、女の歡心をかう男のいる事は知っているが、同じ女でも、金で全く自由になり、しかも、一日に何人もの男に肌を許す接客婦等に、そんな事をする男の気が計り知れなかった。彼等は、そうする事により飛切り、特別サービスを彼女等に期待するのだろうか。谷田は急にばかばかしくなつた。

「そのような人は、何か下心あつて、そんな事をするのか。例えば、君を独占しようとか！」

「そんな事、別に、ただ、馴染としてのつきあいよ」

「すると、僕のような馴染は、君にとっては余り、とくにもならんね」

「そんな事ないわ。お客さんはお客さんよ。私に云わせれば、そんなお金を使う人は、ばかよ」

「結局、カモって奴か」

「私は、別にお客さんをだましたりしてないつもりよ。でも、男って皆、そんなのじゃないかしら。お金を持てば、バラバラと浪費しまふのじゃない？」

「僕も、一度、そんな身分になりたいね」

「ならない方が身の為よ。恋人に怒られてよ」  
 つぼみは、口を、ぐつと結んで谷田を優しくにらむようにして云つた。

「僕に、そんな人はいないよ。第一、そんな人があれば、こんな所に遊びにこないよ」

「そりやわからないわ。恋人があつても、まだ、自分の意にならな場合は、仕方なく、こんな所へくるんぢやない？」谷田の眼をのぞくようにして云う彼女に、谷田は

「どうだか、僕なら絶対、そんな事しない」と云つた。

「あやしいものだわ」と彼女は云つて、チャリと時計を見て、やおら身を起し、夜具をしき出した。夜具をしきと云つても、裾の方にまくつてあつたのをひきのばすだけであつた。

「私も、早く、こんな商売をよしたいわ」彼女は、ふつと、溜息をつくように云つた。

「そうだね、何時迄も、こんな商売もしていられまい。まあ、一刻も早く商売替をする事だね」谷田はゆつくりと腰をあげて床に近づいた。

「商売替えと云つても、こんな私に向く仕事って何もないわ」

「ぢや結婚する事だね。」

「誰もしてくれないわ」

「そりやわからないさ、人はすきずき、縁はいなもの、ってね」

「なんね？その云い方」彼女は、寝間着の紐を結びながら、チャラツと谷田を見おろして云つた。

「何も、君がこんな商売をしているから、どうのと云うのぢやないよ。要は、その人の心の問題さ。相手の過去はどうでもいい、ただ現実、そしてこれからの愛情が問題だ、という人がなきにしもあらず。君ならでは」とね」

「今頃、そんな殊勝な人が、何処にいるものですか」彼女は、はきすてるように云つて、谷田の横に滑り込んできた。

「そんな人いないかね。あるいは、世話をしよう、なんて云う人」

「全然」

「彼は？」

「毎日変わる彼氏ばかり」

「そうかな」谷田は腕組みをして眼を天井に向けた。スタンドの青い灯が美しく天井に影絵を描いていた。

「私は、自分の事はもう諦めているの。でもね、この頃、いやに子供がほしいの。赤ちやんを産みたくて仕様がなないの。子供があつたら、とつくづく思うわ。でも、誰の子かわからないのはいやね」

「今迄、妊娠した事ないのか」

「ないの、他の人は、よく掻爬したとか何とか云つてるけど」

「こういう商売を五年もしておれば、産めなくなるぢやないか」

「だからほしいのよ。私の将来は諦めきつて、何の希望もないけどでも、生きて行く上には、何か生甲斐がほしいのは本能でしょう？今のところは、故郷の両親の面倒を見なくては、と自分の身を振り返ってみようとは思はないけど、何時迄も親が生きているわけぢやなしやがて、親が亡くなつてしまつたら、こんな私自身に、何の生甲斐があると思つて……欲は云われないわ。子供一人あれば、これからの私に大きな生甲斐があると思うの」身を泥沼に沈めた女の絶望の中の一つの欲求であろう。

「女も二十五を過ぎると、いろいろ考えるわね」つぼみは、ふつと溜息をついた。

「僕はこう思うね。君が現在いるこの社会から、一刻も早く足を洗う事によって、君が現在抱えている卑下しきつた観念から脱却出来ると思う。この人、と思う人に、一つ思いきつてぶつかつて行つて身を固める事だね」

「そんな人、あんた探してくれろ？」

「冗談だろう。君自身の問題だぜ。日に、何人もの男と交渉を持つておれば、そんな男の一人や二人おりするものだ。例えば、馴染の客で、君に、何かと物を買ってくれたりする人」

「駄目よ。そんな人」つぼみは、谷田の言葉を途中から横取つて強く否定した。

「こういう社会にいる女ね、人並以上に苦勞をしてきているのとそして、自分を卑下しきつていいるから、そんな事になると、決して大きな事や多くを望んでないわ。自分に、何の価値もない事を知っているから、身分不相応な希望を抱かないわ。だから、私達、根はなかなかしつかりしているのよ。どんな苦しい生活も堪え得る力を持つていると思うわ」彼女はじつと天井の一点をみつめながら、自己弁護のような口上で云つた。

「しかし、月五万円ももうけるなら、少々の給料取りとは結婚する気もせんだろう」

「そんな事ないわ。人並の生活が出来ればいいのよ。それが、人並以下となつて、どん底になると、私達のような女は駄目になるのね。過去にそんな経験が一度でもあると、つい、また身売をしような事になりはしないかと思うの」

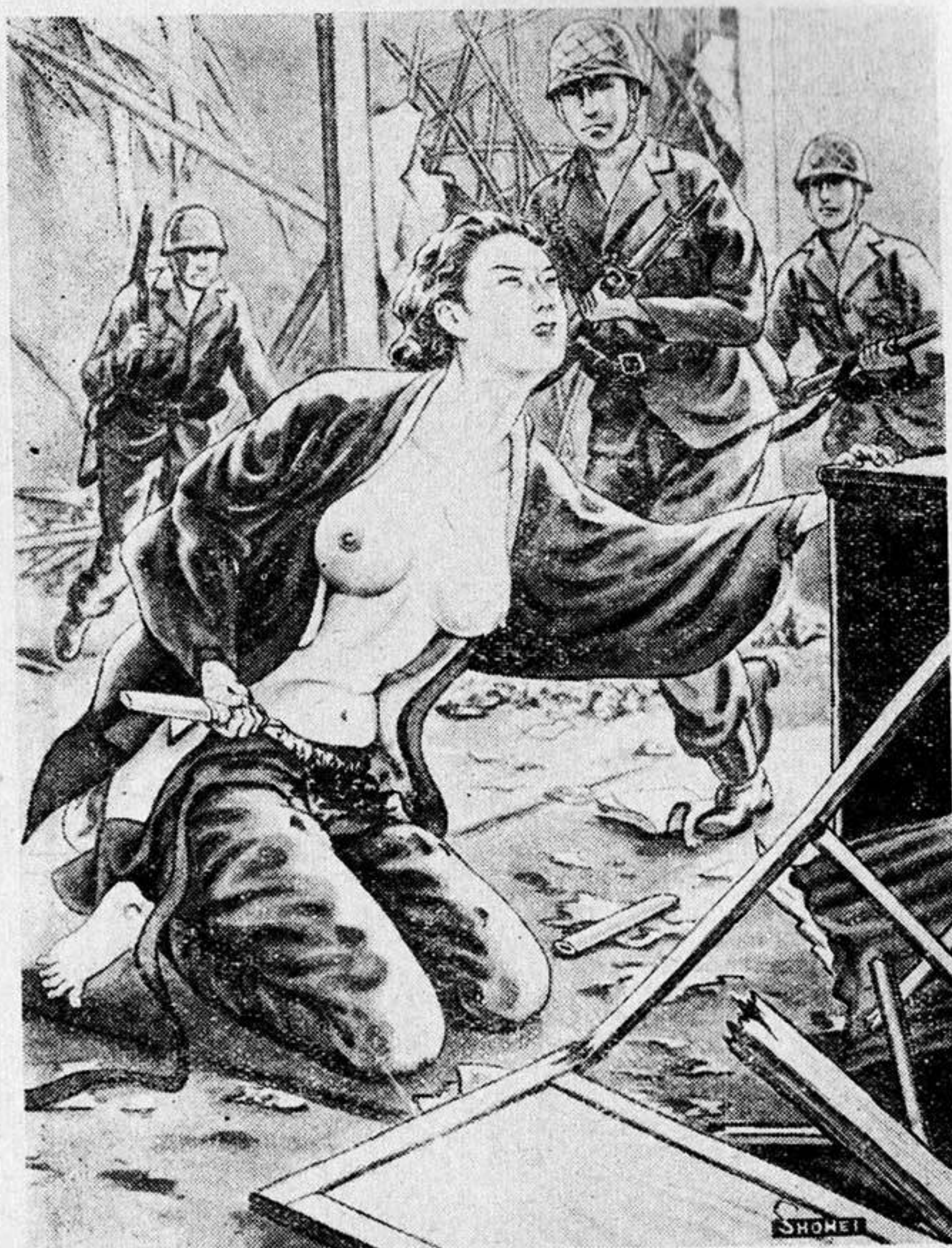
「すると、金銭的な欲望は、さしてないというのだね」

「ええ。私達はそんな方面には割に冷淡ね」

「ぢや、こんな商売をやめて、故郷にでも帰つて、苦しくても地道な職を探したら？」

「私だって、泥鰌ぢやないから、何も好き好んでこんな商売を何時





宮崎昭平画集 大和撫子の散華

いたましい敗戦の悲劇は、可憐な乙女の身にも容赦なく降りかかってきた。若い女を犠牲に求めて、敵兵は銃剣をひらめかして迫ってくる。生きて凌辱の恥しめを受けるよりはと、女ながらも大和撫子の日本女性、深く護身用の短刀の鞘を抜いた。

豊満な両の乳房もあらわに胸を下腹まで押しひろげ、ぐざりと左下腹へ突き立てた。ジーンと全身に走る激痛、今はこれまでと雪白の臍下をきり／＼と切りひらいてゆく。「ううう、うう」と苦悶に耐えながらも、清く散ってゆく乙女の誇に瞳を輝やかして、乱入してきた敵兵を睨みつけるのであった。鮮血に混って腸が灰色の肌を見せて傷口から溢れでてきた。

事はなかなうと思っていた。確かに立派な考えであった。しかし、そのような彼の観念が、彼の現実の孤独感から、一刻も早くエスケ

ープしたい、とあせりの感情から出ている事に、彼自身気づいてなかった。(以下次号へつづく)

迄もしていたくないけど、今更、故郷に帰ったって！」と急に声を細めて

「いくら口をふいて、涼しい顔をして帰っても、こんな処にいた女は、いっぺんにわかるわ。田舎の人は、そんな方には、目がさといのよ」監獄のめしを食ったみたい、自分を迎える世間の目を恐れ尻ごみをするようであった。

「世間の人って、冷たいものよ」と、ふっと息をつくようにして、「この人なら、と今迄に思わない人もなかったけど、そんな人には奥さんも子供もあつたりしてね。男なんて、口ばかりで、いい加減なものよ。普段は、こっちの御機嫌をいろいろとて置きながらいざとなると、急に、あやふやな態度になっちゃうの。本当に、世の中って、うまくいかないものよ」満更、根も葉もなさそうな事をかんで出すように云った。

「あたる相手が悪かったのだね。僕のような人間なら大丈夫なんだが！」

「あんた、それ、本気？」急に声をひそませるようにして、体の向きを変えて、目で谷田の目を追うようにして云った。

「僕の現実の境遇に君が満足するなら。僕は貧乏人だ。君が持ってきた行李の中身が、半年もたないうちに、空になってしまう事もないともいわれないが、そんなのでよかったら！」谷田は、冗談のように口許で笑いながら云っていたが、万が一、女がその気なら彼女と生活してもいい、と心の隅で思っていた。

「あんた、別に私の御機嫌をとらなくてもいいのよ。私、そんな事云われたからと云ってよるこんだり、感激したりしないから」

「つぼみは、がっかりしたように、体を又元通りにして、つと手をおぼし、スタンドの灯を消した。部屋の中は真暗になった。ドアの上にある小窓に、廊下の電気が、ぼんやりとうつつっていた。

「僕は別にそんな意味で云ったのぢやないよ。まあ、僕のような男

もいるという事を覚えておいてくれ」谷田は念を押すように云ったが、彼女は余り乗気にもならないようであった。

「私等のような、月を見た事のない女は、あんたには向かないわ」「月を見た事ない？」

「ええ。夜になって空を見上げて、せまい路地からではネオンの灯で月が見えず、朝はすっかり夜が明けきってからでないと起きないもの」彼女は、フフッと自嘲めいた笑顔を低く立てた。谷田はなる程と思った。月を全然見ないという事は、少し大げさではあるが、見る機会が少ないのは事実だろうと思った。

「こんな私でもね、結婚するとか、一緒になると、やっぱり好きな人になりたいわね」と彼女は云いながら、くると体を谷田の方に向けてきた。

「あんたが、せめて二万円位の給料取りならね」つぼみは、谷田の腕をとり、自分の頭の下にひいて云った。

「僕はごめんね。そんな料見を持つ女ならね。そりや、君の立場としては、両親の仕送り云々と考えるのだから、僕としては、そんなふうに云われると、金の力で君が動いてきた事になるからね」「うそよ、そんな事。ごめんね」とささやくように云って、そつと顔を彼の胸におしつけてきた。谷田は、急に興ざめた感情になった。なんだか、彼女にも遊ばれているように思えてきたのである。谷田は現実の自分が、異性の愛情にうえていいるとは決して思っていなかった。独り暮らしの孤独に堪えかねて、つぼみのような女でも思っていて彼女に云ったのではなかった。彼のかねてからの理念は、もし、恋愛とか結婚する相手が、たとえ、如何なる過去があるうと如何なる環境の中にいようと、そんな事は問題外であった。彼の最も欲するのは、現実の愛情であった。真実の愛情というのは、彼の考えでは自分の意のままに縛らせてくれる女であった。若しそんな相手があつたら、もし、そのような事になつても、自分は後悔する



# 殘虐な女性達

森本愛造 記

一九〇一年刊行の独文絵入単行本より  
(私は次に鞭打愛好者の故郷とも云うべき英国を訪れてみよう。)

アングロ・サクソンの婦人達の名は彼女達の残酷無残な召使達への取扱によって全体が世の中に築き上げた「優雅隠健」の気風を知るものには一瞬、奇異の念を起さしめるに充分である。併し、これから挙げる代表的な例というより典型的な実例の幾つかは、読者に前説を肯定するの止むなきに至らしめると思う。

トオマス・ライトは労働の点について、その著「中世に於ける英国人家庭の風俗」の中で触れている。即ち、彼は、英国の主婦達が自ら責道具を揮って召使や下女達を死に至らしめた実例について述べているのである。こうした野蛮な家庭内での懲戒の方法は、時代の進歩と共に、徐々に隠健な形へと移行して行ったが、一方信ずべき幾つかの報告が、現在に

至って猶、厳格な主婦が英国に存在している事を示して居る。こうした説明を論ずるに際して、私は英国の貧民学校に於ける実例をひいてみようと思う。その中には、十八世紀に至っても猶、英国の主婦達が下男下女を、生徒や子供達に対してするのと同じ方法で罰して居た事が示される。それはすでに引用された事のあるブランシス・ペノイア夫人の手記によっても明らかである。即ち日常生活について、細かな点に至るまで誠実な記録を残したこの夫人は一七六〇年一月三〇日の欄にこう記して居る。

「ハリーが昨日云った事を大層気にして、一日中焦マしている様子が見えた。私としては私の母が私にした様に二つの方法の中の一つを採る心算で居る。それは追い回してしまいか、非道く鞭を与えるかという事である。假令それが事実であったとしても、息子の短所や、百姓娘の自惚れ等が、子供達の部屋での

話題になるなどという事は許されるべきではないと思う。彼女(女中の意ならん)を追いついてしまふと、あの貧しい家ではずい分困るだろう。私は帰されるか、鞭かの何れかをあの女自身に扱はせよう。私はこう思った。きいてみると彼女は「奥様のお好きな方を掴んで下さい」と云うので、私は、翌日の午頃私の部屋に来る様に命じた。この娘の名はホッヂスというが、ホッヂスは自分と主家の息子との間の出来事が、女主人である私に知られてしまった事を覚ったらしい。彼女は恥と恐怖とで取乱してしまつて、息子のゲオルクの事をベラベラ話してしまつた。私はこの事を良人に話そうか、いや、話す訳にはいかない、そうでなくても良人はゲオルクのいけない行為に憤慨しているのだから。」

更に翌々二月二日付の手記には次の様な記述が見られる。

「二月二日。嫌な事件が起つた。私はこの日記をハリーの寝台の側で書いて居る。彼は不真面目な行為の為に懲罰をうけた。昨日の午頃、ホッヂスは云われた通りに私の部屋へ来た。先ず、良人の母親がいつも答や鞭をしまつてある戸棚から答を持ってこさせて、私の前に跪かせ、非行を詫言びて許しを請う様に命じた。ホッヂスは云われる通りにした。そこで私は型通りの方法で彼女に答を浴びせた。ホッヂスはががつりした体付きの

清潔な感じのする娘だった。どちらかというとやせている私自身の娘に対してさへも、近頃は答を与えた事がないので、娘を打った事は久しぶりだった。彼女は今迄に打たれた事がなかったもので、始めて打ち下ろされる答の苦痛に怖ろしい叫び声を上げるのだった。(この年になるまで、一度も鞭の味を知らないなんていう事は、前の女主人やこの娘の母親の顔を見てやりたい位のものだわ。)娘が余り大きな声で喚いた為か、私が未だ打ち終らない中に、私は窓の外で、低い忍び笑いをきいた。まもなく、娘のシャルロットが飛び込んで来て「あそこにハリーがいる。」といった。私が怒って、シャルロットに無断で入ってきた事を詰る前に、突然、窓の下に大きな物音と共に、何かが落ちて来た。驚いて窓の外を見ると、それは、ホッヂスの大声をきいて、当の相手のハリーが、梯子伝いに上に上って、覗いていたのが何かのはずみに落ちたのだ。彼は落ちるに事欠いて、良人が一番大事にしていた草花の真ん中に躍り込んだので、花は滅茶苦茶にされてしまつていた。ハリーは全身、血塗れになつていた。それは、その草花の上を滑つていたガラスを一緒に打ち破ったからだ。」「

同じ筆者は、二、三ヶ月経った後、詳しく云えば一七六〇年七月九日付の欄に、注目すべき記述をしている。この記載は、正しく彼女の鞭打愛好の情熱を示している。

「七月九日、彼は(著者註、夫人の婿に當る青年の事を指す。)よい贈物をしてくれた。それは、一人の黒人の青年である。最近のロンドンの流行になつて、この黒人は私の小姓になる訳である。贈主である婿の母親がザウウッド夫人は、いつも黒奴を二人連れて来て、チヨコレットをたしなみながら、鞭をふるものだもの。(以下略)」

更に同年の八月二日付の記事、

「八月二日。けたたましい笑い声で目がさめてみると、良人と息子のハリーが二人で、セザール(黒奴の名)にヤーマウス夫人の真似をさせて笑っているのだった。私は一緒になつて笑いかけてハツとした。黒奴は今、私達の国王を嘲ける様な事を云つたのだ。黒奴はヤーマウス夫人が国王に横ビンを張っている処だと説明するのだった。更に黒奴は、王が初老になつて、自分の妾の気嫌を取る場面を演り始めた。私はこういう種類の事を、この家の中で見る事は嫌いなのだ。もう我慢出来ない。私は私達の国王が黒奴に嘲笑されるのを黙って見ている訳にはゆかないのだ。ヤーマウス夫人に対して国民は不満を持っている。併しそれは私の日記に書いておくだけでも充分なのだ。何も黒人の世話になる必要はない。私はすぐ女中のディアラヴを呼んでセザールを私の部屋に呼び入れさせ、この白

人の女中の手で、黒奴を打ち捉えさせた。私は黒人が打たれるのを見たのは初めてであるが、白人の場合とは違つて、皮膚の上に、鞭の条痕が現われるのは、仲々の事であるが、この黒奴の喚き声の様子から考へて、女中の打撃は充分に厳しいものだった。女中は黒奴を打つことによつて随分腕が疲れた様だった。」

【訳者註、黒奴を鞭打の対象として飼うという高尚な趣味に対して、沼氏を始めとして、汎マゾヒストは相當の昂奮を感じると思う。女主人の鞭をうける為に飼育される有色人種という構成は確かに、実現が困難であるだけに、現在日本のマゾヒスト達にとつては、望外の夢であらう。しかし、ここに実例がある。ビルリッゲル博士の示したものは範例ではなくて、実例である。この点は、重要である。そこで私は補筆の意味で一人の白人混血の女性についての興味ある事例をお知らせしようと思う。この出来事は昨年に始まり、この東京の近くで、本日現在持続して行われている事であり、本人の「希望」は又、伝言ではなく、私自身が直接に聞いた事なのである。画集に既に慰みの為の幾点かを寄稿して貰つた。D・Q夫人がその本人であるが、彼女の本性的な希求は、三つの部門に分ける事が出来る。その第一は鞭撻の形であらわれ肉体的な加虐の本能であり、第二は言語及



び環境其の他の方法による空想的な加虐である。最後に僅少乍らウラグロニストを喜ばせる性向を持っている。第一の場合、相手の人種年令の如何を問わず、緊縛して鞭打する事自体に精神的及性的な昂奮と満足を感じるものであるが、私共に特に興味をもたしめるのは第二及第三の希求である。第一の場合彼女は対手を異性に限らず、同性でも又人間以外の動物でもよいのであつて、サディスティンとしては十分であつても、マゾヒストにとつては理想的とはいえないからである。第二の場合、その實際上の慾求は、奴婢所有及虐待、異性の動物化——単に家畜化だけではない。弱者の徹底的な弾圧という形であらわれる。彼女が之までに提供してくれた何れかは正しくこの第二の欲望の具象したものであるといえよう。幾多の実例をひいて述べなければならぬが、余りに本題から逸脱してもいけないので、鞭打すべき動物——Bestia——を彼女は求めていた。既に何匹かの雑種犬と馬の幾頭かが、彼女の鞭打のみならず、全ゆる種類の責苦の為に命を絶たれている。その彼女は、所有する数十種の鞭笞の使用の対象として、異民族の異性を求めて来たのである。敢て私は希望者を求めない。それは、如何に快樂死はあつても、刺のついた首輪をはめられて、鋭い拍車や犬鞭の責苦の中に、若し萬一の事態が発生したならば、それは直ちに

に官憲の弾圧のよき手掛りとなるからである。私とても単なる事務的な交際の域を出ない様に心掛けていた。只、肝要な事は彼女が私のCUSIN IN LAWである事である。こうして「猛獣をも馴らしつけるといった女性」とザッハール・マゾッホが憧憬を以て讃えた伯爵夫人と同質の女性が、この極東の一角にも実在している事、及びビルリッゲル博士の堆論や引例が、現代に至つてもそのまま立派に通用する事に注意していただきたいと思う次第である。」

英国の貴族の邸宇では、健康上の障害を与えない限度、与えたとしても輕微にしか与えない程度でのこうした懲罰を行うのが通例であつた。併しここに、十八世紀の後半、ロンドンの聖タンスタン教区で起つた有名な事件は、明らかに奴隷制度下の状態を想わせるものであつた。この事件に登場する主人公は有徳な教会の信者であり、鉛細工人と結婚して産婆をしていたエリザベス・ブラウンリッゲという婦人である。

最も効果的ならしめる為である。藤杖や燬炉掃除用の棒等と共に、馬追用の革鞭や乗馬鞭が屢々用いられた。彼女の住居は炭倉であつた。食事はパンと水だけであつた。僅かな時間着用に許された衣服を汚損すると即時に裸にされて縛りつけられるのであつた。連統して何日もそうして放置されるばかりか、時折の鞭打が當然の様にやつて来た。然も、加害者が草履れると息子が代つて鞭を揮うのであつた。ある日、メアリー・クリフオードは五回の鞭打をうけた上に、全裸のまま縛りつけられ、……

裁判所は是を不問に附し、隣人達もこれを當然の処遇と考え、敢て告発に至らなかつたと思われる。この事は取りも直さず「教師」の職業が如何に虐待と懲罰の權威を持ち、主人と雇用者が如何に密接に「鞭」によつて結びつけられていたかを示している。例えば同事件を契機として出版された多くの書籍の中でも処刑の年にロンドンで出版された「注目すべきミセス・ブラウンリッゲ事件」——ロンドン市民に告ぐる書——「市民の手記」という長い傍題を持った本はその本文で「ブラウンリッゲ夫人は現在正当と見做されている鞭打によつて処刑されたのではなく、悪い給養と肉体的に余りにも悪い生活条件を与えたが故に絞首された。」と述べ、この件は鞭打反対者に対する烈しい怒りと、良識を持つ者の正義観によつて熱烈に語られている。

な懲罰権と共に委ねた場合、果して、彼女は現在のままの状態に居るであろうか。幾多の先例と一般的な人間心理の上から云つて、現在の例外は直ちに法則化すると断言せざるを得ない。人間は常に非本能的な主張に屈従する傾向を持っているからに他ならない。

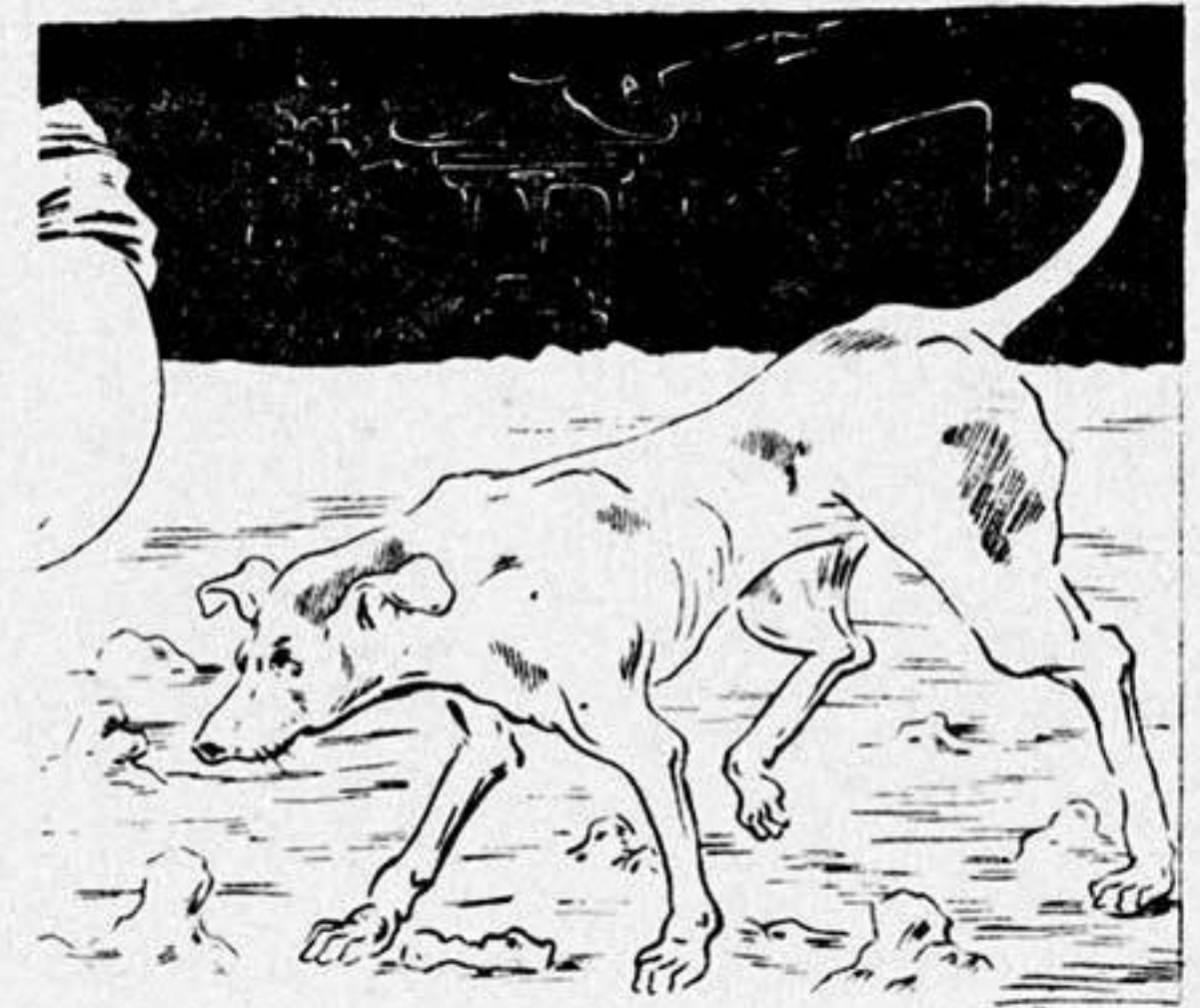
註

- (1) Thomas Wright.
- (2) Frances Penoyer.
- (3) Harry.
- (4) Hodges.
- (5) Georg.
- (6) Harry.
- (7) Charlotte.
- (8) Catherwood.
- (9) Yarmouth; Cesar.
- (10) Dearlove.
- (11) St. Dunstan.
- (12) Elizabeth Brownrigg.
- (13) Mary Mitchell.
- (14) Mary Jones.
- (15) Mary Clifford.
- (16) Cooper.

以上

つた。この件についてクーパーは「恰度酔払らつた野菜売が、自分のロバを打つ様」と評して居る。メアリー・ジョーンズは屢々、二脚の台所用の椅子の上で、全身が傷とみづ腫れの為にくんで来るまで加虐者の腕が疲労の為に動かせなくなるまで、徹底的に打ちのめされた。被害者が氣絶すると、このサディスティンである女神は、娘に水を浴せ、時によると水桶の中に頭を押し込んだりするのだった。如何にこの教区や英国が、弱者虐待によつて高名であるにせよ、この様な程度を超えた加虐は些か衆目を惹く様になつた。メアリー・ジョーンズは、この地獄からの脱出を決心し、ついに旧居であつた棄児養育所に逃げた。事情をきいた養育所の神父達は、かのサディスティンの良人ブラウンリッゲを告発した。併し、加虐本能に燃え上つた産婆は、些かもひるまなかつた。残つた二人の娘は連日の様に烈しい鞭打と拷問とに毎日を経さねばならなかつたのである。二人の中の一人メアリー・ミッチェルはジョーンズの後を追つて脱出を試みたがこの脱出は失敗に帰した。即ち、ブラウンリッゲの息子が、脱走中の娘を捉えて連れ戻つたのである。メアリー・クリフオードの取扱われた方法は言語に絶して居た。彼女は多くの時間全裸で生活する事を強要された。鞭打が時間的な制約をうけずして実行される為と、鞭打ち拷問や屈辱や





## 流浪八年より

## 被虐より

## 嗜虐へ

沖野恵美子

流浪八年既載分

昭和二十九年一月号

「流浪八年」

昭和二十九年二月号

「人身御供」

昭和二十九年四月号

「收容所脱出」

## 【一】

美しい太陽の輝く昼も、寒さがひしひしと身に伝わる夜も、野獣の様な李の為に苦しみ続けました。お陽様の光を公然受けずに不自由極まりない收容所で過ごして来た肌は、すき透る様に白く、壁際に追いつめられ必至に抵抗する私。一片の覆も無いぶざまな姿……あゝ何と云う恥しい姿だったのでしょうか。こ

んな哀れな姿を見せる位なら、死ぬ方がましだと何度考えた事でしょう。

それなのに、私はどうして逃げ出そうとしなかったのでしょうか。勿論高い土塀で囲まれた家で、それを飛び越える事は出来ません。然し、土塀にそって植えてあるボブラの木だつて、死ぬ気でやれば登れない事はなかったのです。又、隙を見計らつて門から逃げ出す工夫もあったでしょう。それなのに、何の手

段を構する事もせず、一ヶ月余の間、毎日毎夜、責苦の連続を甘んじて受け、其の間与えられた家に引籠った儘で過ごしました。其の中に、寒い寒い冬がやって来ました。地面は六尺以上も凍り、それは鉄筋コンクリートよりも固いのです。勿論野山は草一本もなく、人間だつて酒に酔つて、二時間も外でゴロ寝すればカンカンに凍ってしまします。野山の樹や、家も、水も、地上の全てのものは半年間の活動を止める満洲の冬、けれど私は何もその冬を怖れたものではありません。死ぬとか、生きるとかの観念は全く無くなつて居りました。ここに居れば飽衣暖食が出来、何と自由ないと、か云う考えも全然ありません。唯、眼に見えない不思議な力が、私をしてこの家に腰をすえさせて居ました。

## 【二】

そんな不摂生な監禁同様な生活を送つて居る間に、何時しか一九四五年も暮れ、地平線の見える曠野も、全てが白一色の銀世界に覆われ、あの血みどろの戦争が何処にあったかと思われる様な大自然です。

そして、お正月がやって来ました。そのお正月と前後して、今迄満人達に監禁されて居た日本人は、自由を取り戻しました。勿論兵隊さん達は別です。あの人達は小さい收容所から大きい收容所に移され、そしてそこから

シベリヤに送られたのでした。残つたのは、女や子供に老人、でなければ病弱者でした。今迄の不自由な監禁から解放された喜び、自由を取り戻した人達は、ホッと恐怖から逃れた様な安堵を頬に浮べました。然しそれはその後に来る餓えと、寒さに天地を呪わねばならなかったのです。伪くに職なく、食うに糧なく、着るに布さえない哀れな生活、乞食をして、米粒一つ呉れる満人としてなく、返つて、さんざんな悪口を云われた上、叩き殺された人さえありました。そんな中で、結局若い女の人は、皆それぞれの方法で、満人の妻や妾となつて行つたのです。老人子供は煙草売りや下働きになり、大便汲みから薪割り水汲みと凍った北満で、実にみじめな生活を送りました。その中で、私なんか本当に幸福な部だったのです。

やがて、国府と中共の戦いが北満から次々に北支へ移りましたが、土地改革により大地主だった李は日本人を妾に持つて、安楽に暮せなくなりましたので、私は彼の家から出ました。

私は、こんな田舎で住んで居つても仕方ないと考え、牡丹江に行く決心をしました。幸い彼の所から相当額のお金を持つて出たし、服だつて綿の入ったのを着て居りました。牡丹江へ出るには、歩くとして一番近道を行つて六十華里はあると云う事で、短い冬の日、

まる一日歩いても女の足では到底雪の中を行けそうもありません。勿論汽車等なく、歩くより仕方ないので、兎に角五道を通つて樺林迄出る覚悟で道を急ぎました。

各部落の入口には、銃や紅槍を持った歩哨が立つて居ります。雪に埋つた道は踏み固められて居るからこそ、それと解る位です。朝お陽様の上る九時頃家を出たのに、僅か二十華里（日本の約二里半）の五道に着いた時には、早や陽も西に傾いて居りました。凍つてしびれた指、鼻の先端無感覚になり、もうこれ以上どうしても歩く元気がありません。私は、今日はこの部落で休もうと心に決めて、五道へ入りました。

匪賊や馬賊から守る為の高い土塀に囲まれた二百戸余りの部落、嚴重な取調べを歩哨から受け、フラフラと建て混んだ汚い家の方へ向いました。旅館とある筈も無く、ようやく探した一軒の食堂で、この頃やつと覚えかけの片言満語で料理を注文しました。冷えた切った臓腑にしみ込んで行く暖かいスープ、私は次々に生気を取り戻して、肉饅頭や、おうどんをむさぼり食べて居ました。

「姑娘、爾向那兒去？」（娘さん、何処へ行くんだい）

不意に話かけられて、ビクッとして顔を上げますと、二十五、六才でしょうか、暖かそうな毛皮の上衣に乘馬ズボンと云う、この辺

では珍らしくすっきりとした服装の青年が、ニコニコ顔で立つて居ました。

「牡丹江へ行くんです」

と、私が答えると。

「ほう、牡丹江へ、そして一体何にしに」

「勿論、伪く所を探しに行くんですけど」

「駄目々々」

その男は、牡丹江から帰つて来たばかりだとの事で、牡丹江はこの地方よりもっとひどく、日本人も多いので、到底偽く事なんか出来ないし、餓え死に、凍え死にした人が道端にゴロゴロして居ると云う事です。色々と話し合う内に、行くなら行けば良いが、さしずめ今晚の宿る所もないだらうから、俺が面倒を見てやろうと、その男（王哲民と云いました）が部屋を探して呉れる事になりました。昼間の疲れでグッタリとなつた私は、王に世話して貰つたその食堂の一室で、グッタリと生体もなく眠りこけました。

夜中過ぎ、何かしら胸を押えられた様な苦しさに、フト意識付きますと、誰か知らない男が私の顔をのぞき込んで居るのです。幾ら疲れたと云え、何んと迂闊な事だったのでしょうか。

男が息をはずませて支那酒独特のむせかえる様な厭な臭を私の口に吐きかけて居るので、私は力一杯で、夢中になつてその男を突き飛ばしました。燈とてない真つ暗い室の中で





顔をつきつけて居ました。所在ない長い一日、夕方になってやっと風も静まり、窓ガラスに張った氷も解けて、窓辺に流れて来ました。

私は、この頃少しづつ飲み始めた強い支那酒を、自分でついでは、三杯五杯と腹の中へ流し込みました。ムシヤクシヤする気持を何とかまぎらわしかったのです。王は心配そう

な顔をして眺めて居ります。その情ない姿。また／＼あの夜の事が思い出されて、じり／＼として来る気持で。

「ねえ、王、あんたどうして、そんな情ない顔をして居るの」

私は、彼の弱々しい姿に、キン／＼した声で怒鳴る様に云いました。

「別に、別にどうもしないよ。只貴女があま

りお酒を飲んで体をこわしたら駄目だから」そう、どもり口調で云うじれったさ。

「何云ってるの、貴方は男じゃあないの、そんなにめそ／＼して」

その時、幾分酒の酔も手伝って居たのでしよう。私は、いきなり前にあった皿を一枚、彼の頭目がけて投げつけてしまいました。

「ガチッ」

余程強い力だったのでしよう。眼をシヨボシヨボさせて居た頭に当たったかと思うと、変な音を立て、砕け飛びました。

「アイヤ、トンノ」

瞬間頭へ手を当て、歪めた顔、額の所から血がタラ／＼と流れています。

その時の私は、血を見た狼の様でした。両手で頭をかゝえ、オンドルの上へかがみ込んだ彼の上へ、手に触れる物を片っ端から投げつけました。それでも何の反響も見せずじつとしている彼、とう／＼私はチャブ台迄両手で差上げると、円く盛り上っている彼の背中へ叩きつけました。

「ウウ、ウ……」

変な声を出したかと思うと、それ迄じつとかがみ込んで居た彼は、とう／＼固いオンドルの上へうつ俯してしまいました。破れた服背骨が折れたのか、さも痛そうに。

「ウー／＼、アイヤ／＼」

と奇妙な声を出してのたうち廻りました。

男はオンドルを二、三回転って行って「ウウッ」と奇妙な声を出し、一瞬じつと動きませんでした。とうの昔に処女の誇を失っていた私、心にゆとりがあると云うのか、……一歩手前で突き落された男の顔を想像すると、思わずブツと吹き出してしまいました。

「なな、なにがおかしい」

それは案の定、王の声でした。もともと宿る所を探してやったと云うからには、こんな事位計算に入れていたのでしょうか。満人の好色はとくに知っている私です。それには答えず後から後からこみ上げて来るおかしさに私は馬鹿の様に笑いました。

「どうして、そんなに笑うんだ」

王は怒りにふるえる声でこう云うと、又猛虎の様におそって来ました。真暗い室の中で獣の様に挑んで来る男、私をオンドルの中へめり込ます様な勢です。その中で、私は只ゲラゲラと笑い続けました。

もう何時頃だろう、寒い冬の夜は、小さいたった一つの窓ガラスも凍らせて居る事でしよう。

### 【三】

牡丹江へ行く積りだった私は、とうとうその目的を果さず、ずるずると五道に腰をすえてしまいました。むこうへ行っても、王の云う様な苦しい生活だったら困ると考えたのか

或は、案外若くて親切な王が好きになったのか、どちらにせよ、私自身そんな事が解りませんでした。最早や、貞操を守るとか、満人の妻になるのが嫌だとか云う様な「観念を失った、生ける屍の様な」私でした。むしろ彼の盲目的な愛、猛虎の様な体力に魅せられたのかも知れません。

五道は、東に高い山が連なり、西は見渡す限り何一つ無い平野です。土造りの低い家屋が二百余りありますが、普通の家には便所が無いと云う変わった所で、井戸も部落中にたった三つで、昼過ぎの少し暖かい時を見計い、水汲みに行くのですが、十人、十五人と井戸端で一緒にになり、順番を待って汲むと云う不便でした。特に便所のないのは困りました。満人は皆、雪の一尺余りも積った中で、悠然とかがみ込んで居ます。十七、八の少女も、二十過ぎの新婦も、何んの恥しさも知らぬ様に、大きな両丘を雪の間に覗かせて居ります。部落の囲の外百米以内は、コチコチに凍った石より凍い大便が、足の踏み場も無い程に転って居ます。

零下二十度、三十度もある朝、山から吹き下す凍った様な風を背に受けて、かじかんだ手を両腋下へ差し込んで、じつ／＼とずくまうって居ると、その横で犬が臭も何もしない「ハッタイ棒」の様になった大便を嚙って居り、うっかりぼう／＼として居ると、足音もさせず

に後へ来て、お尻をペロ／＼となめてしまいます。こんな事が本当にあるのかと思われませんが、読者の中に、若し、大陸帰りの方が居られたら、＼そうだわ、確かに、私も一度なめられて、何んとも云えない気持に、それから毎日犬の居そうな所で御不浄したわ、本当に／＼気持、今頃あの犬はどうしているかしら」と思い出される方もあると思います。不便の中にも飾り気のない生活、それがこの部落に対する私の見た気持でした。

王と一緒に生活する様になった私は、彼が案外気の小さい、お人よしの人間だと云う事に驚きました。あの日の晩、幾ら酒に酔っていたとは云え、あんなに迄して襲って来た事が不思議な位でした。

一週間過ぎ、十日経つ内には、余りにも見かけ倒しの彼にうんざりしました。思えばあの強暴なソ連人との二日間、………いうよりもむしろ他人からいじめつけられる事に、不思議な興奮を覚えるようになった私は、彼があの最初の晩の獣のように猛然とおそいかゝるのを待っていたのですが、一向にその様な事をしない無気力な彼には愛想が付き、思い切って暴れて見たい様な、ヒステリックな気持になって居りました。二日程前に降った雪が、必ずその後三日は吹くと云う風の為に、外へ出れば息も出来ぬ寒さと、飛び散る雪に、私と王とは一日中家の中で、ブススリし



私は、血走った眼でじっとそれを眺めていた。額から流れて居る血が、眼に入り頬を伝わり、身体を動かす度にアンペラに地図を描きます。今迄、さん／＼ソ連兵や満人に痛めつけられて来た私は、何かしら、胸がスーッとなって行くのを感じました。

## 【四】

それからと云うものは、私の乱暴は益々激しくなるばかりでした。あの日、背骨が折れたのかと思いましたが、幸いに何んともなかったもので、私は、日が暮れて、寒さの為に誰一人出歩きもしない夜が来ると、彼をいじめの様になりました。幾ら叩いても、蹴っても、少しも抗えない彼でした。毎日々々そんな事を繰り返す内に、彼がかえって喜んで甘受して居るとしか見えませんでした。そうなる益々虫の治まらなくなった私は、とう／＼彼の腕を折ってしまったのです。

その日も始めの内は。

「ねえ王、お前は どうしてそんなに情ないの毎日々々私にこんな事をされて、男のくせに悔しくはないの」

私は、所々に青い痣の有る彼の顔を見ながら云いました。

「別に……」

彼は、口癖の「別に」と云うだけで、複雑な眼の色、又々じり／＼として来る私。

「別にではないわよ。一遍位反抗して、此の私を殴る事位出来ないの」

そう云った私は、いつものヒステリーが起って来ました叩かれるのを待つて居る様な羊の様な彼に、

「お起ち、今日はうんと痛い目をさせて上げるから、何ん」と云う情ないさまなの」

私の命令に、ゆっくりと起ち上る彼は、まるっきり、親方に折檻を受けるサーカスの子供の様でした。

「服を全部脱いでしまいなさい。貴方なんか服を着たまま叩かれたって、ちっとも痛がらないんだからね」

少年の様な彼も、その時はちよつと渋った様な顔をして私の顔を見つめました。けれどもその眼の中には少しの反抗の色も見えませんでした。何て意気地無い男なんでしょう。

「何を／＼／＼しているのよ早く」

私は、まるで赤子が小便する時に、慌てゝ着物を脱がす母の様に、彼の上衣をはぎ



取りました。そしてズボンもシャツも。丸裸にした彼、豆油を皿に入れて綿を心に

してつけた灯の中で、改めて彼の良く発達した筋肉に驚きました。盛り上った肩、力瘤に

ふくらんだ腕、特に女のブヨブヨした身体と違って引締った胸と、脚の線は美事なものでした。それ等をしばらくの間呆然と見とれて居た私は、以前にも増して怒りと憎しみが憤然として湧いて来ました。こんな逞しい身体をした男の癖に、何んて情ない弱虫。

私は、今日こそはこの男を死ぬ程ぶってやろうと思いましたが。何日の頃からかサドに変っていたのです。いゝえ、私には生れた時からこの様な嗜虐性があったのでしょうか。

丸裸のまま、典獄の裁きを待つ囚人の様に直立している彼を、細引を出して腕の上からキリ／＼と縛り上げました。叩いている間に痛みに堪えかねて、暴れない為にです。何時もなら叩くと云っても服の上からだったのでこたえなかったのでしょうか、今日は叩き倒してしまふつもりですから、うっかり堪えられなくなつて逃げられたら困ると、ふと気付いたからです。

女の力では仲々強く、肉に食い込む様には縛れません。彼の強い力で暴れられたら解けてしまふそうですので、グル／＼と八回も九回も捲きつけました。それでも尚無言の彼の閉じた眼元には、肌に食い込む感覚を楽しんで居る様にさえ見えます。

「王、眼を開けて御覧！ 今日はお前を叩き

殺してやるから、本当に情ない男」

私は、側にあった鞭棒を取り上げて、彼の眼の前に持つて行きました。鞭棒とは、支那人の家なら何処へ行っても一本は必ずあり、樗等の様な固い木で造った、うどんを打つ棒です。初めから計画的であつたのではなく、只傍らにあった手頃な棒だったので、手に取つたのです。手垢で黒く光っている棒、私は王に見せ乍ら。「これは良いものを見つけたわ、これならいくらこの男だつて、悲鳴を上げてしまふに違いないわ。これで一つ殴られただけで、大概は参ってしまうわ」と考え、早や、彼の醜く歪んだ顔がフツと脳裏をかすめます。

王の眼は、一瞬、驚きと恐怖に変わった様に思いましたが、又、すぐに棒を待つ様な観念した眼を閉じました。

「ゲン」

王の肩の肉に当って、掌に響く衝撃、私はとう／＼堪らなくなつてそれを振り上げていたのです。それは、あの鳴る鞭と違って、鈍いくせに腹に伝わる様な鈍い音。腰をちよつとふらつかせた彼、けれどもすぐ又、踏みしめて立っています。

「畜生、畜生々々」

一撃、二撃、三撃、腰、腿、お尻と丸い棒は跳ね反ります。それでも倒れない彼、よろよろとしては踏みとどまり、踏みとどまり、

しまいには両足を開いて仁王立ちの様になつて堪えています。苦痛に歪んだ顔、汗が額にブツリと玉を湧き上らせて来ました。

「未だか、これでもか、これでもか」

私は、血眼になって力一杯棒を振ります。

「ううーん」

ばたつと王が倒れました。ひやつとした私は、振り上げた棒を止めました。オンドルの上に転った彼は、自由な足をバタ／＼させて悶えて居ます。そして玉の様な汗が顔から胸から流れ出て、暗い灯の下では血にも見える凄惨な姿です。私は縛ったままの彼をじっとみつめて、のたうち呻く姿に、むら／＼と湧いて来る不思議な衝動にじっとして居れなくなりました。髪を振り乱し、汗でびっしりの私は、狂気の如く、王の傍に駆けよりました。

性も根も尽き果てゝ、汗びっしりぐつたりとなつた私は、王の

「痛い、腕が、腕が」

と云うのに紐を解いてびっくりしました。無惨にもあの最後の一撃で、左の第二関節の下が折れてしまつていたのです。

【編集部】この稿は一応これで終わります。続編は機を見ていづれ発表します。



# 明治年間の新聞覚え書

【四】

吾

妻

新

## 夫の抵当（一九・四・九・郵便報知）

実を言うと、わが妻を抵当にして金を借りた事件は、明治の新聞にいくつか報道されている。いかに日本の家族制度の下で女性の地位がみじめだったかを物語るものだが、ここに紹介するのはその逆の場合である。ただしマゾヒストの諸君が想像するような意味ではなく、抵当という名義で男は公然とほかの女と同棲し、妻はみじめな目に会わされているのだから、やはり男尊女卑の本質に変わりはない。ただ抵当という口実の奇抜さと、人間が借金のカタに押えられると信じていた当時の倫理観念を知る上に、きわめて貴重な資料である。

群馬県下吾妻郡原町の百姓某（四十三）は、妻子がありながら同町のお泰という後家と関

係をむすび、公々然と通いつめていた。ところが二人で遊びあるくには金が欲しい。そこで、妻のお梅がヘソクリの小金を持っていくことを嗅ぎつけ、なんとか引張りだす方法はないものかと、悪い相談をはじめた。

「いいことがあるわ。五十円の借用証をかい

て私に頂戴」

「それをどうするんだ」

「あなたに貸した金が取れないからといってお梅さんを責めて、払わせるのよ」

「そいつはいい考えだ」

こうして偽りの証文を手にしたお泰は、さつそく男の留守宅へ乗りこんで催促に出た。

「さんざん人の夫を横領しておきながら、相対つくの借金を私に催促するなんて、あんまりひどいじゃありませんか」

と云って見たが、それで顔を赤くするような女ではない。

「私と旦那の仲こそ相対づくだが、金の貸し借りはチャンと証書のあることだ。どうしても払わないというなら裁判所へ訴えて出るから、そう思つていい。そうなれば身代限りとなつて、一家離散するんだからね」

脅かされてみると、法律に暗い農家の妻だから震え上ってしまった。といって、五十円という大金はヘソクリなどで追いつかない。口惜し涙を呑みこんで、お梅は寝取った仇の女に頭を下げてあやまるしかなかった。

この調子だと大した金は持つていないと見当をつけたお泰は、内心ガツカリしたが、よし、それならそれでこの女を苛めてやろうと決心した。

「じゃあ仕方ない、金が払えないというなら

代りに抵当を取るよ。といってもこんな貧乏

所帯でろくな道具もないらしいから、こうしよう。お前さんが五十円払うまで、旦那さんをあずかることにする。抵当として貴殿に差入れ申し候という証文をおかき」

一種のサディズムである。こうして残忍な証文をむりやりに書かせたお泰は、いよいよ天下晴れての姦通を楽しみながら、その日から男を足留めして帰さなかった。しかし幾月かたつうちに酒代なども心細くなつてきたので、今度は五百円の利子を払えと言つてお梅を責め立てた。だが、こればかりは成功しなかった。

「主人を抵当に入れたことは入れたが、勝手に弄べという証文は書きません。それなのにあなたは、毎晩楽しんでるじゃないの。私にとつて掛け換えのない大切な品を自由に使つてるんだから、それを利子と思つてくれたって不足はないでしょう」

理窟にかなっていないから、お泰もだまつて引き下るしかなかった。

だがお梅は考えれば考えるほど悲しくなつた。五十円の出来る見込みはない。寐床に入るたびに夫のいない寂しさが胸に沁みる。その上、養蚕の時期が近づいて、とても女手ひとつではやりきれない。そこで彼女はヘソクリの十円をもつてお泰の家へ出かけ、忙がしくてどうしても男手が要るから、抵当の夫を

三カ月だけ小作に借り受けたいと、頭をさげてたのみこんだ。お泰も金が欲しいところだったし、三カ月たてばまた奪い返せるし、会いたければいつでも会えると考えて、それを承諾した。

「近頃馬鹿々々しき話なり」と新聞は結んで

## 姦婦姦夫の私刑

（一六・四・二八、朝野）

これは西海日報にのつた記事を再録したものだし、ニュースの出所が神戸から汽船で長崎に着いた人の話だから、どこまで正確かは保証しがたいが、こんな内容である。

船が神戸をはなれて僅か数里ほど行つたところだった。一隻の小さな和船が漂つていた。漕いでいる人間の姿も見えないので、ふしぎに思いながら近附いてゆくと、船客一同胆をつぶしてしまった。台の上に血のしたたる男の生首がのせてあるのだ。そして小さな苦を張った中には、年のころ三十ばかりの女が身動きのできぬように全身を縛り上げられ、ただ左手だけが僅かに動かせるようにしてあり、その手の届くところに食物が置いてあった。傍の紙の張札には、「此船もし島へ漂着せば救うべし、大地へ着すれば助くべからず云々」と書いてあった。察するにこの女と生首の男は姦婦姦夫で、ふたりが忍びあったところを夫に見つけられ、こんな惨酷な刑を受けたの

だろうというのである。

疑えば、乗客がその文字をよむには汽船をとめなければ不可能だろうし、停めた以上はその女を救わねばおかしい話だ。いかにのんきな時代でも、そのまま見棄てて漂流させておくとは考えられない。ただこのような、不義はお家のご法度式の私刑が、当時まだ盛に行われたことだけは事実らしい。

## 少女の身体を差押える

（二五・一〇・一五、毎日）

こういう申請をするのも異例だが、それを裁判所が受理して執行したというのは、私の知るかぎり他に例がない。アブノーマルというよりも非常に貴重な例なので、文化史的にも価値がある。

いきさつをさきに述べると、浅草三好町五番地平民篠原惣蔵には惣太郎という息子と、その娘、つまり惣蔵には孫娘のシゲ（十二）がある。明治十七年ごろ、惣太郎はある理由で惣蔵から一万五千円の財産をわけてもらつて分家した。そのときの話し合いでは、シゲは祖父惣蔵の手元で育てられることになっていた。ところが最近になって惣太郎は、ある団体の壮士某と謀つて、シゲをその壮士の養女にすることを承諾し、父親にも娘にも知らせず勝手に籍を送ってしまった。

「之には何か訳合ある由にて」とあるよう



に、複雑な事情が介在しているらしく、ことによつたら妾代りの人身売買だったかもしれない。当時の壮士の生懸はビゴーが数十枚の漫画にみごとに描きだしているが、のちの暴力団やゴロツキなど足元にも寄れぬほどすさまじいものだったから、私の想像はそう的はずれとはいえない。そのためかどうか、シゲはまだ十三才の少女だったが、どうしても養女になるのはいやだと頑張り、暴力で連れてゆかれるのを防ぐために、祖父の惣蔵と彼女の二人の連名で、復讐請求の訴えを起すと同時に、じぶんの身体にたいして仮差押の執行を東京地方裁判所に申請したのである。

これにたいして裁判所は、十月十三日、執行をやった。人間のからだを差押えるなどということは訴訟法実施以来はじめてのことなので、非常な議論が内部で起きたそうだが、思いきってやったというのは、やはり私の述べたような危険な事情があったからではなからうか。そうだとすれば正に大岡裁きで、いまのコチコチの法理論よりもずっと人間性に富んでいたことになる。

## 貞操リンチ

(二五・九・二三、朝野)

長崎県西彼杵郡川原村と為石村には、つぎのような野蛮な風習が残っている。それは、村に住んでいる未婚の女性を支配する絶対権力である。彼女たちは他の村のものと結婚す

ることも、關係を結ぶこともゆるされない。もしも他村の青年とひそかに受し合つてゐることが分つた場合には、村の若者頭の顔をつぶしたと称して、公然リンチを加える。

リンチの方法は、まずその娘を呼び出し、若者頭、副頭取などが居並んで、事実のあるかないかを確かめる。これを糺問というが、目星をつけた以上は泥を吐かせるまで責め立てる。そしていよいよ白状させると、川に連れていって水に浸け、腰を洗う。汚れを落すという意味だろうが、たぶんにサディスティックである。次に、踵に草履または草鞋を結びつけ、ちやうど馬を訓練するときのように、娘の両手を取って駆け廻らせる。これを何度もくりかえして放免するのだが、懲戒と称してだれも怪しむものがない。また相手の男を現場で押えたときには、茅を五六寸ばかりに切って切口をそろえ、それで尻の肉を摩擦し、肉が破れ血が流れるまでやる。それから洗滌と名づけて、やはり川に連れていって傷口を洗うのである。

これは川原村だが、為石村はもっとひどい。そこでは男でも女でも変りなく、人里はなれた山辺へつれてゆき、三尺の青竹で左右の尻を代る代る叩き、竹が割れるまではやめないのだそうだ。じっとしていて受けられる刑ではないから、どうせ押えるか縛るかするのである。

屍体を喰う

## 屍体を喰う

(二六・三・五、朝野)

伊賀國阿拝郡額田村大字中友田の平民高島久次郎(五十三)は、墓をあばいては子供の死体を堀り出し、これを蒲焼にして食べた。よほどの食通とみえる。もちろん簡単につかまって、墳墓発掘死体毀棄罪に問われ、安濃津地方裁判所で重禁錮三カ月、罰金五円に処せられた。

乗馬芸者の護衛

(三二・二九、中央)

女の乗馬に興味ある人のために引用する。  
題だけみて、馬にのった女を護衛するのかと  
思うかもしれないが、そうではない。馬にの  
った芸者が、男を護衛するのである。そして  
護衛された男というのは、いまの総理大臣鳩  
山一郎の父、鳩山和夫だった。

鳩山は当時、憲政本党の頭株で、飛ぶ鳥を落す勢いだつた。政治家で羽ぶりがよければかならず花柳界に縁がある。ご多分にもれず彼も柳暗花明の巷に出没したが、新橋の青柳で知つた小あさ（二十四）という芸者が、およそ變つた女だつた。

明治時代の女の乗馬がめずらしいことは前にも述べたが、彼女は顔の美しいのに似合わず、馬乗拍子（拍子は白拍子、つまり遊女の意味）というニッケネームをつけられたほど

の女丈夫で、手綱さばきの巧みなことは有名だった。

当時の壮士の粗暴だったことは前にもちよつと触れたが、特に国会開設以来は暴力が公然と横行して、政治家と名のつくものはみな反対党の壮士つまり政治ゴロの襲撃に曝される危険があった。これは第一回の議会が開かれたころからそうなので、選挙運動といえざいたるところで干渉が行われ、血の雨を降らしたものだ。

そこで女丈夫小あきが心配したのは、かねて寵愛にあずかる鳩山大博士の身辺だった。公用ならば護衛の壮士もいるだろうが、私用中の私用で通つてくるときにまさか用心棒を連れて歩くわけにもいかないから、そのときを狙つて反対党の壮士からどんな暴行を受けないともかぎらない。女だてらというかもしれないが、新橋の小あさ、壮士の暴力などに負けてたまるものか。というわけで、数日前わざわざ遠い横浜の町まで馬で遠乗りをやり金丸商店からピストルを買つてきた。そして昨二十八日、京橋警察署へ出頭して、護身用の届出をすませた。

「かねては馬術に名を得し小あき拍子、今又博士擁護の短銃を筈せこ代りに帶の間へ挟みてスワと云はばズドンと一発打放さんず勇しの決心誠に鬼に金棒なりとや云ふべき、博士も今後は嚙ぞや枕も高う内閣大臣の椅子、議

長の月桂冠などをば夢みらるる事なるべし」

人柱志願の女

(三四・一〇・二八、日本)

大阪天王寺で鐘を鑄造するという記事が大坂朝日新聞に出たときに、なにを感じがえたのか、じぶんを建立の人柱に使ってくれという手紙を同社によこした女がある。言うまでもなく人柱は、神社仏閣や橋の建築にデメーテルの神にささげるため生きた人間を埋めたという伝説だが、そんなものが明治の時代に行われるはずがない。だが感ちがいにしても、人柱が要るならせひじぶんを生き埋めにくれと熱望して、返信料まで添えてたのむ心理に問題がある。

解釈は読者におまかせして、手紙の全文を  
かかげておく。

乍憚鳥渡(チヨットの意)御伺申上候、陳ば  
朝日新聞の広告に、当大阪天王寺再建に付人  
柱入用の由報知ありしとの風説仕り候得共、  
判然たる事なきに付、御当社へ郵送致事に御  
座候が、此儀実条なり哉、若此儀事実なれば、  
此書着き次第御報知被下度候。併しながら此  
明治の御世に、掛る古昔たる儀は有えるまじ  
くとは思ひ居候得共、当地に於ては此風説甚  
だしき故、万一右様なる事候へ共、何様なる  
役儀は末代迄の名の残る事に候えば、私事此

義に決身仕候間、何卒否哉の義、早々御報答願上候早々頓首。私は宮崎県南耶珂郡本郷村大字中村字目井津荒武とく女と云ふ者に御座候。

何卒〳〵御手数ながら否哉の御返事願上候故に郵便切手添へ候。

## 貞奴の鼻の穴

(三六・四・六、大朝)

鼻のフェティシズムは真鍋氏その他によつて本誌にも紹介されたが、これはフランスの話である。

貞奴といえど承知の方も多いだろうが、日本最初の女優で、川上音次郎の妻である。川上音次郎はもと自由党の壮士だった。おことわりしておくが、これはさきに述べた政治ゴロ、つまり金で儲けられる暴力団ではなく、初期のころ純粹の意味で用いられた壮士、自由民権運動の熱烈な斗士だった。だが政府の弾圧がはげしく（彼は百八十回も逮捕された記録をつくっている）、正面攻撃では効果なしとみて、オツペケペー節というのを考えた。ちやうど今の石田一松ののんき節みたいなもので、通俗的な歌で、専制政治を嘲笑したものだ、人間の履歴といい諷刺の激しさといい、石田一松とは比較にならない。これが大衆の人氣に投じて全国に流行したが、舞台でやるときに川上は、陳羽織を着て鉢巻をしめ、日の丸の軍扇を開いてサツソウたる



演出ぶりをしめした。これを見て惚れこんだのが霞町の芸者貞奴で、あの方以外に男はないとばかり結婚にゴールインした。もっとも

小倉清三郎の相対会研究報告の実例中には川上音次郎と寝た芸者の話があり、それによると彼は古今の達人だったらしいから、天下の

## ソドミニストの告白

## 泉都の夜明け

豊後忠

ソドミアに取って相手を得られぬ程苦しいものはない。毎日悶々の情もだし難く奇クによって幾分慰められる反面、その誰でも持つ多情性の故か、慾望の果しなき歩みが現実的な同憂の友を探しあぐんで尽きる事を知らない。まして心の秘密を絶対知られたくない性向、容易に友を得る事のできない大都会の友を羨みながら若干の金を工面して田舎町より泉都へと友を求めて一夜泊りとときめこんだ。観光温泉を誇る別府市だけに入場客、観客相手の盛り場、騒々しい車の往来、スビーカーのうなり、客引きの呼び声、いつしか自分もその雰囲気にとけ込み雑踏の一群となっていた。

まだ陽は高い。例によって映画館めぐり十ばかりの映画館の看板を見ながら何か男性のたくましい裸体、または美男子の出現

映画はないだろうか探す。仲々お気に召すのはない。仕方がないとあきらめてS映画館に入る。後の方に立っている人、便所などであろうろろしている人はないだろうか私の眼が鋭く左右に走る。若い男性の一人客の隣に陣どる。脚をすりよせてみる、反応はない。あきらめる。自分ながら嫌らしくなってきた。愛想もつきるが森の石松ではないけれど死ななきや直らぬものとあきらめている。

夕刻K公園へと脚はむく。便所へ誰もいないのを見て入る。落書を丹念に読む。ある。『同性愛の友を求む』とか『夕刻七時戸を三度叩け』とか案外同性愛患者の多いのに驚きつつ嬉しくなり何となく愉快になる。まあこの辺をうろついておこう。誰か一人位はいるだろうと思いつつ人待顔

貞奴も寝業で簡単に討ち取られたのかもしれない。その川上はやがてオペケベ一節から壮士芝居に転じ、これが明治の「書生芝居」として歌舞伎以外のあたらしい演劇の出発点となったが、のちには海外にまで進出してヨーロッパ各地を廻り、アメリカだけで四回洋行している。そのとき貞奴も同行して、女優として一緒に舞台に立った。日本に帰ってからも彼女は演劇運動に一生をささげ、「ハムレット」「オセロ」などを手がけるほか、女優学校を建てて後年の女優を養成した。

貞奴の写真はありがたいことに立派なのが残っている。それを見ると分るが、眼は大きく、鼻筋通って高く、口元は引き締まって、非常に近代的な美人である。だからこそ外国でも評判になったのだろうし、ここに述べるようなことも起きたのだろう。大阪朝日の記事はフランスの次の挿話を伝えている。

パリで「道成寺」を上演したとき、清姫の役を貞奴、竹割五郎を音次郎がやった。これが大変な評判で、パリ中の人気をよんだ。

「清姫、五郎の安珍なりしを見、嬉しいと悲しいと心迫りて息を引き取る仕打、見物の人気にかない、さて、貞奴は名優なり、彼の死する時は咽喉仏透き通って見え、鼻の穴円く開き、いかにも人情の極微なる処を現は

に鳥舎の欄によりかかっている。もうあちらの隅では、浮浪者が夜の焚火を始めた。それと思う人も来ない。いささかいらいらして来た。若い高校生らしき人がやって来る。じっと流し目をやる。向うも何か人待風だ。近づいてみるが到底声はかけきれぬ。くすくすしている間に行ってしまう。今晩は駄目なのかと、がっかりして溜息もでる。このまゝ外にいては、夜明けまで寒くてたまらないと思ったので、ボン引きの婆さんと交渉して場末のあやしげな一室に泊る。やがて口紅を赤く塗った女がやってくる。余り興味もないので「今晩はゆっくりさせてやるから休め」と背中合せに寝る。自分を未経験とみたか女がからんで来る。いい加減にあしらって取りあわずにいると、一層意地になって「貴方インボではないの」と云われる。自分は同性のみに愛情を感じ女性に対しては男性としての用をなさぬのかと今更寂しい気にもなるがそれ程の後悔もない。あっさり自覚しあきらめたまでの事こうなればと女に思いきり腰紐で後手をぐつときつ縛らせる。ハタキの柄で二、三度尻をひっぱたかせるが女が仕方なしにやる事としてどうも興がわかぬ。之が同性から打たれ縛られるのだったらと思うと、また味気なくなつて止めてしまった。

早朝、女のねている内そつと抜けだし満されぬ思いをいだいてまたK公園にくる。人気もまだない。もう一度別の便所をのぞく。こんなに同性愛の落書をしているのに一人も会えぬとは残念に思う。敗残の気持で駅に向う。浮浪者があちこちベンチに横になって居る。こうなったら旅の恥はかき捨てと十五、六の浮浪児をつかまえて眼で合図しながら「外へ出る」という。彼は何の事かと寒さにふるえながら外にでた。「一百円やるからこつちに來な」と人のいないのを見はからつて、駅の便所に連れ込む。然し、折柄、電車が着いたのか、ドヤと人の足音がしたので、あわてて百円札を握らせたまま、あつけにとられて居る浮浪児を置いてけぼりにしてホームへ入る。際限のない愛慾の旅、いつ果されるやら同憂の友を求められぬ寂しさ、自然母の眼をぬすんで白粉、マユズミ、口紅などで自分の身体に採色をほどこしたり、緊縛した姿を鏡に写したりして遊んでいる。

自分と同じような性格で悩む者は、この世の中に沢山いると思うのだが、親しく手をとり合う機会もなく独り淋しく埋れてしまわなければならない、と考えると、たまらない気がする。

(おわり)

せりとの批評新聞に出でたれば、毎日立錫の余地も無き大入りなりき」

咽喉仏と鼻の穴がどれだけ魅力があるのか私には分らないが、当時のパリの市民にはそういう趣味を解するものが多かったとみえる。見物はさきを争って俗にいうカブリツキに押し込み、舞台に倒れた貞奴の咽喉と鼻の穴をのぞきこむ騒ぎだった。

花のパリでこの人気だから、音次郎はうれしくてたまらず、あるとき、清姫がまさに最後の息を引取るうとする、

「それ咽喉仏、咽喉仏をみせるんだよ」と、小声でささやいた。とたんに貞奴はおかしくなつて、いまにも吹き出しそうになつたので、くると後ろ向きになつて死んでしまった。カブリツキの連中はガツカリして、かんじんの咽喉と鼻の穴が見られないと盛んに苦情を申し立てた。

「あらいやだ、私の鼻の穴なんか、どこがいのかしら」

「俺にだって見当がつかないが、あんなに騒ぐんだから見せたらいいだろう」

貞奴も呆れたが、考えてみれば減るものでもなし、翌日からこんどはわざと顔を客席に向けて突き出し、それごらんさいと言わぬばかりにしたところが、客席の拍手は雷のごとくだった、というのである。



完全なる隷屬

坂田 信治

拍車と乗馬鞭

乗馬は、唯一の父の道業でした。私の家の電車線路を越した向側に、賑かな町の裏手には、やや大きな広場があり、其処には乗馬倶楽部がありました。父は一日一回は、その馬場で乗馬を行うのを日課として居りました。私は馬上の父を見る為に、たまには父の鞍に乗せて貰い度い為に、幾度となく可成遠いその馬場へ通ったのです。そして私は次第に乗馬に就ての、知識を増して行きました。私がある中で最も興味を惹かれたのは、その風俗でした。乗馬を行う男達の服装、特にズボン長靴、手に持たれた種々の形状の乗馬鞭、それ等のものに対する関心は、私の父を通じて益々固く強くなつて行きました。

倶楽部の会員達は、皆とりどりの長靴を穿いて居ました。然しそれ等は、幾種類もの型がありました。父の持つてゐる様な、硬い胴

の光沢の強い長靴、軟かい皮革の軽やかな、異った色の折返しをついた、競馬の騎手の穿く長靴、騎兵や輜重兵の下士官の穿く、頑丈な重たい長靴、そして色も、黒、焦茶、茶、栗色と、雑多でありました。そしてその長靴の持つ表情、足首の部分に、折疊れた複雑な皺、脛と密着している胴の表面の、種々の型態、足甲の上の靴の縫目、踵に付けられた拍車止、その形態こそ異れ、長靴にはある峻厳さと、残酷さとを私は感じないでは居られませんでした。それを強調するものは、拍車であり、鞭でありました。

拍車の峻厳さを知ったのは、こんな事がありました。ある日曜の朝のことでした。父と私は陽の当る縁側に、婆やは買物に出掛けて居りました。父は一心に長靴の手入をして居ります。靴墨を塗り、艶出しをかけると、長靴の表面は、滑かに鏡の様に輝き始めます。「信治、お前下駄箱の上に、拍車が置いてあ

「なあと、拍車って」

「あそこにあるから判る。かねの齒車のついた奴だ」

私は玄関から、拍車を持って来ました。銀色のメッキを附したそれは、齒車にどす黒い血の塊のようなものが、附いて居りました。「お父さん、これ、拍車って何をするの」「おめえ、知らないのか。これはな、馬に乗って、馬が大人しくして居ればいいが、悪い癖を出したり、云うことを聞かなかったりするときは、この齒で馬の腹を蹴り付けてやるんだ。そのすると、この齒は腹に咬みついて馬はその痛さに、その主人に服従させられるんだ。こいつを力一杯、喰せると痛えぞ。昨日の馬は荒い奴だったから、俺は何べんも蹴り上げてやったんだ。そうしたら、とうとう腹の皮膚が破れて、血が出やがった。それでこんなに血がこびり付いているんだ」

私の顔から、一瞬血が引いて行くのが判りました。私は更めて、その物凄い拍車を見ました。蹄鉄型の金具の中心に出た枝の中に、径二輦位の歯車、そしてその歯は四耗程の刺になつて居りました。

「そんなに痛いのか、お父さん。」

「一寸ためしてやろうか、一ぺんで飛び上るぞ、一寸来てみな」

父は左手で私の膝の上に抱きかゝると、右手で驚擱みに拍車を握り、力を籠めて私のズボンの上から、尻へその齒を叩きつけました。強烈な火で灼かれるような、疼痛が全身を駆け抜け、私は悲鳴を挙げました。

「やめて、痛い、痛いよう」

「判ったかい、この痛さでどんな荒い馬でも大人しくなる」

私の拍車に対する第一の印象は、こんなものでありました。長靴に付けられた拍車を見る度に、怖気を震って、その痛みは甦って来るのでした。然しその形状にも、幾種類があるのを、いつか知るようになりました。齒車の直徑、齒の長さ、踵に取付ける革帶、整然と中心に付いたのもあれば、だらしなく下にずり落ちたり、齒の曲ったり千差万別の様相がありました。

母が死んで、私が家に居るときは、父の乗馬の服装を着けると、いつか私が手伝うようになって居りました。先ず父は真裸になり

ます。そして黒いサポーターで、股をしつかり包むと、やゝ厚手のメリヤスのズボン下を穿き、上は普通のＹシャツを付けて、乗馬ズボンを穿きます。内股に栗色の牛革を縫付け、紺色のズボンは、腰から膝まではゆったりとして、斜に切込まれたポケット、太い革バンドを通した上端を、父は持つて穿きます。然し膝から足首までは、窮屈で伸々楽ではありません。やっと父の太い脹脛と、膝がぐどり抜けると、私はしやがみ込んで、父の足へ靴下を穿かせ、その上を紺色のズボンが覆います。一列に並んだ黒いボタン、私は下から一つずつ、ボタンホールへはめ込んで行きます。父の脹脛は太く、ズボンはびったりと作られていたのでなく、這入り難いのです。そしてそのボタンは膝から約十釐下で終り、膝との間は紐で、締込む様になっているのです。膝から下へ順々に編上げ、ボタンの上で結びます。その間に父は、ネクタイを結び、背筋の割れた上衣を着て居ります。堂々たる軀軀と、膝から下はびったり密着したズボンは、素晴らしい魅力なのでした。そして父はハンチングを被り、皮の手袋を手にして玄關へ向います。其処には手入の行届いた、黒革の乗馬長靴が輝いて居ります。私は父の長靴を穿く動作を、凝視します。それは穿くのが無理と思われる位、びったりと造られてあるのです。父は玄關に腰を据え、靴をとり

ます。長靴の中に付けられた、真中に赤い線  
の這入った、布の帯に両指を引掛けます。そ  
してそれで靴をしつかり固定させて、爪先か  
ら徐々に押込みます。爪先が靴の底に達する  
と、ぎゅっと革の軋る音がして、太い脹脛が  
その硬い胴を、迂り込んで行きます。私は玄  
関の帽子掛から、乗馬鞭を外し父に手渡し  
ます。父は両手でそれをぐっと撓めたり、或は  
長靴の胴を、軽く叩いたりし乍ら、出掛けて  
行くのでした。あくそんなつまらぬ動作なの  
に、私は最早乗馬の服装に、平静な気持にな  
ることが出来ず、不思議な興奮を感じられず  
には居られなくなったのでした。そして乗馬  
鞭は私により以上の刺戟を与えたのでした。

父の乗馬鞭は、長さ一米程で父の話に依る  
と、その芯には鯨の骨が這入っているという  
ことでしたが、外側は黒く染めた牛革で包合  
され、握る部分は太く、革の腕貫が付つて居  
り、尖に向つて次第に細くなり、その先端に  
は、柔かい革が約一〇厘縫い付けられて、よ  
く撓う、振るとヒュッと鋭い音を立てるもの  
でした。私が馬場で父を見ると、父は殆ど  
それを馬に当てることもなく、殆どその鞭は  
乗馬長靴の胴の中に入れられて居りました。

兎も角馬術に関する限り、その馬場では群を  
抜くものと見え、性の悪い馬も父の手に懸る  
と、骨抜きにされた様に、大人しくなつてし  
まうのでした。私は激しく乗馬鞭が、父の手



に依って、振られるのを期待しました。そして私は遂に、その目的を達したのです。

九月の半ばも過ぎ、めっきり秋らしくなつた幾日の午後、父は馬場に行き、私は学校から家に帰った途端、夏の名残のような激しい夕立がやって来ました。私は婆やに云われて傘を持って乗馬倶楽部へ、父を迎えに行つたのです。その小屋に父は濡れることなく、雨宿りをして居りましたが、長靴にはあちらこちら赤土が、こびり付いて居りました。所が私が着くと間もなく、厚い雲が裂れて、輝かしい太陽が、その姿を表わし、まるで嘘の様に晴れ渡つたのです。

「折角来て呉れたのに、気の毒だったな。さあ、今日はもう帰るうか」

父は私の手を握って、歩き始めました。暑い日射がギラギラと、照り始め私達は黙って帰途に就いたのです。私達はいつか人通の少い変電所の裏手を通って居りました。

急に何か罵る様な、荒いだみ声が聞えて来ました。曲り角の向うは、やゝ急な坂になつて居て、其処には沢山の材木を積んだ、一台の荷馬車が、止って居るのでした。

「ほーら、どう、どう。」

陰気な顔の髭面の逞しい馬車曳は、赤銅色に灼けた太い腕で、手綱を轡の金具で、馬の口が裂ける程引張るのですが、疲れ切つたその瘦せた馬は、泡を吹いて足掻くだけで、一

こう動こうとはしません。寂しい場所の後押しを頼む人も、通る気配も有りません。

「こりや、進まんか。」

その男は、麻の手綱をぐるぐると空中に振廻すと、はつしとばかり馬の横面めがけて、打下しました。馬は苦じげに顔を除けましたが、ピシッと鋭い音を立てて、頬に鳴りました。

「このくたばり損い奴が、曳かねえ気か、ようし、こうしてやる。」

鞭紐の様な青筋を立てたその男は、手綱をふり捨てると、積荷の陰から長い握り頃の丸太を、一本引き出して来ました。そして改めて左手に手綱を握ると、右手でしっかりと丸太を握って、斜にかざし、

「そら曳け、この野郎、動け。」

と声を掛け、手綱を兇暴にしゃくり、丸太を馬の背めがけて、殴り付けたのです。ぱくつと鈍い音が響き、馬は苦痛にその瘦せた腰に、満身の力を籠めて、曳きました。然し一寸たりとも動く気配はありません。

「こん畜生、曳かねえ気か。」

男は再び腕を振上げ、残酷な打撃を続けようと身構えたとき、父は静かに声を掛けました。

「おい、おっさん、丸太は止めな。」

馬車曳はびっくりして後を振向きしました。

「誰だい、お前さんは。」

「まあいい、俺は馬を扱いつけてるもんだが馬は丸太なんかで引っぱたいちやいけねえ、丸太は馬の表面は傷けねえが、なかは痛むもんだ、馬は云うことを聞かせるには、鞭がいい、丁度俺は今乗馬の帰りだ。俺が代りにやって見よう。」

そう云い乍ら、父はその男から手綱を奪いました。馬車曳は飽気に取られて、大人しく手綱を渡しました。父は馬に近付くと、軽く馬の頸筋を叩き、

「さあ、しっかり曳け。」

と声を掛け乍ら、右手で長靴の胴に挟まれた、鯨芯入りの鞭を、引き抜いて居りました。尖に付けられた革が微かに動きました。

「ほーら、どう、どう。」

轡をゆっくりと緩め厳しい掛声と共に、鞭をピシリと鳴しました。馬は動きません。然しすっかり落着を取戻して居りました。

「そう、ら。」

と云うなり、鞭は激しい唸を生じて、馬の背へ、腿へ噛み付きました。父の強い臂力に振われた、その物凄く鞭は、恐らく馬にとつては、丸太の何十倍ものかの苦痛であつたのでしようか。馬は眼を血走らせ、死物いで曳き続けました。こつと車が動いたようです。その機を外さず、鞭は正確に背に、腿に交互にその尖は、喰込みました。遂に車は廻り始めたのです。よたよたと哀れな馬は、歩み続

け、ともすると止り勝になる瞬間、強烈な打撃は、時を移さず打下されました。地獄の絵図の様な瞬間が続けられ、馬は坂を昇りつめました。父の顔には、大粒の汗が光り輝いて居りました。それは狂傲とも云うべき、猛々しさでした。男は感歎の声をあげて、云いました。

「うめえもんだな。こりや本職以上だ。本当に、俺あ助かった。」

父はにっこり笑って、

「なあ、おっさん、馬は革の鞭が一番徹えるんだ。よく覚えときな、革の馬に与える苦痛はな、丸太よりも竹よりも大きいんだ。そしてな、与える傷は一番小せえ。だから馬に云う事を聞かせるには、革鞭が一番いい。おめえ一本造つたらどうだい。太い手頃の棒の尖に、革紐を括り付けたもので、充分だよ。これであら大の男が、どんなにひっぱたいやっても、馬の内部に怪我をさせることなんかはねえ、最も皮膚が破れて、血ぐれえは出るかも知れねえが、それだつて丸太で殴ることと較べりや、知れたもんだ。まあ痛い目に合せても、可愛がつてやるんだな。馬はお前達の、宝なんだからな。」

「へえ、そんなもんですかね。いや、然しこりや本当にどうも、有難う御座りました。」馬車曳は丁寧に頭を下げました。私は息が塞がる様な、激しい興奮の中に在り

## 浣腸器と共に

### 久利須照雄

先月号では二十五才になるお嬢さんに対して小生が自らの手で浣腸したことについて述べましたが、それから三十、四才になるバーのママにも浣腸をした経験があります。バーのママは芳子という肥り肉の未亡人で、酒にいさゝか酔つた小生が、探りを入れるように「浣腸」という言葉をお嬢さんに対して、ママも反応を示してくる様子から或は浣腸の愛好者ではないかと、意を強くしました。それから小生の方が積極的に働きかけて、遂には彼女のアパートの部屋まで遊びに行くよ

うになりました。

彼女と親しくなつてから二十日位経つた或る日、何気なしに「浣腸してやろうか」という小生の言葉に、最初の中は、彼女も何だかんだと逃口上を云つていましたが、小生が強引に要求すると、仕方なしに「恥しいけど、して頂こうかしら」と二十CCのガラス製浣腸器を持ち出してきま

した。それから小生は彼女も浣腸の愛好者であることを知つたのです。その中に、次第に彼女の方から浣腸をして呉れというようになり、浣腸の最中にそれをカメラにおさめるようにさえなりました。同封の二枚の写真は、その時に小生がセルフタイマーで撮つたものです。これ以外にも多数の写真をとりました。編集部で集めておられる浣腸の写真の交換等が出来たらどんなに喜ばしいかと存じます。今一つ、貴誌の試みとして広く読者から無記名のアンケートを求められて誌上に発表されては如何ですか、浣腸に関する質問をいくつか誌上に発表してその回答を求めるのです。例えば、  
浣腸を受けた最初の経験  
浣腸の実景を見た経験  
浣腸を受けた時の身体的変化  
異性を直接浣腸した経験  
等々。  
[註] 同封の二枚の写真は公開不可能のものでした。



# （或るソドミアの告白）

## 朝路のぼる

或るソドミアの告白

私には人にも云えぬ限らない悦楽の境地におとし入れる楽しみと苦しみがあります。私は幼い頃、日常女の子と遊び、赤い友禪の布切れなどをみると、もうたまらなくほしくなり、姉や、その友達に笑われたものでした。縁日なども母に連れられて行くと、きつと人形売りの前で時の経つのも忘れて、お河童頭の可愛い人形でもあつと眸を輝かせて母にねだり、やつと買つて貰うと嬉しくて、たまらず、その夜は床に入つても人形を枕下に置いて、仲々寝つかれず、夜半起き出て人形を抱いて遊んだものでした。其の後は年令と共に女の子に対する興味も次第に無くなり、小学校五、六年頃になると若く逞しい、殊に髭のこい先生を見ると何となく涙の出る様な妙な快感に刺戟されて好きな男の先生と一緒にいるだけでも、私は幸福でした。それは人には云えぬ私だけの楽しい秘密だったので、その頃学校へ行くのが人とは別の嬉しさを感じられました。放課後グラウンドでトレ

ニングの為ランニングと短いパンツ姿の体育部の先生の惜しげもなく出しておられる濃い太股の毛を見ると、恥しさと見たいと云う強い慾望に板挟みになり何かのはずみに先生の体に手が触れたりすると、私はもうすっかり真赤になって女の子のように顔もよう上げないのです。きつとそんな時は先生の逞しいサッポーターを締められたパンツの辺りへ私は腫を輝して呆然としていたものでした。

ある夜、宿直の為、学校へ泊られた私の好きなタイプの先生を近所の銭湯で見かけた時は、体を洗うのも忘れて逞ましい先生の裸身を飽す眺めたものです。先生は、そんな私の心を知つてか知らずか、泡立つ石鹸に包まれて洗つていられるのを見ると、何だか他の浴客に先生を見せるの惜しくて、私一人が何時迄も眺めていたくて仕方ありませんでした。そんなわけで自分の家に風呂が有りながら、人の混む銭湯で逞しい男の裸体を眺めるのが楽しみです。家の者が「どうして銭湯が好きだ、

ろう」と不思議そうに云つたりした時には、私はさすがに頬を赤らめて心の秘密を見破られたのではないかとどきどきしたことがあります。家の風呂場の修繕した時は、晴れて銭湯へ行けるのですから嬉しくなつて次々と入つてくる浴客を眺めてつい晩くなり、「お前の風呂は永いナア」と帰つて母にお叱りを受けたこともありつた。それでも自分の気に入つた男の裸体を見た時は、世の中が楽しくて、若し銭湯と云う場所が無ければ、私の此の世に生れた楽しみは、おそらく皆無かつたろうとまで想像されました。

幼い頃、今は亡き父に抱かれて湯に入る時のことが忘れられません。父は常時、真白い六尺褌を締めておりました。この父の褌姿は私にとって、たまらない魅力でした。私は夜などそつと二階の勉強部屋で黒い三尺帯で六尺褌の真似をして遊んだりしたものです。其の後、徴兵検査の結果、私は甲種合格として陸軍の部隊に現役入隊となりましたが、

或るソドミアの告白

その検査場で全員、全裸になつて軍医官の精密なる身体検査を受けましたが、その時は、さすがの私も、逞しい壮丁達の裸像群の中に混つていても、不安と緊張の為に、平素のよくな氣持にならないで済みました。いよいよ入隊して、四、五日は生活の有様が変わつたと物珍らしさの為に夢中で日を送つていましたが、心に少し落付きが来ると、何処を眺めても若い張切つた兵隊ばかりの中の生活に私は忙しい軍務に追われ乍らも、此の二ヶ年の間に、未だ見ぬ戦友達の上に一種の、あこがれと楽しみをもつていました。意地の悪い、いわゆる軍隊の神様と云うべき二年兵や上等兵には、随分と無理な意地の悪い苦しみを味わされて、私達初年兵の泪の乾く間もなく遠い故郷を偲びつておりました。

しかし、私は同性に愛を感じていますので他の初年兵の嫌がる様な仕事も進んで引受けましたし、又、その、つらい任務を同性の古兵に命じられたと思うと、むしろ誇りに思い一生懸命に頑張りました。それを古兵達は私が心より服従したと思つたのか、仲には私を随分と目をかけて陰になり日向になつて面倒を見てくれた人もありました。私は同性の氣に入られるのが嬉しくて、まるで新妻が夫に仕えるような氣持で、いそ／＼と精を出し、それで満足していました。日曜日の朝なども班のK上等兵が私を呼んで「おい髭を剃つて

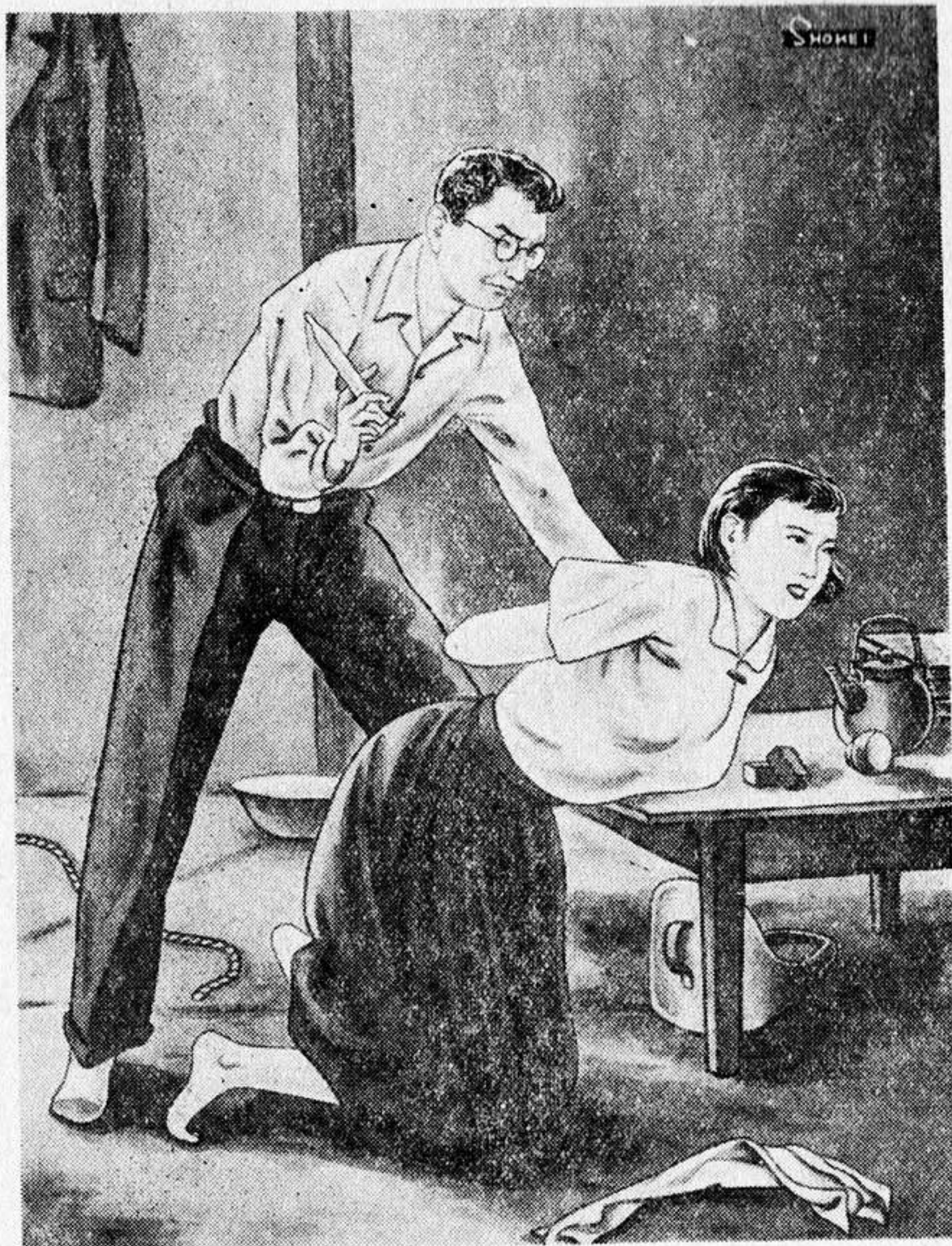
くれ」と云われると、まるで主人の足下にまといつく仔犬のように、心はずみ、浅黒く引締つた男らしい中隊一の好男子のK上等兵の顔や首に何の遠慮もなく、心ゆくまで触れることが出来ると思うと甘酔っぽいものが胸に込上げて、日頃の苦しい生活も、何処かへ消えさり、寝台に上半身をもたせかけたK上等兵の顔に石鹸をぬりつけて居ると私の心は宙に飛ぶように夢中になつてしまふのです。

M上等兵は中隊の数多い好男子の中でも、K上等兵に次ぐ男性的な苦みばしった人でしたが、夏の或る夕方に、中隊の風呂で出逢つた時には、私は思わず舌舐めずりして待ちうけていました。知つてか知らずか、上等兵はサッサと軍服を脱ぐと、鼻唄交りで浴槽の方へ向いました。その一瞬、私は胸を波打せてジツトM上等兵を見守つていました。ハッと息を呑む程に彼の肉体は逞しく見事でした。それ以後はM上等兵が一層好きになりどうする事も出来ず、彼の為なら命もいらぬと思ふ半面、外出したら女の所へ行くであろうと考えると、その女に対して私は限らない憎悪と嫉妬を感じていました。ほんとうに初年兵時代は、普通の世間の常識外れのつらい毎日の連続、殊に、戦時中の軍隊生活された諸君に、私はよくお判りの事だと思います。しかし、私はいくら辛くとも、同性の中で心ゆくまで、幼い時よりあこがれた逞しい男性美の

中で暮らせるのですから、もう全く他の戦友にも云えぬ楽しみでたまりました。男性ばかりの殺風景な軍隊と人は云いますが、私にとっては天国に住むように同性の体臭に溺れきつてしまふのでした。時々私は男か？女か？と自分ながら可笑しくなることがありました。夏等人の嫌がる中隊の不寝番は殊に私にとっては楽しいもの一つでした。それは暑さと日中の激しい訓練にクタクタになつた戦友達が、死んだように深い眠りに入つていますが、ほとんど袴下も脱ぎ落す状態です。陽に、やけた、もり／＼した太股や真白い晒の褌が見えたりして、全く私にとっては、目もくらむばかりの光景です。

そんな私の心が相手に伝わつたのか知れませんが、七八人の上等兵や古兵に、よく兵器倉庫や被服庫又は消燈後の班の寝台の上へ、さそわれたことも度々あります。その中に私の事で上等兵達が無言の中に激しい火花を散らして争うようになったので私は驚いて、それからからはあまり要求に応じぬ様にしました。あれは忘れもしない夏の実弾射撃演習も済み、営庭の木々が、そろそろと冬仕度をする秋も深まつた頃、草にすだく虫の音も、そ／＼にものゝ哀れを感じさせる夜、私は一日の疲れを休める為、床に入ろうとしてみると、遙るか営庭より物悲しい消燈喇叭の音が鳴り響いて来ました。その時、私は昼前に将校室の前





宮崎昭平画集 浣腸のお仕置

「明子さん、貴女は昨日命じておいた数学の宿題を、またサボりましたね、今日はそのお仕置として浣腸をしましょう」

「あら、いやだわ、先生、わたし浣腸なんてされたことないんですもの、恥しいわ。」

「だからお仕置になるんですさあ、動かないように後手に縛りますから、おとなしく背中を手を組み合すんですよ」

「痛くないで、それだったら、あたしお仕置に浣腸され、でも仕方がないわ」

家庭教師の森先生は、生徒の明子さんにうまく口実を設けて浣腸することに半ば成功しました。快心の笑を浮かべて二十CCの浣腸器を持ち上げるのでした。

れが又たまらなく嬉しく感ぜられるのですから一挙兩得とはこの事でしよう。終戦後は一度もそんな機会がありませんが軍国時代は、

私には忘れられぬ、言い替れば私のソドミア全盛時代と言えましよう。

最近では思ふ様な人にも逢う機会もなく一人

淋しく思つて銭湯にてわずかに心を慰めていきます。私のソドミア遍歴も何時まで続く事でしょう。か。

(おわり)

の廊下で出逢つたT上等兵の

「今夜消燈喇叭が鳴つたら俺の所へ来い」

という言葉を今更の如く思い出されて、胸

のときめきを押えながらソツと内務班を抜けた私は、他の戦友に気附かれないうちに用心しつゝ、其の頃、中隊を離れて将校集会所に当番長をしていたT上等兵の部屋の扉をノックして居りました。

「朝路二等兵お呼びで参りました」

私は直立不動で、心持声を震わして言いますと、上等兵は

「おい、来てくれたか、マア、そんなに固くならないで、こちらへ来て菓子でも喰べたらどうだ。」

と優しく笑顔で私を迎えて呉れたのです。

「どうだ、中隊は苦しいだろう。俺は、お前を此所の当番兵に頼んでおいたから明日より練兵に出ないで起床一時間前に此所へ来い」と言うのです。

私は突然の思いがけぬ勤務に驚くと共に、やれ／＼明日より少し楽も出来ると、ずるい考えも起きましたが、又一方T上等兵の心の中も察しられて、妙な心が、はずんで来るのでした。

翌朝私は戦友達の嫉妬と羨望の瞳に送られて、新しい勤務の第一歩を踏み始めました。始めての勤務にて私は先輩の当番兵やT上等兵に服務要領を教わり最初の一日はあわた

だしくすぎ去り私は各中隊よりの当番兵と共に帰ろうとして居りますと上等兵は、ひどくあわてたように、

「お前だけ新米だから明日の勤務の事で話したいから残れ、点呼はとらなくともよい」との事です。あの恐しい中隊の地獄の如く

言われている日夕点呼を、のがれた嬉しさを私はT上等兵に感謝の瞳で一杯で見送りしました。

「今から中隊へ帰つても風呂は無いから、今夜は将集(将校集会所の略名)の風呂へ俺と一緒に入ろう。服は俺の室へ脱いでおけ」

と上等兵は私の全身をじろ／＼と眺め乍ら言われたので私は彼の部屋で服を脱いで禪一つで風呂場へと向いますと、彼は

「おい禪も脱れよ」

と言われて私は一寸羞恥に頬がカツ／＼と火照ってくるを感じていると彼は荒っぽい動作で軍衣袴や襦袢を脱ぎ捨てるときわめて無造作に禪をとり向いの側の風呂場へ入ってゆきました。私も思いきって彼の後を追つて、一緒に湯につかりましたが、別に私の期待した事も無く彼はサッサと身体をふくと足音高く部屋へ帰って行きました。私は何だか期待した自分が可笑しくなつてそこ／＼にして服を身につけ終りました。湯上りの頬の輝く上等兵は又一段と男性美を發揮して、しかも禪一つの姿を椅子に、かけていましたが、間もな

く服を着終ると私の手をとって傍らの寝台に並んで坐ると

「お前は中隊で成績も好い方だし、しっかり頑張るんだぞ、若し苦しい事や他の者に言い難い事があつた時は遠慮なく俺に言え」

そして、暫く考へて居る風でしたが

「俺は肩がこつて困つてゐるんだが、一寸もんでくれよ」

そう言乍ら一旦着た服を脱いで禪一つになり寝台の毛布の上に俯伏せになりました。私に肩をもませて居る上等兵の濃い胸毛も私にはとても美しく、四五日前の中隊相撲大会に出場した逞しい上等兵の裸体を今、自分の目のあたりに見て、私の神経を甘美な世界へひき入れ、思わず揉む手にも力が入るのです。十分程、もんでいますと彼は、やにわに床の上に起き上つて、

「こらえて呉れよ、俺は以前からお前が何となく好きであつたが、中隊に居らぬので淋しかった」

と涙を浮べて云われたので、私も、

「上等兵殿、自分も前より好きでありました」と夢中で云つてしまいました。

軍隊では将校や下士官の当番として一切の身の廻りの世話をするのですが、自分の好みに合った人の当番になった時は、ほんとうに禪まで進んで洗濯させてもらうのです。彼等は其の事を恐縮していますが、私にすればこ



わゆる帆つ立て尻と云う奴そのまゝの姿態でさだめしつらからうから生来フェミニストの私はつかいか棒を尻にあてがって差上げる。そして時ならぬ華麗な二つの雪原に私は躊躇なく絵筆を走らす事である。

病膏毛に入れた私は単に貴絵を眺めるだけでは満足しきれず、こんな想像を逞しくしては拙い絵筆を運ぶようになった。同封の絵数は私のイメージより描き出された素人絵、幸にこの拙文と共に貴誌に掲載の栄を勝ち得たならばどんなに嬉しい事だろう。そしてこれは望むべくもないだろうが実際にモデルを前にして描く事が出来たならば私の貧しい才能を以ってしても今少しリアルに描く事が出来るかも知れない。

云い忘れたが私はあく迄、美と云う事に主眼を置く、従ってその貴絵もあまりにもグロテスクなもの、凄惨眼を覆わしむるようなものは好まない。代理石のようにきめ細かな柔肌にまつわりつく縄目の姿、凌辱と恐怖に身悶える態こそ、私のチャームされる処で、全身これ蚯蚓腫れ、どす黒い血が完膚なき迄に流れていると云ったようなものは痛く感興を阻害する。尻打ちにしてもその剥き卵のような愛らしい臀部はやたらに傷をつけて貰いたくない。私にとっては尊い宝物なのだから――。せいぜい靴が草履が鞭の場合は、二筋三筋の蚯蚓腫れならどうか我慢が出来よう。

**掲載候補作品寸評**

**鞍馬の孕み女** (緑 猛比古)  
お天狗松昔噺シリーズの一つ、女体責めのサジスチックな場面が豊富に出てくる。

**あゝ、この恍惚境** (小村 二郎)  
懸賞の佳作入選作品、長縄絆、日本髪などの被縛姿態に興味を持つ筆者が、女装趣味から次第に自分が折檻されたい欲望を持つようになる過程を甘美的に描く佳篇。

**創作 追 腹** (大島 一)  
切腹を中心にした時代小説、悦虐味万点。

**女性乗馬考** (馬化 狂一)  
或る馬化狂の告白体験、随筆、並に春日さんへの通信といったもの、珍しい投稿。

**被 縛 症** (高村 民子)  
自分の縛られたキャビネ版の二枚の写真を

それはたとえば、あのヘリオトロップのような甘酢っぱい香と刺戟を私の心に植えつけてくれた。

爾来私は寸暇をさいて貴誌の蒐集に没頭するようになった。逆吊、宙吊、水責、火責等々ありとあらゆる責の極致が、苦悶する美女の群が、私の周囲に撩乱の花を咲かせた。何月号であったか貴誌で伊藤晴雨氏が貴絵は芸術品なりと喝破して居られたが、私も双手を挙げて賛意を表したい。およそ人の心に美的感興を呼び覚ますものが芸術なりとせば、枯れ果てた私の心に暖い慈雨を齎らしてくれた貴絵こそは私にとって最大の芸術品と云わねばならない。

女の美しさそれは責によって最もよく發揮される。豪華なドレスも華麗な衣裳も女体本来の美しさに較ぶれば三文の価値もない。私は散歩が好きでよく家人にもつげずらりと街へ出るがたまにまた貴絵にあつたような美女に出くわすと異様な衝動に屢々理性の領域は侵略されそうになる。

江戸好みのお召も紅梅ちらしの長襦袢もひん剝いたらどんな顔をするであろうか……。花恥かしい処女の肌を貪欲な私の眼がたまるところなく舐め廻す。彼女の乳色の肌が羞恥で薄紅色に染まると私は矢も楯もなく彼女の両腕を捻上げて高小手に縛り上げる。後手に緊縛した儘顔は地面に尻を持ち上げる。い

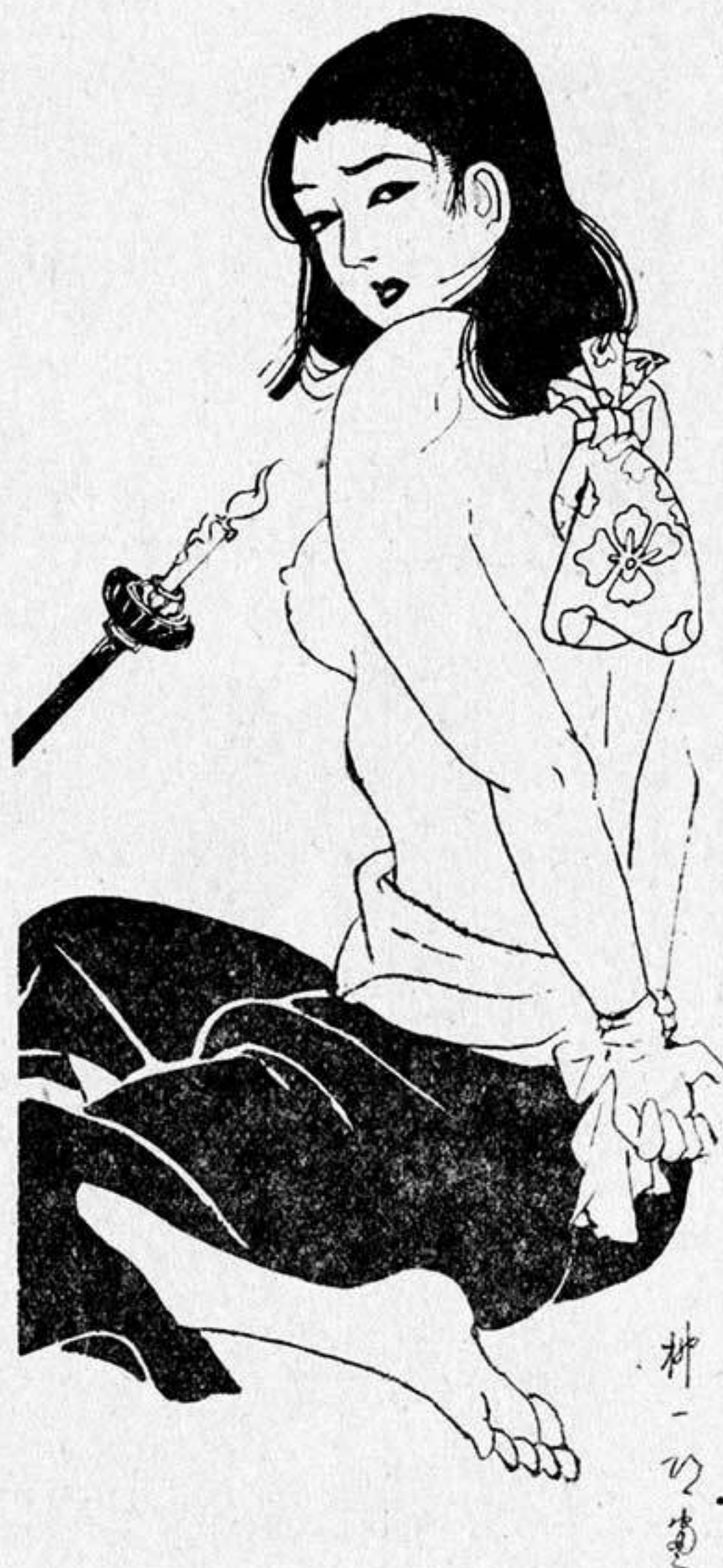
だから私は肉体的苦痛よりも心理的苦悩に喘ぐ女性の姿により一層のエクサイトを感じる。例えば四月号の滝麗子氏筆になる特高の拷問絵図にしても竹刀の尻打ちよりも仰臥して口から鉄瓶の水を注入される絵の方が次に起る生理的現象を悩裏に描かして、より深い感銘を覚える。江戸時代に用いられた蛇責も私にとっては垂涎おくあたわざるものの一つである。

ある。これは主に無毒の蛇を使用したらしいが鉛色に光る蛇身が女体にあまねく遍歴する図は正に私をして時間の觀念を全く忘却せしめる。天来の忠物である女体を責によってさまざまなアングルから鑑賞するチャンスに恵まれぬ私は、こうして種々の貴絵によって僅かに慰撫している次第である。

(終)

## サディズムへの憧れ

京町柳 一郎



私が貴絵に興味をもつようになったのは何時の頃かさだかではないが、戦後の虚脱状態からようやく落着きを取戻した多分昭和二十二、三年の頃からだったと思う。生来の孤独癖から当世流行のガールフレンドとやらもたぬ私は何かしら心の片隅を空虚な風が吹き荒ぶのを感じ云い知れぬ淋しさに鬱々とした毎日を送って居た。そんな或日、近所の書店で不図手にした雑誌の口絵に、私はかつてない激しく心のときめくのを感じた。それは確

か中島喜美氏の筆になるもので半裸の美しい御殿女中が宙吊りにされて居る図柄で純の様に艶やかな肌むちりとした触れ、ばぶるんとはわかれりそうな乳房、紅の湯文字に包まれた細い腰、それ等が繊細なタッチでよく表現されて居た。傍に無難作に投げ捨てられた紅白市松模様の御殿帯、紫矢絢の着物も妙にうら悲しく悩ましくも亦妖しい情緒を漂わして居た。私はこの絵に憑かれたように見入って居た。時の経つのも忘れて――。

それはたとえ、あのヘリオトロップのような甘酢っぱい香と刺戟を私の心に植えつけてくれた。

爾来私は寸暇をさいて貴誌の蒐集に没頭するようになった。逆吊、宙吊、水責、火責等々ありとあらゆる責の極致が、苦悶する美女の群が、私の周囲に撩乱の花を咲かせた。何月号であったか貴誌で伊藤晴雨氏が貴絵は芸術品なりと喝破して居られたが、私も双手を挙げて賛意を表したい。およそ人の心に美的感興を呼び覚ますものが芸術なりとせば、枯れ果てた私の心に暖い慈雨を齎らしてくれた貴絵こそは私にとって最大の芸術品と云わねばならない。

女の美しさそれは責によって最もよく發揮される。豪華なドレスも華麗な衣裳も女体本来の美しさに較ぶれば三文の価値もない。私は散歩が好きでよく家人にもつげずらりと街へ出るがたまにまた貴絵にあつたような美女に出くわすと異様な衝動に屢々理性の領域は侵略されそうになる。

江戸好みのお召も紅梅ちらしの長襦袢もひん剝いたらどんな顔をするであろうか……。花恥かしい処女の肌を貪欲な私の眼がたまるところなく舐め廻す。彼女の乳色の肌が羞恥で薄紅色に染まると私は矢も楯もなく彼女の両腕を捻上げて高小手に縛り上げる。後手に緊縛した儘顔は地面に尻を持ち上げる。い





# 玉稿落穂集 (二)

誌上に載らなかった  
原稿のことども

編集部

今回は先ずフェチズムについて、変わった投稿を述べましょう。従来、身体各部の狂崇については、足、眼（眼帯を含む）鼻、腕、尻、臍窩、等々に関して本誌上に度々発表されましたのは皆さまも御承知のことと思います。そこで、ここに送られてきたのは、十九才になる或る女性からの告白記で、異性の耳朶、殊に耳垢に対して激しい狂崇を持つといった変ったものです。この一文は非常に長くだら／＼と纏りのない書き方だったので一応没となつていますが、フェチズムとしては極めて珍しい型の一つです。

彼女は定時制の短期大学に通っている大学生で、昼間は或る土建会社の事務員をしているのだそうですが、物心ついた頃より耳垢をとることに非常に魅惑を感じ、次第に

成長するに従つて、異性の耳垢をとりたいう強い誘惑を押えきれなくなつて、現在では、異性の耳垢をとるような職業に従事したい念願である。ということでした。

編集部から彼女に対して照会したことについての回答によりますと、一番強い魅力は、異性の耳垢をとること、次に異性の耳垢、三番目には異性の耳朶という順序で、同性のものに対しては比較的関心が薄いとのこと。耳関係以外のフェチズムについて問合せたところ、ザーメンを飲むこと、という返事がありました。彼女の幼時からの詳しい心理的な変化を年次順に記録して貰うつもりが、本誌の休刊で中絶した恰好になっていきます。同じくフェチズムの項で、腰巻、コルセット、ブローズ、褌、等の下着類や靴、スト

ッキング等の足に附随したもの、鼻汁や汗のような分泌物、その対象はいろいろありますが、公開を憚るような対象物による濃厚なるシーンの告白が、その行為自体は別に法に触れるといった性質のものでなくとも、公然性を忌むところから、印刷に廻されたいといったジレンマに陥る悔しい告白もあります。その点本誌が純学術誌ではないのでやむを得ないところもありますが、呉々も残念な次第という外はありません。

男性の切腹及び女性の切腹について、相当数の投稿があります。中には長篇連載、絵入りで送られて来る熱心な方のもありますが自慰的に思ひの赴くまま奔放に書きまくっているのが多く、とてもそのまま公開出来ないのが殆どです。男性の切腹でもそうですが、殊に女性の切腹の自らの告白といったものがそれが自己を偽らない赤裸々なものであればあるだけに、忌避すべき部分が多くて、告白者に対しても全く相済まないといった気持が湧いてきますが、やむを得ず筆を揮つて削除している始末です。嘗ての信太啓子さんの「開花の契機」でも、今から思えば、肝腎のところは大斧を揮るって削ってしまったのですし、その後の彼女の真面目な告白も、ことセックスに関してのことだけに、十数篇の没の連続で投稿意欲を失わしめたのは、かえすがえすも残念でした。

本誌上で春田一郎氏の「幽囚十ヶ月」を連載して好評を博していますが、獄中記といった体験記も数多くありません。多くは誇張されて書いてあるか、或は殊更ある部分のみ強調されたといった書きぶりなので、どうかと思ひます。中には、強姦強盗罪で六年の刑を受けて最近出所したもののだが、貴誌を読んで自分の今まで行つて来たことを偽らずに告白したいといつて送つてきた手記は、彼が警察で述べたであろう調書以上に詳細をきわめたもので、彼が数多くの婦女を路上に襲つて強姦したり、持物を強奪したりする時の心理の変化が、起きた事件の順を追つてよく描かれていたし、捕つてから刑務所へ服役するに至るまでの経過も非凡の書き方ではありましたが、内容が内容だけに公開が憚られました。

このあたりで「要参考、禁発表」の原稿保存箱を一寸覗いてみましょう。羽村京子さんからの、読者通信と流腸に関するアイデアとが出てきました。——前略——私もとうとう八ヶ月の妊婦になろうとしています。毎日大きなお腹をかかえてやたやたしています。「読者通信」のところで大阪の久方様の妊婦讀美論を読んで思わずドキッとしてしました。このごろ「股間縛り」がよく出ているので妊婦だ腹に試してみたらお腹が縦に溝が入つて二つになりました、荷物のように亀の甲に縄をか

けてみたら妙な恰好になりました。どなたか子を持つた腹に縄をかける面白い方法を考えて頂きたいと思ひます。八ヶ月の大きなお腹では空気や液体を大腸内に多量注入することは出来ませんが、便秘がちなので流腸はしよつちゆうしてもらっています。——中略——「人間料理」の空想をしました。雞を割くようにバラバラに料理されてみたいなあという気がします。臓腑もどれ一つとして無駄にならないで、腸だって腸詰をつくるのが出来ます。皮だって本の表紙になるし、骨だってペーパーナイフその他の細工物になります。考えていたらムズムズしてくる空想です。私は絵がかけませんので麗子さんか峯子さんに描いていただけたらと思つて二三のアイデアにすぎませんが書いて一緒にお送りします。もしお願いを聞き入れて下さったらこれ以上の喜びはありません。

この羽村京子さんのアイデアというのは、A、美女人肉料理（シリーズ物）として、1から10まで、1は四手に縛られた目かくしされた美女がぶらさげられた獲物として登場、こゝで流腸或は本式の腸洗滌が実施される。2は大きなマナイタに似向けに大の字に縛られた裸女、3は、咽喉もとから肛門部まで真二つに割れる、4は腹わたを出されて水道の水できれいに水洗いされる。5では、臓腑をすつかり取り出して大きな皿の上に盛り上げ

る。6、臓物をとり出した女体は足首で吊り上げる。7、逆さ吊りのまゝ鋸を入れて左右に二つに分ける。8、皮をはがし、首を切断する。頭部は更に分解され脳ミソが取り出される。9、脚と股の肉は片方ずつ吊られて冷蔵庫に貯えられる。10、分解した頭部や胸部は更にきれいに肉をそがれ、骨と肉に分ける。細い肉は腸詰にする。

以上のような趣向で、これは羽村京子さんの希望で都築峯子さんの筆で絵になりましたが、とうとう発表出来ませんでした。

B、妊婦の腹剖き、猿ぐつわされた妊婦が柱に後手に縛られているのが1、2は、腹を縦に立ち割られて溢れ出て流れ落ちるハラワタの絵といった趣向、添景人物として二、三の男女を配する。その会話は、「お前の腹の子が見てえ」とか、「腹の子は百薬の長」とか「孕み女の肝は万病に利く薬だ」とか、「あなたの卵巣をたべてホルモンをつけるのよ」とか云々。

C、風船玉、これは後手に縛った女を逆さ吊りにして、お腹の中へ空気を送り込んで風船玉のようにふくらませる。

D、蛙の実験、「蛙の実験は他のポーズでもいろいろ出来ます。場合によっては腹が破裂してハラワタの散乱したのやハラワタの一部を口から吹き出したのも面白いと思ひます」と京子さんは書いていますが、後手に縛られ



さ女体が横に倒した椅子の上に仰向けになつてゐる略画で、肛門から管を入れて高圧空気がどんどん送り込まれて、腹がマリのよう膨らむといった構想で、お腹が破裂するまで止めないのだそうです。

E、娘の串焼き、串で口から縦に肛門まで貫き、小串二本で手足を胸に縫いつける。大きな皿に盛ってお客さんに出す。腹を割って臓もつを抜いたものでもよいし、詰め物をして

縫い合したものでよい。

F、お刺身の切り取り喰い、逆さ吊りにした女体の胴を出来るだけきつく締め、胴のところでテーブルにはめこみ、生きたまゝフオークとナイフで脚、腰の肉のついたところをそぎとり、ソースをつけて食べる。(他に二、三の人物を配する)最後に腸がテーブルの上に散乱する。

以上は全部略画入りで、情景描写も詳しく

説明されています。大変嗜虐的なアイデアで絵として成功させるにはリアリスチックなゆき方では、困難なため、折角都築肇子さんに苦心惨憺の末完成して貰いながら誌上に掲載される迄に至りませんでした。

次号では、更に「要参考、禁発表」の秘庫を訪ねてみましょう。

(以上)

## 女優の素足

高原正夫

エバ・ガードナーの素足、最近の圧巻は「裸足の伯爵夫人」で、これは題名の示す通り異色ある女優であるガードナーの可愛らしい素足が堪能出来る。ガードナー扮するところのマリヤが踊子時代、アパートの居室のカートンの蔭で、男と向き合つて恐らく接吻してゐる場面、ガードナーの裾から、膝から下の素足がまる出しで、ベニキュアをした足の爪

がハッキリ見え、ハッと息を吞ませるものがある。ガードナーの体や顔は大柄であるが、彼女の素足は小型で足指も短く可愛らしい。足の爪は四角か或は丸形の様である。その足指が、接吻の興奮によつてであろう、左の母指がキュッと上に反り返り、第二指以下は反対に下側に反り乍ら身悶えすると言う、素足フアンにとつてはドキンとさせられるエロチ

ックな場面である。その他、ジブシイに扮して、芝生の上を素足で踊り班う場面も美しく悩ましい。

ジャンナ・マリヤ・カナレの素足。次ぎは、一九四七年のミス・イタリアの栄冠を勝ち得たと言う肉体系女優カナレの素足の美。圧倒する肉体美を以て妖しく活躍するこの女優の素足は映画「テオドラ」の中にいくらか出て来るが残念のことにガードナーの様にハッキリ足の指や足の爪迄確実に鑑賞出来る場面は無い。その代り、彼女が捕われて牢屋に入れられる場面、彼女は悲鳴を上げ乍ら必死の抵抗を試みるけれども、後ろ手に燃じ上げられて牢屋の片隅に押し詰められ、遂に観念してガククリと身を投げ出してしまふ。そこに牢番がにじり寄つて行く。彼の両手

に鉄の足枷足鎖が冷く無気味に光つて居る。彼女は両足を投げ出し、ガククリと抵抗を止めたままで、悲しそうに、「痛くしないでね……私の足首は弱いのですから……」と哀願する。牢番は、投げ出された彼女の両足首ににじり寄り、先ず右の足首にゆつくりと鉄の鎖を嵌める。彼女は自分の足首に冷い足枷が嵌められるのを、悲しそうに又訴える様な眼眸で眺めて居る。牢番は、右足首を繋ぎ終えてから、彼女を見上げる。視線が合う。牢番は慌てて視線を外らすと彼女の左腕の腕飾りに目が止る。そこで彼は、彼女のエロチシズムと腕飾りに誘惑されて、左足首を繋ぐことを断念し、その上、折角嵌めた右足首の鎖をも外して、逃がしてしまうのである。誠に息詰る光景である。この時見えたところからすると、カナレの素足はガードナーより大型であり、足の指も爪も長目の様に思われた。

高峰三枝子の素足、彼女の数多い映画のうち素足で出て来る場面も多々あったと思われるが、前二者の様にハッキリと三枝子の素足が鑑賞出来る様に画面に出たことは無いのであるまいか。私が彼女の素足を判断するには二つの資料しか無い。一つは昔の映画のステールで下駄履きでシャガンだ姿。これによれば側面からではあるが、右足の母指から第五指まで、従つて足の爪の形も可成りハッキ

リ想像出来る。もう一つは、彼女が未だ売出しの頃だから娘時代であるが、ブラウスとパンツ姿で、何処かの河原の大岩に腰掛けて撮つた夏のプロマイド写真、これはサンダルも何も履かず全くの素足である。この二つの写真から総合すると、彼女の足の大きさは普通形はやや中広く足指の長さも普通、足の爪の恰好は大体四角であるが、全体に一種のなまめかしさと言うかエロチシズムがただよつて居た。彼女は最近も浴衣姿の写真をよく撮るが、これは前に言つた通り、下駄を履いた立姿が大部分なので、角度の関係から、よく判断つかない。但しその場合でも、彼女は足の指先に力を入れて下駄を押える様に居るのである。彼女の心は何時も歓びに顫えて居るのであるか、苦しみ悶えて居るのであるか、無意識にやつて居るのであるか、本人の外分らない。高峰三枝子と言へば、その昔は高慢な女との評が一部にあったと聞くが、私は彼女に直接会つたこともないし、真偽は知らない。又仮りに昔高慢であつたとしても今はそう言う事は無からう。此の頃彼女は多少スランプの様であるが、私は三枝子フアンの一入としてその健斗を祈つて止まない。

高慢で思い出したけれども、私は嘗て、勿論彼女に対してでは無いが、余り高慢な女に出会ふと、反動として、その女を捕えて牢屋

に入れ、後手に縛り上げて抵抗出来ない様にしてしまひ、次に靴下を脱がせて素足にし、その両足首を鉄の鎖でガククリと繋いで、全くその女が観念してしまつたところを、ゆつくりと心ゆく迄、足の指や足の爪を弄んでやりたいと言う空想に駆られたことがあつた。前記映画「テオドラ」を見て、私は図らずも此の事を思い出した。

高峰三枝子の素足、これも素足の映画には度々出て居るにしても、ハッキリ鑑賞出来たものは無い。「カルメン故郷に帰る」で踊子になつて板の間で踊るところを、カメラが足部を追つたものがあるが、何分動いて居るのでハッキリ分らない。但し、ベニキュアした白い素足が、踊るにつれて板の間を移動する場面は充分に美しい。ほかに、絵のうまい彼女がアトリエで軽装になり筆を振つて居る時ローマ式(?)の履物をはき両足を前に投げ出して居る写真が何かのグラフにあったが、これは角度の関係から横座り程ハッキリしないが、それでも相当の大きさもあり、ピンとも合つて居るので足の爪の様子まで分るので大体の見当はついた。それと、最近の「浮雲」のボスター写真等から判断すると、彼女の素足は大型で伸々として居り、足の指も足の爪も長白であつて、彼女の無邪気な円顔と違つた一種の美しさを持つて居ると判定する。

(完)



# 「百合子の記録」

渡 辺 陽

## 序

去る十月、筆者は九州福岡のN町で「百合子」と呼ぶ、まことに類稀な女性とめぐり会った。本手記は、同女の話を筆者がまとめて一文に綴ったものである。

N町と云えば遊廓として日本的に名高い土地であることは申す迄もない。百合子はこの町の余り大きくない棲に籍を置いている。その種類の女性であった。然しながら、身長五尺三寸、眼はパッチリと二皮に大きく、鼻梁がすっきりと通って高く、官能的な唇と白い歯並びは仲々の美人である。そして何よりもその身長にも不拘、白い膚のせい、醜陋的な柔らかなさの感じを具えているのであった。ダンス・フロアを具えた広い応接間で、例

の品定めをしていた筆者は、文字通り群鵝の一鶴と云った形の彼女に指さした。連絡に行ったヤリ手婆の返事は、意外なことに「ショート・タイムなら」と云うのである。時刻は宵の口の六時過ぎ、普通なら大喜びでしほれるだけしほろうと云うところでののだが。

部屋に入って三度目に筆者の驚いた事は、彼女は薄い支那服ただ一枚で下着をつけず、それにその肉体が想像以上に素晴らしいことであつた。部屋に入るや否や、いきなりその支那服を（後で気がついたが、この服たるや思い切つて身体にピッタリと合せて裾を切り込み、それにフアスナアの操作で直に脱げるようになっていた）かなぐり捨てたのだ。アブノーマルの道ではかなりベテランのつ

れだけ興味を持って、通常の愚かしい行為はそっちのけに、彼女の人となりを根掘り葉掘り訊きたゞすのに夢中になって行つた。初めは冷淡な返事をしていた彼女は、やがて筆者が奇譚クラブのことに言及するや、途端にあらわに熱意を示し始めた。彼女も、この現代日本文化の誇りとも云うべき奇譚クラブの愛読者であつたことは云う迄もない。「私が此処で働いているのは生活の爲ではありません。毎日出来るだけ沢山の男性に、私の身体を茶茶苦茶に弄んで欲しいからで、それも土方や人夫と云つたような男達に。だから、あなたの様な紳士、それに中年の人は余り嬉しくないのです」と云うようなことから、これから記すような身上話を筆者は明かされたのである。もと

より彼女の承諾を得てこの稿にし、此処に投稿する次第であるが、読者にして興味を持たれる方には、その人がアブノーマリストとして立派である限り、喜んで彼女の居所をお知らせしたいと思う。

## 一、生い立ち

私は今満二十八才、父も母も兄弟もありません。父母と二人の弟妹は昭和二十年三月の大空襲の時、東京の深川で行方不明になりました。当時、北多摩のN飛行機工場へ女学校から学徒動員に行つていて、偶然にも命を長らえた私は、それから叔母の許に引き取られました。この叔母というのが私の母の妹だったので、終戦後、私はこの叔母の夫である叔父によって、今日のような私にされてしまったのです。

叔母が昭和二十三年に、叔父が去年の暮にそれ／＼他界して行つたのですが、終戦後ずっと叔父の死ぬ迄、私はこの叔父達の生活の糧として働かれ、又、ただ生活の糧というだけではなく、叔父の趣味によつて教育されて参つたのです。御推察戴けるように、叔母の死後は、私は叔父を表面では叔父と呼びながら、ほんとうは夫として仕え、事実上の妻となつていたのです。叔父の仕事は所謂、口入業であつたのですが、私が世話になり、そして終戦となつてか

らは、ずっと東京を離れて旅廻りを続ける、一種の小さな興行師となりました。小さな、と申しますのは、興行師が叔父であり、役者はこの私唯一人でありましたからです。それがどんな興行であるか御想像出来ることゝ思いますが、少し、いゝえ非常に普通とは違って、興味があるかと、私も思います。

この叔父の御蔭で、私は本当に変わった女にされてしまいました。初めからそのような性格があつたことゝも思いますが、東京の美校を出ながら口入屋を浅草でやつていた、この変わった叔父によつて、今日の私が創られてしまったのです。幸か不幸か私には判りませんが、どっちにしろ、他に変わりようのない私と申す他ございません。

初めは叔父、叔母と私の三人の、後には叔父と私二人の、日本全国を股にかけての旅廻りのこと／＼をこれから申し上げ度いと思ひます。細い点については忘れたことも沢山ございますが、私自身が身を持って経験し、身を以て味いました、特別に印象深いことだけは決して忘れて居ませんので、詳細に申し述べ度いと思ひます。

（以下、彼女の語るまゝに記録したメモを筆者に於て適当に取捨し、且分類し、次に述べて行くような四つの分類に分つた。彼女の語は宵の口から深更午前二時頃までに及ぶ長い

ものであつたが、あまり興味のない箇所、公開をはばかる点等は、適当に削除したことを御諒承戴き度い。）

## 二、その一「写真のモデル」

写真のモデルと申しますれば御想像戴けますように、まる裸の私の芸術的と申しますにはあまりに縁遠い、さまざまの姿態のものでございます。そして、それは何枚も何枚も焼増しされて、好事家の間に売られる為のものでもございました。初めはいやでいやでたまらず、顔を隠してばかり居た私でございましたが、しまいに何ともなくなり、進んで殊更恥かしい恰好をするようにさへなつてしまいました。

顔を隠すということにつきましては、叔父も初めはこのことに注意し、猿ぐつわを使用したり、マスクを使つたりしていたのですがとう／＼最後に叔父の好みに合った一つの方法を発見しました。それはビニール・テープで鼻を下から上へ吊り上げて、額にそのテープを貼りつけるといふ方法でございます。こうしますと、鼻の穴が黒々と正面に開いて、唇がそれにつれて吊り上り、眉のところは皺が出来、容貌が大変に変わつてしまいます。叔父はこのテープを当時苦心しては進駐軍から購入し、大切にしていたのでした。後にも述べますが、叔父は私の鼻を弄ぶことに大變強

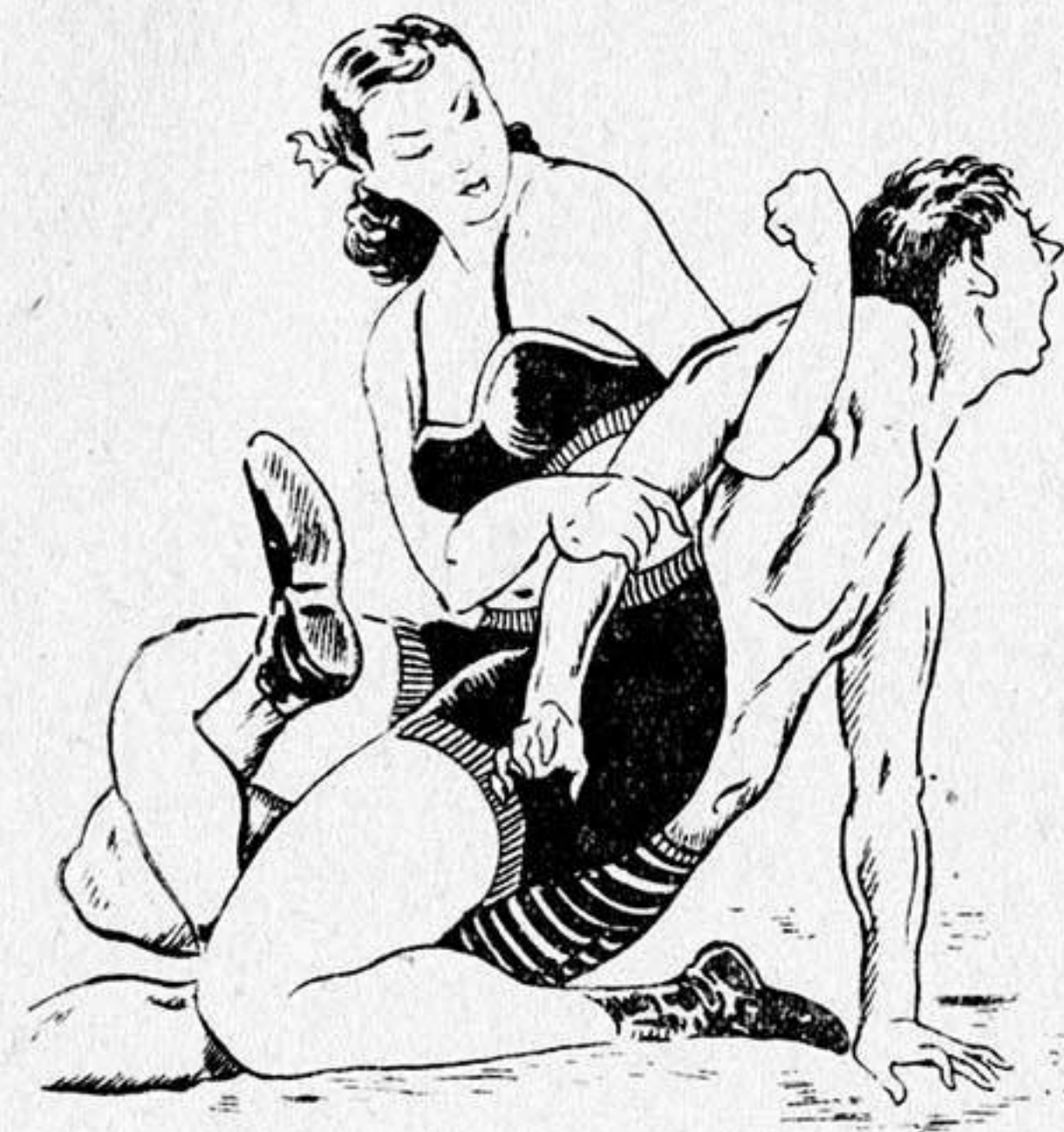






どこへあたらたら何点、と興奮わめく男達の弄びものにされたこともございます。生卵をなげつけられ、それが額にあたり身体中を流れていく時の気味悪さは、一寸表現の言葉もございません。痛くない矢やボールよりも、痛いおちよくや箸置き、または生卵の方が、私には印象強く残っております。

それから、「御テーブル」と叔父の称する



## あるラヴレター

——長瀬昭子さんへ——

畑 晃

サービスさせられたことも屢々でございます。それはテーブルの上に大の字に寝させられ、その私の身体の上に食物を並べるのでございます。

同じような趣向で「足ぬくめ」になったこともございます。テーブルか机の下に横たわり、食事をする人々の足をぬくめる役でございます。勿論両手は縛られていますから、た

だじつと寝ているだけなのですが、男特有の脂臭い足が鼻の上にのせられ、胸の上に置かれたりするのを真暗い中で味わねばならない気持はなみ／＼ならぬものでございました。

〔編集部註〕筆者から誌上に掲載するようヌード写真や緊縛写真数枚、原稿と同封してありましたが、都合により誌上掲載を見合せます。

長瀬昭子さん

貴女が「奇譚クラブ」五月号に書かれた「女サディストの手記」、非常に感銘深く読ませて戴きました。

ぼくは自分でサディストを自認している者の一人ですが、これまで女性のサディストには全然興味を持っていなかったのです。ぼくは古川裕子の「囚衣」の載った号からの「奇ク」を全部持っているが、森山美歌さんにして、春日ルミさんにして、最近の荒井貞子さん、戸破貞子さん等、こう云っては悪いけれど、全然興味をもたなかったのです。

然し、三月号で「私の体験記」を読み、更に「女サディストの記」を読んで、貴女に斯くの如きラヴレター（といっている）を書いて見たくなったのです。つまり、これは男サディストなるぼくから、女サディストの貴女に宛てたラヴレターです。

昭子さん——と呼ぶのを許してほしい。

元来、女は恐らくマゾヒストたるが本筋だと思う。その点で古川裕子さん等は本筋の中でも本筋の人でしょう。前に云った通り、女のサディストは嫌いだといってもいい位です。

そのぼくが貴女に手紙を書く気になったのはやはりそれ相当の理由があるのです。

昭子さん——

第一の理由は貴女が同性を相手にしているということ。前にあげた森山さん等の場合はその対象が男性なのでやゝ変態という感じがするのです。貴女はこう書いています。

「私は女性の美しい肉体を讚美致します。殊に女性の肉体に力が充満して、緊張しきつた時程美しいものは他に類がないとさえ思います。（中略）それに女性同志の格闘には女性特有の柔い感触がありますし、勝った時の優越感とは又格別です」（五月号一五七頁）

確かにその通りだとぼくは思います。ぼく等男性のサディスト達もその感覚を味うのが最後の目的だと考えます。（勿論、性関係その他の男女間の問題が立ち入る時は別です）然らば、男性がマゾヒストであって、女性がサディストであった場合はどうか。勿論、征服欲は完全に満足されるに違いありません。満足以上のものがあるでしょう。しかし、その場合は只、それだけではないでしょう。若し、その通りであるとすれば、ぼくは女性のサイディトというものは無意味な存在だと考えます。サイディズムの対象は女でなければならぬ。何回もいわれることですが、その中に「人間性」の美しさを表現するの

れば一個の人格ある人間を苦しめるだけの価値は絶対ないというべきでしょう。その点二俣志津子さんのものにもある程度の魅力を感じますが、二俣さんの場合少くもスパーウィーマンらしく面白くない。

では、男性のマゾヒストは一体どうしたらいいか、これは同性のサディストに委せるのが一番いい、若し、それが出来ない場合は奴隷として女性が男性を支配するがいい、そうでない「遊び」はどうも感心出来ません。

昭子さん

ぼくは貴女を讚美するラヴレターを書いているので。他の女性サディスト諸姉を非難しようとして、この手紙を書いている訳ではない。先にすすみましょう。

第二に貴女は縄を用いてない。メトミに重点をおいている。ぼくは本当の責めは「緊縛」でないと思っています。これは吾妻新氏が女性にズボンをはくべきだという信念と同様、「責め」の本体は「緊縛」になく、「仕置」になく、肉体的な苦痛（それは自己と他人の直接の接触によるものに限ります）と精神的な苦痛を与えるのが本筋だというのはぼくの信念です。責め道具を使うのは下、緊縛は下です。ぼくは自分の敏子という対象（本年十八才、ぼくの許嫁、今秋結婚の予定）は一度も縛ったことがない。責め道具を使ったのは一度か二度です。その他は力道山流の肉

体的苦痛と精神的苦痛ばかりです。

昭子さん

正直にいいましょう。ぼくはあなたを責めて見たい。貴女と猛烈なる格闘を演じて見たい。幸い、ぼくは自分の時間と金には不自由していません。一度、お手合せを願いたいのです。その時にはぼくも日頃の意見をすべて責め道具を使うかも知れない。

あなたは高い女サディストとしての誇りをもっている。しかし、それは同性に対してです。然らば、男性たるぼくが貴女のその誇りをうち砕いてやりたい。その時、ぼくが勝ったら貴女は敏子と共にぼくの相手になりなさい。若し、万一、ぼくが負けたら貴女の相手として敏子を進呈する。（それは彼女も同意です。ぼく達二人は今非常に「自由」であることをつけ加えておきます。ぼく達のことはいずれ敏子の日記を公開します。）

昭子さん

どうです。やって見ませんか、出来れば入場料をとって公開してもよし、敏子をジャッ

シに三人切りでやっても結構です。勝手なことを書きましたが、以上でペンをおきます。

長瀬昭子様

畑 晃



## 映画、雑誌、芝居の

## 緊縛場面

## 波羅田讓一

私も先天的と云うのか、サディ

ズムの傾向が見られ、女を縛るとか、綺麗に結び上げた髪を崩すと云うことに妙に興味を持たれ、映画でも、雑誌でもそう云う処があれば切り取り一人悦に入っております。左に切り抜きの一部を抜粋させていただきます。

## 『変化大名』

山手樹一郎作 木俣清史画

## 【二五一回】

(昨年十二月より北海タイムス朝刊に連載されたもの)

納屋の二階は、四方壁の一方に高い明り取りの窓が一つある切りで、その牢獄の様な板敷の真ん中に、うしろ手に手足を結わかれたお咲が、手拭で猿ぐつわをされた

まゝころがされていた。

「いたなお咲き」

小弥太は見るなり、獲物を狙う驚のごとくつか／＼とそばへ進みよって、乱れた髪を引つつかみぐいと引きずる。お咲きの冷たい目がじろりと小弥太を見て、ふふんと鼻先でわらうように、不敵にもそばを向いた。

「お咲き、もうこうなつては、どうもがいて見ても駄目だ。いっそ痛いおもいをするより、復讐鬼のかくれ家が素直に白状してしまえば、命だけは助けてやろう」

小弥太が心にもないことを横柄にいう、お咲きは体中に敵意をみながら見て見向うともしない。

「ふむ、返事のないところを見ると痛い思いがしたいのか」

「おいあの弓折れを取ってくれ」

若侍は一瞬、自分が折檻でもされるような顔をしたがすぐ持つて来て小弥太に渡す。

「お咲き、素直に白状するか、どうだ」

弓の折れでぐいとお咲きの顎をこじあげて悪鬼の様に目を光らすお咲きはそれでも知らん顔をしていた。

「うぬッ」

小弥太は容赦なく弓の折れを振りあげて、びしりと背中へ一打ちくられる。餅を引叩く様なにぶい音がしてさすがにお咲きは、体中に火の走る様な激痛を感じて、思わずのけ反りながら苦痛の顔を歪める。

「これでもか」ビシリ

「うぬッ」びしり

お咲はその度に歯をくいしばって、のけぞりながらもついにたえ

られなくなつて、床へのめり倒れてゆく、肩で嵐の様に息を切っている。

「お咲、これでもまだ木をあげぬ気か」

喉を鳴らしている様な小弥太の声に、若侍たちは思わず目をそむける。(以下略)

## 【二五二回】

小弥太はお咲の裸身を思い切り引叩いて、復讐鬼のかくれ家を白状させるつもりだったが、そのあまりに美しい肌を見ている中にふっと気が変つてきた。

「お咲——」

弓の折れを投げ出すなり、我にもなく小弥太はお咲の肩と髪をつかんで、床から引つべがえすように力一杯ぐいと引き起す。

「ううッ」お咲は羞恥と憤怒に、身もがきして、その手を逃がれようとしたが、手足の自由を奪われている上に、野獣になり切っている男の力には到底かなうはずはなく、無理にそこへ引き据えられてしまう。

「どうだ、白状をしないか、ウーム強情な女だ、よし、しめ殺してやる」うわ言の様に、小弥太は、喉へからんだ左手にじんわりと力を入れながら右手が蛇の様に乳房へたわむれてきた。(以下略)

## 『ごろつき侍』

野村胡堂作 今村恒美画

(読切小説集、昭和二十七年五月号誌上に)

## 水責め

(前略)

剣持礼之進はその梯子をそつと倒して、軒隣のお楽の家の屋根に掛けるのは大して六つかしいことではありません。それから静かに屋根を踏んで、お勝手の上の天窓に手を掛けました。

綱を結んでなかったので、引窓の戸は思いの外簡単に開いて、お楽の家の中は眼の下に浅敷から舞台を眺めるように明らに見られるのです。

「——」

剣持礼之進は、危ふく声を出すところでした。お楽の部屋はさながら地獄変相図が展開して居りました。

お楽は長襦袢一つにされて、嚴重な狼藉を噛まされ、手も足も毘布巻のように縛られて、畳の上へ引き据えられて、気の遠くなる様な責め手に逢つて居るのです。

「いえッ、園姫を何処へ隠したッ」

覆面の男は三人、

「園姫は、屋敷に送り還されるか次第によつては殺される丈のことだ、いずれにしても、お前の損になるまい——云わぬか、お楽」

三人の覆面は、今迄も拷問の限りをつくしたらしくお楽は半死半生の態ですが、何と云われても、頑固に頭固に頭を振りつづけるのです。

「恐ろしい強情だ、松葉燻しにして、火鉢の上に逆様に吊るのも面白いが、煙が出ると近所の衆がうるさい、大盥に水を一杯に張つて水責めにして見るが宜い」

それは実に、悪魔の知恵でした大盥を座敷の中に持ち込むと、水

瓶の中の水をそれにプチ込んで、その上手桶で五、六杯加えて縛つたまゝのお楽を、二人の大男の手で逆様にそれへ浸け込むのです。

水へ首まで入れて引上げ、引上げては又水へ入れられるお楽の苦しみは、はたの目にも痛々しく剣持礼之進は天窓の上から幾度飛び込もうとしたかわかりません。

「サア、まだ云わぬか、強情な女だ」

伊達采女らしいのは、お楽の苦しむ姿を面白そうに眺めて飽くまでこの責めの遊戯をつづけさせようとするのです。(この項の挿絵がない。)

## 「映画」

角田喜久雄作

## 『風雲将棋谷』

これは戦前と戦後とのを見たが自分の好むとする所はやはり大倉千代子が扮する雨太郎(坂妻)の許嫁がサソリ道人に高手小手に後手に縛られて責められる状態が前から後から大寫されて、満喫させられて二度も三度も見続けたが、

今日封切られた、市川右太衛門と石井光子との映画はたいして興を呼ばなかった。また

外国映画では、戦前封切られた

## 『ノートルタムのセムシ男』

俳優は全部忘れてしまったが、或る娘が無実の罪に問われて幼稚な裁判から絞首刑になる迄、手力セ、足力セをはめられて各地に廻わされて行く状態が前から後から斜め上から何回も大寫され、私の心をタンノウさせてくれた。

## (芝居)

何と云つても伊藤雨晴画伯をモデルにして作られたと云う、五月信子主演の「火あぶり」は、戦前戦後を通じて忘れ得ないものでありましょう。私は、日劇小劇場で一日中見続けても見飽きない状態であった、この内容は、各地で公演されたので同好の志は見られた事と思ひますので省略させていただきます。(以上)



## 体験記

## 吹き溜り

## 近東規矩也

## 坐り込み騒動

丹羽文雄氏が、新潮別冊にS子<sup>（一）</sup>を、小説新潮に再会を、各々載せている。これは私の入院している病院の患者の実態を、まことに精緻を極めた調査資料を基としてフィクション化したものであるが、風俗作家にして、はじめて可能な仕事であろうと思われる巧みさで作品化されている。殊に坐り込みを背景にS子と云う女の眼から見た。患者自治会のあり方が、新らしくカリカチュアされている点など、実に面白い。舟橋聖一氏の、その時々<sup>（二）</sup>の社会の生きた材料を扱った夏子<sup>（三）</sup>のものと共通した面白さを覚える。現に、このS子のなかに登場する某君が、資料を提供した患者に、勢込んで怒鳴り込んで行った事実など、まったく、事実は小説よりも奇なり、と称すべきかも知れない。再会に出て来る、相愛の男女が

主治医から外泊許可を買って、池袋の温泉マアクの旅館で一夜を過ごし、事実上の夫婦となって病院へ帰って来るシノブシスなど、余りに生々しい現実であっただけに、反響が大きかった。

余談は、扱て置き、この物語りは昨年の九月にさかのぼる。当時、この病院は施設も風紀も、全くひどいものがあつた。日曜は文字通り本日休診で医師は一人もいなかった。重患が苦痛を訴えようが、高熱患者が出ようがおかまいなしである。日直の看護婦は勤務室で雑誌に読みふけり、病室の巡廻は夕方の検温時まで行わない。病院だというのに、氷の備えさえない有様で、死亡者が出れば、五分と経たぬ間に雑役夫が屍室に搬んでしまう。線香一本あげる事も許されなかった。もともと、ここは日立航空機株式会社の寮であつたものを一部改造して病院としたため、旧館の

病棟は木造のバラックに近い建物であつた。現在の医療法人財団に替ってから、暫らくしてサトリウム風の新館が出来上り、外来病棟や大玄関が構築されたのだそうである。従つて病室も自治会が結成される前には、床板に莫塵を敷き詰め、その上にマットを置いた病室が大半であつた。附近には、赤い集団地帯とか、赤い患者などの新語を生んだ、清瀬療養所や東京国立療養所などがあり、この病院も入院患者の九〇%までが結核症で療養中のものであつた。しかも殆んど全部が、生活保護法の適受を受けている、所謂、生保患者なのである。台東区関係の福祉事務所の幹旋に係る行路病者や、山谷のドヤ住いの者が一番多かった。上野の山の住人、これは葵部落と云われている区劃の人々である。それに地下道の浮浪者、バタ屋、駅の構内で、ブウパイをやっているダフ屋、ボン売（覚醒剤売り）

ニコヨン労働者等であつた。つまり、ある意味での人生の落伍者であり、喰い詰めの流れ落ちて落ち行く先が、この病院でもあつた。いふなれば、人生の終着駅である。しかしこうした人々にとってこの病院は天国の存在であつた。三度の食事の心配はいらない。入浴も週一回は出来るし、病衣は毎週洗い更しが取替えて貰える。おまけに月々六百円の併給金が貰える。この併給金は生活扶助料であり、理髪、被服、日用品の購入を目的として算出されたもので、平均一人当り月一万六千円の医療費の外に支給される訳なのである。その上、映画も年二回程度、観覧出来るし、祝祭日には袋菓子や折詰が食膳を飾る。しかも、結核は概して自覚症状が少く、痒痒を感じない場合が多いのであるから、労働しない患者の生活は実に、のんびりとした面白いもので、むしろ人によって退屈きまる明け暮れであるらしい。だから一寸でも小康を保つようになると、無抑を囁くものが、集って、ナイガイと云う乞食賭博を始める。最初は古雑誌を使った貢めくりの賭博で、一四五頁なら一と四と五で〇、つまり豚になり、三二四頁なら九でカブになると云った具合である。次第に熱が入って来ると花札を使ったオイチヨカブを始める。為に六百円の併給金が半日でフイになつてしまふ人間も出て来る。熱くなると、借金をして何とか取られた金を取り

返そうとあせる。揚句の果てにはシヤツやズボン下まで売り尽し、借金も払えなくなると夜中に病院をトンズラしてしまう者も出て来る始末で、甚だしいのに到ると、配膳室のアルミの食器や膳を持ち出して売り飛ばす奴もある。勇ましいのは散々借金をして逃げ出した男が半月程して、又搬ぎ込まれて来たりする有様で、滑稽と云う外ない。患者が患者なのだから——という訳でもあるまいが、病院側の施設や看護も実に出鱈目を極めていた。重患の便器は半日も放っておかれるし、清拭と称するものも、まったくお座なりの恰好だけのもので、医師の診察など半年に一べんと云う患者さえあつた。中には症状を話してほしいと訊ねても、

「お前一人を診る訳じゃアない。二百人からの患者を診て廻るんだ。だから、まアザツと診る程度で、いちいちくわしく説明など出来んヨ」

と云った調子である。余り診察が早いので患者は、この医師に「ジェット機」と云う仇名をつけたものである。中には三月に入院していても院長の顔も知らない患者もあつた。こんな風なので、患者側も負けていなかった。同じ病棟の、しかも狭い廊下を隔てて女患者と男患者の部屋が向い合っているの、自然、風紀問題も乱れ勝ちであつた。十五人近い女患は皆、男を持っていた。これ等の男

女は社会で見る、それと少しも変らない夫婦生活を続けていた。性的な生理の処置すべてベッドの上で行われていた。看護婦が反つて顔を赤らめるような場面は始終眺められたものである。焼酎を呑んで暴れ廻るのは殆んど毎夜のことで、くりから紋々の刺青をした兄哥が大声で淫猥な俗歌を唄い、看護婦に抱きついて悪戯をする。煙草は看護婦の眼の前で平気で喫った。非道いになると、小使室の煙草を十個、二十個と盗んで来て患者に売り付けて小遣いのかせぐ者がある。

入院した当座、私もびっくりしてしまつた。院長に患者心得を設けるよう歎願してみた。それが九月に入つて実現化され、患者に公布された。と同時に、患者側でも、病院の施設や看護面に就いても、この際改革を行つてほしい旨申し入れ、自治会を結成した。はなはくも大学出の私が書記長に選出されてしまつた。自治会が出来て、病院側とのアツレキが日増しに多くなつた。頃を同じくして、日本患者同盟の人々が病院に私達を訪ねて来て、いろいろと病院知識をさずけて呉れた。曰く完全看護、曰く完全給食、ストマイの水増し問題、給食費のピンハネ等、私達は、おぼつかない知識で、そうした日患の資料を基にして、院長と交渉に入つた。何の、浮浪者やバタ屋風情が——とたかを喰つて、軽く患者をあしらつていた院長も次第に尖鋭化して来た



患者側の理詰の戦法にそろそろしびれを切らし始めた頃、折も折、酒気を帯びた院長と多少左傾化した患者との間にトラブルが起きてしまった。それも消燈時限を過ぎた時刻であったせいか、問題は大きくなり、併せて今日までの病院側の態度は不誠実極まるものである。単に一患者の問題に止まらない。鬱積されてきた患者側の、長い期間に亘る、しいたげられたものの、いきどおりが一挙に、この事件を契機として爆発してしまった。院長は謝罪をしない。それなら我々は実力行使でゆくより他に道はない——と云うので、全員応接室に陣取って坐り込みの態勢に入ってしまった。徹夜して交渉が持たれたが、院長は、いさかも不遜な態度を改めようとはせず、官憲の応援を求めて患者側を圧迫しにかかった。患者側では附近の労務組合や日患に連絡をとり、戦術を練った、外部団体の応援で六十時間、及ぶ坐り込みは患者側の勝利に終り、院長は、約定書に記名捺印して、その実施を誓った。

## 約定書

- 一、吾々は荷物ではない。人間並みに扱える。
- 一、名目的な完全看護、完全給食に反対する。
- 一、加配米のピンハネを止めろ。
- 一、看護婦さんは、もっと親切にして下さい。

- 一、ストマイをゴマ化するな
  - 一、残飯は会にまかせろ
  - 一、印鑑は本人に捺せろ
  - 一、重患者を見殺しにするな
  - 一、強制転退院絶対反対
  - 一、併給金をゴマ化するな
  - 一、消毒を確実に実施せよ
- 右の十一項目の要求に就いては全項を承認し、誠意を以て早速に実施する事を約定致します

昭和二十九年十月二十六日

病院長 氏 名 ㊦

患者自治会

執行委員長殿

立会人 日患東京支部

執行委員 議 長 ㊦

延が、それから旬日を経ぬ内に、またまた患者の一人が、死亡した。その重患には看護婦が便器も取ってやらす、食事も食べられぬと云う儘に、ほうっついておいたというのである。医師もこの一週間少しの診察も施して呉れない。これは明らかに約定書違反である云々の訳で、人命を軽々しく扱い過ぎる。嚴重に抗議すべきであると自治会は院長の釈明を迫った。院長も今度は負けていなかった。医師といえども人間である。あやまちはある得る事で、決して診察をおこたつていた訳ではないそれに、あの患者は、手の施しようのない重

態に陥っていたのであり、充分手は尽して来た心算である。患者はこんなことに一々騒ぎ立てず、安静に務めるべきだといきり立った。こうなると、もう喧嘩である。院長が謝罪せぬなら、再度実力行使に及んでも頭を下げさせて見せる、とばかり、その夜から三日三晩に亘る坐り込み斗争に入ってしまった。十一月の寒気は病身にひどく応えた。喀血する患者も出て来る。咳と呻き声が応接室に充滿した。この世乍らの地獄図絵である。男も女も小さく固まって莫塵の上に毛布を敷いて身体を横たえた。食事時には元氣な患者が病室から撤んで食べた。発熱患者が続出した。なにしろ二度と三度の患者ばかりなので急激に症状は悪化の一路を辿る始末で悲惨な斗いになつてしまった。三日目には院長もやむなく民生局に仲裁斡旋方を依頼した。読売、朝日、毎日、産経の記者も交えて都民生局の保護課長を仲裁役に病院側と患者自治会との間に最後の交渉が持たれた。広い食堂で午後一時から夜間十時過ぎまで難航した交渉は院長の誓約書の捺印に到って、漸く妥結を見た次第である。

## 釈明書

過般十月二十六日の患者会の十一項目の要求事項に係る約定書に対し全項を承認し、誠意を以て実施する旨を約定、調印せしも、未

私儀

だ部分的には実施に至らない点は、総べて院長たる私の責任であり、誠に遺憾の極みであります。

就いては今後之が実施に最善の努力を尽くす事を確約し、併せて茲に釈明致します。

昭和二十九年十一月十日

院長 氏 名 ㊦

患者会代表

執行委員長殿

更に協定書として

大×病院長が自治会に対し、誓約した別紙十五項目に就いて、誠意之を実現すると同時に、患者側に於いては将来も医師、看護婦等病院従業員の人格を尊重し、各自、その療養に専念することを茲に協定する。右、事実を確認する為に本書二通作製し、各一通を所持するものとする。

昭和二十九年十一月十一日

大×病院長 氏 名 ㊦

自治会代表執行委員長 ㊦

立会人

東京都民生局保護課長

日本患者同盟書記長

誓約書

一、今迄患者に対して「狂人」「馬鹿野郎」とか、強制転退院、暴行事件又は言動を以て患者に恐怖感を起こした事は院長として間違いであり、深く陳謝します。

一、完全看護を行うために、病院としては医師、看護婦等の増員を遂次行い、今後患者の看護と診療面に就いては、親切と誠実を以て行う様努力します。

一、原則として週一回のベット払い、室内の掃除を行うと共に、便器等は常に清潔にし今後清拭、洗顔に就いては、誠意を以て行う様努力します。

一、レントゲンや検痰、赤沈等定期的な検査は確実に実行します。

一、各病室の信号用のベルは十一月十五日迄に着工出来る様努力します。

一、医療面と看護面に關する自治会の希望意見を病院当局に反映するために原則として月一回、院長出席の下に医療懇親会を開く事を誓います。

一、完全給食に就いては米穀配給台帳の人員の間違い等を是正し、今後規程量をあくまで確保すると共に、自炊を必要としない良心的な病院給食を行う為に、予定献立表、米穀混合率等を表示すると共に、自治会の希望意見を反映する為に月一回、給食懇談会を医師事務長、炊事長、栄養士出席の下に開く事を確約します。

一、主食の混合率は、その混合物を概ね配給基準量通りになる様努力します。

一、ストマイの使用に就いては、今後は患者にその許可証を照示すると共に、その病状

に応じてストマイ等の積極的な療法を、医師の良識に於いて行う様努力します。

一、残飯は今後共患者の自主権に委せます

一、印鑑使用の際は本人に書類を示し、患者自ら捺印する様に努力します。

一、正当な理由なくして患者の意志に反する強制的な転退院は一切致しません。

一、併給金の支払いは今後、絶対に間違いない様に努力致します。

一、食器、膳等の消毒を確実にし、配膳関係者は特に衛生に気を付ける様に致します

一、手洗及び水手拭等は常に清潔にし、室内の消毒等も充分に行います。

以上の事項に就いて誠意を以て行う為に茲に捺印し、誓約するものであります。

昭和二十九年十一月十一日

大×病院長 氏 名 ㊦

自治会代表

執行委員長殿

こうして病院は、とに角病院らしい形容に改革され、患者も「心得」にのっとり療養の規矩に入ったかに見えた。しかし、事實は反って、反対の現象となつて、病院に報いるような恰好となつてしまった。つまり病院側の今迄のそうした外来患者と生保患者の間に見られる差別待遇と云うか、蔑視に対する患者側のインフエリオリティ、コンプレックスが、それならば、勝手にしやがれ——と云つ



た。捨て鉢な反逆精神となつて頭を拾げ出すのである。風紀問題は前に増して烈しく露骨を極めて、年若い見習看護婦などは、見せつけられて赤くなつてしまふ場合が屢々であった。賭博は自治会が組織される以前より熾んになった。と云うより巧妙を極めて来た。看護婦の消燈前の巡回は午後八時頃であつた夕食が済むと、賭博は患者達の日常行事でもあつた。彼等はシキテンと云つて見張りを廊下に立たせることにしていた。テラ銭の上りがシキテンを切る人間に与えられた。五時から消燈時限まで四時間で六十円貰えた。こうした場合、御開帳の賭場には患者といへども出入りは禁じられた。だから病院側から現場を掴まれるという事は絶対にあり得なかつた。賭場は煙草の煙りと人いきれで、むせ返るばかりであつた。白衣と咳き（せき）がなかつたら土方部屋と寸分も異なるまい。こうして患者たちは何かと云うと衆を頼んで横暴を極め、医師や看護婦たちに喰つて掛つた。安静も療養もあつたものではない。正に、飲む、打つ、買うの三拍子揃つた、やくざな生活で来る日来る日を面白く、おかしく暮らしているのであつた。年の暮れになつた。自治会では病院側へ申入事項を行つた。三ヶ日の間は消燈時限とラジオを夜間十時迄延長されたいと云うのである。これは一応許可される処となつたが、患者達は、どう取り違えたのか、はめを外した大騒ぎを演じ出した。大みそかは深夜十二時の除夜の鐘まで、ラジオを声高にガアガア掛け放し、大賭博、つまり全患者公認の三日間の御開帳を自治会で決議してしまつたのである。

附近の民衆は寝静まつたと云う深夜の十二時近く、患者たちは焼酎をあおつて、唾え煙草で花札を娛しんだ。果てはイカサマだと騒ぎ出し、打つ蹴るの私刑が始まつた。唇を切られて鮮血が廊下や白壁を染めた。看護婦は勤務室に小さくなつて戦のいてるばかりで手の下しようもない。三ヶ日は酒臭い匂いがどの患者の口からも消えなかつた。酒がきれると、二合瓶を懷ろにして夜の街を酒屋に走つた。院長をおどして獲得した二ヶ月分の前借の併給金は賭博と酒で、あらかたなくなつてしまつていた。その正月の八日目、胸廓整形手術を施した村田と云う二十二才になる青年が出血多量が原因で死亡した。日頃、元氣な男であつただけに皆、この報らせのあつた折には吃驚してしまつた。赤沈も三十分で〇、一時間二、二時間で四という健康状態だつたし、肺活量も常人と少しも違わぬ四、〇〇〇CCからあつた。尤もそれだけの手術に適した条件におかれてあつたから手術を行つたのであるが、毛細血管の結索が、不十分であつたため、出血が著るしく、死因となつた訳で、この場合、多出血性であつたことが

直接の原因でもあつたのであるが、患者たちは、そうした医師の説明には耳をかそうとせず、ただ、執刀した外科医を大勢で吊し上げ責任を追求する。とどのつまりは、説明だけでは諒承出来ぬから死体解剖をやれと強引に迫つた。村田の遺体は娯楽室に搬び入れ、患者たちの、通夜なるものが営まれることになった。狭い部屋は患者たちで一杯になった香奠を出そうということになり、遺体の前で賭博が始まつた。つまりテラ銭の上りを霊前に供えようというのである。充血した目付きで患者たちは車坐になつて花札を打つた。せ、ん、べい、を喰り、煙草をくゆらし乍ら、夜を明かした。屍が病院を出ると、患者たちは各病室から贈られたサイダーや餅菓子（もちもち）を供養だと称して食べ散らした。勿論、外科医は、慰藉料をい、やと云う程、患者たちにしほりとられた事は云う迄もない。村田の女だつた、久我ひろみは患者側の要求で、外泊で村田の骨を持つて彼の実家に向くことを余儀なくされた。この世界の仁義というものであつた。一番強硬だつた外科医が、この手術で、すっかり影をひそめてしまつた為、患者側はいよいよ凶に乗つて、今度は病院で死した患者の遺品を払下げると院長に交渉を始めた。この五、六年に百名近い死亡者があつた。自治会は福祉事務所に出張して、遺品の払下げを要求し、その認可を迫つた。遺品は問題が多

かつただけに、困難を極めた。二ヶ月に亘る押問答の末に、やつと払下げが決まり、沢山の風呂敷包みが自治会に渡された。背広、オーバー、スカート、丹前、トランク、蒲団等二百点に近いおびただしいものであつた。扱て、今度はその分配が大変であつた。結局、勢力の強いものが、良い品を取つてしまふ結果になつた。浅草公園で顔売つていた兄哥や刑務所帰りの男たちがあらかたせしめてしまった。尤も、自治会の幹部がこうした所謂腕っぶしの強い者達で占められている以上、当然のことでもあつた。アメリカ映画のギャングではないが、「俺が法律だ」と云う訳である。無法な行為も、この暴力がものを云つて総て彼等の都合のよいように合理化されていた。その上、残つた衣料は自治会で値が付けられて患者たちに売られて行つた。例えばラジオは五百円、蒲団は百五十円、オーバー三百円、ワイシャツ三十円といった具合に自治会の委員たちで、せつて値を付けたものである。これが又、壮観な眺めでもあつた。二十人近い委員が、衣類品を山のように積み上げて、一人がせり値を叫ぶと、次々に声が掛けて落ちるまで大騒ぎである。さながら青果市場の朝のせり場と同じさまである。せりは石鹼箱から井まで出た。しかし、こうして付けられた値段でも、月六百円の併給金から購うことは苦痛であつたらしい。男娼の

お茂さんはブローズを買つて早速はいてよろこんでいた。彼は、いや彼女は入院した日には洋装をしていた。スカートをはき、ブラウスを着て、髪は長く肩まで伸びていた。だから看護婦は彼女を女患室へ連れて行つてびっくりした。病衣に着換えさせると、スカートの下にズボンをちやんとはいていたからである。このお釜屋さんは、煙草が好物で、嗜好を越えて中毒症状に近い。五分間と喫わずにいられないらしい。咳が出ようが、医師に禁じられようが、いつかな止めない。科学療法としてパスが投棄されていたが、一度といえど服用したためしがない。彼女は退院するの嫌なのである。尤もこれは敢えて彼女に限つた訳ではなく、この患者全体の気持かも知れない。試みに一日の給食献立をのぞいてみると、朝は御飯、わかめの味噌汁、生卵、漬物、牛乳、粥も同じ、昼は御飯、刺身、浸し、粥も同じ、夜は狐うどん、粥はかき玉汁佃煮といった少く共、中流以上の家庭の食膳と同じであつた。それに例え六百円でも併給金という小遣が貰える。遊んで食べて寝ていれば良いのだから、全く素敵な身分と云わざるを得ない。仍く苦勞もないし、食うための心配も要らない。食ひ詰める者や遊人にとってこれ程、有難い話はない筈である。幸いなことに結核は長期の療養を要する疾病である。二年の処は三年、五年と長びいて貰いたい。

うっかり医師の指示に従つたら案外早く癒つてしまふかも知れない。それでは困ると云う訳で、患者の大半は高貴業のパスもヒドラジドも飲まない。ただ面白くおかし、何の不安もなく遊び暮らせばそれでいいのである。自治会の中でも心ある患者は肩をひそめていた。歌川と云う五十年輩の患者は、昔の友人である丹羽文雄氏に、この病院の面白い患者の実態を詳かに記述して送つた。新潮社から出た雑誌の一連の小説は、この患者をモデルとして書かれた。だから「新潮」の別冊が発売され、患者の眼に入つたから大変である。倉石と云う青年は歌川の病室に怒鳴り込んで行つた。彼は自分達の恋愛をスキヤンダルとして扱われたことは対し、憤然として抗議を申し入れた訳であつた。こんな有様なのでここの常識は別の尺度で計らなければならない。不倫も下剋上も寛容に許されていた。女患者は衆人の前で贅をまくつてストマイの注射を受けることを誇りとしていた。そして、おとこをこしらえなくては一人前の女として振舞えぬのであつた。「あたいは、あの人にスタンプを捺して貰ったんだ。変な真似しちゃいけないヨ」と反りかえつて見得が切れないのである。春になった。安静時間だというのに「ねえ与三さん、そんなお富ちゃん患者の大合唱がきこえていた。（おわり）」



アクロバットと曲馬団

『読んで思い出したまゝ』

鍛治真三

五月特大号、土壘氏の記事にある中国人の街頭見世物は、大正末年から昭和初年頃、日本内地で見たことがあります。うすら寒さを覚える氣候でしたが、三、四十才位の中国人が十二、三才位の少年を一人連れて手車に僅かの荷物をのせてその少年にひかせていました。中国人は頑丈そうな男でしたが、少年はやせていて頭は姑娘のように前額部に少しのぼした前髪を垂れ、あとは丸刈という特異な頭で、服装はよごれたセーターのようなシヤツ一枚と長ズボンという粗末なものです。

中国人は最初は簡単な奇術を数種演じた後、少年にアクロバットもいろいろやらせました。前トシボ、後トシボ等仲々あざやかなアクロバットでしたが、特に感心したのは一尺位の木の台の上に立って体を後に反らせ手は自分の足首を握ったまゝ、台の真下の地面にある一銭銅貨をくわえもとの姿勢に戻るといふ芸当でした。少年時代の私は何故こんなに体が

自由に曲るものと大層不思議でした。

その次の芸当が、土屋氏の記事中にもある脱臼させられる芸というよりむしろ刑といった風のものです。両手を後にして三尺位の棒を水平に後手に握らされ、中国人が二、三度大きく後方から迂回して上へあげたり下げたりします。棒が上へあがるたびに少年はキイキイと悲鳴をあげますが、数回目には力まかせに頭上垂直まであげてしまします。もう少年は声も出ません、そのまゝの姿勢で少年は観衆の方を向かせられています。閉じた目からは涙が垢でよごれた頬を伝います。中国人は少年の一枚しか着ていないシャツのすそを一杯まくりあげて腕の付根を完全に露出します。やせた体に脱臼した骨が異様な突起となつてあらわれていて、冷たい風が数えられる様な肋骨の上に小さくついている乳首をなでてゆきます。

中国人はこのかわいそうな少年を許してや

るために錢をくれといつて帽子を持つて客の  
渦の中を歩きますが、錢はわずかしかりま  
せん。これだけでは今晚は野たれ死だ何とか  
救つてくれと、棒で少年の腕の脱臼部をビシ  
ヤビシヤ叩きながら哀願します。又少しの金  
が集ります。ようやく少年は許されてもとの  
姿勢にかえります。不思議なことには腕をお  
ろして腕の付根を中国人が揉むもとにおさ  
まるのか、少年は普通に両手を動かして道具  
を片付け、やがて灯のともった街のむこうへ  
中国人につれられて行つてしまいました。

この頃は、児童虐待防止法以前で、曲馬団でも相当興味あるものがあつたようです。十才前後位の子供が曲馬や足芸の上乗りをやらせられているのは珍しくなく、当時の新聞にも、子供を見失つた親が曲馬団でブランコ乗りの我子を発見し、買戻したが、話がつくまでは曲馬団では、話題の子供を写真入りで何日限りと新聞広告をしていました。当の子供や親の気持を察すると、たまらないだろうと想像されます。

小説あたりでは「肉襦袢」を着たサーカス娘とよく書かれますが、実際肉感的な肉襦袢を着せられたサーカス娘は非常にすくないようです。しかし、この頃、ある曲馬団で手に入れたプログラムに、十才位の少年少女から大人に至るまで、ピッタリ肌に着た揃いのピンクの薄い肉襦袢を着けていました。幼い少

年少女にはそれなりにいたいたしさが、又二十近い娘にはそれ相応のみずみずしい果物のような肉感が、青年には青年のたくましかったがそのまゝ表現され、少年の頃の私に強い印象として残りました。最近まれに、肉襦袢姿のサーカス娘を見ますが、乳当を強くしめていて折角の体の曲線を殺していますので、昔の生々しい味がありません。もう一度乳当のな

い肉襦袢姿の娘の曲芸を見たいものです。

又昔の曲馬団の芸当は、幼少からきびしく仕込まれたためか、今より水準は高かったようです。どの曲馬団でも、斜針金渡りやチエーン付きの一輪車渡りをやっていました。が、当今では、これをやるサーカスは少いようです。しかし、昨年頃見たある大新聞社の週間グラフ雑誌のサーカス娘告知板によると、い

すれも六才乃至十二才からこの社会の生活を  
してはいますが、児童虐待防止法以後でも事実  
はあとを絶たなかつたのでしようね。今はど  
うでしようか、又、今サーカスで師匠をして  
いる人や、一枚看板の人々の芸道精進談も、  
この奇ク誌上で拝読に及びたいものです。

(おわり)

(おわり)

美醜は論外なのであります。近代に於いて灸痕の出来ることを嫌う女性など、おおよそ凄艶美を解さない時代おくれの考えでしょう。

続・岩瀬祥一の  
お灸院 (絵と文) 岩瀬祥一

世の逆コースにならったのか、このところ昔ながらの「お灸療法」がまたぞろ婦人達の間で盛んに行われています。女性にだけお灸をすえる岩瀬祥一のお灸院でも、お灸のすえられることの好きな女性には非常に多く来てくれて、門前市をなす程の繁昌ぶりです。たしかに婦人はマゾ的で、お灸をされるというその行為自体に云い知れない被虐快感の状態を持っており「アツチチチチ」と悲鳴を上げる声にも、何とも云えない快い叫び声に受け取れます。全く近代の女性性は、背中の肌が艾火によつてジリジリと焼けてくる堪え難い熱さを我慢してマゾ的境地を堪能しており、お灸は熱いから、いやなんて云うのは先ずおきません。施術者の私が、美しい女体をくねらせて熱さに耐える姿が垂涎おくあたわざる情景だと見とれていると、お灸をすえられている女性達の中では、むっちりした肉付のよい

中に 来た 痕も 晴しい 魅力を持 いるも のです 女の背 中に 来た 痕ばか りは一 般的な 視覚と しての





たは私が好きな、嫌いな」  
 フェレラ「(喘ぐ様に)好きだ……」  
 君香「好きななら舐められない事はないわ、お舐め、さアお舐め……」  
 フェレラは君香の足をふるえ乍ら見ていたが怒った様に君香の足をつきとばして立ち上り君香の傍を離れようとする。  
 君香「お待ちッ」  
 君香はフェレラの肩を掴むと、力任せに其の場につき倒し勝ち誇った様に再び足をつき出す。その素足の美しさ、恋と愛欲と金と慾に走る良心の苛責、そのシレンマにおのゝき乍らフェレラは只一途に恋に生きる如くその眼が異様に光って君香の足許にひれ伏し其の素足を舐める。  
 山田五十鈴の威圧的な神々しいまでの美しさは全くマゾヒストの女神みたいなものだ。映画でこそ足を舐めさせたただけだが、もっと屈辱的な奇めがたを君香はやっていて、様な錯覚を私は映画の中に空想した。足を舐めさせる君香の男を征服した満足とも残酷ともつかぬその見下した顔のクローズアップの中にその下には君香がフェレラの顔の上に馬乗りに跨って「さあ、接吻おし」と云っている様な想像を逞しくするのは恐らく私一人ではあるまい。

此の外「ユリシース」「バルテルミーの大虐殺」「悪魔のような女」等にも多分にマゾ

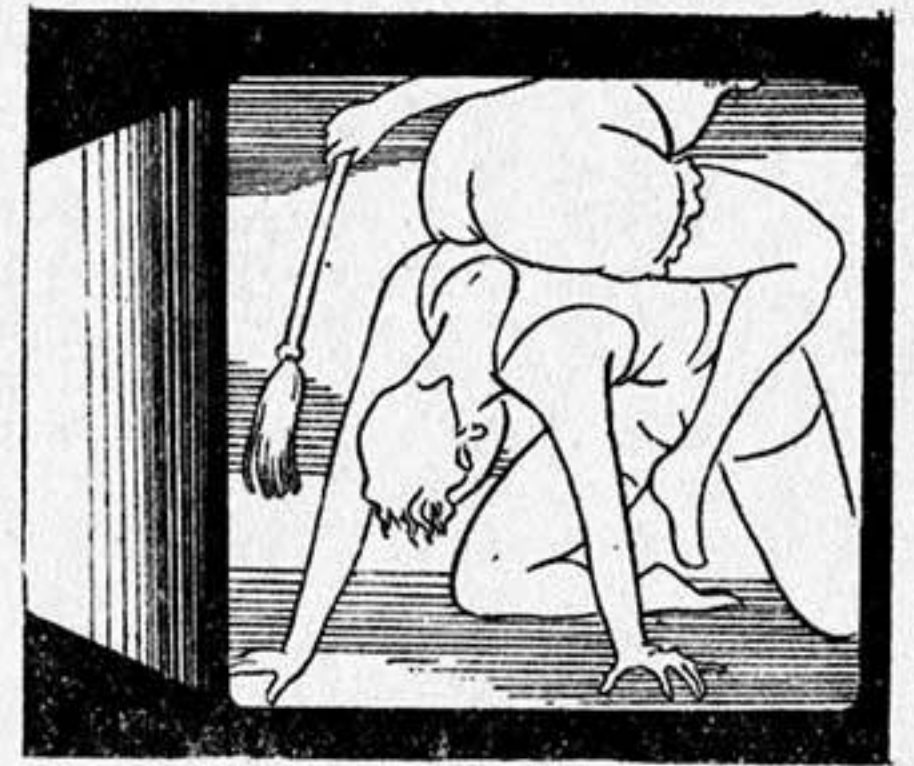
的なのは見られカラミティ・シエーンのお転婆になったドリス・デイなどもマゾヒストの好きな女性タイプである。  
 尚、これは劇映画ではないが、段々人気の出て来た女子プロレスリングも実演？は勿論映画でもマゾ男性はたまらない魅力を感じるものだ、映画にも「紅の激闘」「相うつ女体」など四、五本出ているが女性同志の撲る蹴る踏むの凄じさは胸をとどろかせるより外ない。  
 それから京マチ子の「新女性問答」気まぐれなM的要素を多分に含んだ社長令嬢の行状記で、男を撲る時の表情は一寸たまらない。又「娘の縁談」の中で南田洋子のやるお転婆娘が下宿先の息子を「此の事をあの人に云ったら承知しないわよ、もし云ったら撲るわよ」ときめつける処があるが、これも小気味よいシエーンの一つだった。  
 最近封切られたもので「あすなろ物語」これにも可成りマゾ愛好者にはのきな美しさを感ぜさせる場面が多かった。鮎太少年が不良少女の岡田茉莉子から、夜、寝床の中で上からのかゝられる様にして、私の事をお姉ちゃんとお呼びと、片手を締めつけられ乍ら強要される。鮎太は痛さに半べそをかき乍らお姉ちゃん云々云々云々、これから此の鮎太は姉のよき家来で、時折り苛められきめつけられて日を過してゆく。第二話の中では根岸

をして帰った朝、森繁が淡島の扮する蝶子から布団むしにされた上から馬乗りに跨られて打擲されたり、首を締めつけられたり、用水桶の水の中に顔をザブ／＼つけられたりして折かんされる。然しこの映画のよさはこう云う二人の仲でも綺麗に見える事で考え様によれば男のために働く蝶子の方が虐待されているとも云える。  
 『青銅のキリスト』  
 凄惨な拷問場面の多い映画でどちらかと云えばサジスト向きかも知れないが、それは見る人に依って違ふかもしれない。  
 この映画の中のマゾヒストの胸をときめかせるのは、山田五十鈴の扮する妖艶な長崎遊廓の君香が、神父であり乍ら信徒を肉体的拷問の責めに耐え兼ねて裏切つてゆく悲劇の主人公フェレラを罵りつゝ足を舐めさせるシーンである。  
 君香「お舐め……」  
 君香はいきなり自分の足許に棄てないでくれとすがりついて来たフェレラの鼻先に片足をつき出して  
 君香「あなたは裏切者よ、大よ、お舐め、あなたの為を苦しんで死んだ人もあるのよ、あなたは恥をすてた人間よ、大よ、さあ、お舐め」  
 君香はかぶせる様に  
 君香「どうしたの、舐められないの、あなた

明美、そして第三話では久我美子の女性からいつも彼はおさえつけられた立場で生きてゆき、その女性達へ奉仕する事によって自分の満足求めてゆく様になるのである。  
 少年の日の夢を再現させる様な得難い作品であった。  
 最後は映画ではないが現在、東京の日本劇場で上演中のN・D・Tの秋の踊りで、火星探険の景があるが此の一騎は女性の国、火星での事で男は皆捕虜で奴隷にされる。鉄のくさりでつながれて踊り狂う美しい裸女達の中で、美女から一人一人鞭で打たれ蹴りつけられて、あえぎ乍ら許しと助けを乞う、S・K・Dと違って、N・D・Tは男優、女優なので芝居上でも美女と男奴隷だし、この一景は時間も長いので見応えのある楽しいものであった。  
 今度は一応これで終って、又思いつくまま書くとして、併せて新しい映画のマゾシーンを採りてゆく事にします。(完)

## 続 映画に観た 淡いマゾ

春木俊野



前号に期待したナナがミュージックアートを四ツ這いの馬にして這い廻らす場面こそなかったが、私達マゾヒストを瞠目させるに足るのはナナに扮したマルチヌ・キヤルロのその美しい姿態だった。身体がのび／＼と伸びきって、いわゆる八頭身スタイルの肉感的な姿態もさる事乍ら、その美しい顔の表情にも振舞いにも、女性サジストとしての貫禄は充分で、果てしなく彼女に苛められる空想を得るに足るものであった。事実、あゝ云う女性にならマゾヒストは殺されても本望な事だろう、私にしても儼然夢乍ら、映画のなかのナナから馬乗りにおさえつけられたり踏みつけられ

達が見るに荒くれ男共を四ツ這いの馬にして其の背に跨り、ホール内で人馬競争を始めるのである。酒をおり乍らの此の乱痴気騒ぎは天然色の美しさと相まって可成り長い時間にわたって写されるので最近にないマゾヒスト歓喜の映画である。つぶれた男の背に馬のりのまゝ、得意そうに悠々と跨っているデイトリッヒの女王の態度は、たとえマゾヒストでなくてもその足許に屈伏する事である。  
 『夫婦善哉』  
 筋は殆んどの人が知っている程有名になった好作品、森繁と淡島千景の演ずる夫婦？生活のマゾ味を満喫出来る場面は多々ある浮気

たりする空想に独り陶然と酔ったものである。  
 『無頼の谷』  
 五十才と云われるデイトリッヒが三十そこ／＼の年増のあばずれ女を難なくやってのけた西部劇これも又、その姿態の美しさに驚かされる、映画の中の庄巻は酒場での人馬競争である。文字通り酒地肉林の情景の中で姐御株のデイトリッヒを中心に数人のバアーの女達が見るに荒くれ男共を四ツ這いの馬にして其の背に跨り、ホール内で人馬競争を始めるのである。酒をおり乍らの此の乱痴気騒ぎは天然色の美しさと相まって可成り長い時間にわたって写されるので最近にないマゾヒスト歓喜の映画である。つぶれた男の背に馬のりのまゝ、得意そうに悠々と跨っているデイトリッヒの女王の態度は、たとえマゾヒストでなくてもその足許に屈伏する事である。  
 『夫婦善哉』  
 筋は殆んどの人が知っている程有名になった好作品、森繁と淡島千景の演ずる夫婦？生活のマゾ味を満喫出来る場面は多々ある浮気



## 緊縛フォト

## 『アルバム第三集』のアイデア

鳴海文雄

辻村隆雄

初めてお便りします。五月号で萩千恵子論をかけた鳴海というものです。今度美しき縛しめ第三集を予定されているとか、それに就いて私のアイデアをお知らせして幾分でもお役にたてたいと思っています。

今ここに美しき縛しめ第二集があります。貴方の構成されたものですがこれについて二三先ず申しのべたいと思います。私はこの第二集の中で悦虐味ある、しかも美しい作品を次のように選びました。

- 1、(二三) 吊あげ 2、(二二) 犬ぼえ
- 3、(二〇) たてしぼり 4、(一〇) 足枷
- 5、(三三) 手枷足枷 6、(二二) 逆エビ
- 7、(一六) 股間しぼり 8、(一一) 蠟涙
- 9、(二六) 網渡 10、(一五) 後手

一応こういう風を選びましたが一位と二位はとくに悦虐味ある作品でした。この第二集

からみていえることは第一にモデルは美しくなければならぬということです。犬ぼえ、後手、溪間の妖精のモデルの豊麗な肢体は断然他を圧するものです。殊に犬ぼえに於てはモデルが断然美しい故に股間の縄が印象的でした。縄について、「犬ぼえ」に使った位の縄がもつとも悦虐味があります。縛るものにヴァリエーションをもたせるのも結構ですが「椅子」に使ったひもは感心しません。「美声」に使ったひもは太すぎます。「たてしぼり」に使った縄は堅すぎて緊張感がありません。「股間しぼり」にはしごきのような軟かいものがいいでしょう。いずれ縄は買いがけの新しいものより少し使ってやわらかくしたものの方がいいと思います。

さるぐつわについて、緊縛感はありませんが私の好みについてはさるぐつわをかけない方が表情がよくて好きです。「吊あげ」に

於て半開きの口がいかにも悦虐味をだしています。「股間しぼり」でさるぐつわをしないのが却ってこんな時、女はどういう表情をするだろうという興味を満足させます。大抵強さるぐつわをかけるか、横むきにして顔を見せないようにしてありますが足指の表情よりも顔の表情が大切だと思います。これからはできる丈その点を留意していただきたいと思っています。若しさるぐつわをするにしても顔を一面におおわず「後手」「布団」のような黒布で行った方がいゝです。

コスチュームについて、「足吊り」や「はりつけ」のように下着をはずした破くのは、わざとらしく良くないようです。全裸が殆どですが「布団」に於ける下着の清潔さが印象的でした。「網わたり」でも少女らしい服装が可憐な感じをだしていました。こゝで私はおねがいがあるのです。ぜひセーラー服着用の縛りを実施して戴きたいのです。可憐さを強調するためにはこういう試みがなされていい良いはずですが殆ど行われていないのは残念です。又、女学生の運動服(白シャツ黒ズロース)の縛りもぜひお願いします。

カメラについて、「犬ぼえ」「後手」のようにできるだけアップした方が美しさが良くります。

勝手に書きつけましたが、これらの点について考慮されて第三集を構成していただき

たいと思います。さて、それでは私のアイデアを申し上げます。

- ① 後手縛り、両足首に縄をつけて上に吊る
- ② 両手を前で縛りうつ向かせ、縄で腹を縛り肩へ廻して股間を通して上に吊る
- ③ ②と同じで手枷足枷をする
- ④ 腹ばいにして後手縛り足枷をつけて吊る
- ⑤ 腹ばいになって女体の足と手を吊り上げる
- ⑥ 腹部分に床につく
- ⑦ ⑥の逆、仰臥の女体の手足をつる。臀部丈が床についている
- ⑧ 掌を合せて前手に縛り、その縄を股間を通して上に結ぶ
- ⑨ 椅子に向うむきに腰かけさせて縛る
- ⑩ ⑨の姿勢、前手縛りの縄を股間を通して背をまわって首縄へむすびつける
- ⑪ 後手、両端を吊るした円木にまたがらせる
- ⑫ 後手、土管の上にまたがらせる
- ⑬ 円柱抱き(土管)円柱を抱き両手足を縛る。腹も円柱に縛りつける
- ⑭ 机だき、机の上にうつ伏せにさせ腹を机に縛りつけ、両手両足を別々に机の脚に縛りつける
- ⑮ 棒責め 後手に縛り立たせ、横に吊るした棒に手を縛りつける。(白い下着をつける)
- ⑯ 立木の又に座らせ、後手、両足を縛る
- ⑰ 棒の両端を吊り、ブランコのようにして

後手縛りでひざをまげてさかさにぶら下らせる。

- ⑱ 足枷をして後手縛り、ひざから首へ縄でつなぐ。(以上)

## セーラー服姿の切腹写真

松本奈津子さんについて

編集部

「あの、女の人が切腹している写真の載っている雑誌、奇譚クラブって言うんでしよう」と乙羽信子そっくりの可愛いエクトをへこませて、編集部を訪れた娘さん。本年、新制中学を卒業して、今、家で家事のお手伝いと刺繍の稽古兼内職をしているとのこと。なぜ切腹の写真のモデルなんかを希望してきたのだらうか、とにかく「切腹」のことしかいわないところを見ると「切腹」に関心を持っているのだらう。

モデル料はいらない代り、たった一回きりかなってこれない、という約束なので、特に彼女、松本奈津子さんにセーラー服を持参して貰って、セーラー服姿の女学生の切腹姿というテーマで撮影することにした。用いる刃物は、彼女の希望によって白鞘の短刀と黒塗の鞘の小刀ということにきめ、ポーズも大体の立って、とか、坐って、とか、順序を追

って指示しただけで、細部に亘っては総べて彼女が自発的にポーズをとってくれたので殆ど、そのまゝシャツタを切っていった。身長は四尺九寸、体重は十貫五百匁、といっていたから、女性としても稍小柄の方に属している体格だし、それに顔つきが又至ってあどけないので、責めのモデルに納得してくれないかと頼んでみたが、この方は駄目であった。然し、女学生姿の切腹写真の方は彼女の積極的な協力によって、満足に近い写真を得たことは嬉しかった。いつの日か、松本さんの「告白」を書いてほしいものだが、と期待するのは編集部ばかりではなからう。彼女の申出により、誌上の掲載は遠慮しなければならぬのは残念だが、女体切腹の分譲写真として同好者にお見せすることが出来るのは幸いである。



# 女子プロレスリング雑感

鬼山 絢 策

## 人 気

最近女子プロレスリングが非常な勢いで流行してきた。

ストリップのマンネリズムに飽きた観客は再び女子プロレスのかゝっているストリップ劇場に殺到した。

東京では三軒のストリップ劇場で競演の形をとったが、そのうち一軒は「ノンプロ」と銘打って、一座の踊り子をレスラーに急仕立てに練習させてリングに上らせたので、これは迫力も乏しく技術も幼稚で間もなく姿を消した。

観客の八割はこれが「ショウ」であることとを承知しているようだが、中にはほんとに勝負を争うのかと期待して観に来た人はガッカリするが、別の点で満足しているようだ。いまのところ女子プロレスの人気の根元は

珍しいことゝ、荒々しい女の子の動きと、サチズム及びマゾヒズムの妙味と、勝負の特質である「さきが分らない興味」につながっているようだ。

二軒の小屋へ出場する選手の顔ぶれは似たりよったりで、大同小異である。

ルールは男のプロレスの場合と変りなく、ただこれに乳房を突くこと、髪の毛を掴むことを禁じているだけである。

投げ業としては首投げ、腰投げ、巴投げ、ぐらひのもので技の種類が少く単調である。

攻め手はヘッドシーザー（頭締め）胴締め足取り程度でこれもバラエティに乏しい。

## ス タ ー

女子プロレスのスターは佐々木一枝が何と言っても一番人気があり「小次郎」と言うニックネームで、技も豊富であり、非常にサチ

ステイックな演技に魅力がある。容貌もキリツと引き締った顔立ちで、表情豊かにサチスチンの風格を露している。

他には東富士子と言う五尺五寸、二十数貫の太女がいるが、大きいばかりでスピードに欠けている。

## 演 技

試合と言っても、一日に三回も同一選手が行うのであり、ショウであることは止むを得ないが、それにしても迫力がなさすぎる。

それに一回々々ルールの説明をクド／＼と繰返し、リングの設備に時間をとるところへ持ってきてこの「前説」が長いのはどうかと思う。

それにレスリングに一番大切なスピードがどの選手も鈍いことが一番の欠点だ。

寧ろ演技としては選手よりもレフエリーの方が遙かに巧い。レフエリーには、選手を育てた木島幸一や、外人がやっていたが、この二人の投げられつ振りは実に美事である。

試合がエキサイトした如く見せかけて、選手の中に割って入るレフエリーを投げとばすのであるが、一寸手が振られただけで、実に景

気よく、綺麗に、大ゲサにヒックリ返って見せるのである。そこへ行くノンプロの方はストリップ一座の男の俳優がやっていたが、これは全然ベケ。

## 魅 力

我々アブニストの眼から観ると、一般観衆の見る眼とは多少違うかも知れないが、いずれにしてもこのショウは、裸体やレスリングの技を見にくるのではないことは確かだ。

要するに女だてらの「あられもなさ」を観に来ているのであることはアブニストばかりでなく一般大衆も焦点がそこにあるようだ。タッグマッチ（二人一組の試合）などで、リングに休んでいる女の子が「潰しちやえッ」と声をかけたり、選手が「ヤローやったな」とか「ちき生ッ」「この野郎ッ！」とか言うコトバを連発するのが受けている。

男のプロレスでは、どちらか一方が仇役になる場合が多いが、これは興味を増す演出で女子プロでもこれもやる女が二人いる。

相手の胸へ馬乗りに跨がって、下になっている女の子の髪の毛を鷲掴みにしてリングにドシン／＼と頭をぶつける。レフエリーが反則だと止めると、手を離して頭を撫でている。レフエリーの眼の届かない位置になると歯を喰いしばって、思いきり惨虐な表情で、またドシン／＼とやる。

木村富士と言う二十一貫の豊満な肉体美の選手も仇役が上手で、脚をあげて蹴るのが得意であり、相手の背中へ跨がって腕を逆に捻じあげて攻めるところや、仰向けに倒した敵の片足をとって捻りながら、チキの顔を靴のまゝ踏みつけたりする。

男の方では大抵仇役が憎々しくやった場合は最後に敗けるのが多く、「これは方面は違えが相模の初切り（しよつきり）」でも、仇役らしき方に廻った方が敗けているようだが「それが定石の如くなっているが、女子プロレスでは大抵仇役の方が散々相手をしたためつけた揚句勝名乗りを受けているのは面白い現象で、観客もその方が満足しているらしい様子である。

相手の首を脚の間にはさんでしめつけるのは、思った程迫力がない。

## 傑 作

マゾヒストの眼から見て傑作と思われる場面が二回程あった。

この選手達を養成したと言われる木島レフエリーはなか／＼ショーマンシップを心望た男で、総べての構成もこの人のアイデアではないかと思われるが、タッグマッチで、選手がクリンチしたのを解いたのが不服で、リングの外に休んでいた選手が、木島レフエリーの背中をドンと突いた。突きとばされてリン

グの中央へヨロ／＼と出ていった木島レフエリーの頭が、仁王立ちに脚をひらいて立っていた選手の股の間へ首を突込んでしまった。それが不服を唱えた側の選手だったので、得たりとばかりヘッドシーザーで責めつけて、レフエリーをグロッキーにしてしまった場面があった。

これは前から時々試みられたが、恰度うまく脚の間へ頭が行かず、失敗していたアクシオンだった。

佐々木一枝と言う選手も演出の上手な女でレフエリーを投げとばす意気も一番ビツタリ合うが、彼女が木島レフエリーを首投げで、派手にリングの中央へ投げとばし、続いてとびかゝってきた相手の女を腰投げでとばすとこれがレフエリーの上へドタンと折重って倒れた。恰度女の子のお尻がレフエリーの顔の上にドシンと落ちて重ね餅になったところを佐々木一枝が、二人の上に馬のりに跨がって蒲団むしの要領で上からグイ／＼と押し潰す場面があった。これなどは最初から企劃されたものでなく、偶然そうなったものゝようであった。

真剣に勝負を争うと言うことのないのはやむを得ないことだが、それでも全然ないと言ふ訳でもないらしい。佐々木一枝が一度やった相手の両脚をとって真逆様に身体を起し、相手の選手は首と片方の肩で逆立ちしたよう



な形にしておいて、背筋の方へ身体を折り曲げようとした。これはレフエリーが途中でストップして、相手選手が「参った」と言う合図をさせて負にしまった。これをそのまま続けるも背骨が折れてしまうと言うことでこのときはやられた女の顔は真赤に充血してほんとうに苦しそうであった。

## 将来性

現在こんな調子で行われて、人気を集めているが、このまゝでは直ぐ飽きられてしまうと思う。

現在のところ選手の数も少く、一日三回の重労働ではあまり激しい技もできないし、技の種類も単調であり、何か新しいアイデアを次々と考察してゆくのでなくては、興味をつないでゆくのは困難であると思う。

アメリカの女子プロレスはもう相当前から

私は、とうとう、此のたとえようもなく恥かしい告白を、書き始めてしまいました。やりきれない自己嫌悪に、間断なく襲われながら、尚且つ筆を止めることの出来ない私は、何という浅ましい人間なのでしようか。もしこの手記が、誌上に発表されたとしたら、私はおそらく、それを読む勇気を持たないと思います。併し、やっぱり私は、こうして一字

一字と、原稿用紙を埋めていくのです。何回かの脱皮を経て、現在の私は、サディズム(同性を対象とした)に大きく傾いていますが、その中にくく少部分、マゾが残存しており、それが或る行為に結びついてだけ、限られて表われるのです。ここでいう或る行為とは、対象の無い場合の処理として、きわめて普遍的な方法を指します。

とで、女子プロレスももっと技を勉強して、多彩なスピーディーな技の研究を努力する必要があると思う。

さきあげた人気の根元となっている条件のうち、(1)物珍しいと言う点と、(2)特異な荒々しさと、(3)異常なエロチシズムと、(4)アクシデントによる興味と、(5)レスリングそのものの技術の五項目があげられるが、このうち(1)、(2)の項は永続性がない。持続できる興味の条件は(3)と(5)のみしかなく、(3)の条件が果してどの程度まで観客を把握することができるかは、今後の演出の如何にもよるが我々本誌読者にとっては興味ある課題である。

然し最近の観客心理にはなにかこの傾向のシヨウを喜ぶ傾向がみられてきたように感ぜられるのはひとり筆者のみではなからう。これは本誌の愛読者とともによろこぶべき現象であると思う。

某女子学園の職員として勤務している私は二週間目位ずつに廻って来る宿直の日を、何んなに楽しみにしているか知れません。とまりの夜などは、誰も上衣とズボンを脱ぐ程度で、下着のまゝ寝るようですが、私は、わざわざ寝巻を用意していくのです。それから、越中禪と兵児帯をしのばせることも忘れません。

## 密 淫

(みつゐん)

青葉 楨一

夕食がすむと十時頃迄、宿直室でラジオを聞いたり本を読んだりして時間をつぶし、小使の老人が寝るのを待ちます。十時半頃には小使室の灯も消え、郊外にある学校の周囲は、もう物音一つしない深夜です。

私は、何ものかに急ぎたてられるように立ち上ると、鈕をはずすのもどかし、次々と衣服を脱ぎ捨て今度は、越中禪をつけ寝巻を着ると、兵児帯をグルグルと巻いて布団へ這入ります。胸はドキドキと鳴り、眼を閉じると、微かな戦慄が足先から脛上って来ます。私は胸の中に、急いで何時ものイメージを組立てます。

(仰向けに眼を閉じている私は、静かに寝息をたてている)——という想定から、私の奇態な一人芝居は始められるのです。

(扉が開き、黒っぽい服装をした大きな男が這入って来ると、ベッドへ近寄り、いきなり私の布団をはねのけます)

ハッとして眼の覚めた私は、反射的に上半身を起すと、恐怖に固くなって怪漢を見上げます。

(男はニヤリと唇の端でわらうと、ムズと私の肩を掴みました)「アッ」と声を立てると、私は身の危険を

感じて、夢中でベッドをすべり下りました。左の肩を露わにした私は、併しすぐに床へ組伏せられてしまいました。死物狂いの抵抗でやっと男の手を逃がれ、前のめりに入口の方へ駆出すと、ズルズルと解けた兵児帯が足からみ、ボタンと勢いよく転倒しました。

(男の眼の光は俄に増し、野獣のように跳びかゝると、難なく私を撲伏せ禪を撈りどつてしまいます)

私は満身の力で抵抗しようと思いますが、今度は容易に逃がれそうにもありません。

(男は盤石の力で、私を床に押しつけて来ます)

「ユ、赦してくれ、はなしてくれ、はなしてくれ。頼む——助けてくれ——助けて——」

荒い男の息使いを聞きながら、私はきれぎれに叫びます。

(私の身体を抑えつけた男の脚はしめぎの

に追いつきます)

折重なるように倒れたのも束の間、私は幸運にも又々逃出すことが出来ましたが、寝巻は脱げてしまい禪一つです。春の夜の寒さが肌にしみると、私は裸になった己の姿に、「助けてくれエ——」と大声に叫ぶのでした。腕力に全く自信のない私は、只もう逃げようよりほか手段はなく、出来るだけ時間をおいて人の助けを求めるより外ありません。

(後に迫った男が禪を掴みました)

二階の廊下を一散に走る私の恰好は、越中が紐からぬけてお尻へ長く垂らした布をヒラヒラと靡かせた、何とも云えず滑稽なものです。



ように固く、も早や、何をするとも出来ないところへ、グイと脂切った怪漢の手がのびて来ました。

私は屈辱で眼が眩むようになりながら、最後の力をふりしぼって、ようやく男を突きつける、反対側の階段を駆下りましたが、よろめくはずみに足を踏外して、あと二三段のところから下へ転り落ちました。

(今度こそもう駄目です。みじめな恰好で抵抗する力もなくなっている私を、男は、容赦なく責めつけて来ます)

観念の眼を閉じて、男のすがまゝに身を委せながらも、私は未だ弱々しい声で「止めて——止めてくれ、お願いだ、赦してくれ——やめて、やめて——」と泣くように叫んでいました。

(男は土足を私の腰にかけて、勝誇ったように笑いながら、みじめな犠牲者の姿を見下しています)

グツタリと倒れふしたまゝ、私はザラザラとした冷たい床板に、ジツと頬を押しつけていました。

やがて、隙間風の冷たさに、夢から醒めたように我を取戻したとき、黒服のイメーシは既に消えて、そこには、床の上に投げ出された自分のみじみな姿があるだけでした。私は宿直室へ戻ってからも、未だ暫くは気が昂ぶっていて、なかなか寝つかれませんでした。

した。神聖な学園の内部で、このような空想の狂態が演じられていようとは、誰が想像しうるでしょう。

翌日。何気なく階段の下を通りかゝった私は、そこに五六人かたまっていた女生徒達が突然爆発するように笑いだしたのに、思わずハツとして、脚が凍む思いでした。恰で、昨夜のしみがそのまゝ残っていて、それを彼女等に発見されてしまったように、いたたまれない気持ちで、私は慌てゝ立去りました。

去年の夏には、こんな失敗もありました。大変に蒸暑い晩で、私は例の幻想の昂じた余り校庭に飛出してしまったのです。そのときはもう禪もとれて素ッ裸でした。そして十米も走ったでしようか。私はいきなり何かに跌いて、激しく横倒しに投出されました。全く小気味のいゝ程もんどりうって転ってしまつたのです。「——痛ッムムムム」と顔を顰めたとき、すぐには起き上がることも出来ませんでした。寝てくる痛みの中に、私は不思議な陶酔を感じていました。私はヒイヤリとした地面に転ったまゝ、永いこと暗い空を見上げていました。

痛む脚をひきずりひきずり室へ戻って傷をあらためて見ると、右の膝をひどく擦れ、その上強い打撲で曲げることも困難です。一晩経っても痛みは去らず、次の日一日は「頭痛がする」と誤魔化して、宿直室へ寝たまゝ通してしまいましたが、あんなに困ったことはありませんでした。

はありませんでした。勿論、私の愚かな行為は、当直の夜のみに限られているものではありません。閉めきつた自宅の部屋でも、時々行われます。

私は、同性からの凌辱に対する願望を持っているのでしょうか。そう云えば、よくこんな空想をすることがあります。

人気のない工場裏の道を歩いている私は、突如として、暗がりから跳出した二三人の怪漢に、有無を云わず拉致されていきます。連だまされたのは、ガランとした倉庫のような建物。裸電燈が妙に明るく輝いています。男共はよってたかた、私の身体から、着ているものを乱暴に剥ぎとっていきます。非力に私は、只されるまゝになつていくはかばかき有りません。忽ち私は、猿股迄すっかり脱られて、素ッ裸の恥しい姿を、男共の淫らな視線に曝されてしまいます。そうして、そうされながらも、そうして欲しいと願っている自分の浅ましさを、何う隠すすべもないのです。やがて私は、彼等の餌食となつて、さんざん弄ばれた挙句、すべてを投出して屈伏しなければならぬのです。それは耐え難い屈辱であると同時に、又甘美な陶酔でもあるのです。

今、私は、宿直室でこの手記を綴っています。そしてそれも終りに近づきました。時計も十時を廻つたようです。小使室の灯も消えました。最も裸になり易い越中禪と寝巻を、これからつけなければなりません。窓の外では、朝からの小雨が未だ降りつゞけている。生温い夜です。

## 同憂の士に告ぐ

天 泥 盛 英

リムスキー・コルサコフ作る処の交響詩シエラザードの豪奢な色彩に彩られた難船の風景にも似て、この雑誌は今や、烈しい暴風にさらされて居る。官憲に徒らに抗するものでなく、私達は天与の不思議な慾求に忠実であると思う。法律の示す処は、幾多の手續を経て後に判定が示されると思うが、私達の嗜好は決してその様な人為的な方法によって削減又は消滅するものではない。現在の情勢が、直ちに多くのガリレオ・ガリレイを要求するものとは考えないが、先勲マグヌス・ヒルシュフェルト博士の多難な生涯と、その驚嘆に値する功績と、数知れぬ程多くの人々に慰藉と安心と更に生命の力を与えた偉大な効果とを偲び、私達が故なくして怯懦であつてはならぬと思ふ。

この雑誌は日本語によって考える人々からだけでなく、遠く海外からも協賛の念を伝えられている。細くとも火を絶やしてはならない。これ以後の世代に私達と同憂の

人々が生れ出て来ないと誰が断定出来る。幼時に潜在を始める不思議な萌芽や、思春期に他と異つた形で発育し、妖しい開花を見せる伝統を持った魂を断ち切る事が出来るであろうか。曾って、私が提唱した様に特定の時機、特定の限度、特定の場所という原則が守られるならば、マゾヒズム、サディズムのみならず、一切の変態性慾は単なる悪の華とは

考えられないのである。むしろ、性愛の方式を三次元に、その範囲に更に拡大し、性的な愛情の深奥に一步近づく良きすがとさえ思われる。併し一方、私達青年に達した者は職つて自らの幼少、青年時代を考えて見なければならぬ。無智な青少年に、好奇心のみによる魅力を投ずるならば、奔放な知識慾と貪慾な実行力とに支配されるこの世代が、凡そ

奇抜な危険性を持った方法を以つて、この精神的不満の状態を解決しようとする事は明らかである。知識なき者に、これら変態性慾の実体を開陳し、更に説明、煽動する事は努めて避けらるべき事である。この雑誌の如く、赤裸な心と、本能の姿が詳細に述べられる書籍にあつては、その論述は決して煽動的であつてはならない。若し煽動的な部分を必須とするときは、その説明は難解に過ぎるとも、決して平明に過ぎてはならない。当該の書籍の価格や体裁に就いては経営上の問題を含むのでこゝには省略するが、これも又成る可く複雑、象徴的又比較的高価なるを可とする事は明らかである。私達は何等かの方法を樹てゝ、現在毒薬とさえ見做され始めたこの種の出版物をモルヒネの如く、適当且充分に用いる事によつて霊薬と化そうではないか。ヒルシュフェルト博士やビルリッゲル博士が、身を以つて後世に伝えた、高貴な対症の療法と霊薬とを更に伝えつづける事は、我等の責務とさえなつた。

復刊に當つて、私は多大の尊敬と親愛の念を以つて、編輯に当り運営を行う人々に對しての充分な期待を以つて、斯く同憂の人々に寄せる。

昭和三十年十月十五日

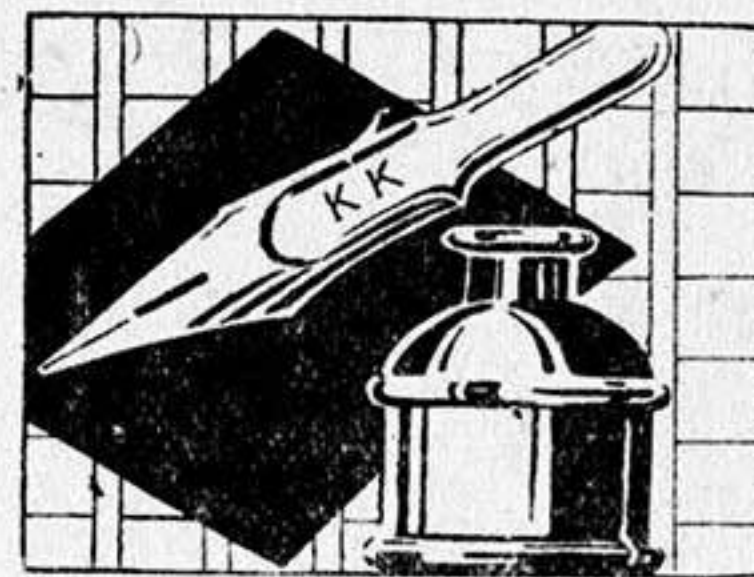


奇ク復刊、お目出とう御座居ます。十月号を受取り久し振りの奇クの感触に云い難い懐かしさを感じました。頁数の減少が誠に残念で

十月号「悪癖」を何度も繰り返えし読みました。一生に一度でもよいから、この様な女王様と奴隷の生活を営みたいと思いました。疼く様な喜びと、やるせない苦惱がカクテルして私の魂は狂狂しく絶叫致します。この利子女王様はマゾ主人の悪癖を治す為のみに逆療法をおやりになられた様ですが、しかし表面上の意識は成程そうでありましょうが、潜在意識ではやはりこの場合、利子女王様に、嗜虐性が潜んでいた事は事実と思います。でなければ普通の場合、あれ程迄積極的になれなかつたでしょう。この私の見方は間違いでしょうか？ともあれマゾ主人は、実によき奥さんを得られ、正に幸運見だと誠に羨らやましい限り

人ではやんで居ります。この中の一つでも良いから実行させて下さる女性の方の出現を待つて居ります。(新潟 なやめる一男性)

(根津生)



## 【読者通信】

りです。それに女王様は奴隷に、深い愛情を感じておられる様で、大変嬉しい事です。口中にパンティを詰め込む所など、大変興奮を覚えます。欲を云えば、苛責の場面、例えば女王様が薄いパンティ姿で、奴隷の頭を、女王様のお尻で、息が出来ない位押えつけたり、奴隷の頭を、女王様は股間に挟んで、太股で締めつけ、両手で出ている奴隷の頭を、ぐつと股間に押しつけ、窒息する程苦しめたり、組み伏せられた奴隷に馬乗りになつた女王様は、残忍な笑を浮かべつゝ、奴隷の首をぐんぐん締めつけたりする情景等を書いて頂ければ、私はしびれる程の興奮に慄えるだろうと思ひました。マゾヒストとして私はこんな責が一番好きなんです。

利子女王様、又後日譚をお聞かせ下さいませ。(京都 平山春夫)

十二日〇〇奇ク〇〇復刊十月号無事落手しました。同日朝、入道に曙書房宛、未着照会の葉書を差上げて了いました。事務御煩多の折から、徒にお騒がせして真に申訳ありませんでした。十月号を手にとつた喜びは、待ちに待つただけに何とも云えませんでした。意

外といつていゝ程の素晴らしい出来ばえに、感激の涙さえ湧いて来ました。こゝ迄になつた諸先生並びに編集部の皆様の御苦勞を今更のように偲び、頭の下る思いがいたします。私も今後拙い原稿を寄せさせて戴きますが、従前とは異り、通信販売のみとなつたので、稿料廃止、もし謝礼を出すならば掲載分の本誌贈呈にとどめる事を提案、多少でもお手助けする事を考えるべきではないかと存じます。大変生意気な申様でどうかお赦し下さい。今はどうも昂奮して了つていて思うようにペンが運びません。又日をあらためてゆつくりとお便りを差上げます。〇〇奇ク〇〇のみに生甲斐を感じている数多くの読者の為、どうか此の上の御健闘をお祈りします。草々

(青葉楓一)

小生三十才独身男子です。自分で自分の気持が分らず、その処置に困つて居ります。私の様に多種多様の性質の者はいるでしょうかそれはサド、マゾ、フェチの三つがあります。女性の緊縛写真を見ると、自分がモデルを使つてやつて見たいと思ひ辻村先生等がうら

やましく、又にくらしくもあり、先生の何%かを分けてもらいたい位です。その他、投稿者の読物などで妻やフレンドなどを責めたりしている男性を、何んと幸福だろ、同じ人間に生れて、こうも差別があつてよいのかと思つて居ます。マゾフォートに出て来る男性をも随分うらやましくなり、自分もこんなになつたらと思つたりも逢えたらと、氣をもんで居ります。まだフェチがあります。この中には女装のあこがれもひそんで居ります。市内を歩いても洋装店等の下着が目についてなりません。きれいな女の人を見ると、あの人達はどうなんもの着ているだろうなと考へ、女体の移り香のする下着を借りてもよいから、それで女装して見たいと思つて居り、そして女装の男を責めて見たいと思ふ女の人の出現を待つて居る様な氣にもなつて居ます。ソドミアと流陽は今の処全く興味ありません。今迄に妻の候補者はあつたのです。妻はマゾ的性質のある者がよいと思ひますが、その様に誘導する事も知りません。こんな風にいろいろなる事が頭にこびりついて一

この上は読者の増加により昔日の面影を取戻して頂きたいと思ひます。ニユーフェイスのモデルの方々も新鮮な感じを与えて呉れました。それにしても休刊前の一、二冊に現れたグラビア写真の鮮明さが懐しく思われます。いづれにしても女性の緊縛フォトはどんなものでも結構ですから出来るだけ沢山のせて下さい。(仙台、KY生)

奇ク〇〇の再刊を心からお慶び致します。われわれにとつては、この種の雑誌は正常な社会生活を営むための最少限度の口として正に必需品とも云えると思ひます。現状では通信販売という手段をとる事もやむを得ない事と思ひますが、今後共一層の勇氣と自信を以て続刊に御努力される事を祈つて止みません。(名古屋ST生)

復刊は流石に首を長くして待たれました。やはり他のものを購読していても奇クのようなものはなく、日常の生活にも空虚なものがあったのを感じさせられました。今後毎月発刊されることを祈らずには居れません。復刊号で読まされたのは「悪癖」です。この作一つで奇クの価値は十分に感じまし

た。これは奇クを持つ価値であり技巧的な創作には感じられないモチーフでひしひしと迫る真実感を感じます。勿論、私がこうしたイマのものに關心を持つていたためでしょうが、沼正三氏が時々その作品に触れられるように、「悪癖」と同傾向のものに理解があるならば、氏がその資料を十分に駆使して作つた作品にお目にかゝりたいものです。こゝで榎本さんの「悪癖」を実際の告白として批判させて頂きますと、そこまで発展し理解していったということについて非常に羨ましいと思ひます。いづれにしても榎本さんの告白の後日譚が或は読者通信としてでも拝見出来ることを心から望みます。(京都 K、H生)

(山口幸一)

奇譚クラブ再刊との報に接し欣快に耐えず候、そもそもの近頃最も愚劣なるものは、所謂悪書追放運動にて、その口火をつけた東京山の手の婦人連とやらは最も下劣なるオッサンオッサンな虚栄心の強い種族にして、それに踊らされた

官僚の馬鹿加減も呆れ果てたものにて候、彼等のグループこそ、最もおいせつな下劣な人種にして、汚職、収賄の舞台に候、お座敷ストリップショーとか旧華族屋敷を利用した白黒実演等を黙許しておき最も真面目なる真実の大衆の欲求を踏み越えろとしたものにて候、彼等には性欲の何たるかは勿論分らず、男と女が居れば、わいせつ行為を連想する程度の尋常一年生位の知識しか持ち合せておらず奇クグループの深遠な境地などは云つてきかせたつて分らぬからこんな連中は相手にせず、どしどし独自の企画により進められんことを要望致し候、及ばず乍ら吾々読者も絶大な支持を捧げん

(山口幸一)

毎月一回の遅刊さえなく発行されて来た奇クも現在の様な情況下に於ては中々困難な段階にぶつかつて、小生二十八年頃よりの愛読者で毎月近所の本屋で購入致して居たのですが、今月は取締りの強化の為か、近所の書店を四五軒も











## 蜂の胴四十五センチ

一柳トシ様へ

川上 明

一柳トシ様、奇ク五月号の貴女の手記拝見致しました。あの文章の中で「コルセットのせいで胴が蜂のようにくびれて来ました」と申されて居るのを読み私も「コルセット」には強い関心を抱く一人として始めておたより致させていただきます。私の自分では試みるのではなく他の方に実際にしていただいて共に楽しむというので、貴女とは一寸違ふと思ひます。コルセットは、十八世紀フランスにて大流行を致したもので貴婦人は皆用いたとのことです。締めすぎて傷まで出来た人もいます。近來ではアメリカのマーガレットミッチェル女史の著の有名な「風と共に去りぬ」の中で女主人公スカリーットオハラが三郡一の

腰(ウエスト)の持主でその細さは十七インチ(四十三センチ)にしています、いずれにしても胴の細さは近代女性の男性の夢でもあり、美容体操の発達等もこの目的のために出来たといつても過言ではないでしょう。

さて私が或女性を験してみた結果を簡単に話しましょう。その女性は身長五尺二寸、体重十四貫三百で、始めウエストは六十六センチでした。その女性と親しくなつて三月目、私はバンドを贈つたのでした。そのバンドは普通より穴が数多くあり、四十センチまでありました。私はそのバンドを彼女の胴にズボンの上から締めさせたのです。始めは五十五センチでした、これでも可なり細くみえます。最初は苦痛だったようでした。

たが「大丈夫になったわ、この方がずっとスマートね」と言います。その言葉に力を得て私はもう一本一寸細めのバンドをプレゼントしこれを彼女の肌直接に締めさせたのです、五十センチでした。こうして三ヶ月も立つともうほとんど苦痛も言わず、何の気にもしていません。そこで肌のバンドを四十七センチにしました。勿論上のズボンのバンドは五十センチです。これはかなり苦痛と見え、「いたいわ、夜ねられない」とか言いました、私は肌のバンドを昼も夜も入浴中も外してはいけないうと云つておいたのが彼女はその通り実行したのでした。かくて四月、彼女の肌のバンドは確実に胴をしめつけ遂にほとんど苦痛がなくなつて来ました。私は或夜彼女に「どうだいまだ締められるかい」と聞くと「大丈夫だわ締めても」と言います、そこで四十五センチに締めました。「きつい、かい」ときくと「大丈夫いい気持ちよ、手の指がまわりそう」とそれほど苦痛でもないらしいのです。ちよつ

とはなれて彼女の体をみると、胴はひょうたんの様にくびれしめられていました。そしてこゝにしているのです。外がわのズボンのバンドも四十八センチにしました。するとまるで体が二つに分かれて見えます。それで何でも仕事をします。彼女は洋裁学校へ行っていましたから自分の持つてくるズボン、スカートの胴まわりは皆作りかえてしまひました。家で叱られたさうです。こうして胴まわり四十五センチのまゝ六ヶ月たちました。バンドを外すとそこだけうす紫に皮膚の色が變つていきます、ぎゅつとくびれているので下腹がつき出ています。彼女も自分一人で鏡の前に立ちしげ／＼と見ることがあるさうです。そして大変嬉しいさうです。パンティやズロースのゴムも物すごくきつくなっています。でも一柳さんのようなコルセットではないので、そんなに細くくびれていないと思います。でも幅広のバンドをつけていますのでいくらかいゝでしょうが、二人きりの時バンドを思い

## 奇譚クラブ

復刊第一号

## 目次

定価二百円 (十16円)

## 口絵

美しいドアー…… (四馬 孝画)

二頭立馬車…… (畔亭数久画)

水中の女…… (都築峰子画)

緊縛フット・オンパレード

黒のシユミーズ

緋のシユミーズ

どういふポーズをとるの?

ボリウム

ながし目

朝日を浴びて

うつつ

旅の縛られ女優

きものシリーズ迎春花

悪軍日記

ボクの責め方

女性の下着について

鼻いじめの写真

奈落の欲情

流腸器と共に

お膳の型と種類

自殺娘の死体損壊

二個のイチジク流腸

女性緊縛寸考

完全なる隷属

サディズム雑感

再度の鞭を期待しつゝ

(二俣志津子さんに)

女工哀史以前

乗馬ズボンの女腹切

(白金 紅次)

(榎本 利子)

(宝塚二三夫)

(水上流太郎)

(北谷 英二)

(沢井 和雄)

(久利須照雄)

(土屋 淑人)

(近藤 一)

(花村恵美子)

(宝塚二三夫)

(坂田 信治)

(村岡 助浩)

(沼 正三)

(南洋 一郎)

(藤山 秀緒)

女性の禪愛用

切腹通信

少年刑務所体験記

男性自虐の方法

玉稿落穂集

アブ追求三〇年の回顧

幽四十ヶ月

女性切腹面に憑かれた男

素足礼讃

新しいコルセット

あるマゾヒストの手帖から

私の流腸論

映画に見た淡いマゾ

アクロバット通信

明治年間の新聞覚え書

残酷なる女性達

「七化け小僧出現」

(田辺 愛子)

(津島比呂史)

(三根 耕二)

(岡村 文雄)

(編 集 部)

(山田 正実)

(春田 一郎)

(伊藤 和彦)

(高原 正夫)

(一柳真砂子)

(沼 正三)

(数 正男)

(春木 俊野)

(九州 傾城)

(吾妻 新)

(森本 愛造)

(緑 猛比古)



## ○ジャジャ馬馴し

(中富、村田二嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

中富綾子嬢、村田那美子嬢の二人共全裸にて賣めつゝ賣められつゝという奇抜きわまりない縛りフット、若き美女二人を配した他に比を見ない珍しい逸品、コレクションの中に絶対に欠かすことの出来ない保証付のもの。

## ○逆さ吊り

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

十四貫有余の伊吹嬢を足首を上にして逆さに吊り下げた苦心作、如何なる強烈な縛りにも耐えた流石の真佐子嬢も遂に痛さに悲鳴を上げた逆さ吊りの三態、是非この一組を。

## ○萩千恵子嬢

新版股間しばり

キヤビネ版 三枚一組 三百円

本誌専属の各モデルを煩して従来敢行した股間しばりはマニア諸氏から絶賛を博しましたが、ここに縛りに対して強い願望を持つに至った萩嬢をモデルとして今までにない新構想により股間しばりの最新版を提供する。

## ○坂口利子嬢

悦虐緊縛集

キヤビネ版 三枚一組 三百円

本誌の口繪写真に活躍した坂口利子嬢の代表作をここに再びお見せする。彼女の緊縛に対する真価は従来作品に如美

## 最新版アブフォト 実費分譲

### 緊縛女体写真

(従来分譲中の緊縛写真は絶版です。これは全部新しい作品ばかりです。)

## ○高瀬忍嬢

悦虐ポーズ代表選

キヤビネ版 三枚一組 三百円

芳名正に十八才、八頭身美人の忍嬢の全身の肌をひしひしと喰い込むローフの細目、頬もくびれよとばかりきつく噛まされる猿ぐつわ、ポーズといふ表情といふ悦虐モデルの本領を發揮した素晴らしいもの。

## ○美少女緊縛

(中富綾子嬢)

キヤビネ版 二枚一組 二百円

可憐な美少女、中富綾子嬢の柔肌がくつと濡れ程きつく纏いついた麻縄、羞恥と苦痛にゆがむ可愛い顔を真正面から取り組んだ一枚の女体縛りフット。

## ○藤田節子嬢

「落花狼籍」

第一集 キヤビネ版 三枚一組 三百円

第二集 キヤビネ版 三枚一組 三百円

元宝塚映画のニューフェイス、藤田節子嬢の初めて縛られた和服姿、着物の裾にのぞく紫足の色気は日本趣味の美しい作品、和装好みの方には是非。

子嬢の初めて縛られた和服姿、着物の裾にのぞく紫足の色気は日本趣味の美しい作品、和装好みの方には是非。

## ○古川裕子好み縛り

(萩千恵子嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

透明のビニールのレインコートは雪日の肌をいかに白く輝やかしている。レインコートの上から全身をしめつける麻縄、息もつけられない猿ぐつわ、古川裕子作「長期刑」のお仕置をここに再現した緊縛フットの決定版。

## ○加賀利江子嬢

第一回縛り集

キヤビネ版 三枚一組 三百円

美貌の新人、まあごらん下さい。利江子嬢の初めて縛られたこの縛られ方を縛られることを厭わない緊縛モデル第一回の縛られポーズ、是非コレクションの一端へお加え下さい。

## ○加賀利江子嬢

悦虐ポーズ集

キヤビネ版 三枚一組 三百円

ようやく縛られることに慣れた利江子嬢の悦虐姿態、日本式の高手小手と緊縛の表情が渾然一体となつて、マニア待望のたまらない情感を漂している逸品。

## ○厚狭春江嬢

股間しばり三態

キヤビネ版 三枚一組 三百円

「縛られる女」で、その緊縛感を極度に發揮した厚狭春江嬢が、ここに再び緊縛感溢る股間しばりを以てお目見えします。全身の肌に喰い込む細目はきつとマニアに御満足頂くことでしょう。

## ○デニムのズボン縛り

(加賀利江子嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

腰から太股へと身体にびつたりと喰いついたデニムのズボンを素肌に纏つての緊縛、ズボンの外へ出た足首にはヌードに見られぬ色気が漂つて十八才になったばかりの利江子嬢を恥しがらせる。

## ○須川令子嬢

股間しばり三態

キヤビネ版 三枚一組 三百円

新しいモデル令子嬢をして正面ばかり股間しばりを敢行して、その中から優美な姿態三態を選んだ股間しばりマニアに推す快心作。

## ○須川令子嬢

悦虐姿態三態

キヤビネ版 三枚一組 三百円

内に可憐な初々しさを秘めながら緊縛に対する情熱を写實的に表した令子嬢のようやく縛りに慣れた顔の作品、将来本誌の悦虐モデルとして売り出す同嬢の初推す快心作。

期の作品として数十枚の中から特に選出した。

## ○萩千恵子嬢

新版腰巻しばり

キヤビネ版 三枚一組 三百円

従来分譲の腰巻しばりと異つて、特に千恵子嬢の注文によつて縄をかけた日本趣味豊かな萩嬢の特色を發揮し、腰巻に関心を持つ人並に緊縛マニア向として選んだ作品。

## ○灸点地獄

(施術者 春日ルミ嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

太股に、お尻に、背に煙を上げる灸灸をすえられる熱さに悲鳴を上げる真佐子嬢の表情に益々快心の笑みを洩らすルミ嬢、サジスチン春日ルミ嬢とマゾヒストン伊吹真佐子嬢の二人を配した灸灸の決定版、以前の杉美嬢の灸灸三態の上をゆく作品。

## ○悦虐モデル

縛り六人集

キヤビネ版 六枚一組 五百円

六人の悦虐モデルの代表的なポーズを集めてこれこそマニア待望の多彩な縛りフット集としておすすり出来る作品。足吊りポーズ(杉美嬢) 極端な裸女(伊吹真佐子嬢) 白下下(村田那美子嬢) メンズバンドの縛り(川辺砂登子嬢) あられもなき悦虐ポーズ(萩千恵子嬢) 虐待される女(坂口利子嬢)

## ○奴隷使役

キヤビネ版 三枚一組 三百円

春日ルミ嬢に使役される奴隷春日ルミ嬢の下に敷かれ、足で頭を踏まれ股を挟まれる等、奴隷の悦虐姿態は女主人の仮借ない鞭によつていよいよ激化する。

## ○女王様の尻の下

キヤビネ版 三枚一組 三百円

春日ルミ嬢の尻の下にうごめくマゾヒスト小沼正三、豊満な女体はどつしりと小沼の身体のあるる部分に、その威力を發揮する。

## ○長靴着用の女性から

鞭で仕込まれる

キヤビネ版 三枚一組 三百円

キヤビネ版 三枚一組 三百円

## ○乗馬靴乗馬服の男から

責められる男

キヤビネ版 三枚一組 三百円

モデルは新人、隈野野郎、辻村氏が自ら責め手をつとめた一幕。

## ○男性縛り輝美縛体

キヤビネ版 三枚一組 三百円

モデルは潮田正雄。

## 女性切腹写真

(従来分譲中の切腹写真は絶版です。これは全部新しい作品ばかりです。)

## ○自害悦虐女体切腹

キヤビネ版 三枚一組 三百円

女性切腹の代表的基本ポーズ。

## ○切腹曼陀羅図

キヤビネ版 五枚一組 五百円

哀婉と清濁の中にはほのぼのと漂う悲愴感、清潔なモデルによつて女性切腹の情趣を最大限に盛り上げた新しい作品。須川令子嬢のポーズ。

## ○女学生の切腹姿態

キヤビネ版 五枚一組 五百円

本誌の女性切腹の口繪を見て、たつた一回きりならモデルになつてもいい、但し切腹のモデル以外はいや、と申出てきた本年十七才の乙女、乙羽信子嬢の可愛らしいエクボの持主。本人は切腹に関心を持つていて無料にてモデルになつ

## 女性浣腸写真

(従来分譲中の浣腸写真は絶版です。これは全部別なフットです。)

## ○新構想浣腸責め

キヤビネ版 三枚一組 三百円

縛られて身動きの出来ない被術者に浣腸器の嘴は容赦なく迫つてゆく。春日伊吹のコンビによつて姿態に新しい構想を求めて試みた野心作。

## ○羽村式ゴムマリ浣腸

キヤビネ版 三枚一組 三百円

羽村京子さんから送られたアイデアの略図をもとにしてゴムマリによる肛門からの空気を注入による尻を空中に揚げた被術者の逆立ちのポーズ。

## ○新趣向浣腸フット

キヤビネ版 三枚一組 三百円

浣腸マニアの方々から提供されたアイデアを参考に、それを再現させて三つの趣向を代表させた浣腸の雰囲気満点のフット。

## マゾフオト

(従来のマゾフオトは若干残っています。これは全部違った作品です。)



悪の部屋  
 変態讚美論  
 録「ドレイ・ボーイ」  
 一収容所脱出  
 閣雲博士の回想  
 非小説性液  
 蜘蛛と蝶々(元結露)  
 残虐なる女性達  
 切腹研究夜話(三)  
 感情教育(六)  
 マゾ心理について語る第五回談者座談会  
 實の繪は芸術品なり  
 アブニストの記  
 爛れた花  
 高橋鉄氏に問う  
 三月号「告白と手記特集」  
 二月号「女性異常告白集」  
 新年号「私の生活体験の記」

昭和二十八年  
 【以下各号一冊百円】  
 十二月号 倒錯の花園  
 十一月号 あぶ・まにやの手記  
 十月号 偽らざる告白の記  
 九月号 (品切)  
 八月号 (品切)  
 七月号 實の体験特集  
 六月号 緊縛の一表情  
 五月号 男性マゾ特集  
 四月号 倒錯の告白特集  
 三月号 東西拷問くらべ  
 二月号 實の小説特集号  
 新年号 縛つた女を描く

昭和二十七年 一冊九十円  
 十一月号 宗教刑罰戯戯面譜



先祖の女腹切

吉住信吉

田谷先生によつて戦争中の凄惨な女腹切が紹介されていますが、読者の中にはまだ女でこんな物すごい腹切が出来るかどうかと半信半疑の方もありません。ところが小生の家でも先祖にやはりこのような腹切があったことが伝わっていますので御紹介しましょう。

小生の家は山口県某地で百姓でしたが、数百年伝つた名家で苗字帯刀まで許されていましたので代々家名を重んじ、家名を傷けた時は男女を問わず切腹して先祖の靈に詫びるよう云伝えてきたそうです。ところが明治前まで男で切腹した人は一人もなく女に二人一度に切腹があったというのです。

現在から五代前の当主の嫁は十七才で小生の家へ嫁したそうです。年寄夫婦が極めて因業で始終苦しめられ、その上主人が放埒のため誠にはじめな毎日を送つておりましたが、十九の年に妊娠し不幸なことに男女の双生児を生んだそうです。年寄夫婦は畜生腹だと云つて子供が生まれ胎盤が出たばか

りの嫁（くらと云つたそうです）の枕許へ小刀をつきつけ家名を傷つけた上はすぐ切腹せよと迫りました。その上畜生腹の血で畳をけがすのは不浄だから板の間でムシ口をしいて切腹しろ、お前の肌につけている寝衣は家の械で織つたものだから血で汚すな、等という常人では考えられないような残酷なことを云いました。くらは覺悟していたらしく黙つて聞いておりましたが年寄が立去ると、怒りにもえたすさまじい表情で坐り直すと、「おのれ人を人とも思わぬ人非人、畜生腹のはらわたを見せやる、人非人の作つたものなど肌につけるものか」齒がみをするといきなり寝衣を脱ぎ分焼直後で腹に巻いた晒をむしりとするようにはぎとり湯文字一つで小刀をもつと荒々しく次の板の間のムシロへ坐り看護の人たちがウロウロする中に「人でなしめ、真の女の最期をよく見ておけ」と叫びながら力一杯、左脇腹に突き立て力任せに右まで引切りました。分焼後で腹の

皮がたるんでいたこととて、引廻す後から後からダラ／＼陽があふれ出すのを押えもせず、「お婆、これが畜生腹のはらわたか、よく見よ」とのゝしりながら二三歩よろよろと立上り奥の間の方へ歩むとドツと倒れ転がりながら鳩尾へ刀を突込むとギリ／＼と抉つて絶命しました。

そこへ急を聞いて、くらに実家からついてきていた女中のとりという女が（二一だったそうです）とび込むと断末魔のけいれんをしてゐるくらの鳩尾へ突立つた刀を引抜きざま、「お供します」と叫んで帯をとる暇もなく、左手で着物と下着をぐつとまくり上げ右手でグサツと下腹へ立膝のまゝ突込み両手で右へ引廻しながら「ようもお嬢さんをこんな目にあわせたな、必ずこの家の者をとり殺してやる」と大声でさけび、刀を抜き、着物の上から左乳下に突込み、くらの死体にかぶさるようにして絶命しました。とりは大兵肥満な女ではらわたは、出なかったそうです。

切腹の情景は、くらを看護していた人が近所の寺の住職に話をしたのが書きとめられて、明治中頃まで残っていたといわれます。

【編集後記】

本誌の復刊に際して、御祝いの言葉と激励のお便りを頂き厚く御礼申し上げます。本月号では、印刷の効果を考へて、口繪の八頁は全部「繪」とし本誌専属画家の腕を揮つて頂きました。写真の方は、素晴らしい傑作を数多く撮影してありますが、前号の印刷では効果が余りよくないので、本月号では掲載を見合せ、次号では別途に方法を考へてみます。優秀なる写真は、口繪に掲載出来ない等、未発表のフオトはすべて分譲品として発表しましたので、何卒、マニアの方々には別項の一覽表によつて多少に拘らずお申込み下さるようお願いいたします。好評の復刊第一号に引続き、第二号も真摯な文獻研究誌としての真面目を發揮すべく努力いたしました。只、当初の予定では、従前の十分の一位の読者数は獲得出来るものとして、企画を樹立しましたが、案に相違して、百分の一に満たない申込者数でありましたので、残念ながら、赤字軽減のため、本号では紙質を幾分悪くしました。将来、読者数の増加に伴い、紙質の向上並に、増頁を企りたいと考えますので、せいせい、グループの方々には本誌の復刊を宣伝下さるようお願いいたします。

(M生)

【編集後記】

【編集後記】

本誌の復刊に際して、御祝いの言葉と激励のお便りを頂き厚く御礼申し上げます。本月号では、印刷の効果を考へて、口繪の八頁は全部「繪」とし本誌専属画家の腕を揮つて頂きました。写真の方は、素晴らしい傑作を数多く撮影してありますが、前号の印刷では効果が余りよくないので、本月号では掲載を見合せ、次号では別途に方法を考へてみます。優秀なる写真は、口繪に掲載出来ない等、未発表のフオトはすべて分譲品として発表しましたので、何卒、マニアの方々には別項の一覽表によつて多少に拘らずお申込み下さるようお願いいたします。好評の復刊第一号に引続き、第二号も真摯な文獻研究誌としての真面目を發揮すべく努力いたしました。只、当初の予定では、従前の十分の一位の読者数は獲得出来るものとして、企画を樹立しましたが、案に相違して、百分の一に満たない申込者数でありましたので、残念ながら、赤字軽減のため、本号では紙質を幾分悪くしました。将来、読者数の増加に伴い、紙質の向上並に、増頁を企りたいと考えますので、せいせい、グループの方々には本誌の復刊を宣伝下さるようお願いいたします。

(M生)

次号(十二月号)予告

口絵　れい子素描集（滝れい子）  
サデイスト　の披露宴　（宮崎昭平）  
戦国夜盗　（畔亭数久）  
苦痛の夢　（四馬孝）  
嫉妬の煙管　（宮崎昭平）  
實め  
写真　縛りモデル競艶録  
須川　令子、萩　千恵子  
伊吹真佐子、杉　美美  
高瀬　忍、厚狭　春江  
加賀利江子、藤田　節子  
坂口　利子  
マゾヒスチック、フオト  
浣腸遊戲と切腹擬態  
接客婦　（加治　信一）  
赤い花は泣いてる　（松井頼子・北原純子・画）  
お妾アバート　（白金　紅次）  
倒錯の英雄　（笠置　俊郎）  
織田信長　（春木　俊野）  
姉とその弟

讀者交歡室

○東京のTM様（十月号の通信）  
一度お逢いしたいものです。私は今仙台に下宿しているのですが、冬には東京に帰ります。私の好みは女性緊縛ですが、その次に女装です。女装して夜の東京を歩いた経験もあります。女装も洋装が好きですが、外観（顔、姿）はあくまで女でなければならぬと思います。TM様にもしその様なお積りがあれば機会を作ります。

（仙台 KY生）

○復刊第一号で「自虐」を発表された岡村文姓さんの着想は非常に面白く拝見しました。しかし上半身に対する工夫が一寸足りない様ですね、小生もいろいろ研究しておりますが、ほど完全に近い方法を考案しましたから、いずれ機会を見て発表したいと思っております。岡村さん、姫路の信二郎さん大分のA、Tさん、文通をお願いしたいと思います。左記へ御連絡下さい。名古屋市昭和区長戸町

（塚本繁樹）

○名古屋Y・H様「Kクラブ」五月特大号に於ける貴君の通信を興味深く拝読して、貴君の性向が小生のそれと全く一致していること

に驚き今貴君へお便りする次第です。ところで小生も今年二十三才で大学生ですが、家業が養鶏であるため、その経験は小生にもありその技師としてヨーロッパ（ベルギー、オランダ）までも足を伸ばしました。従つて二十三才になつてもいまだに学生でいる訳です。小生がはつきりした動機もなく同性に愛着を感じるようになったのは、大体十八才頃からで、禪姿というよりもむしろランニングシャツ一枚、肌にはびつたり合つたパンツの運動着姿に魅力を感じ、特に腰部に於ける滑らかな隆起、純白の布にカバーされた小じんまりひきしまつた臀部は実にたとえようもなく美しく感じます。又小生自身、多少庭球をやつていた關係上シヨウト・パンツの姿にも興味があり、学生の庭球試合がある際にはよく見に行きます。貴君同様「集まる人々」の文章には完全に魅力され、機会があれば上京し、そのような場所へも出入りしたいとさえ考えてもおります。しかし多忙の連日でもそんな機会は得られず、毎日人知れず淋しい生活を送つております。

(東京 徳田生)



## 読者原稿募集

(皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】 アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採用分には本誌三月分を贈呈いたします。

【創作】 異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用分には掲載後相当稿料支払います。

【体験告白手記】 皆さまの偽らざる真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載分には一篇につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人々には一篇位は直ぐ書けるものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ボケツト告白】 文体や用紙などは一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下され。採用分には本誌三月分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二月分乃至三月分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】 画材はサド、マゾ流暢、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】 編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることにします。本誌三月分贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

## 私のイメージ

【私】をどしどし放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌半年分贈呈します。

【実者写真】 御自身写真されたものに限りません。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】 将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】 皆さまの胸に持つておられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌半年分贈呈。

【レポート】 新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二月分贈呈。

【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにても結構です。つとめて誌上に紹介いたします。

【読者交歓室】 読者相互間の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたします。御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単に明瞭にお願いします。到着順に最近号に締切は別に定めません。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記しておいて下さい。

奇譚クラブ編集部

## ◎本誌月極購読料◎

一月分一冊(送料十六円)二百円  
三月分三冊(送料共)六百円  
半年分六冊(送料共)千二百円  
一年分三冊(送料共)二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊お申込みの方は必ず送料十六円の御加算を願います。半年分御申込の方に景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

## 奇譚クラブ

第九巻第七号  
復刊第二号 定価二百円  
十一月号 (送料十六円)

昭和三十年十月三十日印刷  
昭和三十年十一月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔  
大阪市晴明通一丁目八番五番地

発行所 天星社出版部

尚、従前の発行所、堺市菅原通四ノ三〇曙書房宛にても郵便物は到着します故、振替口座大阪三四九五六番 曙書房にて御送金下さっても着金いたします。

…(第二集)……(縛られた女ばかりの豪華アルバム)……(第一集)……

## 美しき縛しめ

第一集  
第二集  
第三十二巻

九人の緊縛モデルを駆使して完成した緊縛フォトの巨著、未発表の秘作集  
代表的な縛りポーズ三十二態  
(詳細な説明は切手二十円送付で)

## 32態

◇責め写真はほしいが、印刷紙に焼付けたものは高くて困ると、おっしゃる方は極く鮮明なコロタイプ印刷のアルバムをお求め下さい。  
◇三十二枚の変わったフォトがぎっしりと並んできつと皆さまの胸をわくわくさせることでしょう。全く素晴らしいです。

美術コロタイプ印刷、アルバム装釘

定価 一部 五百円 (送料金三十円)

## 晴雨 美人乱舞

伊藤晴雨先生著並画菊版和装  
美本 定価 四〇〇円 二四

## 図版目次

△人体時計計△天国の女△美人燈  
△島田雷のこわれる迄△丸雷のこわれる迄△美女のなやみ△崩れたる女△鉄砲責にされる女△火葬場異聞△群々に抱かれた美女△死神につかれた女△特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別読物として先人未発の貴重な春画文献五章十九項に亘って詳説す。晴雨ファンに薦む。

貴重なる文献としてその真価を極めて高く評価される文献誌  
奇譚クラブのバックナンバー

今後この種文献は、この値段では絶対に入手不可能です。発行部数が比較的多かった為、左記のような安価な値段段でお譲り出来るわけです。未入手の方々はどうぞこの際品切にならぬうちに申し込下さい。

## 奇譚クラブ

昭和二十八年新年号より昭和二十九年九月号まで、二十一冊分全部在庫、一冊送料共百円。昭和二十九年十月特大号より昭和三十年五月特大号まで、特大号八冊分在庫、一冊送料共百四十円。御送金次第急送します。

## 画帖

## 時代物責絵巻

一、山法師と静御前 二、女スリと岡引  
三、淀君と千姫 四、犬公方と侍女  
五、八百屋お七の最後 六、新撰組と芸妓 七、十郎左エ門と腰元 八、小紫と悪旗本

○御申込みは迅速と確実を誇る曙書房代理部へ  
○御申込次第早速厳重荷造の上急送申し上げます  
○代金引替は送料が高くなりますので、必ず前金でお願いします  
曙書房代理部

## アリスの人生学校

一冊 百円 (送料共)  
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く堂々五百枚に垂んとする傑作、口絵、挿絵力ツト多数挿入

## 奇譚クラブ臨時増刊号